プロファイル管理 2303

Profile Management は、Citrix Virtual Appsサーバー、Citrix Virtual Desktops™で作成された仮想デスクトップ、および物理デスクトップ向けのプロファイルソリューションとして意図されています。プロファイルを管理したい各コンピューターにProfile Managementをインストールします。

Active Directoryグループポリシーオブジェクトを使用すると、Citrix®ユーザープロファイルの動作を制御できます。多くの設定を調整できますが、一般的には、これらのトピックで説明されているように、サブセットのみを構成する必要があります。

展開に適したポリシー選択の適切なセットを選択する最善の方法は、構成の決定の記事の質問に答えることです。

Profile Management の使用権は、EULAに記載されています。

これらのトピックで使用されている用語に関する情報については、用語集を参照してください。

新機能

修正された問題

Profile Management 2303 には、Profile Management 2212 と比較して、以下の修正された問題が含まれています。

- FSLogix Profile Container で ポリシーが有効になっている場合、プロファイルに加えられた変更が保存されないことがあります。
- Profile Management は、ユーザーログオン時にカスタマイズされた Outlook OST パスをリセットする可能性があります。
- Citrix Director バージョン 2203 では、公開アプリケーションの の詳細（**Userinit** や **Shell** など）が、個別の行ではなく単一の行に表示されることがあります。
- ポリシーが に設定されており、Windows ローミングプロファイルが利用可能な場合、Windows ローカルプロファイルが移行されずに削除されることがあります。
- Citrix Director の ボタンが、一部のユーザーに対してグレー表示されることがあります。
- **upmjit.sys** モジュールが、Windows ターミナルの起動を妨げる可能性があります。

既知の問題

このリリースには、以下の既知の問題があります。

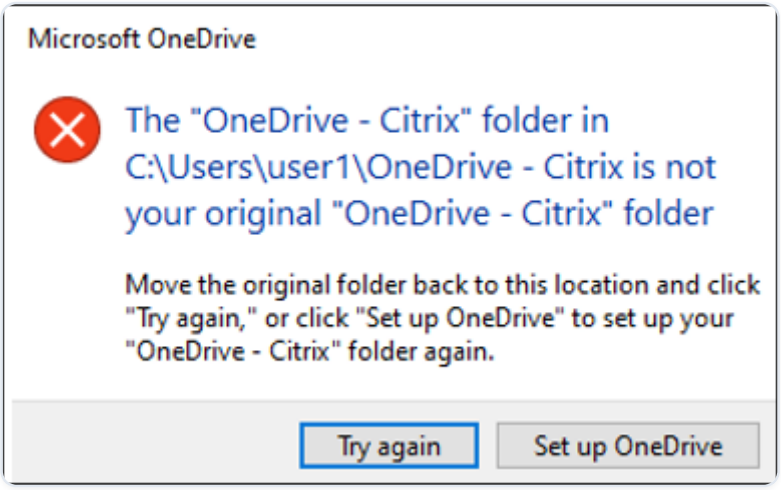
- 特定のコンピューターからアプリケーションを非表示にするアプリのアクセス制御ルールを構成する場合、それらのコンピューターに加えて、割り当てのために少なくとも1つのOUを構成する必要があります。そうしないと、ルールはすべてのOUに適用され、アプリケーションはドメイン内のすべてのコンピューターから見えなくなります。

  例: アプリケーションの割り当てに*コンピューター*AとBが含まれており、*OU*が含まれていない場合、アプリケーションはドメイン内のすべてのコンピューターから見えなくなります。

  特定のOUからアプリを非表示にするルールを構成する場合も、同じ問題が発生します。それらのOUに加えて、割り当てのために少なくとも1つのコンピューターを構成する必要があります。そうしないと、ルールはすべてのコンピューターに適用され、アプリケーションはドメイン内のすべてのコンピューターから見えなくなります。

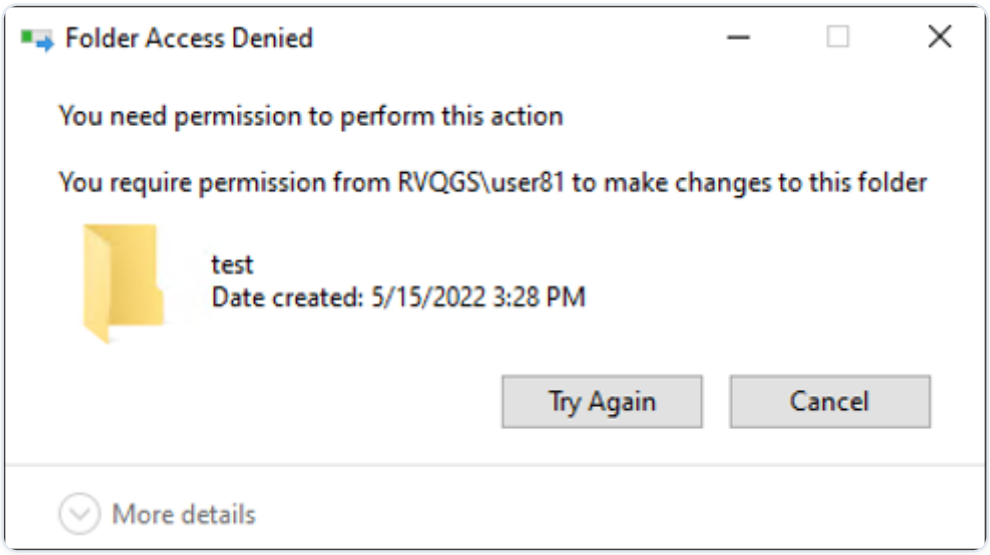
例: アプリケーションの割り当てに*OU* XとYが含まれており、*コンピューター*が含まれていない場合、アプリケーションはドメイン内のすべてのコンピューターから見えなくなります。

- フルプロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーがマシンにログオンすると、次のメッセージが表示されます。
  - ユーザーがコンテナを有効にする前にOneDriveフォルダーを使用していた場合、および
  - コンテナが有効になった後、ユーザーが初めてマシンにログオンした場合。



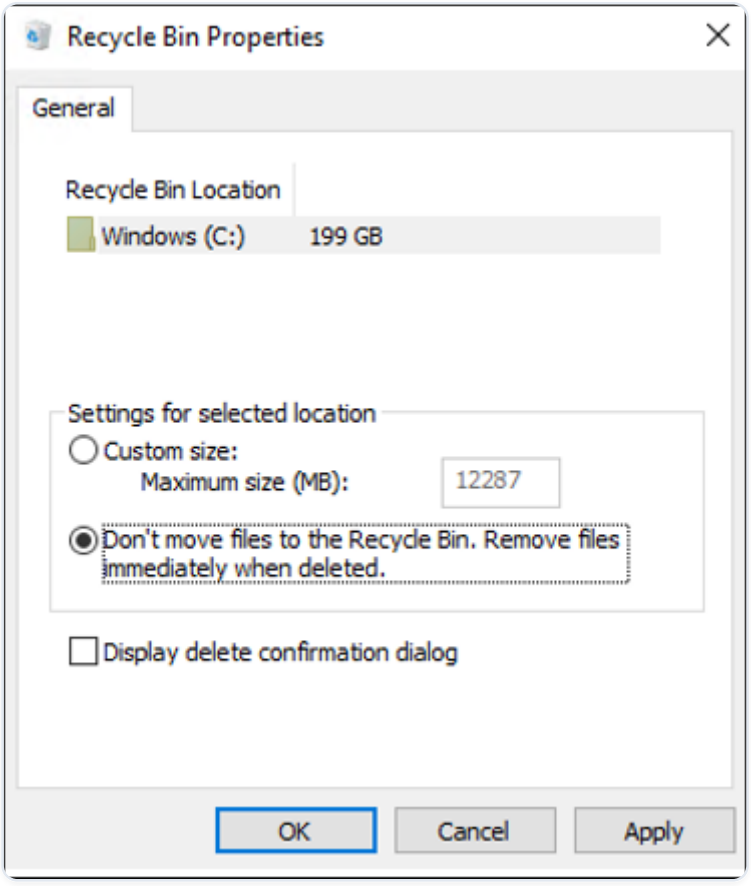
この問題を解決するには、**再試行**をクリックします。その後、OneDriveフォルダーはコンテナに正常に移行されます。

- ユーザーが次の状況でフォルダーをゴミ箱に移動すると、「フォルダーアクセス拒否」というメッセージが表示されます。
  - 部分プロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーはいずれかのコンテナからフォルダーを削除しようとします。
  - フルプロファイルコンテナが有効になっている場合、ユーザーは、ユーザープロファイルフォルダー内にはないが、プロファイルと同じディスク上にあるフォルダーを削除しようとします。



この問題を回避するには、代わりに完全に削除を実行します。

- フォルダーを選択し、**Shift + Delete** を押して完全に削除します。
- **ごみ箱のプロパティ** を **ファイルをゴミ箱に移動しないで、削除と同時にファイルを消去する** に設定します。



- VDA のインストール後にマシンの再起動を求められます。ただし、マシンの再起動後に Profile Management サービスが開始しない場合があります。この問題が発生すると、システムイベントログにイベント 7000 に関する次のメッセージが表示されます。「The ctxProfile

service failed to start due to the following error: The service did not respond to the start or control request in a timely fashion.」回避策として、次のレジストリキーの値をより大きな数値（例: 300,000）に変更します。

  - HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\
  - 名前: ServicesPipeTimeout
  - 種類: REG_DWORD
  - 値: 300000

- スタートメニューの一部が表示されない場合があります。この問題を回避するには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

サードパーティ通知

Profile Management の現在のリリースには、以下のドキュメントに定義されている条件に基づいてライセンス供与されたサードパーティ製ソフトウェアが含まれている場合があります。

Profile Management サードパーティ通知

クイックスタートガイド

この記事では、Profile Management のインストールと構成に関するクイックリファレンスを提供します。

前提条件

すべてのシステム要件が満たされていることを確認します。詳細については、「システム要件」を参照してください。

Profile Management のインストール

Profile Management は、Virtual Delivery Agent (VDA) のインストールに含まれています。VDA の場合、Profile Management をインストールまたはアップグレードするには、VDA ソフトウェアをインストールまたはアップグレードするだけです。

Profile Management の展開は、.msi ファイルと、.adm または .admx ファイルのいずれかをインストールすることで構成されます。ファイルをインストールするには、「インストールとセットアップ」の手順に従ってください。

> **注：**
>
> 潜在的な競合を避けるため、Citrix Profile Management プロセス (`%ProgramFiles%\Citrix\User Profile Manager\UserProfileManager.exe`) をアンチウイルスソフトウェアの除外リストに追加してください。詳細については、「Citrix Antivirus Best Practices」を参照してください。

Profile Management を集中管理する場所を決定する

Profile Management を集中管理するには、次の3つの方法があります。以下のいずれかの方法を選択してください。

- Active Directory で GPO を使用する
- Citrix Studio でポリシーを使用する

- ワークスペース エンバイロメント マネジメント™ (WEM) を使用する

  Active Directory で GPO を使用して Profile Management を構成する手順については、Knowledge Center の記事「CTX222893」を参照してください。

  Citrix Studioのポリシーを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。

  WEMを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

Profile Managementを構成する

基本設定を構成する

1. ユーザーストアを作成する

   ファイル共有の作成やフォルダー権限の設定など、安全なユーザーストアを作成するための推奨事項は、Microsoftの記事Deploying Roaming User Profilesで入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作において高レベルのセキュリティを確保します。

2. ユーザーストアへのパスを指定する
3. Profile Managementを有効にする
4. 基本設定を確認する

   基本設定を確認するには、次の手順を実行します。

   a. Citrix Studioで、**Enable logging**、**Logon**、および**Logoff**ポリシーを**Enabled**に設定します。

   b. VDAにログオンし、`gpupdate /force`を管理者として実行します。

   c. VDAからログオフし、再度ログオンします。

   d. デフォルトのログファイルパス`C:\Windows\System32\Logfiles\UserProfileManager`に移動し、`pm.log`ファイルを開き、ログオンイベントを探して、次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Starting logon processing…

   Finished logon processing successfully in [s]:
   ```

Profile Managementの構成を計画する

1. Profile Managementの展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。ユーザープロファイルの**自動構成**機能は、Citrix仮想アプリおよびデスクトップの展開における意思決定の一部を簡素化します。

   展開に推奨されるアプローチを決定するには、環境に関する次の基本的な質問に答えてください。

   - パイロットまたは本番
   - プロファイルの移行または作成
   - 永続的またはプロビジョニング済み、専用または共有
   - モバイルまたは静的
   - 使用中のアプリケーション

2. それに応じてProfile Managementを構成するには、以下を実行します。

   - ユーザープロファイルをストリーミングします。ユーザープロファイルのストリーミングを参照してください。
   - アクティブライトバックを有効にします。アクティブライトバックの構成を参照してください。
   - 必須プロファイルを指定します。テンプレートまたは必須プロファイルの指定を参照してください。
   - 除外を構成します。項目の含める/除外を参照してください。
   - フォルダーリダイレクトを構成します。フォルダーリダイレクトの構成を参照してください。
   - アプリケーションを構成します。ネイティブOutlook検索エクスペリエンスの有効化を参照してください。

3. Profile Managementの設定を確認します。

   a. この記事で前述した基本設定を確認します。

   b. ポリシー設定については、`pm_configure.log` ファイルを確認してください。以下のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Configuration value read from Policy: LoggingEnabled=

   Configuration value read from INI file: CEIPEnabled=
   ```

```
Configuration value PSAlwaysCache set neither in policy nor in INI
file. Defaulting to:
```

トラブルシューティング

詳細については、トラブルシューティング を参照してください。

Profile Management の仕組み

Profile Management は、同じユーザーによる同時ドメインログオンがプロファイルに複雑さと一貫性の問題を引き起こす環境におけるユーザープロファイルの欠点を解決します。たとえば、ユーザーがローミングプロファイルに基づいて2つの異なる仮想リソースへのセッションを開始した場合、最後に終了するセッションのプロファイルが最初のセッションのプロファイルを上書きします。この「後勝ち」として知られる問題は、ユーザーが最初のセッションで行ったパーソナライズ設定をすべて破棄します。

この問題は、リソースサイロごとに個別のプロファイルを使用することで対処できます。ただし、このアプローチでは、管理オーバーヘッドとストレージ容量の要件が増加します。もう1つの欠点は、ユーザーがアクセスするリソースサイロによって異なる設定を経験することです。

Profile Management は、簡単かつ信頼性の高い方法でプロファイルを最適化します。中間段階およびログオフ時に、レジストリの変更とプロファイル内のファイルおよびフォルダーは、各ユーザーのユーザーストアに保存されます。一般的に、ファイルが存在する場合、以前のタイムスタンプを持つ場合は上書きされます。

ログオン時に、ユーザーのレジストリエントリとファイルはユーザーストアからコピーされます。ローカルにキャッシュされたプロファイルが存在する場合、2つのセットは同期されます。その結果、すべてのアプリケーションとサイロのすべての設定がセッション中に利用可能になります。また、サイロごとに個別のユーザープロファイルを維持する必要がなくなります。Citrix® ストリーミングユーザープロファイルは、ログオン時間をさらに短縮できます。

Profile Management は、ネットワーク障害を経験するモバイルユーザー（オフラインプロファイル機能が構成されている場合）や、異なるオペレーティングシステムからリソースにアクセスするユーザー（クロスプラットフォーム設定機能が構成されている場合）のアプリケーション設定を保護するのに役立ちます。

注：Profile Management は、ローカルアカウントではなくドメインユーザーのログオンを処理します。

ネットワークベースのプロファイルが使用されている場合は、組織で Profile Management の採用を検討してください。強制プロファイルやローミングプロファイルなどの他のソリューションを実装し、Microsoft Windows の標準的な知識でそれらを維持することもできます。ただし、展開が

制限されている場合（たとえば、ユーザーのカスタマイズが制限されているため強制プロファイルが適切なコールセンターなど）を除き、Profile Management が推奨される場合があります。

Citrix は、ユーザー固有のデータがプロファイルとは別に保存されるように、フォルダーリダイレクトを使用することを推奨します。

ホームフォルダーとテンプレートのパスは、ネットワークの場所のみで構成する必要があります。

プロファイルについて

プロファイルの割り当て

Windowsでユーザーにプロファイルを割り当てるには、どのような方法がありますか?

この記事は、Citrix Profile Managementではなく、Microsoft Windowsにおけるプロファイルの割り当てについて説明しています。

ユーザーにプロファイルを割り当てるには、いくつかの方法があります。

- Active Directory (AD) のユーザーアカウントプロパティを使用する
- グループポリシー (GP) を使用する
- 上記の方法を使用して、Remote Desktop Services (旧称 Terminal Services) セッションに固有のプロファイルを割り当てる

これらの方法の一部は、特定のオペレーティングシステムでのみ利用可能です。

- **Remote Desktop Services**。Windows Server 2008 R2でRemote Desktop Servicesプロファイルを割り当てるには、GPO設定「Set path for Remote Desktop Services Roaming User Profile」を使用します。これは「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Component\\Remote Desktop Services\\Remote Desktop Session Host\\Profiles」にあります。以前のマルチセッションオペレーティングシステムでは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Components\\Terminal Services」にある設定「Set path for TS Roaming Profiles」を使用します。

  個々のユーザーのプロファイルを構成するには、ADのユーザーアカウントプロパティページで個々のアカウントに「Set path for TS Roaming Profiles」を設定することもできます。ただし、通常はGPでこの割り当てを行う方がはるかに優れています。

  ターミナルサーバーで「Use mandatory profiles」設定を使用して、強制プロファイルの使用を強制できます。

- **Windows 7、Windows 8、およびWindows Server**：ユーザーアカウントプロパティページを使用して、個々のアカウントに移動プロファイルを設定します。また、Windows Server 2008 ADおよびWindows 7デバイスの場合、GPO設定「Set roaming profile path for all users logging on to this computer」を使用できます。これは「Computer\\Administrative Templates\\System\\User Profiles」にあります。Windows 8またはWindows Server 2012コンピューターにログオンするユーザーの場合、Windows Server 2012のActive Directoryを使用してユーザーのホームフォルダーを設定することもできます。

複数の方法が使用されている場合、ドメインユーザーにプロファイルを配信するための優先順位は何ですか?

ユーザーのプロファイルを管理するためにProfile Managementが使用されている場合、他のどのプロファイル割り当て方法よりも優先されます。Profile Managementによってプロファイルデータが管理されていないユーザーには、複数の方法を使用してプロファイルが割り当てられることがあります。実際に使用されるプロファイルは、次の優先順位に基づいています。

1. Citrixユーザープロファイル（つまり、Profile Managementによって作成されたプロファイル）
2. GPOによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
3. ユーザープロパティによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
4. GPOによって割り当てられた移動プロファイル (Windows Server 2008 AD および Windows 7 のみ)
5. ユーザープロパティによって割り当てられた移動プロファイル

Profile Management のアーキテクチャ

この記事では、ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアのフォルダー構造について説明します。ユーザー ストアは、Citrix® ユーザー プロファイルの中央の場所です。クロスプラットフォーム設定ストアは、別の場所です。

Profile Management ストアに関する重要な情報

ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアの構造は、情報提供とローカライズおよびトラブルシューティングの支援のためにここで説明されています。プロファイルデータの問題を最小限に抑え、セキュリティを維持するために設計された、以下の重要な推奨事項に従ってください。

- どちらのストアの構造も変更しないでください。
- ストアのどの部分にもファイルやフォルダーを直接書き込まないでください。ユーザー ストアは、この点でリダイレクトされたフォルダーとは異なります。

- ユーザー ストアは、リダイレクトされたフォルダーとは別に保管してください。たとえば、`\\server1\profiles\%username%` や `\\server1\folders\%username%` のように、同じファイル サーバーまたは DFS 名前空間の異なる共有に保管できます。この手法により、バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイルをまとめてサポートし、両方のプロファイル バージョンで共有される単一のリダイレクトされたフォルダー セットをサポートすることがはるかに容易になります。
- ユーザーはユーザー ストアを見る必要がないため、ドライブ文字を割り当てないでください。
- ユーザー ストアにクォータを課さないでください。プロファイル サイズを制限する場合は、クォータを使用するのではなく、項目を除外することを検討してください。

ユーザー ストアのフォルダー構造

ユーザー ストアは、デフォルトでユーザーのホーム ディレクトリにある **WINDOWS** フォルダーになります。これはパイロット インストールを簡素化しますが、本番システムでは、ユーザー ストアをネットワーク共有または (最高の拡張性のために) DFS 名前空間として構成してください。エンタープライズ対応のユーザー ストアのサポートされる構成については、「Profile Management を使用した高可用性とディザスター リカバリー」で説明されています。

安全なユーザー ストアを作成するための推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザー プロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

注: Windows 7 および Windows 2008 R2 クライアント デバイスでは、Windows 2012 R2 ファイル サーバーで共有を作成する際に、**Encrypt data access** チェック ボックスを選択しないでください。

ルート レベルのユーザー ストアのフォルダー構造を次の表に示します。

フォルダ	注
	ユーザー ストア内のプロファイルのルート。
`\UPM_Profile`	このフォルダーには、プロファイルからのファイルとフォルダーが含まれています。
`\UPM_Drive_C`	このフォルダーには、プロファイル外から含まれる項目（この場合はドライブCから）が含まれています。このフォルダーは、Profile Management 4.x以前からのアップグレード時

フォルダ	注
	に存在します。Profile Management 5.0では、プロファイル外の項目を管理することはサポートされていません。
`\Pending`	このフォルダーには、ロックファイル、保留中のファイル、およびストリーミング機能が使用されている場合はスタンプファイルが含まれています。

いくつかの例をこの表に示します。

フォルダー名の例	注
`\UPM_Profile\Data`	ユーザープロファイル内の**Data**フォルダーの同期されたコンテンツ。
`\UPM_Profile\AppData_upm_var`	ユーザープロファイル内の非ローカライズされたApplication Dataフォルダーの同期されたコンテンツ。このフォルダーは、Profile Management 4.x以前からのアップグレード時に存在します。バージョン1プロファイル（Application Dataはその一例です）の管理は、Profile Management 5.0ではサポートされていません。

保留領域

ユーザー ストアには保留領域が含まれています。この領域は、ストリーミングされたユーザー プロファイルとアクティブな書き戻し機能によって使用される一時的な領域です。ユーザーが最後のセッションからログオフした後、すべてのファイルは保留領域からユーザー ストアに同期されます。新しいセッションでは、ユーザー ストアと保留領域の両方からファイルがダウンロードされるため、ユーザーは常に最新のプロファイルを体験できます。

サーバーが応答しなくなった場合、保留領域内のファイルをユーザー ストアに解放するタイムアウトを設定できます（ストリーミングされたユーザー プロファイル機能の一部として構成されている場合）。

複数のプラットフォームを持つユーザー ストアのフォルダー構造

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、複数のプラットフォームが関係します。各プラットフォームのプロファイルを分離するために、プラットフォーム固有のフォルダーを定義する必要があります。通常、これはユーザー ストアへのパス ポリシーでProfile Management変数を使用して行います（たとえば、パスに`%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`を使用します）。

クロスプラットフォーム設定ストアは、クロスプラットフォーム設定機能が構成された後、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。ストアの名前と場所は、構成時に指定します（クロスプラットフォーム設定ストアへのパス ポリシーを使用）。このストアには、オペレーティング システム間でローミングするユーザー設定のサブセットが保持されます。

たとえば、Windows XPとWindows 7の間で設定をローミングしたい場合があります。プラットフォーム固有のフォルダーには、Windows XPとWindows 7に固有のユーザー設定が含まれています。クロスプラットフォーム設定ストアには、これらのオペレーティング システム間でローミングする設定のサブセットが含まれています。ログオン時に、このサブセットはプラットフォーム固有のフォルダーにコピーされ、その一部として残ります。ログオフ時に、サブセットへの変更が抽出され、クロスプラットフォーム設定ストアに戻されます。

各プラットフォーム固有のフォルダーには、標準のサブフォルダー（例：UPM_Profile）が含まれています。詳細については、「ユーザー ストアのフォルダー構造」を参照してください。さらに、UPM_CPS_Metadata サブフォルダーも存在します。このシステムによって作成されたフォルダーには、オペレーティングシステム間で共有される一時的な設定が含まれています。

ユーザー ストアと AD フォレスト

Citrix ユーザープロファイルは、フォレストをまたいで管理することはできません。同じフォレスト内のドメインをまたいで管理することは可能で、これにより同じログオン名を持つ複数のユーザーがフォレスト内の同じリソースにアクセスできます。これには、ユーザー ストアへのパスにある `%USERDOMAIN%` と `%USERNAME%` 変数を使用してプロファイルを一意に識別することが含まれます。

ただし、この場合、ユーザー ストアへのパスを設定する際に、同じログオン名を区別するために変数を使用する必要があります。これを行うには、ドメイン名変数をパスに追加します。また、ユーザー ストアのアクセス許可を設定し、Active Directory のユニバーサル グループを使用して Profile Management の処理済みグループ設定を有効にする必要があります。

%ProfVer% のような手動で定義されたシステム変数を使用して、オペレーティングシステムのバージョンを設定できます。または、Profile Management 変数を使用して、オペレーティングシステム名、ビット数、またはプロファイルバージョンを設定することもできます。AD フォレスト

内のユーザー ストア パスの例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアのローカライズ

次の表は、プロファイルデータがユーザー ストアとの間で移動される際に、Profile Management がフォルダーをローカライズおよび非ローカライズする方法の概要を示しています。フォルダー名のみがローカライズおよび非ローカライズされます。たとえば、スタートメニューのエントリやレジストリ設定は、Profile Management によって正しい言語に翻訳されません。

この情報は、Profile Management 4.x 以前からアップグレードする場合にのみ関連し、その場合、バージョン 1 のプロファイルが存在する可能性があります。Profile Management 5.0 では、バージョン 1 のプロファイルの管理はサポートされていません。

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー	ユーザープロファイルに対する相対フルパス
アクセシビリティ	Accessibility_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
アクセサリ	Accessories_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
管理ツール	AdminTools_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
アプリケーションデータ	AppData_upm_var	`\Local Settings`
クッキー	Cookies_upm_var	
デスクトップ	Desktop_upm_var	
エンターテイメント	Entertainment_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
お気に入り	Favorites_upm_var	
履歴	History_upm_var	`\Local Settings`
リンク	Links_upm_var	`\Favorites`
ローカル設定	LocalSettings_upm_var	

バージョン 1 英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー	ユーザープロファイルに対する相対フルパス
マイドキュメント	MyDocuments_upm_var	
マイミュージック	MyMusic_upm_var	`\My Documents`
マイピクチャ	MyPictures_upm_var	`\My Documents`
マイビデオ	MyVideos_upm_var	`\My Documents`
NetHood	NetHood_upm_var	
PrintHood	PrintHood_upm_var	
プログラム	Programs_upm_var	`\Start Menu`
最近	Recent_upm_vars	
スタートメニュー	StartMenu_upm_var	
テンプレート	テンプレート_upm_var	
インターネット一時ファイル	インターネット一時ファイル_upm_var	`\Local Settings`
送る	送る_upm_var	
スタートアップ	スタートアップ_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
システムツール	システムツール_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`

プロファイル管理のユースケース

Citrix Profile Management は、アプリケーションがユーザーにどのように配信されるか、またはどこに格納されているかに関わらず、さまざまなシナリオでユーザープロファイルを管理するために実装できます。以下に、これらのシナリオの例を示します。

- Citrix Virtual Apps™ と公開アプリケーション
- Citrix Virtual Apps と公開デスクトップ

- Citrix Virtual Apps と分離環境にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops™ にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops にインストールされたアプリケーション
- 物理デスクトップにストリーミングされたアプリケーション
- 物理デスクトップにローカルにインストールされたアプリケーション

これらのシナリオのうち、Citrix は以下を最も一般的なユースケースと見なしています。

- **複数セッション** - ユーザーは複数の Citrix Virtual Apps サーバーサイロにアクセスするため、複数のセッションを開いています。ただし、サーバー上でのアプリケーションの分離とストリーミングは、サーバーサイロの代替手段であることに注意してください。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **「最後の書き込みが優先」と移動プロファイルの整合性の問題** - 移動プロファイルへの最後の書き込みにより、すべての設定が保存されます。したがって、複数のセッションが開いていて一時的な変更が行われた場合、移動プロファイルは正しいデータを保持しない可能性があります。さらに、ネットワーク、ストレージの問題、またはその他の問題の結果として、設定がプロファイルに正しく書き込まれない可能性があります。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **大規模なプロファイルとログオン速度** - プロファイルの肥大化は、ユーザープロファイルを扱いにくくし、ストレージと管理の問題を引き起こす可能性があります。通常、ログオン時に Windows はユーザーのプロファイル全体をネットワーク経由でローカルユーザーデバイスにコピーします。肥大化したプロファイルの場合、この動作はユーザーのログオン時間を長引かせる可能性があります。

複数セッション

特に大規模な環境では、同じファーム内であろうと複数のファーム内であろうと、ユーザーが異なる Citrix Virtual Apps サーバーに格納されている異なるアプリケーションにアクセスするために、複数のセッションを開く必要がある場合があります。可能な場合は、アプリケーションの分離またはストリーミングを検討して、同じ Citrix Virtual Apps サーバーにアプリケーションを格納し、ユーザーが単一のサーバーからすべてのアプリケーションにアクセスできるようにし、それによって単一のセッションを可能にします。ただし、事業部門が特定のサーバーを制御している場合や、アプリケーションをストリーミングできない場合は、これが不可能な場合があります。

ユーザーが様々なCitrix仮想アプリサーバーからアプリケーションにアクセスする必要があることが確認されたら、プロファイルへの影響を特定する必要があります。

次の図は、複数のセッションが存在する場合にアプリケーション設定が失われる可能性がある例を示しています。

図(/en-us/profile-management/2303/media/upm-multiple-sessions-1.png)

例えば、MaryはApp A、App B、App Cにアクセスしたいと考えており、それぞれServer 1、Server 8、Server 12にルーティングされます。各アプリケーションにログオンすると、Maryのターミナルサービスローミングプロファイルが各サーバーにロードされ、各セッションのフォルダーがリダイレクトされます。MaryがServer1のApp Aにログオンしているときに、MaryはSetting1を変更し、そのセッションからログオフします。その後、Maryは他の2つのアプリケーションでの作業を完了し、ログオフします。

ログオフ時、Server 1のセッション内でMaryが行った変更は上書きされます。これは、一時的な変更ではなく、最後に閉じられたセッション内の設定が保持されるためです。翌日、MaryがApp Aにログオンすると、彼女が行った変更が表示されないため、不満を感じます。

Profile Managementは、一般的にこの状況の発生を防ぐことができます。Profile Managementは、セッション中に変更された特定のプロファイル設定のみを書き戻し、その他の変更されていない設定はすべてそのまま残します。したがって、発生する可能性のある唯一の競合は、Maryが別のセッション内でSetting1を変更した場合です。ただし、このシナリオでProfile Managementが使用されている場合、ユーザーは最新の変更が保持されることを期待するでしょうし、実際にそうなります。

「最後の書き込みが優先」とローミングプロファイルの整合性の問題

このシナリオは、このトピックの最初のシナリオと似ています。「最後の書き込みが優先」の問題はさまざまな形で現れる可能性があり、アクセスするデバイスの数が増えるにつれてユーザーの不満が高まる可能性があります。

ローミングプロファイルは、リダイレクトされたフォルダーを除き、すべてのプロファイルデータを保持するため、ユーザープロファイルは大きくなる可能性があります。これにより、プロファイルをダウンロードする必要があるためログオン時間が増加するだけでなく、特にネットワークの問題がある場合、ログオフの書き込みフェーズ中に不整合の可能性が高まります。

Profile Managementを使用すると、特定のデータをユーザープロファイルから除外できるため、ユーザープロファイルを最小限のサイズに保つことができます。プロファイルには差分のみが書き込まれるため、ログオフの書き込みフェーズではデータ量が少なく、処理が高速になります。Profile Managementは、一時データにプロファイルを使用するが、アプリケーション終了時にクリーンアップしないアプリケーションにとって有益です。

複数のリソースにアクセスする

ユーザーが複数のリソースにアクセスするにつれて、プロファイルはより複雑になります。ネットワークに保存されているプロファイルの場合、Microsoft Windows はレジストリを使用してユーザー設定を保存します。プロファイルはログオン時にネットワークからローカルデバイスにコピーされ、ログオフ時にネットワークにコピーし直されます。日常的に、ユーザーは複数のコンピューターにアクセスし、デスクトップとラップトップを切り替え、Citrix Virtual Apps and Desktops™ または Citrix DaaS (旧 Citrix Virtual Apps and Desktops service) で作成された仮想リソースにアクセスします。

この図は、単一の Citrix® ユーザープロファイルが、複数のリソースにログオンするユーザーにどのように追従するかを示しています。

以下のグラフィックは、複数の Citrix リソースにログオンするユーザーと、コンピューター間でユーザーに追従する Citrix ユーザープロファイルを示しています。(/en-us/profile-management/2303/media/upm-access-multiple-resources.png)

たとえば、ユーザーはローカルの物理デスクトップを持ち、そこから Citrix Virtual Apps で公開されたアプリケーションにアクセスします。また、Citrix Virtual Desktops で作成された仮想デスクトップにもアクセスします。設定が適切に構成されていない限り、ユーザーの設定はこれらすべてのリソースで統一されません。

さらに、共有リソースにアクセスする場合、移動プロファイルの動作は「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。たとえば、管理者が移動プロファイルを有効にし、ユーザーがローカルデスクトップの背景色を変更したとします。その後、ユーザーは Citrix 仮想デスクトップにログオンし、ローカルデスクトップからログオフし、仮想デスクトップからログオフします。ローカルデスクトップと仮想デスクトップの両方が同時に開いており、最後のログオフは仮想デスクトップからでした。したがって、仮想デスクトップセッションからの設定がプロファイルに最後に書き込まれたため、背景色の変更は失われます。

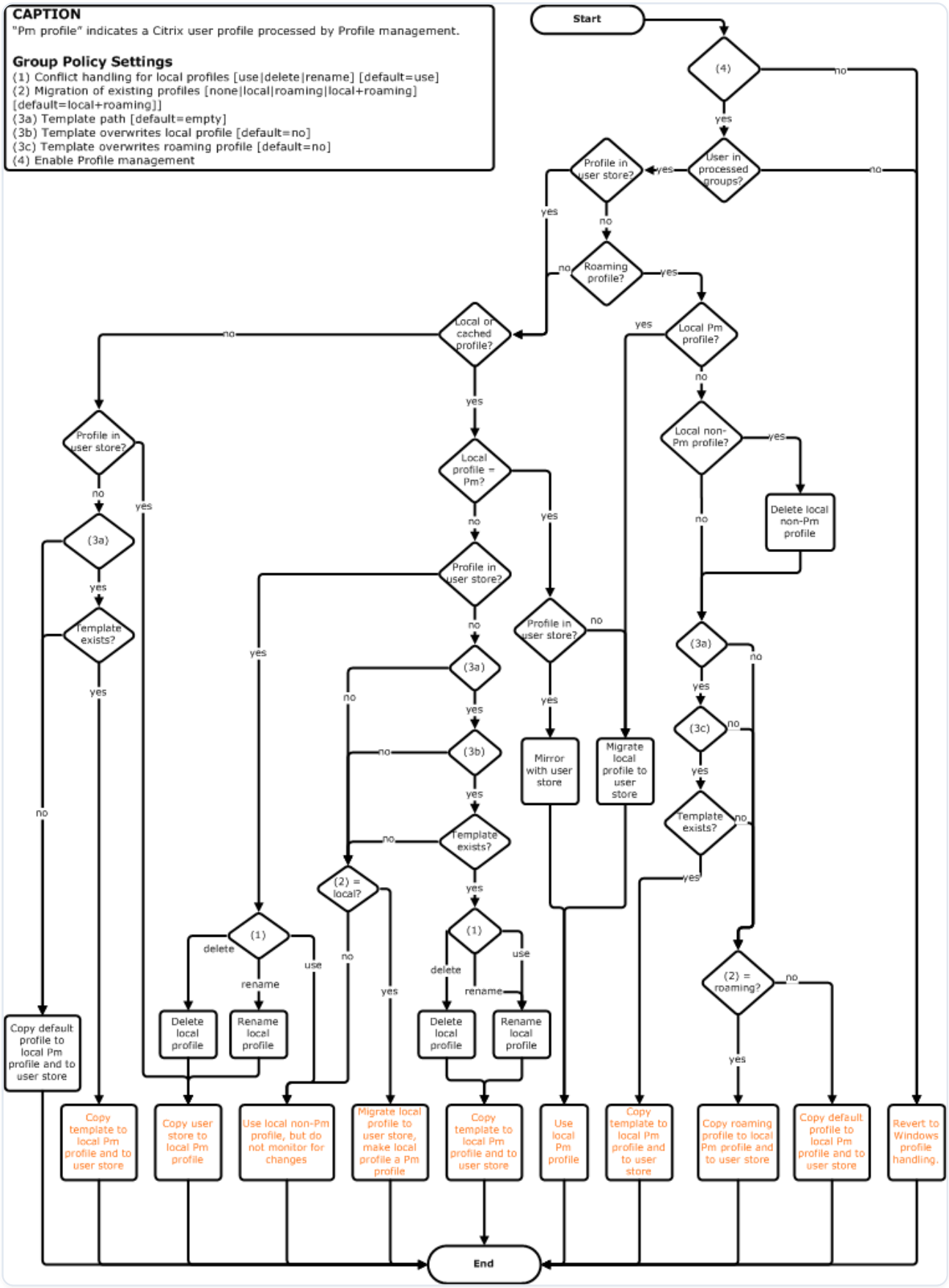
ログオン図

この図は、ユーザープロファイルの移行戦略の詳細を検討するのに役立ちます。また、パフォーマンスの次の側面についても説明しています。

- プロファイルを移行すると、2つのネットワークコピーが発生し、ログオンプロセスが遅くなる可能性があります。たとえば、**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**という操作には、次の2つのコピーが含まれます。1つはローミングプロファイルストアからローカルコンピューターへの完全なプロファイルコピー、もう1つはローカルコンピューターからユーザーストアへの完全なプロファイルコピーです。

- キャッシュされたプロファイルが使用される場合、ネットワークを介したプロファイルデータのコピーは行われません。

図は下から上に読みます。下部のボックスで目的の操作（たとえば、**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**）を確認します。その後、必要な移行設定を特定するためにパスをたどります。

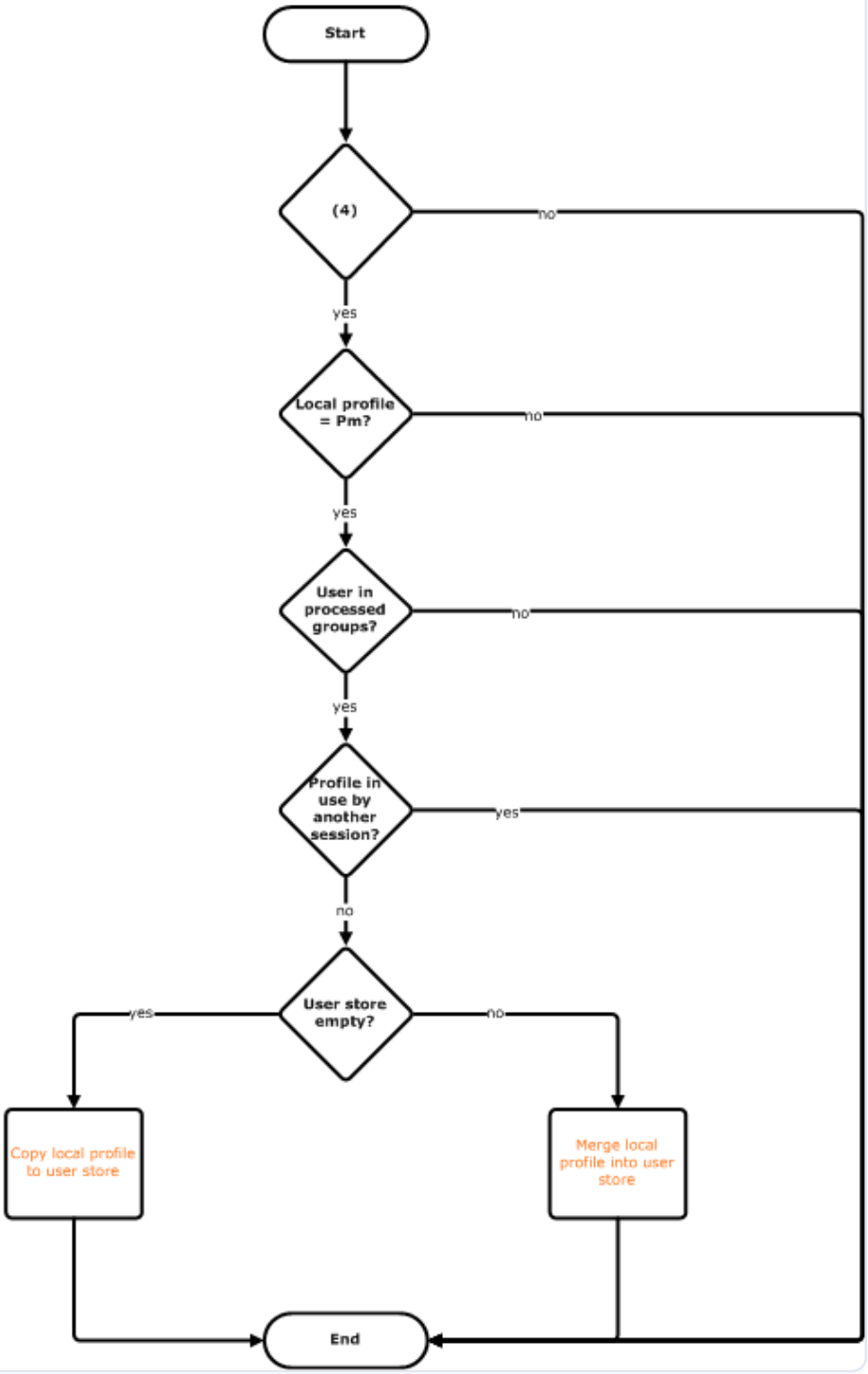

CAPTION
"Pm profile" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.
Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management
Start
(4)
User in processed groups?
Profile in user store?
Roaming profile?
Local or cached profile?
Local Pm profile?
Local non-Pm profile?
Delete local non-Pm profile
Local profile = Pm?
Profile in user store?
(3a)
Template exists?
(3b)
(2) = local?
(1)
delete
rename
use
Delete local profile
Rename local profile
Mirror with user store
Migrate local profile to user store
(3c)
(2) = roaming?
Copy default profile to local Pm profile and to user store
Copy template to local Pm profile and to user store
Copy user store to local Pm profile
Use local non-Pm profile, but do not monitor for changes
Migrate local profile to user store, make local profile a Pm profile
Use local Pm profile
Copy roaming profile to local Pm profile and to user store
Revert to Windows profile handling.
End

ログオフ図

この図は、ログオフ時にプロファイルデータをコピーまたはマージするために使用されるロジックを説明しています。

CAPTION
"Pm" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.

Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management



展開計画

構成を決定する

Profile Management を構成するには、環境に関する以下の基本的な質問に答えることをお勧めします。

1. パイロットまたは本番
2. プロファイルの移行または作成
3. 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
4. モバイルまたは静的
5. 使用中のアプリケーション

回答に基づいて、展開環境に合わせて Profile Management を構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにすることができます。

次のステップ

- インストールとセットアップ
- トラブルシューティング

ヒント

Profile Management の設定を確認および展開する際は、以下のヒントを参照してください。

UPMConfigCheck ツールを使用して設定を確認する

UPMConfigCheck は、稼働中の Profile Management 展開を調査し、最適に構成されているかどうかを判断する PowerShell スクリプトです。詳細については、Knowledge Center の記事 CTX132805 を参照してください。

コンピューターをOUにグループ化する

質問への回答が異なるコンピューターセットで同じである場合は、それらをActive Directory組織単位 (OU) にグループ化することを検討してください。また、そのOUにアタッチされた単一のグ

ループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、Profile Managementを構成することも検討してください。

これらの質問への回答が異なる場合は、コンピューターを別々のOUにグループ化することを検討してください。

あるいは、ドメインがWMIフィルタリングをサポートしている場合は、すべてのコンピューターを同じOUにグループ化し、WMIフィルタリングを使用して適切に構成されたGPOを選択できます。

パイロットまたは本番環境

パイロット展開の目的は、ソリューションを迅速かつ確実に実証できるようにすることです。重要な目標は、パイロット内のコンポーネント数を減らすことかもしれません。Profile Managementの場合、2つのコンポーネントはユーザー ストアと、プロファイルが処理されるユーザーの選択です。

ポリシー: ユーザー ストアへのパス

Citrix®ユーザープロファイル用のユーザー ストアのセットアップは、Windowsローミングプロファイル用のプロファイル ストアのセットアップとまったく同じです。

パイロット展開の場合、これらの考慮事項を無視できることがよくあります。ユーザー ストアへのパス ポリシーのデフォルト値は、ユーザーのホームディレクトリにある**Windows**フォルダーです。これは、単一のオペレーティングシステム（したがって、単一のプロファイルバージョン）のみが展開されている限り、単一プラットフォームのパイロットでうまく機能します。プロファイルバージョンについては、「プロファイルについて」を参照してください。このオプションは、ユーザーのホームディレクトリに十分なストレージがあり、ファイルサーバーのクォータが適用されていないことを前提としています。Citrixは、プロファイルでのファイルサーバーのクォータの使用を推奨していません。その理由は、「複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する」に記載されています。

本番環境への展開では、セキュリティ、負荷分散、高可用性、および災害復旧を慎重に検討する必要があります。ユーザー ストアの作成と構成については、以下のトピックの推奨事項に従ってください。

- Profile Managementのアーキテクチャ
- ユーザー ストアを作成する
- ユーザー ストアへのパスを指定する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ポリシー: 処理されるグループ、除外されるグループ

本番環境への展開は複雑であるため、Profile Managementのロールアウトをすべてのユーザーに同時にリリースするのではなく、段階的に行う必要がある場合があります。展開がロールアウトされている間、ユーザーは異なるリソースに接続するときに異なるプロファイルエクスペリエンスを受け取ることを伝えることができます。

パフォーマンス上の理由から、Profile ManagementはEULAによってライセンスされており、組み込みのライセンスチェックは行われません。ユーザーをActive Directory（AD）ユーザーグループに割り当てるか、適切な既存のADグループを使用することで、ライセンス割り当てを管理することを選択できます。

パイロット展開では、Profile Managementの使用は、招待された少数のユーザーグループ（複数の部門からの可能性があり、単一の代表的なADグループを使用できない場合）に制限されます。この場合、「処理されるグループ」および「除外されるグループ」ポリシーは未構成のままにします。Profile Managementはグループメンバーシップのチェックを実行せず、すべてのユーザーが処理されます。

これらのポリシーの詳細については、「処理されるグループのプロファイルを定義する」を参照してください。

重要: いずれの場合も、Profile Management によって処理されるユーザー数が、関連する EULA によって設定された制限を超えないようにしてください。

プロファイルを移行または作成する

Profile Managementの展開を活用して、組織のプロファイルを更新できます。最初は小規模でカスタマイズされたプロファイルを使用し、それへの追加を厳密に制御します。あるいは、既存のプロファイルをProfile Management環境に移行し、長年にわたって蓄積された個人設定を保持する必要があるかもしれません。

既存のプロファイルを移行することを決定した場合は、「既存のプロファイルの移行」および「ローカルプロファイルの競合処理」ポリシーを構成します。

次の図は、この質問に対する回答に基づいてこれらのポリシーを構成する方法を示しています。

図(/en-us/profile-management/2303/media/upm-migrate.png)

ポリシー: テンプレートプロファイル

まったく新しいプロファイルセットを作成する場合は、「テンプレートプロファイル」ポリシーを使用して、この目的のためのテンプレートを作成することを検討してください。詳細については、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」を参照してください。テンプレートを

作成しない場合、Profile Managementはユーザーにデフォルトの Windowsプロファイルを提供します。テンプレートが不要な場合は、このポリシーを無効のままにします。

テンプレートプロファイルポリシーは、**ユーザーストアへのパス**ポリシーに似ています。このポリシーは、ユーザーがProfile Managementによって管理されているコンピューターに初めてログオンしたときに、ユーザープロファイルを作成するための基礎として使用できるプロファイルの場所を指定します。

オプションで、テンプレートをすべてのログオンに対するCitrix®必須プロファイルとして使用できます。計画の一環として、ユーザーがアクセスするアプリケーションの特定などのタスクを実行する必要があります。それに応じて、プロファイル内のレジストリの状態、ショートカット、およびデスクトップ設定を構成する必要があります。プロファイルフォルダーのアクセス許可を設定し、ユーザーのログオンスクリプトを変更する必要があります。

> **注:**
>
> Citrix Virtual Desktops™展開で必須プロファイルを選択する場合、Profile Managementの.admまたは.admxファイルではなく、Citrix Studioを使用することをお勧めします。

永続的かプロビジョニング済みか、専用か共有か

プロファイルを作成するマシンの種類は、構成の決定に影響します。主な要因は、マシンが永続的かプロビジョニング済みか、および複数のユーザーで共有されるか、1人のユーザー専用であるかです。

永続システムには何らかのローカルストレージがあり、その内容はシステムがオフになっても永続することが期待されます。永続システムは、ローカルディスクの模倣を提供するために、SANなどのストレージテクノロジーを採用する場合があります。対照的に、プロビジョニング済みシステムは、ベースディスクと何らかのIDディスクから「オンザフライ」で作成されます。ローカルストレージは通常、RAMディスクまたはネットワークディスクによって模倣され、後者はしばしば高速リンクを備えたSANによって提供されます。プロビジョニングテクノロジーは一般的にProvisioning ServicesまたはMachine Creation Services™（あるいはサードパーティ製の同等品）です。プロビジョニング済みシステムが永続的なローカルストレージを持つ場合もあり、これはPersonal vDiskによって提供されることがあります。これらは永続的として分類されます。

これら2つの要因を合わせると、以下のマシンタイプが定義されます。

- **永続的かつ専用** - 例としては、静的割り当てとPersonal vDiskを持つシングルセッションOSマシンで、Machine Creation Services (Citrix virtual desktops™内) で作成されたもの、および物

理ワークステーションやラップトップで作成されたPersonal vDiskを持つデスクトップがあります。

- **永続的かつ共有** - 例としては、Machine Creation Services (Citrix virtual desktops内) で作成されたマルチセッションOSマシン、およびCitrix virtual apps™サーバーがあります。
- **プロビジョニング済みかつ専用** - 例としては、静的割り当てを持つがPersonal vDiskを持たないシングルセッションOSマシンで、Provisioning Services (Citrix virtual desktops内) で作成されたものがあります。
- **プロビジョニング済みかつ共有** - 例としては、ランダム割り当てを持つマルチセッションOSマシンで、Provisioning Services (Citrix virtual desktops内) で作成されたもの、およびCitrix virtual appsサーバーで作成されたPersonal vDiskを持たないデスクトップがあります。

以下のProfile Managementポリシー設定は、異なるマシンタイプに対する推奨ガイドラインです。これらは通常うまく機能しますが、展開の要件に応じて逸脱することもできます。

注：Citrix virtual desktops展開では、ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除、プロファイルストリーミング、および常にキャッシュが自動構成機能によって適用されます。

ポリシー	永続的かつ専用	永続的かつ共有	プロビジョニング済みかつ専用	プロビジョニング済みかつ共有
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除	無効	有効	無効 (注 5)	有効
プロファイルストリーミング	無効	有効	有効	有効
常にキャッシュ	有効 (注 1)	無効 (注 2)	無効 (注 6)	無効
アクティブライトバック	無効	無効 (注 3)	有効	有効
ローカル管理者のログオンを処理する	有効	無効 (注 4)	有効	有効 (注 7)

注

1. このマシンタイプではプロファイルストリーミングが無効になっているため、「常にキャッシュ」設定は常に無視されます。
2. 「常にキャッシュ」を無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限 (MB 単位) を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルに読み込まれるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
3. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルに変更を保存する場合を除き、「アクティブライトバック」を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
4. ホスト型共有デスクトップの場合を除き、「ローカル管理者のログオンを処理する」を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
5. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する機能を無効にします。これにより、ローカルにキャッシュされたプロファイルが保持されます。マシンは個々のユーザーに割り当てられているため、プロファイルがキャッシュされているとログオンが高速になります。
6. 常にキャッシュする機能を無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限（MB単位）を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルに読み込まれるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
7. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルを除き、ローカル管理者のログオンを処理する機能を有効にします。この場合、このポリシーを無効にします。

モバイルまたは静的

お使いのコンピューターはActive Directoryドメインに常時接続されていますか？ラップトップや同様のモバイルデバイスは、おそらく接続されていません。同様に、一部の展開では、永続的なローカルストレージを持つ固定マシンがあるかもしれませんが、それらのマシンはデータセンターから長期間分離されている場合があります。たとえば、遠隔地の支社が衛星通信によって本社と接続されている場合です。別の例としては、災害復旧があり、インフラストラクチャが復元中で、電力や通信が断続的になる場合があります。

通常、Profile Managementは、ネットワークが利用できない間にユーザーがログオフしない限り、短時間のネットワーク障害（24時間未満）に対して回復力があります。このような状況では、ログオンプロセスを大幅に高速化するいくつかの方法でProfile Managementを最適化できます。これが静的ケースです。

長期間の切断が予想される場合や、企業ネットワークから切断されている間にユーザーがコンピューターをログオフまたはシャットダウンできる必要がある場合、Profile Managementを最適化することはできません。ユーザーが再接続すると、プロファイル全体がユーザーストアからフェッチされるため、ログオンが遅くなります。これがモバイルケースです。

モバイルケース

長期間の切断（およびActive Directoryドメインへの断続的な接続のみ）の場合、Offline profile supportポリシーを有効にします。このアプローチにより、サポートされていない最適化を制御する以下のポリシーの効果が自動的に無効になります。これらのポリシーはグループポリシーで無効になっているように見えないかもしれませんが、効果はありません。

- プロファイルストリーミング
- 常にキャッシュ

注: もし Offline profile supportが有効になっている場合、 **Active write back**は尊重されますが、コンピューターがネットワークに接続されている場合にのみ機能します。

静的ケース

ポリシー: オフラインプロファイルのサポート

短期間の切断の場合、Offline profile supportポリシーを無効にします。これにより、以下のいずれかのポリシーを設定できます。

ポリシー: ストリーミングユーザープロファイルグループ

Streamed user profile groupsポリシーを「未構成」に設定します。このポリシーを有効にしても、Profile streamingも有効になっている場合にのみ効果があります。Streamed user profile groupsは、ストリーミングプロファイルの利用を特定のActive Directoryユーザーグループに制限するために使用されます。これは、Profile Managementの古いバージョンから移行する際の一部のシナリオで役立ちます。このポリシーの設定方法については、「ユーザープロファイルのストリーム」を参照してください。

このポリシーに適用される高可用性と災害復旧に関する情報については、「シナリオ4 - 移動ユーザー」を参照してください。

ポリシー: 保留中のエリアロックファイルのタイムアウト

「**保留中のエリアロックファイルのタイムアウト**」ポリシーを「未構成」に設定すると、保留中のエリアロックの1日タイムアウトというデフォルトの操作が適用されます。これが唯一サポートされている値であるため、このポリシーを調整しないでください。

ポリシー: アクティブなライトバック

このポリシーの詳細については、「永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有」(/ja-jp/profile-management/2303/plan/upm-plan-decide-4a.html) を参照してください。

使用中のアプリケーション

展開環境で使用されているアプリケーションは、Profile Management の構成方法に影響します。ただし、他の構成決定とは異なり、単純な「はい」または「いいえ」の推奨事項はありません。決定は、アプリケーションが永続的なカスタマイズをどこに保存するか（レジストリまたはファイルシステム）によって異なります。

アプリケーションが設定とユーザーのカスタマイズをどこに保存するかを特定するために、ユーザーのアプリケーションを徹底的に分析し、理解してください。Process Monitor などのツールを使用して、アプリケーションのバイナリを監視します。Google も別のリソースです。Process Monitor の詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/procmon>` を参照してください。

アプリケーションの動作を理解したら、インクルージョンを使用して処理するファイルと設定を定義します。除外を使用して処理しないものを定義します。デフォルトでは、`AppData\Local` 内のファイルを除き、プロファイル内のすべてが処理されます。展開環境に次のいずれかのアプリケーションが含まれている場合は、`AppData\Local` のサブフォルダーを明示的に含める必要がある場合があります。

- DropBox
- グーグル クローム
- Visual Studio のワンクリック発行で作成されたアプリケーション

シンプルなアプリケーション

シンプルなアプリケーションとは、適切に動作するアプリケーションのことです。これらは、パーソナライズ設定を HKCU レジストリハイブに、パーソナライズファイルをプロファイル内に保存します。シンプルなアプリケーションには基本的な同期が必要であり、そのためには次の方法で項目を含めたり除外したりする必要があります。

- これらのポリシーにおける相対パス（%USERPROFILE% に対する相対パス）：
    - 同期するディレクトリ
    - 同期するファイル
    - 除外リスト - ディレクトリ
    - 除外リスト - ファイル

- ミラーリングするフォルダー

注：%USERPROFILE% は Profile Management によって暗黙的に指定されます。これらのポリシーに明示的に追加しないでください。

- これらのポリシーにおけるレジストリ相対パス（HKCU ルートに対する相対パス）：
  - 除外リスト
  - 包含リスト

項目の含め方と除外方法については、「項目の含め方と除外方法」を参照してください。

レガシーアプリケーション

レガシーアプリケーションは適切に動作しません。パーソナライズファイルをプロファイル外のカスタムフォルダーに保存します。推奨される解決策は、レガシーアプリケーションで Profile Management を使用するのではなく、Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用することです。

複雑なアプリケーション

複雑なアプリケーションには特別な処理が必要です。アプリケーションのファイルは相互参照することがあり、相互に関連するグループとして扱われる必要があります。Profile Management は、複雑なアプリケーションに関連する2つの動作（Cookie 管理とフォルダーミラーリング）をサポートしています。

Internet Explorer での Cookie 管理は、基本的な同期の特殊なケースであり、常に次の両方のポリシーが指定されます。

- ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する
- ミラーリングするフォルダー

フォルダーミラーリング、Cookie 管理の詳細、およびこれらのポリシーの設定方法については、「Cookie フォルダーおよびその他のトランザクションフォルダーの管理」を参照してください。

クロスプラットフォームアプリケーション

クロスプラットフォームアプリケーションとは、複数のプラットフォームでホストされる可能性のあるアプリケーションです。Internet Explorer および Microsoft Office の特定のバージョンでは、Profile Management はプラットフォーム間でのパーソナライズ設定の共有をサポートしています。これらの設定は、レジストリまたはプロファイル内のファイルとして保存されます。

クロスプラットフォームアプリケーションに推奨されるポリシー設定については、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」に記載されています。

他のアプリケーションの設定をプラットフォーム間で共有したい場合は、Sepago の Profile Migrator を使用することをお勧めします。

Java および Web アプリケーション

Java アプリケーションはプロファイル内に多くの小さなファイルを残すことがあり、プロファイルの読み込み時間を劇的に増加させる可能性があります。したがって、`AppData\Roaming\Sun\Java` を除外することを検討してください。

ポリシーの概要

次の表は、さまざまな種類のアプリケーションに対して Profile Management を構成するために使用するポリシーをまとめたものです。表では次の用語が使用されています。

- **相対**。ローカルボリューム上の相対パスで、%USERPROFILE% に対する相対パスです（%USERPROFILE% は指定してはいけません）。例: `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`、`AppData\Roaming\Adobe\`。
- **絶対**。ローカルボリューム上の絶対パスです。例: `C:\BadApp*.txt`、`C:\BadApp\Database\info.db`。
- **レジストリ相対**。HKCU ハイブ内のパスを指します。例: `Software\Policies`、`Software\Adobe`。
- **フラグ**。パス情報が不要な処理を有効または無効にするためにフラグを使用します。例: Enabled、Disabled。

ポリシー	ポリシータイプ (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションタイプ - シンプル	アプリケーションタイプ - レガシー	アプリケーションタイプ - 複雑
同期するディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
同期するファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	

ポリシー	ポリシータイプ (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションタイプ - シンプル	アプリケーションタイプ - レガシー	アプリケーションタイプ - 複雑
除外リスト - ファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
包含リスト	レジストリ		レジストリ相対		
除外リスト	レジストリ		レジストリ相対		
ミラーリングするフォルダー	フォルダ			絶対値	相対
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する					フラグ

ファイル名とフォルダー名におけるワイルドカード処理

ファイルやフォルダー（レジストリエントリではなく）を参照するポリシーは、ワイルドカードをサポートしています。詳細については、ワイルドカードの使用を参照してください。

包含および除外ルール

Profile Managementは、ユーザープロファイルのファイル、フォルダー、およびレジストリキーをユーザーストアに含めたり除外したりするためのルールを使用します。これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。この開始点から、トップレベルの例外を除外として構成し、次にトップレベルの例外に対するより深い例外を包含として構成することができます。ルールに関する詳細情報（項目の包含と除外に関する手順を含む）については、項目の包含と除外を参照してください。

プロファイル内の英語以外のフォルダー名

バージョン1プロファイルを使用する英語以外のシステムでは、包含および除外リストに相対パスをローカル言語で指定します。たとえば、ドイツ語システムでは、**Documents**ではなく

Dokumentenを使用します。複数のロケールをサポートしている場合は、各言語で包含または除外する項目をそれぞれ追加します。

次のステップ

1. 構成の決定に記載されているすべての質問に回答します。
2. 回答に基づいて、展開用にProfile Managementを構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにすることができます。

   構成してはならないポリシーのリストについては、管理の**構成を必要としないポリシー**を参照してください。
3. ローカルGPOでProfile Managementをテストするで説明されているように、設定をテストおよび確認し、Profile Managementを有効にします。

複数のプラットフォームの計画

複数のプラットフォームでのユーザープロファイルが課題となるのはなぜか?

ユーザーが複数のコンピューティングデバイスにアクセスすることは一般的です。あらゆる種類のローミングプロファイルにおける課題は、これらのデバイス上のシステム間の違いに起因します。たとえば、デスクトップにローカルファイルへのショートカットを作成し、別のデバイスに移動したときにそのファイルが存在しない場合、デスクトップには壊れたショートカットが残ります。

シングルセッションオペレーティングシステム (OS) とマルチセッションOSの間でローミングする場合にも同様の問題が発生します。一部の設定 (電源設定やビデオ設定など) はサーバーに適用できない場合があります。さらに、各デバイスにアプリケーションが同様にインストールされていない場合、ローミング時に他の問題が発生する可能性があります。

一部のパーソナライズ設定 (マイ ドキュメント、お気に入り、OSやアプリケーションのバージョンに依存しないその他のファイルなど) は、他の設定よりもはるかに管理が容易です。しかし、ドキュメントタイプが1つのシステムでのみサポートされている場合、これらの設定でさえローミングが困難になることがあります。たとえば、あるユーザーがMicrosoft Projectを1つのシステムにインストールしているが、別のデバイスではそのファイルタイプが認識されない場合があります。同じアプリケーションが2つのシステムに存在し、一方のシステムには異なるアドオンがインストールされており、ドキュメントがそれを期待している場合、この状況はさらに悪化します。

アプリケーションのインストール方法を変更すると、どのように問題が発生するか?

プラットフォームが同じようにインストールされていても、各プラットフォームでアプリケーションが異なる方法で構成されている場合、アプリケーションの起動時にエラーが発生する可能性があります。たとえば、あるプラットフォームのExcelではマクロやアドオンがアクティブになるが、別のプラットフォームではアクティブにならない場合があります。

スタートメニュー

スタートメニューにはリンク (LNKおよびLNK2ファイル) が含まれています。メニューのユーザー固有の部分はプロファイルに保存され、ユーザーはその部分を変更できます。カスタムリンク (実行可能ファイルやドキュメントへのリンク) を追加することは一般的です。さらに、言語固有のリンクは、同じアプリケーションに対して複数のスタートメニューエントリを生成します。また、ドキュメントを指すリンクは、他のコンピューターでは無効になる場合があります。その理由は、ドキュメントへのパスが別のシステムに対する相対パスであるか、アクセスできないネットワークパスであるためです。

デフォルトでは、Profile Managementはスタートメニューフォルダーの内容を保存しません。これは、実行可能ファイルを指すリンクがコンピューターに依存することが多いためです。ただし、システムが類似している状況では、Profile Managementの構成にスタートメニューを含めることで、ユーザーがデスクトップ間をローミングする際の整合性が向上します。あるいは、フォルダーリダイレクトを使用してスタートメニューを処理することもできます。

注: 最も無害に見える変更からでも、予測不能な副作用が生じることがよくあります。たとえば、Sepagoブログの `<https://helgeklein.com/blog/2009/09/citrix-user-profile-manager-upm-and-the-broken-rootdrive/>` の記事を参照してください。

常に、プラットフォーム間でスタートメニューの動作をテストし、検証してください。

クイック起動ツールバー

クイック起動ツールバーにはリンクが含まれており、ユーザーが構成できます。デフォルトでは、**クイック起動**ツールバーはProfile Managementによって保存されます。一部の環境では、リンクがコンピューターに依存する可能性があるため、**クイック起動**ツールバーの保存は望ましくない場合があります。

ツールバーをプロファイルから除外するには、フォルダー除外リストに次のエントリを追加します: `AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch`。

作成するプロファイルの種類?

重要: 構造の違いにより、複数のプラットフォームを含む環境では、各ユーザーに対して個別のバージョン 1 およびバージョン 2 プロファイルを作成することをお勧めします。Windows Vista と Windows 7 のプロファイル名前空間の違いにより、これらのプラットフォーム間でプロファイルを共有することは困難です。また、Windows XP と Windows Server 2003 の間でも障害が発生する可能性があります。バージョン 1 およびバージョン 2 プロファイルの詳細は、「プロファイルについて」を参照してください。

ここでの複数プラットフォームの定義には、複数のオペレーティングシステム（異なるビット数のものを含む）だけでなく、同じオペレーティングシステム上で実行される複数のアプリケーションバージョンも含まれます。この推奨事項の理由を以下の例で示します。

- 32ビットシステムには、オペレーティングシステムに32ビットオペレーティングシステムに固有の場所でアプリケーションを起動するよう指示するレジストリキーが含まれている場合があります。Citrix®ユーザープロファイルが64ビットシステムでこれらのキーを使用する場合、そのシステムにその場所が存在せず、アプリケーションが起動に失敗する可能性があります。
- Microsoft Office 2003、Office 2007、およびOffice 2010は、一部のWord設定を異なるレジストリキーに保存します。これらのアプリケーションが同じオペレーティングシステム上で実行される場合でも、Wordアプリケーションの3つの異なるバージョンに対して個別のプロファイルを作成する必要があります。

プロファイルの相互運用性を確保するために、MicrosoftフォルダーリダイレクトをCitrixユーザープロファイルと組み合わせて使用することをお勧めします。Windows VistaまたはWindows 7がWindows XPと共存する必要がある環境では、これはさらに重要です。

ヒント: 組織のデータ管理ポリシーによっては、Active Directoryから削除されたユーザーアカウントのプロファイルをユーザー ストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアから削除することをお勧めします。

複数のファイルサーバーで Citrix® ユーザープロファイルを共有

Profile Management の最もシンプルな実装は、ユーザー ストアが 1 つのファイル サーバー上にあり、1 つの地理的場所のすべてのユーザーをカバーするものです。このトピックでは、複数のファイル サーバーを含む、より分散された環境について説明します。高度に分散された環境については、「Profile Management を使用した高可用性と災害復旧」を参照してください。

注：ユーザー ストアのサーバー側ファイル クォータは無効にしてください。クォータがいっぱいになるとデータ損失が発生し、プロファイルをリセットする必要があるためです。プロファイルに保持される個人データ（例：ドキュメント、音楽、画像）の量を制限するには、サーバー側ファイル クォータが有効になっている別のボリュームにフォルダー リダイレクトを使用する方が適切です。

ユーザー ストアは複数のファイル サーバーに配置でき、これは多くのプロファイルをネットワーク全体で共有する必要がある大規模な展開でメリットがあります。Profile Management は、ユーザー ストアを単一の設定 **ユーザー ストアへのパス** で定義するため、この設定に属性を追加することで複数のファイル サーバーを定義します。Active Directory のユーザー スキーマで定義されている任意の LDAP 属性を使用できます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/win32/adschema/attributes-all?redirectedfrom=MSDN>` を参照してください。

ユーザーが異なる都市にある学校にいると仮定し、これを表すために #l# 属性（場所を表す小文字の L）が構成されているとします。ロンドン、パリ、マドリードに拠点があります。ユーザー ストアへのパスは次のように構成します。

```
\&num;l#.userstore.myschools.net\profile&num;sAMAccountName#\%ProfileVer%\
```

パリの場合、これは次のように展開されます。

```
\\Paris.userstore.myschools.net\profile\JohnSmith\v1\
```

次に、利用可能なサーバー間で都市を分割します。たとえば、DNS で Paris.userstore.myschools.net を Server1 にポイントするように設定します。

この方法で属性を使用する前に、そのすべての値を確認してください。それらは、サーバー名の一部として使用できる文字のみを含んでいる必要があります。たとえば、#l# の値にはスペースが含まれていたり、長すぎたりする場合があります。

#l# 属性を使用できない場合は、同様のパーティション分割を実現する #company# や #department# などの他の属性について AD ユーザー スキーマを調べてください。

カスタム属性を作成することもできます。`Sysinternals` ツールである Active Directory Explorer を使用して、特定のドメインにどの属性が定義されているかを確認します。Active Directory Explorer は `<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/adexplorer>` で入手できます。

注：プロファイルやサーバーを区別するために、%homeshare% などのユーザー環境変数を使用しないでください。Profile Management はシステム環境変数を認識しますが、ユーザー環境変数は認識しません。ただし、関連する Active Directory プロパティ `#homeDirectory#` を使用でき

ます。したがって、ユーザーの HOME ディレクトリと同じ共有にプロファイルを保存する場合は、ユーザー ストアへのパスを `#homeDirectory#\profiles` に設定します。

ユーザー ストアへのパスでの変数の使用については、次のトピックで説明されています。

- ユーザー ストアへのパスを指定する
- OU 内および OU 間でプロファイルを管理する
- Profile Management を使用した高可用性と災害復旧

OU内およびOU間でプロファイルを管理する

OU内

組織単位 (OU) 内でProfile Managementがプロファイルを管理する方法を制御できます。Windows Server 2008環境では、Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用して、.admまたは.admxファイルをOU内のコンピューターのサブセットに制限します。WMIフィルタリングは、Service Pack 1 (GPMC with SP1) を適用したグループポリシー管理コンソールの機能です。

WMIフィルタリングの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc779036(v=ws.10)>`および`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc758471(v=ws.10)>`を参照してください。

GPMC with SP1の詳細については、`<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=21895>`を参照してください。

以下の方法を使用すると、単一のOU内で単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、異なるOSのコンピューターを管理できます。各方法は、ユーザーストアへのパスを定義するための異なるアプローチです。

- ハードコードされた文字列
- プロファイル管理変数
- システム環境変数

ハードコードされた文字列は、1種類のコンピューターのみを含む場所を指定します。これにより、Profile Managementによってそれらのコンピューターからのプロファイルを一意に識別できます。たとえば、Windows 7コンピューターのみを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Windows7`を指定できます。この例では、

Windows7フォルダーがハードコードされています。ハードコードされた文字列は、Profile Managementサービスを実行するコンピューターでのセットアップを必要としません。

Profile Management変数は、コンピューターを一意に識別するために柔軟に組み合わせることができ、セットアップを必要としないため、推奨される方法です。たとえば、異なるビット数のオペレーティングシステムで実行されているWindows 7およびWindows 8プロファイルを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`を指定できます。この例では、2つのProfile Management変数は、Win7x86 (Windows 7 32ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) およびWin8x64 (Windows 8 64ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) のフォルダーに解決される可能性があります。Profile Management変数の詳細については、「Profile Managementポリシー」を参照してください。

システム環境変数には、いくつかの構成が必要です。これらは、Profile Managementサービスを実行する各コンピューターで設定する必要があります。Profile Management変数が適さない場合は、次のようにシステム環境変数をユーザーストアへのパスに組み込むことを検討してください。

各コンピューターで、%ProfVer%というシステム環境変数を設定します。(ユーザー環境変数はサポートされていません。) 次に、ユーザーストアへのパスを次のように設定します。

```
`\\upmserver\upmshare\%username%.%userdomain%\%ProfVer%`
```

たとえば、Windows 7 32ビットコンピューターの場合は%ProfVer%の値をWin7に、Windows 7 64ビットコンピューターの場合はWin7x64に設定します。Windows Server 2008 32ビットおよび64ビットコンピューターの場合は、それぞれ2k8および2k8x64を使用します。これらの値を多くのコンピューターで手動で設定するのは時間がかかりますが、Provisioning Servicesを使用する場合は、ベースイメージに変数を追加するだけで済みます。

ヒント: Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012では、グループポリシーを使用して環境変数の作成と適用を高速化できます。グループポリシー管理エディターで、 **コンピューターの構成** > **基本設定** > **Windows の設定** > **環境** をクリックし、次に **操作** > **新規** > **環境変数** をクリックします。

OU間

Profile Management が OU 間でプロファイルを管理する方法を制御できます。OU の階層と GPO の継承によっては、複数の OU に適用される共通の Profile Management ポリシーセットを1つの GPO に分離できます。たとえば、**ユーザー ストアへのパス** と **Profile Management を有効にする** は、すべての OU に適用する必要があります。そのため、それらを専用の GPO に個別に保存

し、そこでこれらのポリシーのみを有効にする（他のすべての GPO では未構成のままにする）ことができます。

継承されたポリシーを上書きするために、専用の GPO を使用することもできます。GPO の継承に関する情報については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

Profile Managementにおけるドメインとフォレストのサポート

Profile Managementは、Windows Server 2008およびWindows Server 2012のドメインとフォレストの機能レベルをサポートしています。それ以前のオペレーティングシステムはサポートされていません。

システム環境変数を使用すると、複数のドメインにおけるユーザー名の曖昧さを解消するのに役立ちます。詳細については、「OU内およびOU間のプロファイルの管理」を参照してください。

Profile Management を使用した高可用性とディザスターリカバリ

前提条件として、ユーザー ストアの構造と作成方法を理解してください。詳細については、「Profile Management のアーキテクチャ」および「ユーザー ストアの作成」を参照してください。

これらのトピックでは、Citrix Profile Management に適用される高可用性とディザスターリカバリのサポートされているシナリオについて説明します。シナリオを関連する基盤となる Microsoft テクノロジーに関連付け、サポートされているものを特定します。

- シナリオ 1: 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本的なセットアップ
- シナリオ 2: 複数のフォルダー ターゲットとレプリケーション
- シナリオ 3: ディザスターリカバリ
- シナリオ 4: 移動ユーザー
- シナリオ 5: ユーザー ストアの負荷分散

Profile Management は、信頼性の高い環境で動作することを前提としています。原則として、この信頼性は Active Directory (AD) とネットワーク ユーザー ストア (NUS) の可用性に適用されます。どちらかが利用できない場合、Profile Management はプロファイルを提供できず、Windows に責任を委ねます。Windows は通常、デフォルトのプロファイルを提供します。

ローミング プロファイルとの比較

ディザスターリカバリおよび高可用性シナリオでは、Citrix Profile Management は Microsoft 移動プロファイルに影響するのと同じ問題の影響を受ける可能性があります。特に明記されていない限り、Profile Management はそのような問題を解決しません。

特に、次の点に注意してください。

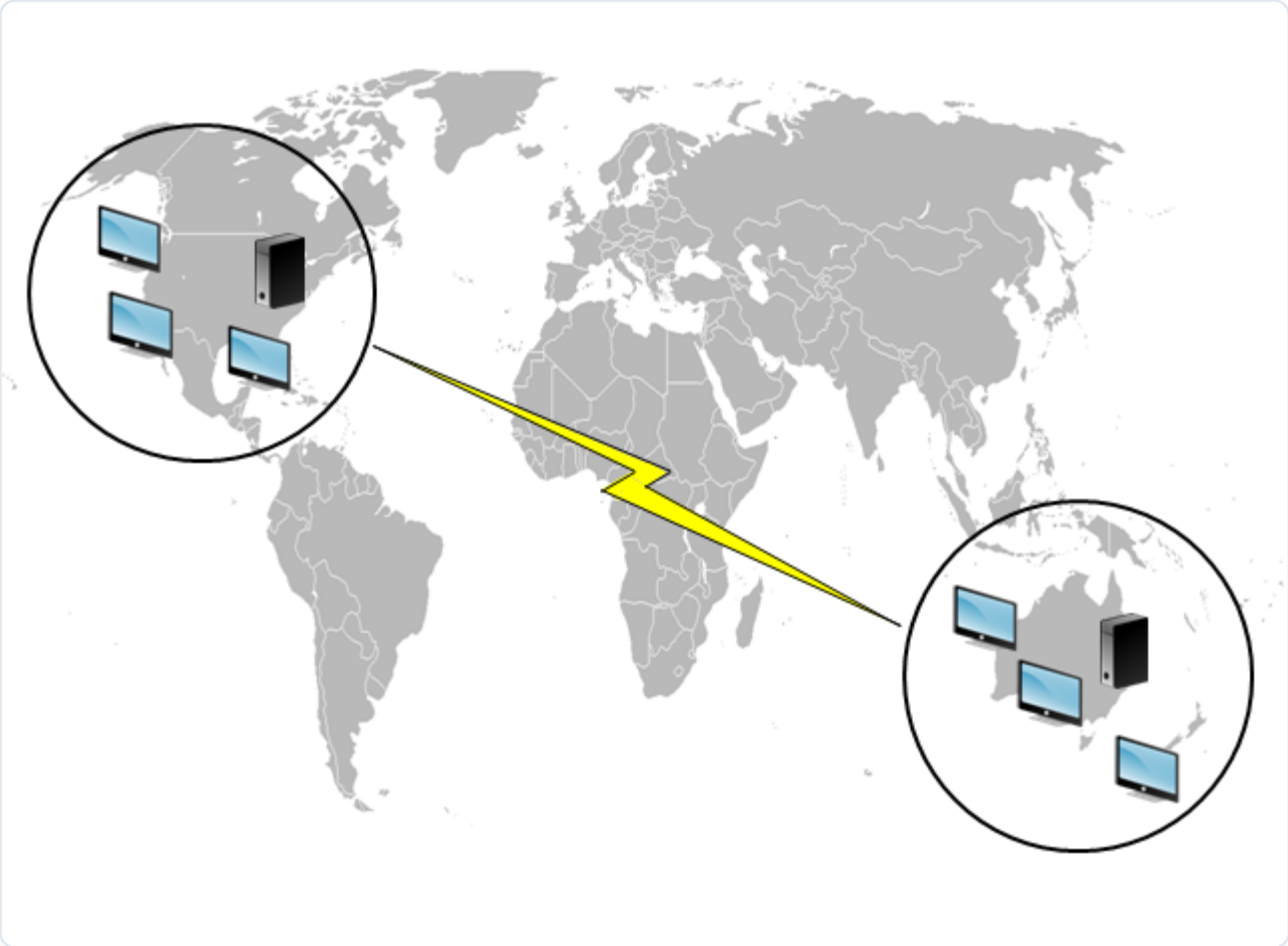
- Profile Management のサポートは、移動プロファイルもサポートされているシナリオに限定されます。
- オフライン ファイルのキャッシュ オプションは、移動ユーザー プロファイル共有で無効にする必要があります。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。
- 移動プロファイルは DFS 共有からロードされません。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2533009>` を参照してください。

シナリオ 1 - 地理的に隣接するユーザーストアとフェールオーバークラスターの基本設定

「ユーザーには、常に地理的に隣接した優先ネットワークユーザー ストア (NUS) をプロファイルに使用させたい。」この場合、オプション 1 と 2 が適用されます。

「NUS をフェールオーバー クラスター上に配置して、高可用性を実現したい。」この場合、オプション 2 が適用されます。

次の図は、このシナリオを示しています。北米 (NA) のユーザーは、ブリスベンではなくニューヨークの NUS を使用したいと考えています。目的は、遅延を減らし、オーストラリアまたはニュージーランド (ANZ) への大陸間リンクを介して送信されるトラフィックを最小限に抑えることです。



オプション 1 – DFS 名前空間

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、「DFS 名前空間の概要」を参照してください。

このオプションの実装

DFS 名前空間は、ブログ記事で提示されている問題の一部を解決できます。

NUS 用に `\\MyCorp\Profiles` という名前空間を設定しましょう。これは名前空間ルートです。ニューヨークとブリスベン (およびその他のサイト) に名前空間サーバーを設定します。各名前空間サーバーには、各 Active Directory の場所に相当するフォルダーがあり、それらのフォルダーはニューヨークまたはブリスベンのサーバー上のターゲットを持っています。

Active Directory (ユーザー レコードの一部) には、次の場所が構成されている場合があります。

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ワガワガ	ANZ

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ダーウィン	ANZ
ブリスベン	ANZ
オークランド	ANZ
シアトル	該当なし
サンディエゴ	該当なし
ウェストパームビーチ	該当なし
ポキプシー、ニューヨーク	該当なし

以下の図は、DFS名前空間を使用してこれを設定する1つの方法を示しています。

グラフィック(/en-us/profile-management/2303/media/upm-ha-dr-scenario1-option1-1.png)

設定が完了したら、ユーザー ストアへのパス設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l#`

8つのサイトに属するユーザーのプロファイルは、シナリオで要求される地理的制約を満たしながら、わずか2台のサーバーに分散されます。

代替案

名前空間ターゲットを順序付けし、次のように順序付けルールを使用できます。DFS 名前空間が使用するターゲットを解決する際、ローカルサイト内のターゲットのみが選択されるように指定できます。これは、特定のユーザーについて、すべてのデスクトップとサーバーが同じサイトに属することが保証されている限り機能します。

例えば、通常ポキプシーに拠点を置くユーザーがワガワガを訪れる場合、この手法は失敗します。そのユーザーのラップトッププロファイルはブリスベンから来るかもしれませんが、公開されたアプリケーションで使用されるプロファイルはニューヨークから来るかもしれません。

推奨される手法であるAD属性を使用すると、ユーザーが開始するすべてのセッションで同じDFS名前空間の選択が行われることが保証されます。その理由は、#l# がマシンの構成ではなく、ユーザーのAD構成から派生するためです。

オプション2 - フェールオーバークラスタリングを使用したDFS名前空間

参考資料

- 2ノードファイルサーバーフェールオーバークラスターの構成に関するステップバイステップガイドについては、2ノードクラスター化ファイルサーバーの展開を参照してください。
- 名前空間タイプの選択に関する情報については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/choose-a-namespace-type>`を参照してください。

このオプションの実装

フェールオーバークラスタリングを追加することで、基本的な高可用性を提供できます。

このオプションの重要な点は、ファイルサーバーをフェールオーバークラスターにすることです。これにより、フォルダーターゲットは単一のサーバーではなく、フェールオーバークラスターでホストされます。

名前空間サーバー自体に高可用性が必要な場合は、スタンドアロンの名前空間を選択する必要があります。ドメインベースの名前空間は、名前空間サーバーとしてのフェールオーバークラスターの使用をサポートしていません。フォルダーターゲットは、名前空間サーバーのタイプに関係なく、フェールオーバークラスターでホストされる場合があります。

重要: フェールオーバークラスター内のサーバーが失敗した場合、ファイルロックの状態が保持されない可能性があります。Profile Managementは、プロファイル処理中の特定の時点でNUS上のファイルロックを取得します。重要な時点でのフェールオーバーがプロファイルの破損につながる可能性があります。

シナリオ 2 - 複数のフォルダーターゲットとレプリケーション

「ローカルのNUSが利用できない場合、ユーザーが企業ネットワーク上の別のバックアップ場所からプロファイルデータを取得できるようにしたい。変更を加えた場合、その変更は、優先するNUSが再び利用可能になったときに、そこに戻される必要がある。」

このシナリオにおける基本的な要件は、ネットワーク上のプロファイルの代替場所を提供することです。ユースケースには、ネットワークインフラストラクチャの部分的な障害や、フェールオーバークラスターなどのフォルダーターゲットの完全な利用不能が含まれます。

検討する必要があるオプションは、複数のフォルダーターゲットの使用とDFSレプリケーションの使用です。

オプション 1 - 複数のフォルダーターゲットへのリフェラル

背景情報

DFS名前空間のチューニングについては、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/tuning-dfs-namespaces>`を参照してください。

このオプションについて

リフェラルとは、ユーザーデバイスが順番に試行するターゲットの順序付きリストです。これは、ソフトウェアライブラリのようにターゲットが読み取り専用であるシナリオ向けに設計されています。ターゲット間にリンクはないため、この手法をプロファイルで使用すると、同期できない複数のプロファイルが作成される可能性があります。

ただし、リフェラルのターゲットに対して、順序付け方法とターゲットの優先順位の両方を定義することは可能です。適切な順序付け方法を選択すると、すべてのユーザーセッションによって一貫したターゲットが選択されるように見えます。しかし実際には、ユーザーのすべてのデバイスが同じサイト内にある場合でも、サイト内ルーティングの問題により、異なるセッションによって異なるターゲットが選択される可能性があります。この問題は、デバイスがリフェラルをキャッシュするとさらに複雑になる可能性があります。

重要：このオプションはProfile Managementの展開には適しておらず、サポートされていません。ただし、ファイルレプリケーションは、単一セッションのみが保証され、 アクティブライトバックが無効になっている一部の特殊な展開で使用されています。これらの特殊なケースについては、Citrix Consultingにお問い合わせください。

オプション 2 - 分散ファイルシステムレプリケーション

背景情報

- 分散ファイルシステムレプリケーション（DFSR）の概要については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-replication/dfsr-overview>`を参照してください。
- レプリケートされたユーザープロファイルデータに関するサポートステートメントについては、`<https://techcommunity.microsoft.com/t5/ask-the-directory-services-team/microsoft-8217-s-support-statement-around-replicated-user/ba-p/398230>`を参照してください。
- DFSRが分散ファイルロックをサポートしない理由を理解するには、`<https://blogs.technet.com/b/askds/archive/2009/02/20/understanding-the-lack-of-distributed-file-locking-in-dfsr.aspx>`を参照してください。

このオプションの実装

DFSレプリケーションは、帯域幅が制限されたネットワーク接続を介したフォルダー同期を提供します。このオプションは、単一の名前空間フォルダー定義が参照する複数のフォルダーターゲットを同期するため、オプション1の問題を解決するように見えます。実際、フォルダーがフォルダー定義のターゲットとして追加されると、それらはレプリケーショングループに属するものとして指定できます。

考慮すべきレプリケーションには2つの形式があります。

- 一方向レプリケーション（アクティブ/パッシブレプリケーションとも呼ばれる）は、重要なデータを安全なリポジトリにバックアップするために設計されています。このレプリケーションは、たとえば、災害復旧サイトの維持に適しています。パッシブターゲットが参照に対して無効にされ、災害復旧計画がアクティブ化されたときにのみ呼び出される限り、Profile Managementで機能させることができます。
- 双方向レプリケーション（アクティブ/アクティブレプリケーションとも呼ばれる）は、グローバル共有データへのローカルな読み取り/書き込みアクセスを提供することを目的としています。ここでは、即時レプリケーションは必ずしも要件ではありません。共有データはめったに変更されない場合があります。 重要: アクティブ/アクティブDFSRはサポートされていません。

スケジュールは、データがレプリケートされる頻度を定義します。頻繁なスケジュールは、CPUと帯域幅の両方でより集中的ですが、即時更新を保証するものではありません。

その操作のさまざまな時点で、Profile Managementは、(共有)ユーザー ストアへの更新を調整するために、NUSで特定のファイルをロックする必要があります。通常、これらの更新は、セッションの開始時と終了時、およびアクティブなライトバックが有効になっている場合はセッションの途中で行われます。DFSレプリケーションでは分散ファイルロックがサポートされていないため、Profile ManagementはNUSとして1つのターゲットしか選択できません。この設定により、双方向レプリケーション（アクティブ/アクティブレプリケーション）の価値が事実上排除され、したがってProfile Managementには適しておらず、サポートされていません。一方向レプリケーション（アクティブ/パッシブレプリケーション）は、災害復旧システムの一部としてのみProfile Managementに適しています。その他の用途はサポートされていません。

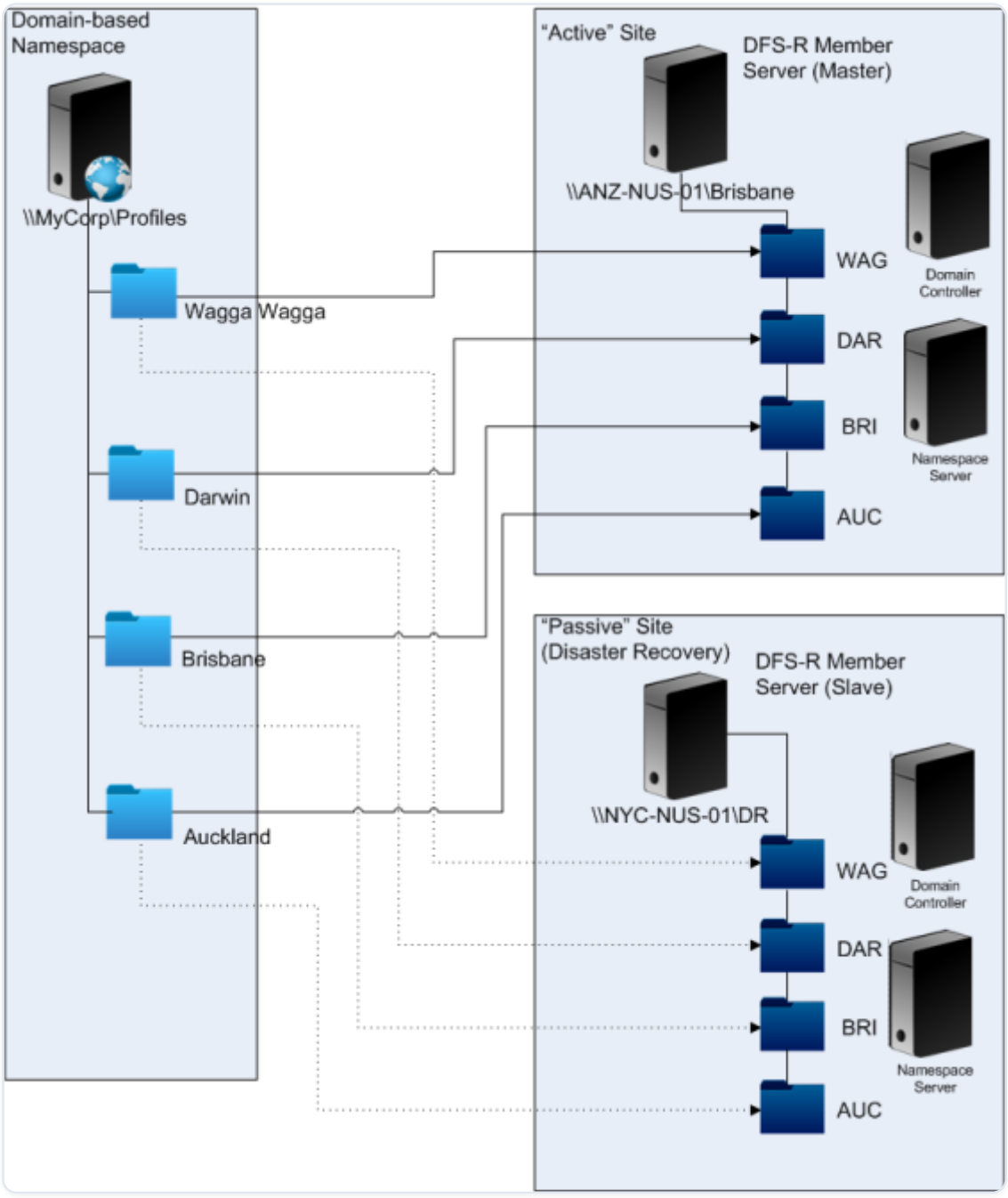
シナリオ 3 - ディザスターリカバリー

「Citrix®ユーザープロファイルを処理するために、完全なディザスターリカバリーサイトをどのように設定すればよいですか？」

Profile Management は、ディザスターリカバリー (DR) に必要な主要な機能をサポートしています。

- **DFS 名前空間**。ドメインベースの名前空間サーバーは、DRサイトが独自の名前空間サーバーを持つことができるため、このシナリオでは推奨されます。(スタンドアロンの名前空間サーバーはレプリケートできませんが、フェールオーバークラスターでホストできます。)
- **複数のフォルダーターゲットとDFSレプリケーション**。各NUSに対して、少なくとも2つのターゲットを提供しますが、通常運用では1つだけを有効にします。一方向のDFSレプリケーションを設定して、無効になっているターゲット (DRサイトにある) が最新の状態に保たれるようにします。
- **個々のフォルダーターゲットをホストするためのフェールオーバークラスター**。オプション。DRサイトのリソースを無駄にする可能性があります。

この図では、ドメインベースの名前空間がNUSを管理します。(シナリオ1の図では意図的に名前空間を含んでいませんでした。) DRサイトを含む各サイトに名前空間サーバーを含めることができます。すべてのサーバーは、名前空間の同じビューをサポートします。



DRプランがアクティブ化されると、DRサイトのNUSは、マスターNUSからレプリケートされた変更で最新の状態になります。ただし、名前空間サーバーはまだ名前空間の誤ったビューを反映しているため、その構成を更新する必要があります。各フォルダーについて、マスターサイトのフォルダーターゲットを無効にし、DRサイトのフォルダーターゲットを有効にする必要があります。

ADの更新が伝播した後、名前空間サーバーはDRフォルダーターゲットを正しく特定し、DRサイトはProfile Managementで使用できるようになります。

注: ユーザーストアへのパス設定は、実際のサーバーではなく名前空間フォルダーを参照するため、Profile Managementの構成を更新する必要はありません。

実際には、DRサイトは通常プロファイルには使用されないため、一方向または双方向のレプリケーションが可能です。災害が終了すると、DRサイトからマスターサイトへの接続により、災害中にNUSに加えられた変更がマスターサイトにレプリケートされます。

シナリオ 4 - 移動ユーザー

「スタッフが異なるオフィス間を移動する際、地理的に近い NUS を引き続き使用できるように、優先 NUS を変更したい。」

このシナリオの難しさは、ユーザーのログオンセッションが複数の場所から集約される可能性があることです。彼らは通常、デスクトップセッションをあるサイトから別のサイトへとローミングします。しかし、彼らのアプリケーションの多くは、ユーザーのデスクトップの現在の場所を認識していないバックエンドサーバーでホストされています。

さらに、ユーザーは切断されたセッションに再接続する可能性があります。おそらく、それらのセッションはホームロケーションでホストされています。何らかの理由でセッションがユーザーの新しい場所にある NUS に切り替えられた場合、パフォーマンスが低下します。

ホットデスクを利用する出張者にとって、**プロファイルストリーミング**と**常にキャッシュ**の設定を使用することが最善の選択肢です。固定マシンを使用する場合でも、Citrix® ストリーミングユーザープロファイルを使用して、迅速にログオンできます。常にキャッシュを有効にすると、プロファイルの残りの部分がバックグラウンドで読み込まれます。

シナリオ 5 - ユーザー ストアの負荷分散

「複数の地理的に隣接するネットワーク ユーザー ストア (NUS) 間でユーザーの負荷分散を行いたい。」

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、DFS 名前空間の概要を参照してください。

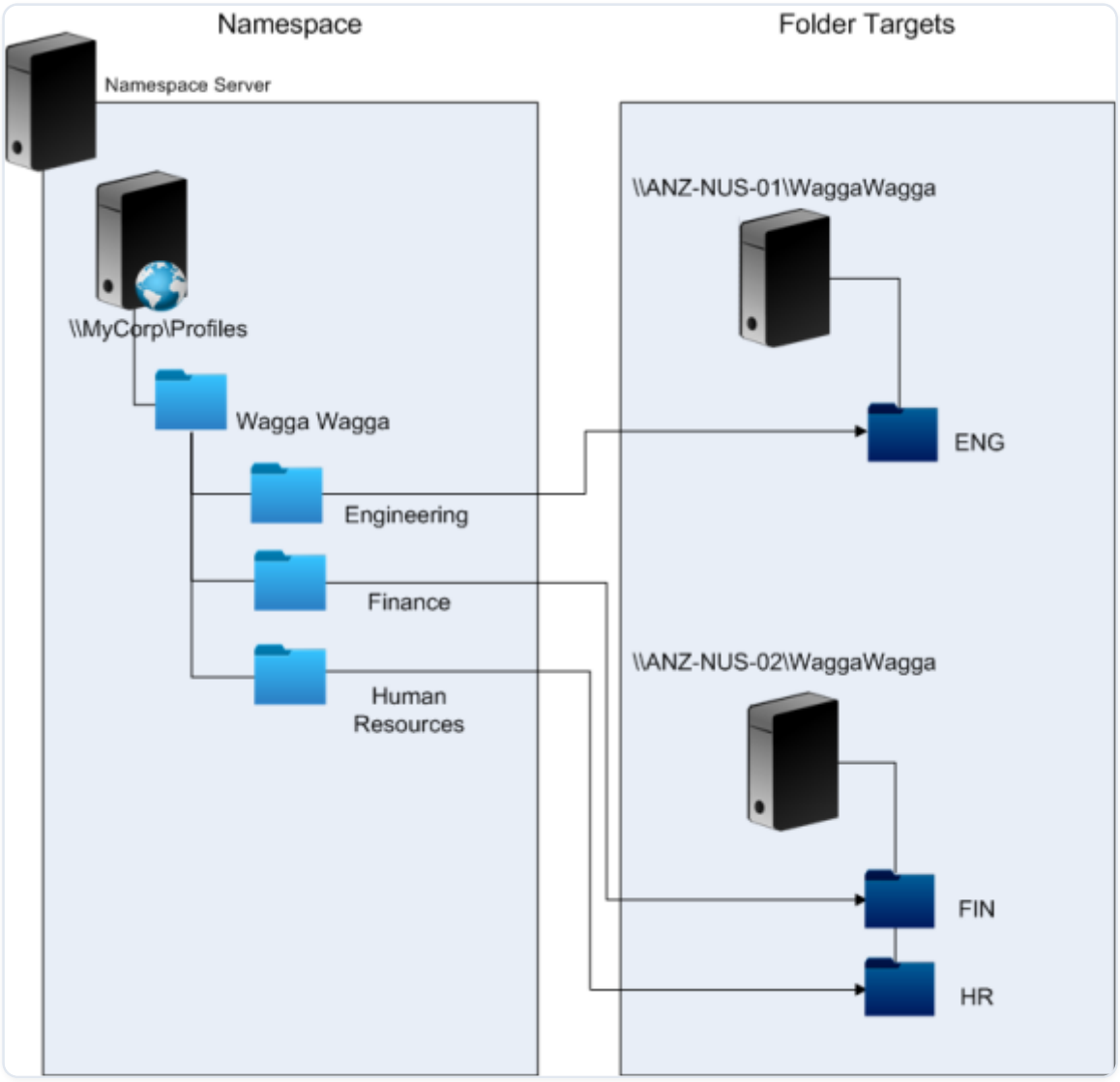
シナリオ 1 とは異なり、このシナリオでは、複数の NUS を必要とするほど大規模な単一サイトがあります。DFS 名前空間を使用することで、シナリオ 1 のソリューションを改善できます。

シナリオ 1 (オプション 1) では、DFS 名前空間を使用して、複数のサイトを同じサーバー上の異なるフォルダーにマッピングしました。同様の手法を使用して、名前空間のサブフォルダーを異なるサーバー上のフォルダーにマッピングできます。

理想的には、ユーザーアカウントを同様のサイズのチャンクに分割する AD 属性 (例: #department#) が必要です。シナリオ 1 と同様に、#department# は常に定義され、正しいフォルダー名が含まれていることが保証されている必要があります。

シナリオ 1 と同様に、`\\MyCorp\Profiles` と呼ばれる NUS の名前空間を設定します。

この図は、名前空間の設定方法を示しています。



セットアップが完了したら、「ユーザー ストアへのパス」設定を次のように構成します。

```
\\MyCorp\Profiles&num;l#&num;department#
```

この構成により、Wagga Wagga のユーザーは、両方ともローカルの 2 つの NUS サーバーに分散されます。

Profile Management を使用したフォルダーリダイレクトの計画

Profile Management はフォルダーリダイレクトをサポートしており、その使用が推奨されます。

Active Directory (AD) を使用すると、アプリケーションデータやドキュメントなどのフォルダーをネットワークの場所に保存（リダイレクト）できます。フォルダーの内容はリダイレクトされた場所に保存され、ユーザープロファイルには含まれないため、プロファイルのサイズが削減されます。AD のバージョンによっては、リダイレクトできるフォルダーとできないフォルダーがあります。さらに、フォルダーリダイレクトを構成することで、必須プロファイルのユーザーは、プロファイルの使用を制限しながらも、一部の設定、ファイル、その他のデータを保存できます。

一般的なガイドラインとして、ネットワーク帯域幅が許す限り、セッション内で定期的にアクセスされないすべてのユーザーデータに対してフォルダーリダイレクトを有効にすることをお勧めします。

リダイレクト可能なすべてのフォルダーが AD でアクセスできるわけではありません。特定のオペレーティングシステムでリダイレクトできるフォルダーは、レジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User Shell Folders` にあります。

フォルダーリダイレクトに関する重要な情報

Profile Management でフォルダーリダイレクトを使用する際の以下の重要な点に注意してください。

- XenDesktop 7 では、Citrix Virtual Desktops™ ポリシーを使用して、Studio でリダイレクトするフォルダーを指定します。詳細については、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。
- フォルダーリダイレクトを正常に構成するには、バージョン1とバージョン2のプロファイル間のフォルダー構造の違いに注意してください。
- フォルダーリダイレクトを使用する際のセキュリティに関する詳細については、Secure および Microsoft TechNet Web サイトの Folder Redirection Overview の記事を参照してください。
- ユーザーストアは、リダイレクトされたフォルダーに使用される共有とは異なる方法で扱ってください。
- リダイレクトされたフォルダーを除外リストに追加しないでください。

このビデオを視聴して、詳細を確認する:

サードパーティのディレクトリ、認証、およびファイルサービス

この記事では、Microsoft が提供するサービス以外のディレクトリ、認証、およびファイルサービスに対するサポートについて説明します。

ディレクトリサービス

重要: Active Directory (AD) は、Profile Management の運用に不可欠です。その他のディレクトリサービスはサポートされていません。これらのサービスには以下が含まれます。

- ノベル eDirectory。
- Windows 2000 Server またはそれ以前のオペレーティングシステム (OS)。Windows 2000 Server は AD をサポートしていますが、必要なレベルではありません。詳細については、「Profile Management でのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。Microsoft Windows NT 4.0 は AD より前のものです。
- Samba 4 またはそれ以前のバージョン。

認証サービス

その他の認証サービスはドメイン内で AD と共存できますが、Profile Management ではサポートされていません。その理由は、Profile Management Service と同様に、これらのサービスが winlogon.exe と相互作用し、ユーザーログオンプロセスに問題を引き起こす可能性があるためです。たとえば、Novell の認証サービスは、ユーザーがプリンターやファイル共有などの Novell リソースにアクセスすることを可能にしますが、サポートされていません。

ファイルサービス

サードパーティのファイルサービスは、ユーザーストアおよびフォルダーリダイレクト (使用されている Windows オペレーティングシステムでサポートされている場合) に使用できます。ファイルサーバーは、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) タイプであり、NTFS ファイルシステムをサポートしている必要があります。これらの理由により、以下がサポートされています。

- ウィンドウズ サーバー 2003 以降
- サンバ 3

重要: Novell ディレクトリに対する認証が必要なため、Novell ファイルサービスはサポートされていません。

複数のプラットフォーム上のプロファイルとProfile Managementの移行に関するFAQ

このセクションでは、複数のWindowsオペレーティングシステム、または単一オペレーティングシステムの複数のバージョンやビット数を持つ環境でプロファイルを使用することに関する質問と回答を掲載しています。

プロファイルとの互換性の問題を確実に回避するにはどうすればよいですか?

異種環境をサポートする必要性と、ユーザーとそのデバイスを追跡するためのパーソナライズ設定の必要性のバランスを取ります。通常、これら2つのニーズのバランスは、管理者とIT部門のみが決定できます。ユーザープロファイルを次のように調整することで、異なるシステムを管理します。プロファイルがローミングする場合、問題は適切に処理されるか、必要に応じて設定は完全に無視され、まったく追跡されないようにする必要があります。これは、多くのサードパーティ製ソフトウェアソリューションの基礎となっています。

トラブルシューティングを最小限に抑えるには、同じデバイス設定（インストールされているアプリケーション、OSバージョンなど）間でプロファイルをローミングするようにしてください。しかし、現代の多くのシナリオでは、これは容易に達成できず、不完全なユーザーエクスペリエンスにつながります。たとえば、ユーザーは複数のオペレーティングシステムを使用しているからといって、お気に入りやマイドキュメントを複製する必要はありません。この場合、管理者はフォルダーリダイレクトを使用することでユーザーエクスペリエンスを向上させることができます。このMicrosoft機能の使用は、他のシナリオでも推奨されます。

異なるシステム間でプロファイルを共有できますか?

Citrixは、プラットフォームごとに1つのベースプロファイルを持つことを推奨しています。これは、オペレーティングシステムごとに1つのプロファイルを持つことと必ずしも同じではありません。この推奨事項の詳細については、「複数のプラットフォームの計画」を参照してください。これにより、互いに機能しない可能性のある設定や、特定のOSに適用されない設定の数を最小限に抑えることができます。たとえば、デスクトップの電源設定は、サーバーシナリオやリモートデスクトップサービス（旧ターミナルサービス）を含むシナリオには適用されません。

プロファイルの数を簡素化して減らそうとし、それらが複数のOSで使用されるようになると、設定の競合のリスクが高まります。システムが同じでない場合、この問題はさらに複雑になります。たとえば、Microsoft Officeのアドインはすべてのデバイスに存在するとは限りません。幸いなことに、特定のデバイスに適用されないこのような設定は、多くの場合無視されます。無視されない場合にサポートの問題が発生します。アドインが存在しない場合、Microsoft Excelは起動に失敗します。

Profile Managementは、複数のバージョンまたはプラットフォーム間で設定をどのように有効にしますか?

Citrix®は、複数のベースプロファイル間で共通設定をローミングする機能を提供します。Citrixは、Microsoft Office、Internet Explorer、壁紙などの設定のローミングを可能にします。これらの種類のシナリオをサポートする能力は、アプリケーションがプラットフォーム間の設定のローミングをどの程度サポートしているかによって制限されます。次の質問のリンクは、Microsoftの立場とベストプラクティスをカバーしています。

Microsoftは、プラットフォームとバージョン間でローミングプロファイルをどのようにサポートしていますか?

関連情報については、「ローミングユーザープロファイルの展開」を参照してください。

Office 2007のツールバー設定については、「クイックアクセスツールバーのカスタマイズ」を参照してください。

標準のMicrosoft Windowsプロファイルソリューションが技術的、カスタム、またはビジネス要件を完全に満たさない場合、Profile Managementは実行可能なソリューションとなります。

x86プラットフォームとx64プラットフォーム間でプロファイルを共有することは可能ですか?

Windows x86 と x64 間で 1 つのプロファイルを共有することは一般的に可能ですが、いくつかの問題が発生する可能性があります。

いくつかの理由があります。たとえば、使用ごとのファイルの関連付けが `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes` に保存されることがその 1 つです。非管理者が Firefox を既定のブラウザとして設定すると、32 ビットシステムには次が保存されます。

`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes\FirefoxHTML\shell\open\command` -\> "`C:\Program Files\Mozilla Firefox\firefox.exe`" -requestPending -osint -url "%1"

このパスを含むプロファイルが Windows x64 で使用されると、OS は 64 ビット版の Firefox を探しますが、これは存在しません。代わりに、32 ビット版が `C:\Program Files (x86)\Mozilla Firefox` にインストールされている可能性があります。これにより、ブラウザが起動しなくなります。

逆の場合も同様です。x64 プラットフォームでパスが設定されていても、x86 プラットフォームで使用される場合です。

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルがどのように動作するかをテストしたいのですが、どこから始めればよいですか?

複数のプラットフォームで 1 つのプロファイルを使用する実験を行うには、テストと検証が重要です。推奨されるアプローチは、プラットフォームごとに 1 つのプロファイルを持つことです。単一のプロファイルが複数のプラットフォームでどのように動作するかを調べたい場合は、以下の情報が役立つかもしれません。

次の質問に答えることで、何が問題を引き起こす可能性があるかを特定することから始めます。このトピックの残りの質問を、問題への対処と追跡のアイデアとして使用してください。

プラットフォーム間で動作する項目：

- マイドキュメントと「お気に入り」
- 構成情報（既定値を含む）をプロファイル内に完全に保存するアプリケーション

動作しない可能性がある項目：

- ハードコードされたデータ、パスデータなどを保存するアプリケーション
- x64 または x86 プラットフォームに固有の設定
- すべてのシステムに存在するわけではない Excel アドインなど、同一ではないアプリケーションのインストール。これらのインストールは、アプリケーションによって異なるあらゆる種類のエラー状態を引き起こす可能性があります。

ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることはできますか?

はい。プロファイル管理は、ローカルデスクトップ、Citrix Virtual Apps、Citrix Virtual Desktops™、またはこれらの任意の組み合わせに基づいてプロファイルを適用できます。

適切なプロファイル管理設定が有効になっている場合、リモートデスクトップサービス（旧ターミナルサービス）プロファイルは、ユーザーがターミナルサーバーまたはCitrix Virtual Appsセッションを持っている場合にのみ使用されます。この設定は、ユーザーがリモートデスクトップサービスセッションを介してログオンするときに、既存のプロファイル（Citrixユーザープロファイルを除く）を上書きします。

Windows 7では、GPOコンピューター設定を使用して、ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができます。繰り返しになりますが、これはGPに基づいているため、プロファイルの割り当てはGPOが適用されるOUに依存します。

コンピューターに基づくプロファイルの割り当てが望ましいのはなぜですか?

個別のユーザーエクスペリエンスが必要な場合、ユーザーがログオンするコンピューターにプロファイルを割り当てることは有用です。たとえば、管理者は、リモートデスクトップサービス（旧ターミナルサーバー）セッションで使用されるプロファイルを、デスクトップで使用されるプロファイルとは別に保持することを決定する場合があります。

プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行しますか?

ユーザーがログオンするときに、既存の移動プロファイルとローカルプロファイルを自動的に移行するようにプロファイル管理を構成できます。また、テンプレートプロファイルまたはデフォルトのWindowsプロファイルを新しいCitrixユーザープロファイルのベースとして使用することもできます。

プロファイル管理の移行の計画と設定については、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。ソフトウェアがWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する方法の詳細については、「ログオン図」を参照してください。

どのプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行できますか?

プロファイル管理は、Windowsローカルプロファイルと Windows移動プロファイルを移行できます。強制プロファイル（.manファイル）はプロファイル管理によって無視されますが、Citrixユーザープロファイルのテンプレートとして使用できます。プロファイル管理が正しく機能するように、すべてのユーザーへの強制プロファイルの割り当てを無効にしてください。

既存のWindows強制プロファイルをテンプレートとして使用するには、「テンプレートまたは強制プロファイルの指定」を参照してください。

テンプレートプロファイルを使用するにはどうすればよいですか?

プロファイル管理では、新しいCitrixユーザープロファイルの作成のベースとして使用されるテンプレートプロファイルを指定できます。通常、初めてプロファイルを割り当てられたユーザーは、ログオンするWindowsデバイスのデフォルトユーザープロファイルを受け取ります。これは許容できるかもしれませんが、異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルのバリエーションが、ユーザーのために作成されるベースプロファイルの違いにつながることを意味します。したがって、テンプレートプロファイル機能はグローバルなデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

ユーザーがプロファイルデータに変更を加えるのを防ぎたい場合は、テンプレートプロファイルをCitrix強制プロファイルとして識別することもできます。

詳細については、(/ja-jp/profile-management/2303/configure/template.html)「テンプレートまたは必須プロファイルの指定」を参照してください。

インストールとセットアップ

インストールパッケージをダウンロードする

開始する前に、有効なCitrix®アカウントがあることを確認してください。

ダウンロードを完了するには、次の手順に従ってください。

1. Citrix Virtual Apps and Desktopsダウンロードページにアクセスします。
2. ダウンロードしたいバージョン（例: 2206）を見つけて展開し、**Sign in to access restricted downloads**をクリックします。
3. Citrixアカウントの資格情報でサインインします。
4. **Citrix Virtual Apps and Desktops™ 7 `<Version_Number>` > 製品ソフトウェア > Citrix Virtual Apps and Desktops 7 `<Version_Number>`, すべてのエディション**を選択します。
5. **Components that are on the product ISO but also packaged separately**ノードを展開し、**Profile Management**サブノードの**Download File**をクリックします。
6. 表示される**Download Agreement**ダイアログボックスで、ダウンロードを開始するために同意します。

   ダウンロードが完了すると、`ProfileMgmt_<version_number>.zip`ファイル（例: ProfileMgmt_2206.zip）がダウンロードフォルダーに表示されます。

ダウンロードに含まれるファイル

ダウンロードしたパッケージを解凍します。パッケージに含まれるファイルについては、次の表を参照してください。

ファイル名	説明	場所
x86.msi	32ビットシステム用インストーラー	
x64.msi	64ビットシステム用インストーラー	

ファイル名	説明	場所
CitrixBase.adml および CitrixBase.admx	プロファイル管理ポリシー階層用のADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\CitrixBase`
ctxprofile.adml および ctxprofile.admx	プロファイル管理ポリシー設定用のADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)

Profile Management のインストール

Profile Management は、VDA インストーラーのオプションコンポーネントです。VDA と一緒に、または個別にインストールできます。この記事では、Profile Management 独自のインストーラーを使用して Profile Management をインストールする方法について説明します。

VDA と一緒に Profile Management をインストールする方法について詳しくは、Citrix Virtual Apps and Desktops ドキュメントの「VDA のインストール」を参照してください。

概要

ユーザープロファイルを管理する各コンピューターに Profile Management をインストールする必要があります。通常、配布ツール、イメージングソリューション、またはストリーミングテクノロジーを使用して、コンピューターで MSI インストーラーを実行します。任意のコンピューターに直接インストールすることもできます。サイレントインストールがサポートされています。

一般的なインストール手順は次のとおりです。

1. MSI インストーラーを実行します。
2. グループポリシーを使用して Profile Management を構成するには、ADMX テンプレートファイルをグループポリシーに追加します。

> **注:**
>
> すべてのユーザーコンピューターに同じバージョンの Profile Management をインストールすることをお勧めします。また、同じバージョンの ADMX テンプレートファイルをグループポリシーに追加してください。このアプローチにより、異なるユーザープロファイルストア

> 構造（異なるバージョン）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

MSI インストーラーを実行する

この手順では、単一のコンピューターに Profile Management をインストールします。

1. 管理者としてコンピューターにログオンします。
2. インストールパッケージのルートフォルダーにある MSI インストーラーを実行します。インストールウィザードが表示されます。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。
4. コンピューターを再起動します。

インストーラーは、DLL やその他のファイルに加えて、インストール場所（デフォルトでは `C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager`）にこれらのファイルを作成します。

ファイル名	説明
UPMPolicyDefaults_all.ini	Profile Management .iniファイル
UserProfileManager.exe	Profile Managementによって管理されているコンピューター上で機能を実行するWindows サービス

コマンドラインからMSIインストーラーを実行する

コマンドラインからMSIインストーラーを実行すると、ユーザー操作なしでインストールを完了できます。

コマンドラインインストールでは、以下のインストールオプションも提供されます。

- `/norestart`オプションを使用して再起動を抑制します。

  オペレーティングシステムによっては、コンピューターが再起動するまでProfile Managementが機能しない場合があります。たとえば、Windows 7ワークステーションを再起動する必要はありません。
- 必要に応じて`INSTALLDIR`を指定します。
- Profile Managementの.iniファイルのインストールを防止するには、`INSTALLPOLICYINIFILES`を`no`に設定します。

以前のバージョンで.iniファイルを使用しており、その設定をこのバージョンで使用したい場合は、インストール後に各設定を手動でGroup Policy Editorの対応するProfile Managementポリシーに転送してください。

- アップグレードには`OVERWRITEINIFILES=yes`オプションを使用します。詳細については、Profile Managementのアップグレードを参照してください。

次の例では、ユーザーインターフェイスを表示せず、再起動なしでProfile Managementをインストールします。UACが有効な場合は、昇格された特権で`msiexec`コマンドを実行します。たとえば、管理者として実行したコマンドプロンプトから実行します。

```
msiexec /i <path to the MSI file> /quiet [/norestart]
[INSTALLDIR=<installation directory>]   [OVERWRITEINIFILES=yes]
[INSTALLPOLICYINIFILES=no]
```

Profile Managementのアンインストール

この手順では、単一のコンピューターからProfile Managementをアンインストールします。開始する前に、コンピューターの管理者であることを確認してください。

1. データ損失を避けるため、すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. プログラムと機能のインストール済みプログラムの一覧から、**Profile Management**を選択し、**アンインストール**をクリックします。
3. **はい**をクリックします。
4. コンピューターを再起動します。

サイレントモードでProfile Managementをアンインストールすることもできます。

（オプション）ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加する

グループポリシーを使用してProfile Managementを構成する方法に応じて、ADMXテンプレートファイルをドメインコントローラーまたはコンピューターに追加します。

- OU内のコンピューターに対してProfile Managementを一元的に構成するには、ADMXテンプレートファイルをすべてのドメインコントローラーに追加します。
- 各コンピューターに対してProfile Managementを個別に構成するには、ADMXテンプレートファイルをそのコンピューターに追加します。

インストールパッケージから以下のファイルをコピーし、ドメインコントローラーまたはコンピューターの場所に貼り付けます。詳細な手順については、以下の表を参照してください。

ファイル名	元の場所（インストールパッケージ）	コピー先（ドメインコントローラーまたはコンピューター）
CitrixBase.adml	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>`（例：`C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`）
CitrixBase.admx	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions`
ctxprofile.adml	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
ctxprofile.admx	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions`

ADMXテンプレートファイルの詳細については、こちらのMicrosoft記事を参照してください。

GPOでプロファイル管理ポリシーを構成する

ドメインコントローラーにADMXファイルを追加した後、プロファイル管理ポリシーを表示および構成するには、次の手順に従います。

1. ドメインコントローラーで、**Active Directoryユーザーとコンピューター**を開きます。プロファイル管理がインストールされているコンピューターを含むOUを特定します。
2. **グループポリシーの管理**を開き、OUを右クリックして、**このドメインにGPOを作成してここにリンク**を選択し、GPOを作成します。

> **注:**

> GPOにセキュリティフィルタリングを適用する場合は、認証済みユーザーグループまたはコンピューターグループのいずれかを使用してください。個々のユーザーのみを含むセキュリティグループは使用しないでください。

3. **グループポリシーオブジェクト**から、新しく作成したGPOを右クリックし、**編集**を選択します。グループポリシー管理エディターウィンドウが表示されます。
4. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート... > Citrix Components > プロファイル管理**を選択します。すべてのプロファイル管理ポリシーが表示されます。
5. 必要に応じてプロファイル管理を構成します。

ローカルGPOでProfile Managementをテストする

プロダクション環境にProfile Managementを展開する前に、テスト環境をセットアップすることをお勧めします。ドメインのグループポリシーオブジェクト (GPO) に設定を転送するための完全にサポートされたより簡単な方法は、マシンへのローカルインストールに基づいています。

一般的なワークフローは次のとおりです。

1. マシンにProfile Managementをインストールします。
2. 構成を決定するに記載されている質問への回答に基づいて、ローカルGPOでProfile Managementポリシーを構成します。
3. Profile Managementを有効にする。
4. ログオンおよびログオフの動作をテストします。
5. 満足のいく結果が得られるまで、ローカルGPOの設定を調整します。

概要

マシンがプロダクションOUのメンバーである場合、ローカルGPOを使用してProfile Managementを安全にテストできます。ローカルGPOポリシーは、OUおよびドメインのGPOが利用できない場合に有効になります。ローカルGPOを使用する場合は、他の場所（たとえば、ドメインやサイト）でProfile Management GPOが使用されていないことを確認してください。

ドメインGPOを使用してグループポリシーを構成できない場合、ローカルGPOを長期的なソリューションとして使用できます。ただし、この方法は環境に次のような複雑さをもたらします。

- 各マシンには、Profile Management ADMXファイルがインストールされている必要があります。

- ドメインユーザーは、複数のマシンにアクセスする際に設定を維持できない可能性があります。

> **重要:**
>
> ローカルGPOを長期的なエンタープライズソリューションとして使用することはお勧めしません。

ユーザーエクスペリエンスをテストする

プロファイルソリューションを実装する場合、ユーザーがさまざまなマシンからリソースにアクセスする際のユーザーエクスペリエンスの相違を最小限に抑える必要があります。

ユーザーのレジストリとファイルは、物理マシン、プロファイル構成、およびオペレーティングシステムによって異なる場合があります。したがって、ユーザーがローミングするマシンのシステムインストール間の相違に対処するようにProfile Managementを構成する必要があります。

そのためには、本番環境を模倣する方法で、ユーザーのリソースへのアクセスを確認します。これらのリソースには、次のものが含まれる場合があります。

- ローカルにインストールされたアプリケーションが搭載されたマシン
- ストリーミングされたアプリケーションまたはローカルにインストールされたアプリケーションを含む仮想デスクトップ
- 仮想アプリサーバーで公開されているか、そこからストリーミングされている仮想アプリ
- ターミナルサービスクライアント

オペレーティングシステムのバリエーションをテストする

ユーザーは、異なるオペレーティングシステムからアプリケーションにアクセスする場合があります。それらの間のバリエーションにより、単一のユーザープロファイル内で競合する設定が作成される可能性があります。

詳細については、「プロファイルバージョン」を参照してください。

ユーザー ストアを作成する

この記事では、組織に最適な方法でユーザー ストアを作成するのに役立ちます。ここに記載されている情報を確認するだけでなく、ユーザー ストアへのパスを可能な限り効率的に構成してくだ

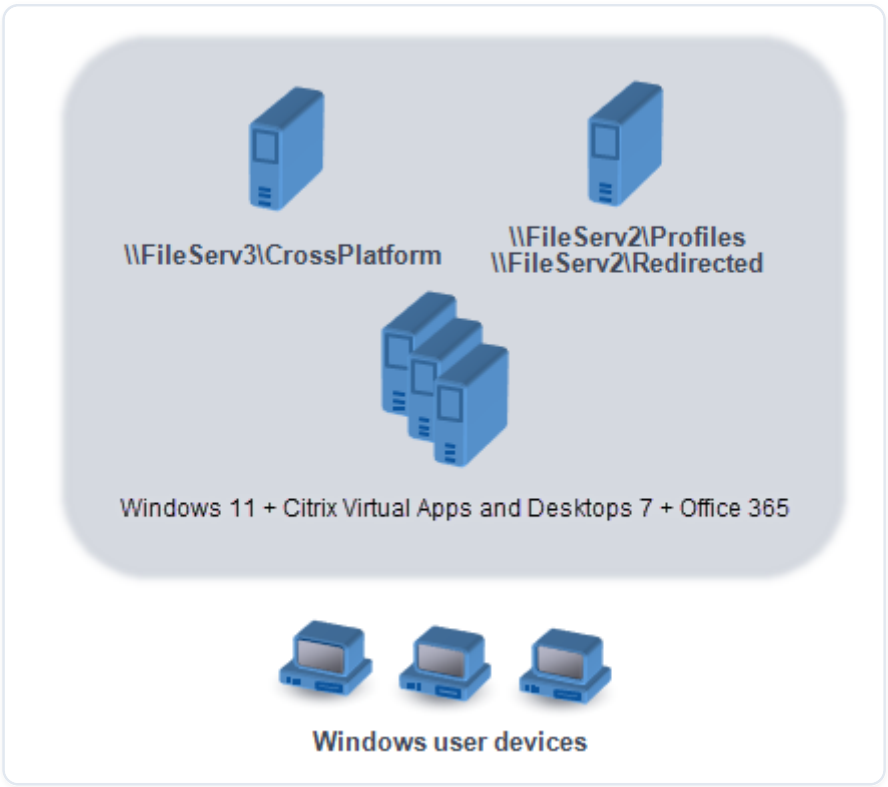
さい。たとえば、変数を適切に使用してパスを構成します。その件に関するアドバイスと例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアは、Citrix® ユーザー プロファイルを保存するための中央のネットワーク ロケーションです。

ユーザー ストアには、任意のサーバー メッセージ ブロック (SMB) または共通インターネット ファイル システム (CIFS) ファイル共有を使用できます。ベスト プラクティスは、以下を確実にすることです。

- 共有は、Citrix ユーザー プロファイルで使用されるアカウントからアクセスできること。
- 共有は、プロファイル データを保存するのに十分な大きさであること。
- 共有は、ディスクまたはネットワーク障害の場合に堅牢であること。

この図は、リダイレクトされたフォルダー アイテムのストレージ、クロスプラットフォーム設定ストア (別のファイル サーバー上)、および Microsoft Office を実行する Windows 11 仮想デスクトップ (Citrix Virtual Desktops™ で公開) に関連するユーザー ストアの例を示しています。仮想デスクトップにアクセスするユーザー デバイスも参考として示されています。



安全なユーザー ストアを作成するための推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「ローミング ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを保証します。また、ユー

ザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザー プロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めます。

展開に複数のプラットフォームが含まれている場合は、「複数のプラットフォームの計画」でバージョン 1 およびバージョン 2 のプロファイル タイプに関する情報を確認してください。ユーザー ストアの構造については、「Profile Management のアーキテクチャ」を参照してください。

注: アプリケーションがユーザー プロファイル内のファイルのアクセス制御リスト (ACL) を変更した場合、Profile Management はそれらの変更をユーザー ストアにレプリケートしません。この動作は、Windows ローミング プロファイルと一貫しています。

このビデオを見て詳細を確認する**:**



アップグレードと移行

Profile Management のアップグレード

この記事では、Active Directory を使用して Profile Management 展開をアップグレードするためのガイダンスを提供します。

重要: このアップグレードプロセスにおける手順の順序に従うことが重要です。新しい .adm または .admx ファイルをグループポリシーに追加した後にのみ、すべてのコンピューターでソフトウェアをアップグレードしてください。事前にアップグレードすると、ログファイルが2つの場所に保存される可能性があります。一方には古いバージョンのログファイルが、もう一方には新しいバージョンのファイルが含まれます。この考慮事項は、特に Citrix virtual desktops™ 展開に影響します。

スケジュールされたメンテナンス期間中にアップグレードすることも重要です。または、Active Directory のレプリケーションによって変更が展開全体に伝播されるような時間にアップグレードしてください。通常、アップグレードには最大24時間かかる場合があります。

アップグレードプロセスには以下が含まれます。

1. グループポリシーオブジェクト (GPO) を作成し、新しい .adm または .admx ファイルを新しい GPO に追加する

   \- または -

   この記事の後半で説明するように、既存の .adm または .admx ファイルをアップグレードする。
2. この記事の後半で説明するように、すべてのコンピューターで .msi ファイルをアップグレードする。
3. GPO を適用する。

既存の .adm ファイルをアップグレードするには

グループポリシーに以前のバージョンの Profile Management .adm ファイルが存在する場合、以下の手順を使用してアップグレードできます。アップグレードすると、以前のバージョンのすべてのポリシー設定が保持されます。

1. ドメインコントローラーで、次のいずれかを実行します。

   - 既存の .adm ファイルをインポートします。このファイルは、ダウンロードパッケージ内の GPO_Templates フォルダーにあります。
   - ダウンロードパッケージ内の GPO_Templates フォルダーから .admx ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions` フォルダーにコピーし、.adml ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions\<localized` フォルダーにコピーします\>。たとえば、英語のオペレーティングシステムでは、\<localized folder\> は en-US です。

2. Profile Management を構成するために使用するコンピューターで、グループポリシーオブジェクトエディターを開きます。
3. グループポリシーオブジェクトエディターで、**管理用テンプレート**を右クリックし、**テンプレートの追加と削除**を選択します。
4. 既存の Profile Management .adm ファイル (例: ctxprofile5.4.1) を選択し、**削除**をクリックしてから**閉じる**をクリックします。管理用テンプレート\Citrix フォルダーが削除されます。
5. **管理用テンプレート**を右クリックし、もう一度**テンプレートの追加と削除**を選択します。
6. **追加**をクリックし、新しいバージョンの .adm または .admx ファイルの場所 (例: ctxprofile5.5.0) を参照して選択し、**閉じる**をクリックします。新しいファイルがインポートされますが、以前の設定は保持されます。

.msi ファイルをアップグレードするには

すべてのユーザーデバイスに同じバージョンの Profile Management をインストールし、その同じバージョンの .adm または .admx ファイルをすべてのドメインコントローラーの各グループポリシーオブジェクトに追加することをお勧めします。これにより、異なるユーザープロファイルストア構造 (異なるバージョンからのもの) が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

新しい設定を有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンの Profile Management にアップグレードすることをお勧めします。使用しているバージョンで設定が新しいかどうかを確認するには、「Profile Management のポリシー」を参照してください。

1. アップグレードするコンピューターからすべてのユーザーがログオフしていることを確認します。
2. 各コンピューターで .msi ファイルを実行して、既存のバージョンに新しいバージョンの Profile Management をインストールします。詳しくは、「インストールとセットアップ」を参照してください。

.ini ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management で .ini ファイルを編集し、新しいバージョンにアップグレードします。ソフトウェアはファイルが編集されたことを検出し、デフォルトでは上書きしません。既存の .ini ファイル設定を保持し、新しいバージョンの新しい設定を使用するには、次のいずれかを実行する必要があります。

- 新しいバージョンの .ini ファイルから新しい設定を、既存の編集済み .ini ファイルに手動で追加します。
- 既存の編集済みバージョンの .ini ファイルのコピーを保存します。アップグレード中にファイルを強制的に上書きするには、OVERWRITEINIFILES=yes コマンドラインオプションを使用します。保存した設定をアップグレードされた .ini ファイルに追加します。例:

  ```
  msiexec /i <path to the MSI file\> /quiet [INSTALLDIR=<installation directory>] [OVERWRITEINIFILES=yes] [INSTALLPOLICYINIFILES=no]
  ```

注

HDX™ を介して Profile Management ポリシーを構成するには、次の操作を行う必要があります。

- Delivery Controllers をアップグレードします。その理由は、HDX が XenApp および XenDesktop のレイアウト `image-full\x64\Citrix Desktop Delivery Controller` にある UserProfileManager_PowerShellSnapIn.msi ファイルから Profile Management のポリシー設定を読み取るためです。
- Profile Management の最新バージョンを入手するために、VDA をアップグレードします。

その他のリソース

- Profile Management のポリシー
- インストールとセットアップ

構成

構成の優先順位

Group Policiesと.iniファイルを使用してProfile Managementを構成できます。構成設定は次のように適用されます。

1. Group Policiesで定義された設定が優先されます。ポリシー設定が**未構成**に設定されている場合にのみ、.iniファイルが照会されます。

   注: 組織単位内のサイトやドメインにGroup Policy Objectを選択的に適用する場合、さらに優先順位が適用されます。「Group Policy: Filtering and Permission」を参照してください。ドメインおよびOUのGroup Policiesは、ローカルポリシーよりも優先されます。
2. 設定がポリシーによって定義されていない場合、Profile Managementは.iniファイルからその設定を読み取ろうとします。
3. 設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、デフォルト設定が使用されます。

Group Policyと.iniファイルで同じ設定を異なる方法で構成したい状況があるかもしれません。たとえば、Group Policy設定でデフォルトのログ記録を有効にし、トラブルシューティングに使用するコンピューターで.iniファイルを使用して詳細なログ記録を有効にする場合などです。

Profile Management .ini ファイルについて

デフォルト構成

Profile Management には、.ini ファイルに保存されているデフォルト構成が付属しています。このファイルは、Profile Management Service が認識できるようにインストールフォルダーに配置する必要があります。デフォルト構成は、ほとんどの環境に適しています。すべてのグループのすべてのユーザーのプロファイルを処理します。

Windows XP または Windows Server 2003 で Profile Management の英語以外の展開を実行している場合は、UPMPolicyDefaults_all.ini を使用して、.ini ファイルの適切な言語バージョンを作成する必要があります。このファイルのコピーを言語に合わせて名前変更し（たとえば、スペイン語の

場合は UPMPolicyDefaults_all_es.ini）、フォルダー名をローカライズします。次のファイル名を使用します。

- フランス語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_fr.ini
- ドイツ語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_de.ini
- スペイン語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_es.ini
- 日本語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_ja.ini
- 簡体字中国語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_zh-CN.ini

.ini ファイルの変更

.ini ファイルにエントリを追加する場合は、変数と値が正しい形式であることを確認してください。

フラグ（オン/オフインジケーター）は次の形式である必要があります。

```
<variable>=<value>
```

値が 1 の場合、設定が有効になり、その他の値または値がない場合は無効になります。たとえば、次のエントリは `ServiceActive` 設定を有効にします。

```
ServiceActive=1
```

次のいずれかのエントリは、設定を無効にします。

```
ServiceActive=ON

ServiceActive=OFF

ServiceActive=TRUE

ServiceActive=FALSE

ServiceActive=
```

リストエントリは次の形式である必要があります。

```
<value>=
```

次のエントリは、同期する Microsoft Office ファイルを指定します。

```
[SyncFileList]

AppData\Local\Microsoft\Office\*.OfficeUI
```

グループポリシー設定の変更は、ターゲットコンピューターで手動または自動のポリシー更新が発生したときに適用されます。.ini ファイルへの変更は、推奨されるコマンド **gpupdate /force** を発行したときに適用されます。または、ターゲットコンピューターで Profile Management Service を再起動したときに変更が適用されます。

競合するプロファイルを解決する

既存の展開にProfile Managementを追加すると、ローカルのWindowsユーザープロファイルとCitrix®ユーザープロファイル（ユーザーストア内）の間で競合が発生する可能性があります。このシナリオでは、ローカルのWindowsプロファイル内のデータがどのように管理されるかを決定する必要があります。

1. Profile Managementで、フォルダーを開きます。
2. ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. ドロップダウンリストから次のいずれかのオプションを選択します。

    - 。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを処理しますが、それを変更することはありません。
    - 。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを削除し、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。
    - 。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的）、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

ここでローカルプロファイルの競合処理が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

プロファイル管理を有効にする

展開を容易にするため、デフォルトでは、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。プロファイル管理は、他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように機能するかをテストした後でのみ有効にしてください。

グループポリシーを使用してプロファイル管理を有効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理**で、**プロファイル管理を有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルを使用してプロファイル管理を有効にすることもできます。これを行うには、次の手順に従います。

1. プロファイル管理がインストールされているマシンで、`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager\UPMPolicyDefaults_all.ini`に移動します。
2. メモ帳を使用してUPMPolicyDefaults_all.iniを開きます。
3. 設定を編集して、特定の要件を反映させます。

この設定がグループポリシーで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

次のようにしてプロファイル管理を有効にすることもできます。

- Citrix Studio。Citrix Studioを使用してプロファイル管理を有効にする方法については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。
- Workspace Environment Management (WEM)。WEMを使用してプロファイル管理を有効にする方法については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

このビデオを見て詳細はこちら**:**



テンプレートまたは強制プロファイルを指定する

デフォルトでは、新しいCitrix®ユーザープロファイルは、ユーザーが最初にログオンするコンピューターのデフォルトユーザープロファイルから作成されます。プロファイル管理では、プロファイル作成時に中央に保存されたテンプレートを使用することもできます。このテンプレートは、任意のネットワークファイル共有に存在する標準の移動プロファイル、ローカルプロファイル、または強制プロファイルにすることができます。

異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにばらつきがあると、ユーザー用に作成されるベースプロファイルに違いが生じます。テンプレートプロファイルの選択は、グローバルデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

前提条件：

- テンプレートプロファイルにユーザー固有のデータが含まれていないことを確認します
- ユーザーがテンプレートプロファイルへの読み取りアクセス権を持っていることを確認します
- 強制プロファイルをテンプレートプロファイルに変換するには、ファイルNTUSER.MANの名前をNTUSER.DATに変更します
- テンプレートプロファイルのNTUSER.DATからSACLを削除します

既存のMicrosoftプロファイルをカスタマイズしてテンプレートプロファイルを作成する方法については、`<https://support.microsoft.com/kb/959753>`および`<https://support.microsoft.com/kb/973289>`を参照してください。

1. プロファイル管理で、フォルダーを開きます。
2. **テンプレートプロファイル**ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. **テンプレートプロファイルへのパス**で、テンプレートまたは強制プロファイルとして使用するプロファイルの場所を入力します。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーへの完全なパスです。

   重要：パスがNTUSER.DATのみで構成されている場合、パスにファイル名を含めないようにしてください。たとえば、ファイル`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`の場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。

   UNCパスまたはローカルマシン上のパスである絶対パスを使用します。たとえば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージにテンプレートプロファイルを永続的に指定するために、後者を使用できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。

5. オプションで、既存のWindowsユーザープロファイルを上書きするためのチェックボックスを選択します。ユーザーにCitrixユーザープロファイルがない場合でも、ローカルまたはローミングWindowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、これが無効になっていない場合、このファイルはユーザーストアに移行されます。**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする**または**テンプレートプロファイルがローミングプロファイルを上書きする**チェックボックスを有効にすることで、設定を変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別します。Windows強制プロファイルと同様に、Citrix強制プロファイルには変更を保存できません。

ここで**テンプレートプロファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートまたは強制プロファイルは使用されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

マイグレーションポリシーの選択

Profile Managementが有効になった後、ユーザーが初めてログオンするとき、そのユーザーのCitrix®ユーザープロファイルは存在しません。しかし、ログオン中に既存のWindowsユーザープロファイルを「オンザフライ」で移行できます。既存のどのプロファイル（ローミング、ローカル、またはその両方）をコピーして、以降のすべての処理で使用するかを決定します。

マイグレーション戦略の計画について詳しくは、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。さらに、既存のプロファイルを移行するためのシステム要件については、「システム要件」で確認してください。

1. Profile Managementで、フォルダーを開きます。
2. ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. ドロップダウンリストから、次のいずれかのオプションを選択します。

    - ローカル。ローカルプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

- ローカルおよびローミング。ローカルプロファイルとローミングプロファイル（以前はターミナルサービスプロファイルとして知られていたリモートデスクトップサービスプロファイルを含む）を移行する場合は、この設定を使用します。
- ローミング。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルが移行されます。この設定が無効になっている場合、プロファイルは移行されません。この設定が無効になっており、ユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、Profile Managementを使用しないセットアップと同様に、プロファイルを作成するための既存のWindowsメカニズムが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

項目を含める/除外する

この記事では、Profile Management がユーザープロファイルから項目を含めたり除外したりするために使用するプロセスについて説明します。ユーザーのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるために、デフォルトの包含リストまたは除外リストを変更する場合は、このプロセスを理解していることを確認してください。この変更が必要かどうかを判断するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

たとえば、Microsoft Word は高度にカスタマイズ可能で頻繁に使用されるアプリケーションであり、アクセス方法に関わらずローミングユーザーに同じエクスペリエンスを提供する必要があるため、含めることができます。逆に、エンタープライズアプリケーションは一部のグループではめったに使用されないため、ログオンおよびログオフのたびにプロファイルデータをダウンロードする必要がないため、除外することができます。

デフォルトでは、ローカルプロファイル内のすべてのファイルとフォルダーはユーザーストアと同期されます。同期したくないファイルやフォルダーは、除外リストに追加することで指定できます。フォルダーを除外した場合でも、同期したいサブフォルダーは包含リストに追加することで指定できます。

含めることができるものと除外できるものは次のとおりです。

- プロファイル内に含まれるファイルとフォルダー。

- 個人設定を保存するHKCUハイブのレジストリエントリ。HKLMハイブのエントリはデフォルトでは処理されず、処理するように構成することもできません。

項目を含める/除外する前に

ユーザープロファイルの内容を調整する前に、組み込みのWindowsパフォーマンスモニター（Perfmon）カウンターのセットを使用することを検討してください。これらはプロファイルの動作に関する洞察を提供します。利用可能なカウンターには、プロファイルサイズやローカルコンピューターでCitrix®ユーザープロファイルを作成するのにかかる時間の測定値が含まれます。

プロファイルをローカル（Profile Managementを実行するコンピューター上）にキャッシュするかどうかを決定する必要がある場合があります。この決定に影響する要因には、展開内のCitrix製品、ローカルコンピューター上の利用可能なスペース、および展開内のユーザー数などがあります。

ファイルとフォルダー

含まれるフォルダー名と除外されるフォルダー名はすべて言語固有です。ただし、ユーザーストア内のフォルダー名はオペレーティングシステムの言語に依存しない形式です。

オペレーティングシステムによってローカルとして扱われるディスク上のファイルまたはフォルダーを同期できます。ネットワークマップされたドライブ上のファイルまたはフォルダーは同期できません。

レジストリ

既存のユーザーの場合、HKCUハイブ全体がユーザーストアにコピーされます。新規ユーザーの場合、Microsoftのローカル、ローミング、デフォルト、またはテンプレートプロファイルのハイブがコピーされます。ユーザーストアに変更が加えられると、包含が追加され、除外がハイブから削除されます。

テンプレートプロファイルに不要なキーが含まれている場合は、Sepago の Profile Nurse などのツールを使用して、ユーザー ストアからそれらを削除します。

除外について

除外はログオン時ではなくログオフ時に処理されます。これらはユーザー ストアからデータを削除するのではなく、新しいデータが書き込まれるのを防ぎます。

デフォルトの除外を除き、通常、Profile Management を初めて展開するときに項目を除外する必要はありません。その後、アプリケーションのパフォーマンスを追跡し、ユーザーからフィードバックを収集するにつれて、複数のアプリケーションの設定が競合する場合や、不要な設定の収

集の結果としてユーザーの NTUSER.DAT ファイルが大きくなる場合に、項目を除外する必要が生じる可能性があります。

リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。

重要: Citrix は、`AppData\LocalLow` フォルダーを同期から除外することを推奨します。デフォルトの構成では、除外リストにすでに `AppData\LocalLow` が含まれています。さらに、`AppData\Local` フォルダーから一部のコンテンツを除外することも選択できます。`AppData\LocalLow` または `AppData\Local` を除外しない場合、大量のデータがネットワーク経由で転送され、ユーザーはログオンの遅延を経験する可能性があります。これらのフォルダーは、標準の Windows ローミング プロファイルでは同期されません。

含めるルールと除外するルール

Profile Management がファイル、フォルダー、およびレジストリ キーを含めたり除外したりする場合、次のルールが使用されます。

1. すべての項目はデフォルトで含まれます
2. 同じパスが含める項目と除外する項目の両方として構成されている場合、含める項目が優先されます
3. 同じフォルダー内では、含める項目が除外する項目よりも優先されます
4. フォルダー階層の上位にある除外よりも、含める項目が優先されます
5. フォルダー階層の上位にある含める項目よりも、除外が優先されます

これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。この出発点から、最上位の例外を除外として構成し、次に最上位の例外に対するより深い例外を含める項目として構成するといったことができます。

既定のインクルージョンと除外

> **注:**
>
> 既定のインクルージョンと除外は、ファイルベースのプロファイルソリューションにのみ適用されます。

> このトピックでは、Profile Management が処理に含める既定の項目と除外する既定の項目について説明します。展開内のアプリケーションによっては、追加の（既定以外の）項目が必

> 要になる場合があります。含めるまたは除外する追加の項目を決定するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

重要：.iniファイルではなくグループポリシーを使用する場合（または、.iniファイルでのテストが成功した後でグループポリシー展開を展開する場合）、インストールされている.iniファイルとは異なり、.admまたは.admxファイルでは既定で項目が含められたり除外されたりすることはありません。既定の項目は手動でファイルに追加する必要があります。これらの項目は、このトピックの表に示されています。以下に注意してください。

- .iniファイルと.admまたは.admxファイルの設定名をマッピングし、Profile Management変数（例：\!ctx_internetcache\!）がどのように展開されるかを理解するには、Profile Managementポリシーを使用します。
- .iniファイルからインクルージョンと除外を貼り付ける際は、各項目の末尾の「=」（等号）を削除してください。
- インクルージョンと除外の先頭にバックスラッシュを追加しないでください。

レジストリインクルージョンリスト

デフォルト値
空

レジストリ除外リスト

デフォルト値
`Software\Microsoft\AppV\Client\Integration=`
`Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing=`
`Software\Microsoft\Speech_OneCore=`

注: Microsoft App-V を使用している場合、この除外は正しくありません。異なる除外が必要であり、その詳細は Profile ManagementとApp-Vに記載されています。

フォルダーインクルージョンリスト

デフォルト値
空

プロファイル内のすべてのフォルダーは既定で含まれます。

フォルダー除外リスト

この表のフォルダーは同期から除外されます。

デフォルト値
!ctx_internetcache!=
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cache=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cached Theme Images=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIcons=`
`\\!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsOld=`
`\\!ctx_localappdata!\GroupPolicy=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\AppV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Messenger=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Office\15.0\Lync\Tracing=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\OneNote=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Terminal Server Client=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\UEV=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows Live Contacts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Application Shortcuts=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Burn=`
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\CD Burning=`

デフォルト値
`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Notifications=`
`\\!ctx_localappdata!\Packages=`
`\\!ctx_localappdata!\Sun=`
`\\!ctx_localappdata!\Windows Live=`
`\\!ctx_localsettings!\Temp=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Microsoft\AppV\Client\Catalog=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\cache=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\log=`
`\\!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\tmp=`
$Recycle.Bin=
`AppData\LocalLow=`
トレース=

ファイルの包含リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のすべてのファイルは、デフォルトで含まれます。

ファイルの除外リスト

デフォルト値
<空>

プロファイル内のファイルは、デフォルトでは除外されません。

項目を含める/除外する

前提条件として、含める項目と除外する項目の仕組みを理解していることを確認してください。詳細については、「項目を含める/除外する」(/ja-jp/profile-management/2303/configure/include-and-exclude-items.html)を参照してください。デフォルトで含める項目と除外する項目については、「デフォルトで含める項目と除外する項目」(/ja-jp/profile-management/2303/configure/include-and-exclude-items/defaults.html)を参照してください。

項目を含めたり除外したりするときは、Enterキーを使用して複数のエントリを区切ります。

項目を除外するには

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**Exclusion list**ポリシーをクリックします。
2. **Enabled**を選択します。
3. **Show**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで同期したくない`HKCU`ハイブ内のレジストリキーを追加します。例: `Software\Policies`。
4. **Profile Management** \> **File system**で、**Exclusion list - directories**ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled**を選択します。
6. **Show**をクリックし、Profile Managementで同期したくないフォルダーを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスを使用してフォルダーを指定し、パスの先頭のバックスラッシュは省略します。
   - プロファイルの場所を特定するには、変数`%USERPROFILE%`を使用しますが、このポリシーに変数自体を入力しないでください。
   - Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

     例:

     - `Desktop`。`Desktop` フォルダーを同期しません。
     - `MyApp\tmp`。`%USERPROFILE%\MyApp\tmp` フォルダーを同期しません。
7. 「**Profile Management**」\>「**ファイルシステム**」の下で、「**除外リスト - ファイル**」ポリシーをダブルクリックします。
8. 「**有効**」を選択します。
9. 「**表示**」をクリックし、Profile Management で同期したくないファイルをすべて追加します。

次の点に注意してください。

- ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスでファイル名を指定します。このポリシーでは、変数 (%USERPROFILE%) を入力しないでください。
- ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。Profile Management 7.15以降では、縦棒 (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。
- Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例：

  - `Desktop\Desktop.ini`。`Desktop` フォルダー内の `Desktop.ini` を無視します。
  - `AppData*.tmp`。`AppData` フォルダーとそのサブフォルダー内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `AppData*.tmp|`。`AppData` フォルダー内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルのみを無視します。
  - `Downloads*\a.txt`。`Downloads` フォルダーの直下のサブフォルダー内の `a.txt` を無視します。

「**除外リスト**」が無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

「**除外リスト - ディレクトリ**」が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

「**除外リスト - ファイル**」が無効になっている場合、ファイルは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

アイテムを含めるには

> **ヒント:**

特定のトップレベルフォルダーを含めることができます。共同作業環境では、この手順には、重要なフォルダーを他の管理者に通知するという利点があります。

1. **Profile Management** \> **Registry** の下で、**Inclusion list** ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効** を選択します。
3. **表示** をクリックし、Profile Management がログオフ時に処理するようにする、`HKEY\_CURRENT\_USER` ハイブ内のプロファイル関連のレジストリキーを追加します。例: `Software\Adobe`。
4. **Profile Management** \> **File system** \> **Synchronization** の下で、**Directories to synchronize** ポリシーをダブルクリックします。
5. **有効** を選択します。
6. **表示** をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Management で同期させたいフォルダーを追加します。例: `Desktop\exclude\include` は、フォルダー `Desktop\exclude` が同期されない場合でも、`include` サブフォルダーが同期されるようにします。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスを使用してフォルダーを指定します。
   - Profile Management 2112 以降、フォルダー名でのワイルドカードがサポートされていますが、再帰的には適用されません。

7. 「**Profile Management**」 \> 「**ファイルシステム**」 \> 「**同期**」で、「**同期するファイル**」ポリシーをダブルクリックします。
8. 「**有効**」を選択します。
9. 「**表示**」をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期させたいファイルを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスでファイルを指定します。
   - ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。ただし、ワイルドカードをネストすることはできません。Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限し、サブフォルダーには適用されないようにすることができます。

- Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードがサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例：

  - `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`。デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
  - `AppData\Local\MyApp*.cfg`。`AppData\Local\MyApp`フォルダーとそのサブフォルダー内の`.cfg`拡張子を持つすべてのファイルを指定します。
  - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を指定します。

- Profile Managementは、インストールされているシステムとユーザーストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

ここで「**インクルージョンリスト**」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKEY_CURRENT_USERハイブ全体が処理されます。

ここで「**同期するディレクトリ**」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

ここで「**同期するファイル**」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ワイルドカードを使用する

ファイルやフォルダーを参照するポリシーでは、疑問符 (`?`) やアスタリスク (`*`) などのDOS形式のワイルドカード文字を使用できます。例としては、ファイルの包含リストと除外リスト、フォルダーの包含リストと除外リストなどがあります。疑問符 (`?`) は1文字に一致します。アスタリスク (`*`) は0文字以上の文字に一致します。

Profile Management 7.15以降では、縦棒 (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。

次の点に注意してください。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に機能しますが、フォルダー名内のワイルドカードは機能しません。ワイルドカードを使用する場合は、有効なパスを指定してください。
- ワイルドカードをサポートするポリシーは、環境変数やActive Directory属性の使用など、他の種類の変数をサポートしません。レジストリエントリを参照するポリシーでは、ワイルドカードを使用できません。

例

ワイルドカード `<path name>\h*.txt` は house.txt、h.txt、および house.txt.txt に一致しますが、ah.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c.txt` は abc.txt に一致しますが、ac.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c*d.txt` は abcd.txt および abccd.txt に一致しますが、acd.txt には一致しません。

プロファイルのルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内の拡張子 .txt を持つすべてのファイルを指定します。
- `*h.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内のこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `h*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内のこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `a?c.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダー内のこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `*.txt|` は、ルートフォルダー内の.txt拡張子を持つすべてのファイルを指定します。

プロファイル以外のルートフォルダーでのポリシーの構成：

- `AppData*.txt` は、AppDataフォルダーとそのサブフォルダー内で、このワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `AppData*h.txt` は、AppDataフォルダーとそのサブフォルダー内で、このワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。

ログオン除外チェックを有効にする

ログオン除外チェックを有効にする 機能は、ユーザーがログオンするときに、ユーザー ストア内のプロファイルに除外されたファイルとフォルダーが含まれている場合に、Profile Management がどうするかを制御します。既定では、この機能は無効になっています。

除外されたファイルとフォルダーとは、ユーザーがそれぞれ **除外リスト - ファイル** および **除外リスト - ディレクトリ** ポリシーに追加するファイルとフォルダーを指します。ユーザーがログオフするとき、Profile Management は除外されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期しません。ただし、除外リストに追加する前に、除外されたファイルとフォルダーがユーザー ストアに存在する場合があります。**ログオン除外チェックを有効にする** ポリシーを使用すると、ユーザーがログオンするときに、Profile Management でそれらのファイルとフォルダーを無視するか、ユーザー ストアから削除させることができます。

この機能を使用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート：ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルシステム** で、**ログオン除外チェック** ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効** を選択します。
4. ドロップダウンメニューからオプションを選択します。既定では、**除外されたファイルまたはフォルダーを削除** が選択されています。
5. **OK** をクリックします。

この機能には、次の3つのオプションがあります。

- **除外されたファイルまたはフォルダーを削除**。ユーザーがログオンするときに、ユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを削除します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを無視**。ユーザーがログオンするときに、ユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを無視します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを同期**。ユーザーがログオンするときに、ユーザー ストアからローカル プロファイルに除外されたファイルとフォルダーを同期します。

> **警告：**
>
> **除外されたファイルまたはフォルダーを削除** を選択した場合、Profile Management はユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを完全に削除します。除外されたファイル

> とフォルダーを再度含めた場合でも、ログオン時に Profile Management はキャッシュされたローカル プロファイルからそれらを削除します。

> 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。ログオフして、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

.iniファイルを使用してログオン除外チェックを有効にするには、次の手順を実行します。

1. Profile Management .iniファイルを開きます。.iniファイルの詳細については、「Profile Management .iniファイルについて」を参照してください。
2. セクションにEnableLogonExclusionCheck項目を追加します。
3. EnableLogonExclusionCheck項目の値を次のように設定します。
   - 除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーをユーザーストアから無視するには、値を1に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=1。
   - 除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーをユーザーストアから削除するには、値を2に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=2。
   - チェックを無効にするには、値を0に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=0。
4. Profile Management .iniファイルを保存して閉じます。
5. `gpupdate /force`コマンドを実行して、変更を有効にします。

構成の優先順位:

1. この設定がグループポリシーオブジェクト (GPO) で構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がGPOにも.iniファイルにも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

処理するグループのプロファイルを定義する

プロファイルを処理するユーザーと処理しないユーザーを定義できます。コンピューターのローカルグループとドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）の両方を使用できます。ドメイングループは`<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式で指定します。ローカルグループは「GROUP NAME」の形式で指定します。

注：コンピューターのローカルグループは、新しく作成されたローカルグループである必要があり、メンバーはドメインユーザーである必要があります。

1. Profile Managementで、**処理済みグループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**Enabled**」を選択します。
3. **表示**をクリックします。
4. Profile Managementでプロファイルを処理するユーザーを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るには、Enterキーを使用します。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでこの設定が構成されていないか、または.iniファイルでも構成されていない場合、除外グループポリシーを使用して除外しない限り、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。
5. プロファイル管理で、除外グループポリシーをダブルクリックします。
6. 「**Enabled**」を選択します。
7. **表示**をクリックします。
8. Profile Managementでプロファイルを処理しないユーザーを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るには、Enterキーを使用します。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでこの設定が構成されていないか、または.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。
9. ローカル管理者のプロファイルを管理するには、Profile Managementで、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーをダブルクリックし、**有効**をクリックします。

   重要：デフォルトでは、Profile Managementは使用中のオペレーティングシステムを認識し、サーバーオペレーティングシステムではなくデスクトップオペレーティングシステム上のローカル管理者のアカウントを処理します。その理由は、ユーザーは通常デスクトップでのみローカル管理者グループのメンバーであり、サーバー環境での処理からローカル管理者を除外することはトラブルシューティングに役立つためです。したがって、デフォルトの動作を変更したい場合にのみ、このポリシーを有効にしてください。

   除外グループポリシーは、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーよりも優先されます。アカウントが両方のポリシーに表示されている場合、Profile Managementはそれを処理しません。

   ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでこの設定が構成されていないか、または.iniファイルでも構成されていない場合、ローカル管理者のプロファイルは処理されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているとおり、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行してください。

ユーザー ストアへのパスを指定する

ユーザー ストアへのパスを指定する前に、 (/ja-jp/profile-management/2303/how-it-works/architecture.html)のを参照し、展開に関連する場合は、次の影響を理解してください。

- 多言語プロファイルの保存
- 含める項目と除外する項目の組み合わせ

1. Profile Managementで、 ポリシーをダブルクリックします。
2. を選択し、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存されるディレクトリ（ユーザー ストア）へのパスを入力します。

パスは次のいずれかです。

- **相対パス**。このパスはホームディレクトリに対する相対パスである必要があります。ホームディレクトリは通常、Active Directory (AD) のユーザーの #homeDirectory# 属性として構成されます。
- **UNCパス**。このパスは通常、サーバー共有またはDFS名前空間を指定します。
- **無効または未構成**。この場合、`\#homeDirectory#\Windows` の値が想定されます。

この設定には、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: %ProfVer%）。システム環境変数は通常、追加のセットアップが必要です。詳しくは、(/ja-jp/profile-management/2303/plan/administer.html)を参照してください。
- ハッシュで囲まれたADユーザーオブジェクトの属性（例: #sAMAccountName#）。
- Profile Management変数。詳しくは、(/ja-jp/profile-management/2303/policies/settings.html)を参照してください。

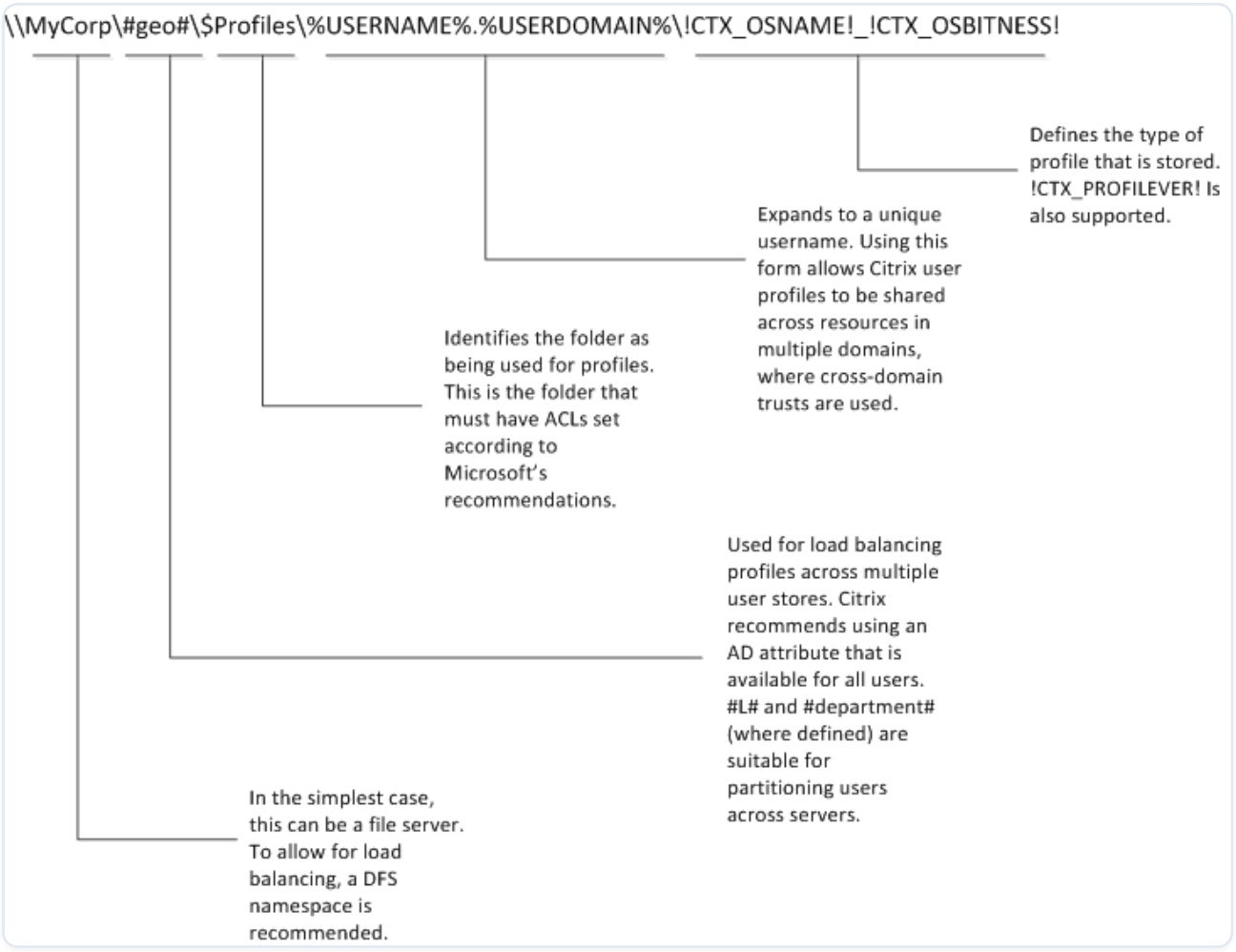
`%username%` と `%userdomain%` を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどの組織変数を定義するために、カスタムAD属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#` は、ユーザー設定をUNCパス `\\server\share\JohnSmith` に保存します（現在のユーザーの #sAMAccountName# がJohnSmithに解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` は `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、この設定がNTUSER.DATを含むフォルダーの1つ上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile` に含まれている場合、ユーザー ストアへのパスを `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` に設定します（`\UPM_Profile` サブフォルダーではありません）。

この図は、AD属性、環境変数、およびProfile Management変数を組み込んだ、ユーザー ストアへの一般的なパスのコンポーネントを示しています。



ユーザー ストアへのパスを指定する際に変数を使用する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する

- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。

ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。ここで、または.iniファイルでこの設定が構成されていない場合、ホームドライブ上のWindowsディレクトリが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ユーザー ストアのレプリケート

ユーザー ストアのレプリケートポリシーを使用すると、ユーザーのログオンおよびログオフごとに、リモートユーザープロファイルストアを複数のパスにレプリケートできます。これにより、Profile Managementはユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供できます。

このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフに時間がかかる場合があります。

> **注：**
>
> - この機能は、ユーザー ストアと完全なプロファイル コンテナの両方で利用できます。
> - レプリケートされたプロファイル コンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェールオーバーには対応していません。

グループポリシーを使用して**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーを構成するには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを**有効**に設定します。
4. **ユーザー ストアをレプリケートするパス**の横にある**表示**をクリックし、**値**フィールドにパスを入力します。

ユーザープロファイルの一部でプロファイルコンテナが有効になっている場合、コンテナベースのプロファイルとファイルベースのプロファイルを異なる場所にレプリケートできます。そのためには、`<path to the replicated file-based profiles>|<path to the replicated container-based profiles>`の形式でパスを入力します。例：`\\path_a|\\path_b`は、Profile Managementがファイルベースのプロファイルを`\\path_a`に、コンテナベースのプロファイルを`\\path_b`にレプリケートすることを示します。

5. **OK** をクリックし、もう一度 **OK** をクリックします。

> **注：**

> セッション中に変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期するには、アクティブライトバックを有効にするポリシーを有効にします。

> 変更を有効にするには、Profile Management がインストールされているマシンで、コマンドプロンプトから **gpupdate /force** コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、その後、再度ログオンしてください。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

By default, Citrix Profile Management impersonates the current user to access the user store. This behavior requires the current user to have permission to directly access the user store. By contrast, the **Enable credential-based access to user stores** policy lets Profile Management access the user store using the store's own credentials.

This policy gives you more flexibility in deploying and accessing the user store. For example, this policy lets you deploy the user store on a file share that the current user doesn't have permission to access, such as Azure Files. Or, you can enable this policy if you don't want Profile Management to impersonate the current user when accessing user stores.

> **注：**

> プロファイルの処理方法に関して、ユーザー ストアには2つのタイプがあります。

- ファイルベース。ユーザー プロファイルは、ログオン時にリモートのユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- VHDXベース。ユーザープロファイルはVHDXファイル（プロファイルコンテナとして知られる）に保存されます。これらのVHDXファイルは、ログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

このポリシーは、ファイルベースとVHDXベースの両方のユーザーストアで利用できます。Profile Managementのバージョン2212より前では、このポリシーはVHDXベースのユーザーストアでのみ利用可能です。

安全なユーザー ストアの作成について詳しくは、Microsoft TechNet Webサイトのローミング ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成するを参照してください。

Profile Managementがユーザー ストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、次の両方のアクションを実行する必要があります。

- Profile Management が実行されている各マシンで、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを有効にします。
- それらのマシンにストアの資格情報を追加します。

その目標を達成するには、次のいずれかの方法を使用できます。Workspace Environment Management™ (WEM) サービスとGPO。

注：

VHDXベースのユーザー ストアでNTFSアクセス許可が保持されるようにするには、プロファイル全体をプロファイル コンテナに配置する必要があります。詳しくは、ユーザー プロファイル全体にプロファイル コンテナを有効にするを参照してください。

WEMサービスを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

WEMを使用すると、Profile Managementが実行されている各マシンで同じ資格情報を入力する必要がなくなります。WEMサービスコンソールでポリシーを有効にし、ユーザープロファイルストアの資格情報を一度だけ入力します。その後、WEMサービスはこれらの設定を各マシンに適用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 管理コンソールで、**ポリシーとプロファイル > Citrix Profile Management設定 > ユーザープロファイルストアの資格情報**に移動します。
2. **ユーザープロファイルストアの資格情報**タブで、**ユーザープロファイルストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**チェックボックスをオンにします。

   WEMでユーザープロファイルストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にするチェックボックスを選択する(/en-us/profile-management/2303/media/selecting-the-enable-credential-based-access-to-user-store-check-box-in-wem.png)
3. **追加**をクリックします。**新しい資格情報**ダイアログボックスが表示されます。

   WEMの新しい資格情報ダイアログボックス(/en-us/profile-management/2303/media/the-new-credential-dialog-box-in-wem.png)
4. プロファイルストレージサーバーのFQDNまたはIPアドレスと、その資格情報を入力します。
5. **OK**をクリックします。

GPOを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

GPOを使用してポリシーを有効にすることを選択した場合、Profile Managementが実行されている各マシンで資格情報を手動で追加する必要があります。

ポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」にアクセスし、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」をダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

資格情報をWindows資格情報マネージャーに追加する

Profile Management は、ユーザー ストアにアクセスするためにマシンに保存されている資格情報を使用します。Profile Management が実行されている各マシンで、ユーザー ストアの資格情報を**Windows 資格情報マネージャー**に追加します。詳細な手順は次のとおりです。

1. Sysinternals の Web サイトから **PsExec** をダウンロードし、ファイルを `C:\PSTools` に解凍します。
2. **スタート**メニューから**コマンド プロンプト**を右クリックし、**管理者として実行**を選択します。コマンド シェルが起動します。
3. `C:\PSTools\PsExec -s -i cmd` コマンドを実行します。別のコマンド シェルが起動します。

> **注：**
>
> `-s` パラメーターは、ローカル システム アカウントを使用してツールを実行していることを示します。これにより、資格情報を安全に保存できます。

4. 新しいコマンド シェルで、`rundll32.exe keymgr.dll, KRShowKeyMgr` コマンドを実行します。「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログ ボックスで、「**追加**」をクリックします。
6. プロファイル ストレージ サーバーの FQDN または IP アドレスとその資格情報を入力し、既定の資格情報タイプはそのままにして、「**OK**」をクリックします。

ユーザー ストアの移行

Profile Management は、データを失うことなくユーザー ストアを移行するソリューションを提供します。この機能は、ユーザー ストアをよりスケーラブルなファイル サーバーに移行したい場合に役立ちます。

ユーザー ストアを移行するには、 ポリシーを ポリシーと組み合わせて使用します。 ポリシーを使用すると、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が以前に保存されていたフォルダーへのパス（以前使用していたユーザー ストアのパス）を指定できます。

パスは、絶対 UNC パスまたはホーム ディレクトリに対する相対パスのいずれかです。どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- システム環境変数（パーセント記号で囲む）
- Active Directory ユーザー オブジェクトの属性（ハッシュ記号で囲む）

例：

- フォルダー `Windows\%ProfileVer%` は、ユーザー設定をユーザー ストアの `Windows\W2K3` というサブフォルダーに保存します（%ProfileVer% が W2K3 に解決されるシステム環境変数である場合）。
- `\\server\share#SAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\<JohnSmith>` に保存します（`#SAMAccountName#` が現在のユーザーに対して JohnSmith に解決される場合）。

パスでは、`%username%` と `%userdomain%` を除くユーザー環境変数を使用できません。

この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。

この設定がここで、または .ini ファイルで構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

ポリシー設定の変更が有効になった後、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、 ポリシーで指定された現在のユーザー ストアに移行されます。

グループ ポリシーでユーザー ストアの移行を構成するには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理**で、**ユーザー ストアの移行**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **オプション**ペインで、以前使用していたユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

Citrix Studio でプロファイル管理ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を完了します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー**をクリックします。
2. **ポリシーの作成**ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「ユーザー ストアの移行」と入力します。
3. **選択**をクリックして、**ユーザー ストアの移行**ポリシーを開きます。

4. **有効**を選択し、以前使用していたユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

証明書を保存する

この手順に従って、セッション中に証明書ストアにインポートされた個人証明書を保存します。デフォルトでは、証明書は自動的に同期されます。

1. 設定 **同期するディレクトリ** にパス `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` を追加します。オペレーティングシステムの言語によって、この場所のApplication Dataフォルダーが決まります。ポリシーを使用して多言語システムを構成する場合は、各言語の場所をリストに追加します。

例

英語システムでは、パスは `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` です。ドイツ語システムでは、`Anwendungsdaten\Microsoft\SystemCertificates\My` です。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ユーザープロファイルのストリーミング

既定では、ユーザーがログオンすると、Citrix Profile Management はユーザープロファイル全体をユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチします。ユーザープロファイル内の大きなファイルは、ログオンを遅くする原因となる可能性があります。ユーザーのログオンエクスペリエンスを向上させるには、プロファイルストリーミング機能を有効にできます。

この機能を有効にすると、Profile Management は、ログオン後にプロファイルファイルとフォルダーがアクセスされたときにのみそれらをフェッチします。

> **注:**
>
> ユーザープロファイルには、ファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが含まれます。この機能はファイルとフォルダーに適用されますが、レジストリエントリには適用されません。レジストリエントリは、ユーザーログオン時に常にフェッチされます。

プロファイルストリーミング機能を有効にする

以下のポリシーを使用して、プロファイルストリーミング機能を有効にします。

- **プロファイルストリーミング。** このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*ファイル*がローカルコンピューターにフェッチされます。
- **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする。** このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*フォルダー*がローカルコンピューターにフェッチされます。

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーム配信ユーザープロファイル**」にアクセスします。
3. **プロファイルストリーミング**をダブルクリックします。「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
4. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

プロファイルストリーミングの機能強化を有効にする

プロファイルストリーミング機能を有効にした後、必要に応じてさまざまな機能強化を適用できます。

例 1: ユーザーから、大きなプロファイルファイルの読み込みが遅いという報告がありました。この場合、**常にキャッシュ**ポリシーを有効にし、大きなファイルの最小サイズを指定します。Profile Management は、ユーザーログオン*中*に、そのサイズより大きいファイルをローカルプロファイルにキャッシュします。

例 2: 組織内で、ユーザーが特定のプロファイルフォルダーに頻繁にアクセスします。そのため、プロファイルストリーミングが有効になっている場合でも、ユーザーログオン時にそれらのフォルダーをローカルプロファイルにフェッチしたいと考えています。この目標を達成するには、**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーを有効にし、プロファイルストリーミングからフォルダーを除外します。

必要に応じて機能強化を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。

2. 大きなファイルの読み込み時間を短縮するには、Profile Management がログオン*中*に大きなファイルをローカルプロファイルにキャッシュするように有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **常にキャッシュ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. キャッシュするプロファイルファイルのサイズの下限 (MB) を設定します。プロファイル全体をキャッシュするには、制限をゼロに設定します。

      注:

      - 制限を超えるファイルは、Profile Management がユーザーログオン*中*にバックエンド処理スレッドを開始するとすぐに、ローカルプロファイルにキャッシュされます。
      - 制限を下回るファイルは、ユーザーがアクセスしたときに引き続きローカルプロファイルにフェッチされます。

   d. **OK**をクリックします。

3. ドメイン内の特定のユーザーグループにのみプロファイルストリーミングを適用するには、次の手順に従います。

   a. **ストリーミングユーザープロファイルグループ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. ユーザーグループのリストを入力します。エントリを区切るには `Enter` を押します。

   d. **OK**をクリックします。

   注: デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、プロファイルストリーミングはドメイン内のすべてのユーザーグループに適用されます。

4. 特定のプロファイルフォルダーとファイルをプロファイルストリーミングから除外するには、次の手順に従います。

   a. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. 「**表示**」をクリックします。

   d. Profile Managementでストリームしたくないフォルダーを追加します。詳細については、この記事の後半にある「プロファイルストリーミングの除外を有効にする」を参照してください。

5. 同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、次の手順に従います。

   a. 「**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**」をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. 「**OK**」をクリックします。 詳細については、この記事の後半にある「保留領域のプロファイルストリーミング」を参照してください。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、`<https://technet.microsoft.com/ja-jp/library/bb490983.aspx>`を参照してください。

構成の優先順位

「**ストリーム配信されるユーザープロファイル**」における各ポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPOまたは.iniファイルで「**プロファイルストリーミング**」が構成されていない場合、「**プロファイルストリーミング**」は無効になります。
- GPOで「**常にキャッシュ**」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、無効になります。
- 「**ストリーム配信されるユーザープロファイルグループ**」が無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。この設定がGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。
- GPOまたは.iniファイルで「**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**」が構成されていない場合、フォルダーのプロファイルストリーミングは無効になります。
- GPOまたは.iniファイルで「**プロファイルストリーミングの除外を有効にする**」が構成されていない場合、すべてのフォルダーがストリームされます。
- GPOまたは.iniファイルで「**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**」が構成されていない場合、保留領域のプロファイルストリーミングは無効になります。

プロファイルストリーミング除外を有効にする

プロファイルストリーミングの除外が有効になっている場合、Profile Managementは除外リスト内のフォルダーをストリームしません。ユーザーがログオンすると、除外リスト内のすべてのフォルダーとファイルがユーザーストアからローカルコンピューターにすぐにフェッチされます。

プロファイルストリーミング除外を有効にするには、次の手順に従います。

1. プロファイル管理で、**ストリーミングされたユーザープロファイル**をダブルクリックします。
2. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. **表示**をクリックします。
5. Profile Managementでストリーミングしたくないフォルダーを追加します。フォルダー名は、絶対パスとして、またはユーザープロファイルに対する相対パス (`%USERPROFILE%`) として指定できます。その変数を使用してプロファイルの場所を特定しますが、このポリシーに変数自体を入力しないでください。パスの先頭のバックスラッシュは省略してください。

例:

- デスクトップ。デスクトップフォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。
- `MyApp\tmp` 。 `%USERPROFILE%\MyApp\tmp` フォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイル内の次のフォルダーはデフォルトで除外されます。

- `AppData\Local\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Protect`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates`

注:

- このポリシーは、プロファイルストリーミングが有効になっている場合にのみ適用されます。
- このポリシーは、ワイルドカード `*` および `?` をサポートしていません。
- エントリを区切るには、 `Enter` と入力します。
- プロファイルストリーミング除外リストを手動で編集する場合は、ログオンがハングするのを避けるために、前述のデフォルトで除外されているフォルダーを追加する必要があります。

保留領域のプロファイルストリーミング

Profile Managementは、保留領域を使用して、同じユーザーの同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。デフォルトでは、この領域はプロファイ

ルストリーミング機能の例外です。この機能が有効になっている場合でも、ユーザーがログオンすると、この領域のファイルとフォルダーはローカルプロファイルにフェッチされます。

同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、プロファイルストリーミング機能の拡張として、**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**機能を有効にします。このポリシーを有効にすると、Profile Managementは、ユーザーがログオン時ではなく、アクセスしたときに保留領域のファイルとフォルダーをローカルプロファイルにフェッチします。その領域に大きなファイルがある場合、ユーザーのログオン時間が大幅に短縮されます。

フォルダーリダイレクトを構成する

フォルダーリダイレクトはMicrosoft Windowsの機能であり、Profile Managementと併用できます。

> **重要:**
>
> フォルダーリダイレクトは、Microsoft Active Directory (AD) GPOまたはCitrix®ポリシーのいずれか1つの方法のみを使用して構成してください。複数の方法を使用してフォルダーリダイレクトを構成すると、予期しない結果が生じる可能性があります。

フォルダーリダイレクトを構成するには、次の手順を実行します。

1. 該当するユーザーを、Profile Managementが管理するOUに移動します。
2. GPOを作成し、編集用に開きます。
3. **ユーザーの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > フォルダーリダイレクト**に移動し、リダイレクトするフォルダーを選択します。
4. `<folder name>`フォルダーのリダイレクトポリシーを有効にし、リダイレクトされたパスを入力します。リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。パスにユーザー名やフォルダー名を追加しないでください。たとえば、**デスクトップ**フォルダーへのパスを`\\server\share\`として設定した場合、ユーザー環境内のフォルダーは`\\server\share\<user name>\Desktop`としてリダイレクトされます。
5. 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

次のフォルダーをリダイレクトできます。

- AppData(ローミング)
- デスクトップ
- スタートメニュー
- ドキュメント
- 画像
- ミュージック
- ビデオ
- お気に入り
- 連絡先
- ダウンロード
- リンク
- 検索
- 保存されたゲーム

フォルダーのリダイレクト時には、次の点に注意してください。

- **ドキュメント**フォルダー。ユーザーのホームディレクトリにリダイレクトできます。
- **ミュージック**、**ピクチャ**、および**ビデオ**フォルダー。これらは**ドキュメント**フォルダーを基準としたフォルダーにリダイレクトできます。

フォルダーリダイレクトが機能することを確認する方法

フォルダーリダイレクトが機能することを確認するには、次の手順を実行します。

1. セッションで、リダイレクトしたフォルダーに移動し、フォルダーを右クリックして、**プロパティ**を選択します。
2. プロパティウィンドウで、「**ショートカット**」タブに移動し、「**ターゲット**」フィールドを確認します。フィールドにリダイレクトされたパスが表示されている場合、フォルダーリダイレクトは機能しています。そうでない場合、フォルダーリダイレクトは機能していません。

フォルダーリダイレクトのログ

> **注：**

> Profile Managementは、フォルダーリダイレクトが失敗した場合にのみ、Windowsイベントログに情報を書き込みます。

> Profile ManagementはWindowsイベントログに情報を書き込みます。Windowsイベントビューアーの「**アプリケーション**」ペインでイベントを表示できます。この情報は、フォルダーリダイレクト機能の使用時に発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

トランザクションフォルダーの管理

トランザクションフォルダーとは、相互依存するファイル（あるファイルが他のファイルを参照する）を含むフォルダーを指します。**ミラーするフォルダー**ポリシーは、プロファイル同期中にトランザクションフォルダーの整合性を確保します。このポリシーにより、Profile Managementはユーザー ストアとローカル ユーザー プロファイルの間でトランザクションフォルダー全体をミラーリングします。

フォルダー ミラーリングの高速化ポリシーは、Profile Management 2106以降で利用可能です。

フォルダー ミラーリングの仕組み

通常、Profile Managementがユーザー ストアとローカル プロファイル間でユーザー プロファイルを同期する場合、タイムスタンプを比較して更新されたファイルのみを同期します。しかし、トランザクションフォルダーでは、その中のファイルは関連付けられており、整合性の問題を避けるためにProfile Managementはフォルダー全体を同期する必要があります。トランザクションフォルダーの例としては、トランザクション ログ ファイルとそれに対応するデータベース ファイルを含むフォルダーがあります。異なるセッションからのトランザクション ログ ファイルとデータベース ファイルを混在させると、トランザクションの整合性の問題を引き起こす可能性があります。

トランザクションフォルダーを正しく同期するために、Profile Managementは**ミラーするフォルダー**ポリシーを提供します。トランザクションフォルダーをターゲットに同期する際、Profile Managementは以下の手順を使用してフォルダーをターゲットにミラーリングします。

1. フォルダー内のすべてのコンテンツを、タイムスタンプを無視してターゲットにコピーします。
2. ターゲット内の追加のコンテンツをすべて削除します。

> **注意:**

> トランザクションフォルダーをミラーリングすることは、「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。複数のセッションで変更されたファイルは、最新の更新によって上書きされ、プロファイルの変更が失われる可能性があります。

ミラーするフォルダーを指定する

ミラーするフォルダーポリシーを有効にし、ミラーするフォルダーを指定します。

Google Chromeを例にとってみましょう。`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`内のブックマーク関連ファイルとサブフォルダーは相互依存しており、プロファイル同期中に全体として処理される必要があります。この目標を達成するには、このフォルダーを**ミラーするフォルダー**ポリシーに追加する必要があります。

ミラーするフォルダーからファイルやサブフォルダーを除外することもできます。前の例では、`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`フォルダーにはブックマークとは無関係なファイルやサブフォルダーも含まれています。それらを除外するには、**除外リスト – ディレクトリ**および**除外リスト – ファイル**ポリシーを使用できます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 「**Profile Management \> File system \> Synchronization**」に移動し、「**Folders to mirror**」ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**Enabled**」を選択します。
3. 「**List of folders to mirror**」フィールドに、ユーザー ストアへの相対パスの形式でミラーリングするフォルダーのリストを入力します。フォルダーを区切るには`Enter`と入力します。

   > **注:**
   >
   > このポリシーは再帰的に機能します。サブフォルダーをリストに追加しないでください。
   >
   > たとえば、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`を追加した場合、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies\Low`は追加しないでください。

4. 「**OK**」をクリックします。
5. ミラーリングされたフォルダー内の特定のファイルとサブフォルダーをミラーリングプロセスから除外するには、次の手順に従います。

a. 「**Profile Management \> File system**」に移動し、「**Exclusion list – directories**」ポリシーまたは「**Exclusion list – files**」ポリシーをダブルクリックします。

b. 除外するファイルとサブフォルダーを指定します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

Profile Management 2106以降では、「**Accelerate folder mirroring**」ポリシーを有効にすることで、フォルダーミラーリングを高速化できます。

このポリシーを有効にすると、Profile Management はミラーリングされたフォルダーを VHDX ベースの仮想ディスクに保存します。Profile Management は、ログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチすることで、ユーザー ストアとローカル プロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなります。

このポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期** の下で、**フォルダーミラーリングの高速化** ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効** を選択します。
3. **OK** をクリックします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

Internet Explorerのクッキーフォルダーを管理する

この記事は、Profile Management 3.1以降に適用されます。

Internet Explorerのクッキーフォルダーを管理する際、プロファイルの肥大化を抑えながらトランザクションの整合性を確保する必要があります。この目的を達成するには、**Folders to mirror**ポリシーと**Process Internet cookie files on logoff**ポリシーを使用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ミラーリングするクッキーフォルダーを指定する。
2. プロファイルの肥大化の問題が発生した場合、ユーザーログオフ時に古いクッキーの削除を有効にする。

変更を有効にするには、このMicrosoftの記事に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

概要

このセクションでは、2つのポリシーがクッキーフォルダーの管理にどのように役立つかについて説明します。

Internet Explorer 8のクッキーフォルダーを例にとってみましょう。そのフォルダーにはindex.datとクッキーファイルが含まれています。ユーザーがインターネットを閲覧すると、index.datはクッキーファイルを参照します。たとえば、ユーザーがそれぞれ異なるデバイスから2つのInternet Explorerセッションを持ち、各セッションで異なるサイトにアクセスするとします。各サイトからのクッキーは、対応するデバイスに追加されます。

トランザクションの整合性を確保する方法

前述の例で、ユーザーが両方のセッションからログオフした場合に何が起こるかを見てみましょう。セッションからのクッキーはマージされ、index.datファイルは最後にログオフしたセッションのものと同期されます。その結果、クッキーファイルとindex.dat内のそれらのクッキーファイルへの参照が一致しなくなります。

Folders to mirrorポリシーがこの問題を解決します。このポリシーが設定されている場合、Profile Managementは、プロファイル同期中にフォルダー全体を宛先にコピーします。このポリシーの動作の詳細については、トランザクションフォルダーの管理を参照してください。

プロファイルの肥大化を回避する方法

新しいセッションでの閲覧は、クッキーフォルダーの肥大化につながります。また、ウェブサイトを再訪問すると、古いクッキーが蓄積されます。**Process Internet cookie files on logoff**ポリシーは、ユーザーログオフ時にプロファイルから古いクッキーを削除することで、この問題を解決します。

> **注記:**

> Internet Explorer 9以前のCookieおよび閲覧履歴情報は、Internet Explorer 10以降のCookieおよび閲覧履歴情報とは互換性がありません。異なるバージョンのInternet Explorerがインストールされている複数のシステム間で移動しないことをお勧めします。\[#474200\]

ミラーリングするCookieフォルダーを指定する

Folders to mirrorポリシーを有効にします。展開でサポートされているOSバージョンに基づいて、ポリシーでミラーリングするCookieフォルダーを指定します。

1. **プロファイル管理 \> ファイルシステム \> 同期** に移動します。
2. **Folders to mirror**ポリシーをダブルクリックします。
3. **Enabled**を選択します。
4. **List of folders to mirror**フィールドで、次のCookieフォルダーを追加します。フォルダーを区切るには`Enter`を使用します。
   - バージョン2プロファイルの場合は`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`。
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies` (Windows 8.1以降のCookieフォルダー)
   - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` (Windows 7およびWindows 8のCookieフォルダー)
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache` (Cookieデータベースファイル`Webcache01.dat`が保存されているInternet Explorer 10以降で利用可能なフォルダー)
5. **OK**をクリックします。
6. Profile Management 2106以降を使用している場合は、**Accelerate folder mirroring**ポリシーをダブルクリックし、**Enabled**を選択します。

(オプション) ログオフ時に古いCookieを削除する

Profile Managementでユーザーログオフ時に古いCookieを削除するには、**Process Internet cookie files on logoff**ポリシーを有効にします。

このポリシーはログオフ時間を増加させるため、プロファイルの肥大化の問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

1. **Profile Management** > **Advanced Settings** に移動します。
2. **Process Internet cookie files on logoff** ポリシーをダブルクリックします。
3. **Enabled** を選択します。

4. **OK** をクリックします。

オフラインプロファイルを構成する

Citrix® オフラインプロファイルは、ネットワークへのアクセスが断続的であるラップトップユーザーまたはモバイルデバイスユーザー向けです。この機能により、プロファイルを可能な限り早くユーザー ストアと同期できます。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーが作業するにつれて、プロファイルはローカルで更新され、ネットワーク接続が再確立されると最終的にユーザー ストアと同期されます。

この機能は、ドメイン参加済みコンピューター (Citrix XenClient® を実行しているコンピューターを含む) でのみ機能します。ネットワーク接続が永続的である傾向があるサーバーやデスクトップコンピューターでの使用は意図されていません。

通常、オフラインプロファイルとストリーミングユーザープロファイルの両方を有効にすることはありません。このため、オフラインプロファイルが優先され、ストリーミングユーザープロファイルと「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」設定が無効になります。ユーザーが最初にログオンするときは、常にラップトップまたはモバイルデバイスに完全なプロファイルがあることを確認してください。

オフラインプロファイルは、次の方法で構成できます。

- **グループポリシーを使用する**。このポリシーにより、機能の一元的な管理制御が可能になりますが、オフラインプロファイルを使用するラップトップまたはデバイスを含む個別のOUを作成する必要があります。
- **.iniファイルを使用する**。ラップトップやモバイルデバイス専用の特別なOUを作成したくない場合は、より簡単なオプションです。ただし、この機能の制御は実質的に個々のデバイス所有者に委ねられます。このオプションでは、各ラップトップまたはモバイルデバイスの1回限りの構成が必要です。

オフラインプロファイルのサポートがグループポリシーを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

グループポリシーを使用する

1. Profile Managementによって管理されるすべてのコンピューターを含むOUを作成します。オフラインプロファイルを使用するラップトップとモバイルデバイス、Citrix Virtual Apps™サーバー、および仮想デスクトップを含めます。

2. ラップトップとモバイルデバイスのみを含む子OUを作成します。
3. グループポリシー管理で、サイト全体のポリシーを適用するベースライングループポリシーオブジェクト (GPO) を作成し、両方のOUにリンクします。
4. すべてのコンピューターに共通するProfile Management設定でベースラインGPOを構成します。
5. 2番目のオフラインGPOを作成し、子OUにリンクします。
6. オフラインGPOを次のように構成します。

    a. プロファイル管理で、オフラインプロファイルサポートをダブルクリックします。
    b. 有効を選択し、OKをクリックします。
    c. ラップトップおよびモバイルデバイスにのみ適用したい他の設定を構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

.iniファイルの使用

前提条件として、ベースラインGPOとオフラインGPOの両方で、オフラインプロファイルサポートが未構成（デフォルト）であることを確認してください。これらの設定が構成されている場合、.iniファイルの設定は上書きされます。

1. 各ラップトップまたはモバイルデバイスで、プロファイル管理インストーラーによって作成された.iniファイルを見つけます。.iniファイルを見つけるには、ダウンロードに含まれるファイルを参照してください。
2. この行のコメントを解除します（セミコロンを削除して）：

    ```
    ;OfflineSupport=
    ```

3. .iniファイルを保存します。

    変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) の構成

CEIP を構成するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**で、**カスタマーエクスペリエンス向上プログラム**をダブルクリックします。
3. **有効**または**無効**を選択し、**OK**をクリックします。
4. 変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

注：

- 非ヨーロッパ地域のマシンでは、このポリシーがGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、CEIPは有効になります。
- ヨーロッパ地域のマシンでは、このポリシーがGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値に関係なくCEIPは無効になります。

CEIP の詳細については、Citrix カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) について を参照してください。

クロスプラットフォーム設定の構成

クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション

この記事では、Profile Management のこのリリースにおけるクロスプラットフォーム設定機能でサポートされるアプリケーションとオペレーティングシステム (OS) について説明します。

定義ファイルについて

定義ファイルには、選択した Windows アプリケーションの共通のパーソナライズ設定が含まれています。各ファイルとその中の定義により、ユーザーは複数の OS 上で同じアプリケーションに接続でき、各プラットフォームで実質的に同じプロファイルが提示されます。たとえば、ユーザーは Microsoft Office の 2 つのインスタンスにアクセスする場合があります。1 つは Windows 7 仮想デスクトップにインストールされ、もう 1 つは Windows Server 2003 上で Citrix Virtual Apps™ を使

用して公開されています。どちらのインスタンスにアクセスしても、ユーザーの Office エクスペリエンスは一貫しています。

事前構成された定義ファイルは、クロスプラットフォーム設定機能の重要な側面です。サポートされるアプリケーションごとに定義ファイルがあります。定義ファイルは XML 形式です。

重要: アプリケーションのすべての OS における動作を徹底的に分析し、この機能の操作を完全に理解することなく定義ファイルを編集すると、ユーザープロファイルに予期しない変更が生じ、トラブルシューティングが困難になる可能性があります。このため、Citrix® は提供される定義ファイルの編集や新しい定義ファイルの作成をサポートしていません。さらに、Windows ユーザープロファイルの性質上、一部のアプリケーション設定は OS 間で複製できません。

さらに、この機能はレジストリ設定やアプリケーション設定には適していますが、ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト（たとえば、ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など）には適していないことに注意してください。

サポートされるオペレーティングシステム

サポートされているシングルセッション OS 間、およびサポートされているマルチセッション OS 間でプロファイルをローミングできます。

以下がサポートされています（該当する場合は x86 および x64 バージョン）：

- **シングルセッション OS**。Windows XP、Windows 7、および Windows Vista。
- **マルチセッション OS**。Windows Server 2003、Windows Server 2008、および Windows Server 2008 R2。

サポートされる Citrix 製品

クロスプラットフォーム設定機能は、以下の Citrix 製品をサポートしています。

- XenApp® 5 フィーチャーパック Windows Server 2003 以降向け
- XenDesktop® 4 以降

サポートされるアプリケーション

このリリースでは、以下の定義ファイルが利用可能です。XMLファイル名には、サポートされるアプリケーションとバージョンが示されています。

- **Internet Explorer 7 Plus.xml**。このファイルは、Internet Explorerのバージョン7、8、9のローミング（お気に入りを除く）をプラットフォーム間でサポートします。お気に入りおよびフィードのローミングはサポートされていません。

- **オフィス 2007.xml**。
- **オフィス 2010.xml**。
- **Wallpaper.xml**。このファイルは、デスクトップの壁紙のローミングをプラットフォーム間でサポートします。テーマのプラットフォーム間でのローミングはサポートされていません。

重要: 各アプリケーションの定義ファイルは、上記のサポートされるシナリオでのみ使用してください。たとえば、Internet Explorer 7 Plus.xmlは、そのブラウザの複数のバージョン間で設定をローミングします。しかし、Office 2007.xmlやOffice 2010.xmlを使用して、Officeのバージョン間で設定をローミングすることはできません。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

計画を実行する

フェーズ1：新しいファイルサーバーを構成する

NewDomain に、クロスプラットフォーム設定 (`\\FileServ3`) の管理用と、 `2k12_Farm` のプロファイル (`\\FileServ2`) の保存用にファイルサーバーをセットアップします。

このケースでは、プロファイル用とクロスプラットフォーム設定用に別々のファイルサーバーをセットアップすることを選択します。この方法は厳密には必須ではありませんが、クロスプラットフォーム設定サーバーを利用可能にする簡単な方法です。プロファイルサーバーは、たとえばDFS 名前空間を使用するなど、異なる設計になっている可能性があり、実装に時間がかかる場合があります。

どちらの場合も、共有フォルダー上の移動ユーザープロファイルに関するセキュリティ推奨事項に従ってサーバー共有を設定します。詳しくは、 `<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/folder-redirection/deploy-roaming-user-profiles>` を参照してください。

フェーズ2：2k8_Farm のマシンを Profile Management 5.0 にアップグレードする

手順については、「Profile Management のアップグレード」を参照してください。

フェーズ3：展開する定義ファイルを選択する

Microsoft Office、Internet Explorer、および Windows の壁紙用に、いくつかの構成ファイル（定義ファイルと呼ばれます）が提供されています。

重要：Citrix® の担当者から指示がない限り、これらのファイルを更新しないでください。

展開に関連する構成ファイルを選択し、これらのファイルのみを `\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions` にコピーします。この例では、Office 2007.xml のみをコピーします。

フェーズ4：2k8_Farm のマシンを Profile Management 5.0 用に構成する

アップグレードが完了したら、クロスプラットフォーム設定機能を（部分的に）有効にするために、以下の構成変更を行います。この段階では、`\\FileServ3\CrossPlatform` のみが利用可能である必要があります。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`	変更なし。このパスはOldDomain ユーザーのみが使用するため、NewDomain ユーザーをサポートするために変更する必要はありません。
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは、定義ファイルが置かれている場所です。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	クロスプラットフォーム設定ストアは両方のドメインのユーザーによって共有されるため、パスには `%USERNAME%` と `%USERDOMAIN%` の両方を指定する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	有効	ユーザーがNewDomainリソースにアクセスする前に、OldDomainからのクロスプラットフォーム設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化することを保証します。

マシンのログオンスクリプトに変更は必要ありません。

フォルダーリダイレクトポリシーに変更は必要ありません。

OU `2k8_Farm`は、このまま実行できます。ユーザーがログオンすると、Profile Managementは定義ファイルOffice 2007.xmlで識別された設定をクロスプラットフォーム設定ストアにコピーします。

フェーズ5：2k12_Farmのマシンを準備する

`2k8_Farm`にファイルサーバーがセットアップされたので、Citrix仮想デスクトップサイトを構築する時が来ました。Windows 7仮想デスクトップが稼働しているときにProfile Management 5.0をインストールします。以下に適切な構成を示します。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ2\Profiles\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\%ProfVer%`	このファイル共有は両方のドメインのユーザーによって使用されるため、ドメイン情報も含むことが重要です。
アクティブライトバック	無効	
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは、定義ファイルが置かれている場所です。この設定は、`2k8_Farm`の設定と一致している必要があります。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	両方のドメインのユーザーがクロスプラットフォーム設定ストアを共有するため、パスには`%USERNAME%`と`%USERDOMAIN%`の両方を指定する必要があります。この設定は、`2k8_Farm`の設

ポリシー	値	注
		定と一致している必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	無効	クロスプラットフォーム設定ストア内のプロファイルデータの初期設定にNewDomainからの設定が使用されるのを防ぎます。これにより、OldDomainからの設定が優先されるようになります。

システム環境変数%ProfVer%を設定するマシンログオンスクリプトが、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%	注
Windows 2012 上の XenApp サーバー	ウィン2012x64	計画されている 64 ビットサーバーが利用可能になったときに必要です。詳細については、その他の考慮事項を参照してください。
Windows 7 デスクトップ	Win7	Windows 7 の 32 ビット版と 64 ビット版の両方が展開されている場合、それぞれに個別のプロファイルを持たせることをお勧めします。そのため、%ProfVer% は各プラットフォームで異なるように構成する必要があります。

そのため、OldDomain ユーザーの john.smith は、Windows 7 デスクトップ用には `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win7` に、Citrix Virtual Apps サーバー用には `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

そして、NewDomain ユーザーの william.brown は、Windows 7 デスクトップ用には `\\FileServ2\Profiles\william.brown .NewDomain\Win7` に、XenApp サーバー用には `\`

`\FileServ2\Profiles\william.brown.NewDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

繰り返しになりますが、グループポリシーを使用してフォルダーリダイレクトを設定します。ドメインは Windows Server 2012 に基づいているため、フォルダーリダイレクトは **<グループポリシーオブジェクト名\>** \> **ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダーリダイレクト** から設定します。

ポリシー	値
お気に入り	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Favorites`
マイドキュメント	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Documents`

%USERDOMAIN% がフォルダーリダイレクトパスに追加されました。このポリシーは NewDomain ユーザーにのみ適用されるため、この設定は必須ではありません。しかし、将来的に OldDomain ユーザーを同じサーバーに移行することを決定した場合に役立つ可能性があります。今のところ、OldDomain ユーザーは OldDomain からのフォルダーリダイレクトポリシーを引き続き使用し、そのポリシーはフォルダーを `\\FileServ1` にリダイレクトします。

フェーズ 6: ライブテスト

テストは2つの段階で実行します。

1. NewDomain のユーザーのプロファイルデータが正しく動作することを確認します。これらのユーザーは、クロスプラットフォーム設定ストアにデータが設定されていません。クロスプラットフォーム設定を作成するためのポリシーソースが無効に設定されているため、プロファイルの変更は OldDomain に伝播しません。
2. OldDomain の数人のユーザーでテストします。彼らが最初にログオンすると、クロスプラットフォーム設定データがプロファイルにコピーされます。その後のログオンでは、いずれかのドメインからの変更がもう一方にコピーされます。OldDomain のユーザーが NewDomain にログオンし、プロファイルデータが存在しない場合（OldDomain が Profile Management 5.0 にアップグレードされて以来、ユーザーが OldDomain でプロファイルを使用していないため）、クロスプラットフォーム設定ストアは更新されません。このトピックで説明されている構成では、ユーザーは設定がドメイン間でローミングされる前に OldDomain にログオンする必要があります。これにより、ユーザー設定（おそらく長年にわたって作成されたもの）が NewDomain のデフォルト設定によって上書きされないようにします。

その他の考慮事項

このケーススタディで構成されているように、Profile Management は NewDomain の設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化しません。ストアを初期化するために使用できるのは、OldDomain の設定のみです。NewDomain に複数の種類のプロファイル（Windows 7 32 ビットやWindows 7 64ビットなど）が含まれるまでは許容されます。あるいは、NewDomain のユーザーが OldDomain のリソースにアクセスする必要がある場合があります。これらの場合、さらに多くの種類のマシンで、ポリシー「Source for creating cross-platform settings」を適切に有効にする必要があります。

> **注意:**

> もし クロスプラットフォーム設定を作成するためのソースが誤って設定されている場合、新しいプロファイルが、多くの蓄積された大切な設定を持つ既存のプロファイルを上書きしてしまう可能性があります。そのため、このポリシーは一度に1つのプラットフォームタイプにのみ設定することをお勧めします。このプラットフォームは通常、ユーザーが保持したいと考える設定が蓄積されている、より古い（成熟した）プラットフォームです。

> このケーススタディでは、いくつかの点を説明するために別々のドメインが使用されています。また、クロスプラットフォーム設定機能は、2つのOU間、あるいは単一のOU内の異なる種類のマシン間で設定のローミングを管理できます。この場合、異なるマシンタイプに対して「Source for creating cross-platform settings」ポリシーを異なる方法で設定する必要があるかもしれません。この設定はいくつかの方法で実現できます。

- .ini ファイルの CPMigrationsFromBaseProfileToCPStore 設定を使用して、各マシンタイプでポリシーを異なるように設定します。「Source for creating cross-platform settings」ポリシーは設定しないでください。
- Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用して、同じOU上の異なるGPOを管理します。OU内のすべてのマシンに適用されるGPOで共通設定を構成できます。しかし、追加のGPOには「Source for creating cross-platform settings」ポリシーのみを追加し、WMIクエリを使用してフィルタリングします。

ユーザーのログオフを強制する

既定では、問題が発生した場合 (たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合) には、ユーザーに一時プロファイルが与えられます。ただし、代わりにProfile Managementを構成して、エラー

メッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。このエラーメッセージは、トラブルシューティングに役立ちます。

1. **Profile Management**で、**詳細設定**フォルダーを開きます。
2. **問題が発生した場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

ファイルセキュリティ属性を同期する

Profile Management が、プロファイルがインストールされているシステムとユーザー ストアの間で、ユーザー プロファイル内のファイルとフォルダーをコピーするときに、セキュリティ属性を同期できます。この機能は、セキュリティ属性間の不整合を防ぐことを目的としています。これには Windows 10 以降、および Windows Server 2016 が必要です。

この機能はデフォルトで有効になっています。無効にするには、次の手順を実行します。

1. **UPMPolicyDefaults_all.ini** ファイルで、**General Settings** セクションに **SecurityPreserveEnabled=0** を追加します。
2. コマンドラインから、`gpupdate /force` コマンドを実行します。

Profile Management は、プロファイルの最終変更時刻に基づいてプロファイルの変更を同期します。変更がファイルのセキュリティ属性のみに対して行われた場合、Profile Management はファイルを同期しません。

ラージファイル処理を有効にする

プロファイルに存在する大きなファイルは、ログオンまたはログオフが遅くなる一般的な原因です。Citrix®は、大きなファイルをユーザー ストアにリダイレクトするオプションを提供します。このオプションにより、それらのファイルをネットワーク経由で同期する必要がなくなります。

グループポリシーでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. **プロファイル管理**の下で、**ファイルシステム**フォルダーを開きます。
2. **ラージファイル処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル**ポリシーをダブルクリックします。
3. 処理するファイルを指定します。

UPMPolicyDefaults_all.ini ファイルでラージファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. .iniファイルに**\[LargeFileHandlingList\]**セクションを追加します。
2. そのセクションの下に処理するファイルを指定します。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例: `\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.ost`

これらのファイルがCitrix Profile Managementの除外リストに追加されていないことを確認してください。

> **注**

> 一部のアプリケーションでは、ファイルの同時アクセスが許可されていません。Citrixでは、大容量ファイル処理ポリシーを定義する際に、アプリケーションの動作を考慮することをお勧めします。

> Citrixは、Microsoftセキュリティ更新プログラムMS15-090を適用することを推奨します。一般的なセキュリティ対策として、Microsoft Windowsシステムを常に最新の状態に保つようにしてください。

アプリケーションプロファイラーを有効にする

この機能は、アプリケーションベースのプロファイル処理を定義します。この機能を有効にすると、定義ファイルで定義された設定のみが同期されます。

アプリケーションプロファイラーを有効にするには、次の手順を実行します。

1. **Profile Management**で、**Citrix Virtual Apps™ Optimization settings**フォルダーを開きます。
2. **Enable Citrix Virtual Apps Optimization**ポリシーを有効にします。
3. **Path to Citrix Virtual Apps optimization definitions**ポリシーを有効にします。
4. Citrix Virtual Apps最適化の定義ファイルが配置されているフォルダーを指定します。
5. `gpupdate /force`コマンドを実行して、ポリシーの展開を強制します。

> **注：**

> 定義ファイルの作成については、「定義ファイルの作成」を参照してください。

ログオフ中、定義ファイル内の設定のみが同期され、その他のすべての設定は破棄されます。セッションでユーザー文書を表示または更新したい場合は、フォルダーリダイレクトを使用してください。フォルダーリダイレクトの構成については、「フォルダーリダイレクトの構成」を参照してください。

ファイル重複排除を有効にする

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイルに同一のファイルが存在する場合があります。ユーザー ストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージ コストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらのインスタンスを中央の場所 (「*共有ストア*」と呼ばれます) に 1 つ保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージ コストが削減されます。

ファイル重複排除を有効にし、共有ストアに含めるファイルを指定するには、次のポリシーを構成します。

1. **ファイル重複排除 > 重複排除のために共有ストアに含めるファイル**
2. (オプション) **ファイル重複排除 > 共有ストアから除外するファイル**

ファイル重複排除ポリシーを構成すると、Profile Management はユーザー ストアと同じパスに共有ストアを作成します。例:

- ユーザー ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!
- 共有ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\SharedFilesStore`

重複排除のために共有ストアにファイルを含める

ユーザー ストアに重複ファイルが存在する場合は、ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定します。

重要:

> 共有ストアに重複排除されたすべてのファイルはすべてのドメイン ユーザーが読み取ることができるため、個人データや機密データを重複排除しないことをお勧めします。

> 詳細な手順は次のとおりです。

1. グループ ポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > ファイルの重複排除**」にアクセスします。
3. **共有ストアに含める重複排除ファイル**」をダブルクリックします。
4. **有効**」を選択します。
5. **共有ストアに含めるファイルのリスト**」フィールドで、「**表示**」をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、以下の考慮事項に従ってサポートされます。

   - ファイル名のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
   - フォルダー名のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例:

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloads フォルダー内の profilemgt_x64.msi ファイル
   - `*.cfg` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の .cfg 拡張子を持つファイル
   - `Music*` — Music フォルダーとそのサブフォルダー内のファイル
   - `Downloads*.iso` — Downloads フォルダーとそのサブフォルダー内の .iso 拡張子を持つファイル
   - `Downloads*.iso|` — Downloads フォルダー内のみの .iso 拡張子を持つファイル
   - `AppData\Local\Microsoft\OneDrive**.dll` — AppData\Local\Microsoft\OneDrive フォルダーの直下のサブフォルダー内の .dll 拡張子を持つファイル
7. 「**OK**」をクリックし、もう一度「**OK**」をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、共有ストアは無効になります。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、共有ストアは無効になります。

共有ストアからファイルを除外する

ワイルドカード文字を使用すると、ファイルのグループを一度にすべて共有ストアに含めることができます。グループから一部のファイルを除外するには、次の手順で**共有ストアから除外するファイル**ポリシーを有効にして構成します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **共有ストアから除外するファイル**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **共有ストアから除外するファイルのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードは、次の考慮事項とともにサポートされています。

   - ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。それらを現在のフォルダーのみに制限するには、垂直バー (`|`) を使用します。
   - フォルダ名内のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例:

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダ内のprofilemgt_x64.msiファイル
   - `*.tmp` — ユーザープロファイルフォルダとそのサブフォルダ内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp` — AppDataフォルダとそのサブフォルダ内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp|` — AppDataフォルダ内のみの.tmp拡張子を持つファイル
   - `Downloads*\a.txt` — Downloadsフォルダの直下のサブフォルダ内のa.txtファイル
7. **OK**をクリックし、もう一度**OK**をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

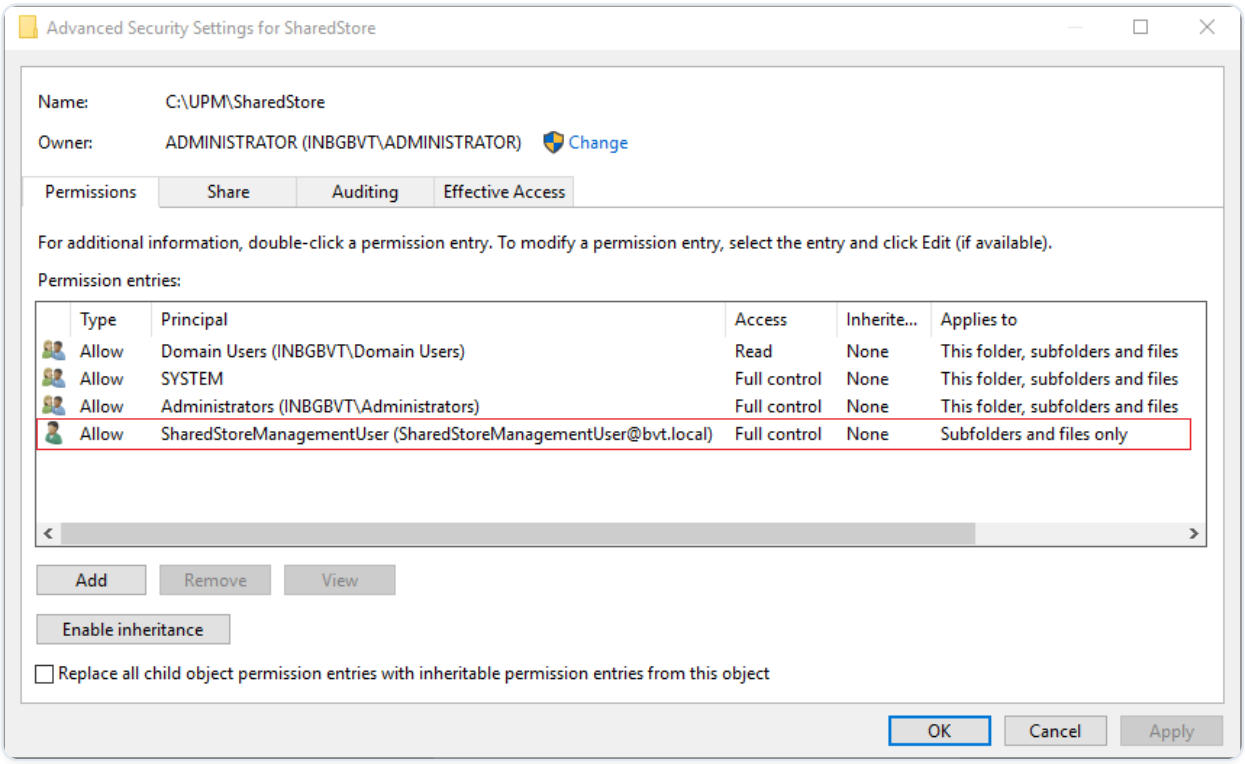
共有ストアのセキュリティ設定を構成する

共有ストアが存在しない場合、Profile Managementは以下の権限設定で自動的に共有ストアを作成します。

- ドメインコンピューター: フルコントロールアクセス
- ドメインユーザー: 読み取りアクセス

デフォルト設定ではドメインコンピューターにフルコントロールアクセス権が付与されるため、セキュリティを向上させるために、共有ストアを手動で作成し、資格情報ベースのアクセスを実装することをお勧めします。これを行うには、次の手順に従います。

1. **Path to user store** 設定の `%USERNAME%` パラメーターと同じディレクトリレベルに共有ストアフォルダーを作成します。たとえば、**Path to user store** 設定が `\\SERVER\UPM_USER_STORE\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` の場合、共有ストアフォルダーは `\\SERVER\UPM_USER_STORE\SharedStore` である必要があります。
2. 共有ストアに次の権限を付与します。この図に示すように、ユーザー `SharedStoreManagementUser` は共有ストアへのアクセスに使用される資格情報です。



3. 各VDAで、共有ストアにアクセスするための `SharedStoreManagementUser` ユーザーアカウントのWindows資格情報を追加します。この目的には、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用できます。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを有効にする

Outlookの検索インデックスローミングを有効にする機能は、ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。この機能により、オフラインOutlookデータファイル (.ost) とユーザー固有の検索データベースが、ユーザープロファイルとともにローミングされます。

前提条件

この機能は、以下の要件を満たすマシンで利用できます。

- オペレーティングシステム:
  - Microsoft Windows 10 バージョン 1709 以降
  - Windows Server 2016 およびそれ以降のバージョン
- Microsoft Outlook 2019、2016、または2103、あるいはMicrosoft Office 365

この機能が有効になるには、マシンでMicrosoft Windows Search Serviceが有効になっていることを確認してください。デフォルトでは、Windowsデスクトップでは有効になっており、Windowsサーバーでは無効になっています。Windowsサーバーでサービスを有効にする方法の詳細につい

ては、このMicrosoftの記事を参照してください。以下のバージョンがテストされ、サポートされています。

- 7.0.20348.380, 7.0.20348.138,7.0.20344.1
- 7.0.21286.1000, 7.0.21343.1000
- 7.0.17134.376, 7.0.17134.285, 7.0.17134.228, 7.0.17134.1
- 7.0.16299.402, 7.0.16299.248, 7.0.16299.15
- 7.0.15063.413
- 7.0.14393.2457, 7.0.14393.2430, 7.0.14393.2368, 7.0.14393.2312, 7.0.14393.2273, 7.0.14393.2248, 7.0.14393.1884, 7.0.1493.1593
- 7.0.1393.2125, 7.0.1393.1884, 7.0.1393.1770
- 7.0.10240.17443
- 7.0.9600.18722

> **注:**
>
> この機能は、Microsoft Windows Search Service の将来のバージョンをサポートすることが期待されています。この機能が Microsoft Windows Search Service の特定の将来のバージョンをサポートしない場合は、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。

仕組み

VHDX (Virtual Hard Disk) は、仮想マシンに仮想および論理ディスクストレージ領域をプロビジョニングするために使用されるディスクファイル形式です。Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能は、VHDX ファイルに依存して動作します。

VHDX ファイルは、この機能を使用する各ユーザーに対して作成されます。VHDX ファイルは、ユーザー固有のプロファイルを、そのユーザーのプロファイル専用の個別の仮想ディスクに保存します。Profile Management は、ログオン時に VHDX ファイルをマウントし、ログオフ時にアンマウントします。VHDX ファイルは次の2種類です。

- OutlookOST.vhdx ファイル。オフライン Outlook データファイル (`.ost`) を含みます。
- OutlookSearchIndex.vhdx ファイル。OutlookOST.vhdx ファイルに保存されているオフラインフォルダーファイルの検索インデックスデータベースを含みます。

> **注:**
>
> デフォルトでは、Profile Management はセッション中にデタッチされた VHDX ファイルを自動的に再アタッチします。詳しくは、「セッションでデタッチされた VHDX ディスクを自動的に再アタッチする」を参照してください。

> Profile Management は、デフォルトで 30 GB の VHDX 容量を提供します。ストレージクォータを適切に計画してください。VHDX の実際の使用量が以前に構成したクォータを超えると、VHDX ファイルはアンマウントされます。

同時セッションのサポート

Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする機能により、Profile Management は、同じユーザーの同時セッションでネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスを提供します。

この機能は、ユーザーの同時セッションごとにOutlook OSTファイルのコピーを割り当てます。デフォルトでは、Profile ManagementはOutlook OSTファイルを保存するために2つのVHDXディスクを提供します（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始すると、追加のOutlook OSTファイルはローカルプロファイルに保存されます。

ストレージ容量に余裕がある場合は、VHDXディスクのデフォルト数を増やすことができます。たとえば、数を3に設定します。その結果、Profile Managementは最初の3つのセッションのOSTファイルをVHDXディスクに保存し、それ以降のセッションのOSTファイルはローカルプロファイルに保存します。

Outlook検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元

Profile Managementは、検索インデックスデータベースの最後に確認された正常なコピーのバックアップを自動的に保存し、破損が発生した場合にそのコピーに戻すことができます。この目的を達成するには、Outlookの検索インデックスローミングを有効にし、次にOutlook検索インデックスデータベース – バックアップと復元ポリシーを有効にします。詳細については、Outlook検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元を参照してください。

機能の有効化

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供するには、**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**機能を有効にし、必要に応じてその拡張機能を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. 次の手順で機能を有効にします。
   a. **Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
   b. **有効**を選択します。
   c. **OK**をクリックします。
4. 同じユーザーの同時セッションでこの機能をサポートするには、次の手順に従います。
   a. **Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
   b. **有効**を選択します。
   c. ストレージ容量に空きがある場合は、「**Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数**」フィールドでデフォルトのVHDXディスクの数を増やします。このフィールドの詳細については、「同時セッションのサポート」を参照してください。
   d. 「**OK**」をクリックします。
5. この機能に高い安定性を提供するには、次の手順に従います。
   a. 「**Outlook search index database-backup and restore**」ポリシーをダブルクリックします。
   b. 「**Enabled**」を選択します。
   c. 「**OK**」をクリックします。
6. この機能に高い可用性を提供するには、次の手順に従います。
   a. 「**Automatically reattach VHDX disks in sessions**」ポリシーをダブルクリックします。
   b. 「**Enabled**」を選択します。
   c. 「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行し、すべてのセッションからログオフしてから、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

> **注:**

> Microsoft Windows 10 1809以降およびWindows Server 2019以降で検索インデックスローミング機能を機能させるには、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows Search`の下にDWORD値`EnablePerUserCatalog = 0`を追加します。レジストリ設定を有効にするには、VDAを再起動します。

Outlook 検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元

Profile Management は、Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能の安定性を確保するためのソリューションを提供します。これは、検索インデックスデータベースの最後に確認された正常なコピーのバックアップを自動的に保存し、破損した場合にそのコピーに復元することで実現されます。その結果、データベースが破損した場合に手動で再インデックスを作成する必要がなくなります。

この機能はデフォルトで無効になっています。これを使用するには、まず Outlook の検索インデックスローミングを有効にする必要があります。Outlook の検索インデックスローミングの詳細については、「ネイティブ Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする」を参照してください。

Outlook の検索インデックスローミングを有効にした後、この機能を有効にするには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADM) > クラシック管理用テンプレート (ADM) > Citrix® > Profile Management > 詳細設定**の下で、**Outlook 検索インデックスデータベース – バックアップと復元**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択し、**OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

Citrix Studio で Profile Management ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー**をクリックします。

2. **ポリシーの作成**ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「Outlook 検索インデックスデータベース – バックアップと復元」と入力します。
3. **選択**をクリックして、**Outlook 検索インデックスデータベース – バックアップと復元**ポリシーを開きます。
4. **有効**を選択し、**OK**をクリックします。

仕組み

この機能が有効になっている場合、Profile Management は、ログオン時にデータベースが正常にマウントされるたびに、検索インデックスデータベースのバックアップを保存します。新しいバックアップが正常に保存されると、Profile Management は以前に保存されたバックアップを削除します。Profile Management は、バックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。検索インデックスデータベースのマウント試行が失敗した場合、Profile Management は検索インデックスデータベースを最後に確認された正常なコピーに自動的に復元します。

> **重要:**
>
> - Profile Management は、ポリシーが有効になり、検索インデックスデータベースが初めて作成された後には、そのバックアップを保存しません。
> - Profile Management は、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。このバックアップは、VHDX ファイルの利用可能なストレージ領域をより多く消費します。

Citrix Profile Management プロファイルコンテナ

> **重要:**
>
> この機能はWindows 7では動作しません。

> ユーザープロファイル内の大きなフォルダーは、ユーザーログオンを遅くする原因となる可能性があります。ログオンエクスペリエンスを向上させるために、Profile ManagementはVHDXベースのプロファイルソリューションであるプロファイルコンテナを提供します。このソリューションを使用すると、選択したプロファイルフォルダーをVHDXプロファイル

> ディスクに保存できます。ユーザーがログオンすると、VHDXプロファイルディスクがマウントされ、プロファイルフォルダーがすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) VHDXファイルのストレージサイズとパスを指定します(#optional-specify-the-storage-path-for-the-vhdx-files)。
2. ニーズに合わせてプロファイルコンテナを有効にします。
   - ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする(#enable-the-profile-container-for-a-portion-of-the-user-profile)
   - ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする(#enable-the-profile-container-for-the-entire-user-profile)。

   > **注:**
   >
   > コンテナベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下のユーザープロファイル（存在する場合）は、初回使用時に自動的にコンテナに移行されます。
   >
   > - ローカルWindowsユーザープロファイル
   > - Citrixファイルベースのプロファイルソリューションからのユーザープロファイル
3. (オプション) プロファイルコンテナからフォルダーとファイルを除外する(#optional-include-and-exclude-folders-and-files)。
4. 展開でマルチセッションシナリオが一般的な場合、プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にします(/ja-jp/profile-management/2303/configure/enable-multi-session-write-back-for-profile-containers.html)。
5. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にしている場合、必要に応じて以下のいずれかのポリシーを有効にできます。
   - ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供するには、ユーザーストアのレプリケートを有効にします。
   - プロファイルコンテナの高い可用性を提供するには、プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にするを有効にします。

> **注：**
>
> - **ユーザーストアのレプリケート**ポリシーと**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**ポリシーは互換性がなく、同時に有効にすることはできません。
> - **プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**ポリシーと**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーは互換性がなく、同時に有効にすることはできません。

概要

主要な概念と情報について説明します。

ユーザーストアとプロファイルコンテナについて

ユーザーストアは、ユーザープロファイルを保存するための中央ネットワークロケーションです。ユーザーがログオンすると、プロファイルはユーザーストアからユーザー環境にコピーされます。ユーザープロファイル内の大きなプロファイルフォルダは、ユーザーログオンを長引かせます。

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナは、ユーザープロファイルを保存するために使用されるVHDXベースのネットワークディスクです。ユーザープロファイル全体または一部を保存するために使用できます。ログオン時に、プロファイルコンテナはユーザー環境にマウントされ、プロファイルフォルダはすぐに利用可能になります。

他のポリシーへの影響

ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にすると、他のポリシーへの影響は次のとおりです。

- ユーザーストアベースのプロファイルソリューションは自動的に無効になります。ユーザーストア専用に設計されたポリシーは適用されなくなります。
  - プロファイルストリーミング

    例外：*プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする*ポリシーが有効な場合、プロファイルストリーミングはプロファイルコンテナに適用されます。詳細については、「プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする」(#optional-enable-local-caching-for-profile-containers)を参照してください。
  - ファイルシステム
  - アクティブなライトバック

    - ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

- Outlookの検索インデックスローミング機能との下位互換性を維持するため、Profile Managementは、以下のファイルをそれぞれ保存するために使用される2つのVHDXディスクを保持します。

    - Outlook検索インデックスデータベース
    - オフラインOutlookデータファイル (`.ost`)

同時アクセスが機能する方法

プロファイル管理は、プロファイルコンテナへの同時アクセスをサポートします。すべての同時セッションにおいて、読み取り/書き込みセッションは1つのみ存在し、プロファイルへの変更をプロファイルコンテナにマージできます。

Profile Managementが同時アクセスを処理する方法は次のとおりです。

- セッションログオン時：

  読み取り/書き込みセッションが存在するかどうかを確認します。存在する場合、現在のセッションは読み取り専用になります。存在しない場合、それは読み取り/書き込みセッションです。

- セッションログオフ時：

  a. プロファイルコンテナをマウント解除します。
  b. 現在のセッションが読み取り専用の場合、プロファイルの変更を破棄します。
  c. 読み取り/書き込みセッションのプロファイル変更を、他の同時セッションがない場合にプロファイルコンテナにマージします。

マルチセッションライトバックを有効にするには、プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを使用します。

(オプション) VHDXファイルの保存パスを指定します

デフォルトでは、VHDXプロファイルディスク（VHDXファイル）はユーザーストアに保存されます。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`。

VHDXプロファイルディスクは、次の場所に保存されます。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\ProfileContainer\!ctx_osname!`。

Profile Management 2112以降では、Profile Management内のすべてのVHDXファイルを保存するための個別のネットワーク場所を指定できます。詳細については、「VHDXファイルの保存パスを指定する」を参照してください。

ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする

ユーザーストアでのログオン時間を短縮するために、プロファイルコンテナ機能を有効にし、それらの大きなプロファイルフォルダをプロファイルコンテナに追加できます。

> **注：**
>
> プロファイルコンテナに追加するフォルダは、ユーザーストアにも存在します。プロファイルコンテナ機能を有効にすると、Profile Managementはプロファイルコンテナとユーザーストアの間でフォルダを同期させます。 プロファイルコンテナ機能を有効にしてから無効にしたとします。一貫性のあるユーザープロファイルを確保するために、Profile Managementはユーザーストアプロファイルをプロファイルコンテナと同期させます。この同期はユーザーログオン時に行われます。除外リスト内のフォルダはユーザーストアにコピーされません。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式でフォルダを追加します。大きなキャッシュファイルを含むフォルダを追加することをお勧めします。たとえば、Citrix Filesコンテンツキャッシュフォルダをリストに追加します: `AppData\Local\Citrix\Citrix Files\PartCache`。

ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする

Profile Management 2009以降、ユーザープロファイル全体をプロファイルコンテナに配置し、VHDXベースのプロファイルソリューション全体を有効にすることができます。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > Profile container settings** の順に移動し、**Profile container** ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効** を選択します。
4. **表示** をクリックし、アスタリスク (`*`) をプロファイルコンテナリストに追加します。
5. **OK** をクリックします。

(オプション) フォルダーとファイルを含める/除外する

プロファイルコンテナが肥大化するのを防ぐため、フォルダーやファイルをプロファイルコンテナから除外できます。必要に応じて、親フォルダーが除外されている場合にフォルダーやファイルを含めることもできます。

プロファイルコンテナからフォルダーを除外する

> **重要：**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にした場合でも、フォルダーリダイレクト設定は有効です。リダイレクトするフォルダーを **Folders to exclude from profile container** リストに入れないでください。そうしないと、フォルダーリダイレクトが機能しません。

1. **Folders to exclude from profile container** ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効** を選択します。
3. **表示** をクリックし、除外するフォルダーをユーザープロファイルへの相対パスの形式で入力します。

   Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。例:

   - `Desktop` は `Desktop` フォルダーを示します。
   - `Downloads*` は `Downloads` フォルダーのすべての直下サブフォルダーを示します。

> **注：**

> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーを有効にする場合（*コンテナーベースのプロファイルソリューション*）、`appdata\local\temp` フォルダーはプロファイルコンテナーから自動的に除外されます。

> この設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで設定が構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

プロファイルコンテナーにフォルダーを含める

除外されたフォルダーのサブフォルダーをプロファイルコンテナーに含めるには、次の手順に従います。

1. **プロファイルコンテナーに含めるフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるフォルダーを入力します。

次の点に注意してください。

- このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで設定が構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、除外リストにないフォルダーはプロファイルコンテナーに含まれます。

プロファイルコンテナにファイルを含める

Profile Management 2112以降、プロファイルコンテナにファイルを含めることができます。

プロファイルコンテナからフォルダを除外した後、そのフォルダ内のファイルをプロファイルコンテナに含めることができます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **プロファイルコンテナに含めるファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。

3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるファイルを入力します。

次の点に注意してください。

- このリストのファイルは、除外されたフォルダ内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダ名内のワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は `Desktop\Desktop.ini` ファイルを示します。
- `AppData*.tmp` は、`AppData` フォルダとそのサブフォルダ内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `AppData*.tmp|` は、`AppData` フォルダ内のみの `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `Downloads*\a.txt` は、`Downloads` フォルダの直下のサブフォルダ内の `a.txt` を示します。

ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで設定が構成されておらず、.iniファイルでも構成されていない場合、除外リストにないファイルはプロファイルコンテナに含まれます。

プロファイルコンテナからファイルを除外する

Profile Management 2112以降、プロファイルコンテナからファイルを除外できます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **プロファイルコンテナから除外するファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**有効**」を選択します。
3. 「**表示**」をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するファイルを入力します。

以下の点に注意してください:

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名内のワイルドカードがサポートされていますが、再帰的には適用されません。

この設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでも設定が構成されていない場合、ファイルは除外されません。

（オプション）プロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にする

「**プロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にする**」機能は、ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーが有効になっている場合にのみ有効になります。「**プロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にする**」ポリシーを有効にすると、ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナー内のユーザープロファイルがユーザーのローカルユーザープロファイルにキャッシュされます。

> 「**重要:**」:

> OneDriveなど、コンテナーベースのプロファイルソリューションでのみ機能するアプリケーションは、このポリシーが有効になっていると正しく動作しない可能性があります。OneDriveが正しく機能するようにするには、このポリシーを無効にするか、OneDriveコンテナーポリシーを有効にしてください。

> デフォルトでは、ユーザーログオン時にユーザープロファイル全体がキャッシュされます。ユーザーログオン時間を短縮するには、「**プロファイルストリーミング**」ポリシーを有効にできます。その結果、ユーザープロファイル内のプロファイルフォルダーはログオン後にオンデマンドでキャッシュされます。

プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする

> **ヒント:**

> FSLogix Profile Containerの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/fslogix/configure-profile-container-tutorial>`を参照してください。Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーの詳細については、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーを参照してください。

概要

FSLogixプロファイルコンテナーやCitrix Profile Managementプロファイルコンテナーなどの VHDベースのプロファイルソリューションは、マルチセッションシナリオでの変更の保存をサポートしていません。変更を書き込めるのは、1つのセッション（読み取り/書き込みモード）のみです。他のセッション（読み取り専用モード）での変更は破棄されます。

しかし、マルチセッションシナリオはCitrix仮想アプリのユースケースで一般的です。これらのユースケースを容易にするために、**プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを提供しています。このポリシーにより、FSLogix Profile ContainerとCitrix Profile Managementプロファイルコンテナーの両方でマルチセッションライトバックを有効にできます。同じユーザーが異なるマシンで複数のセッションを起動した場合、Profile Managementは各セッションで行われた変更をユーザーのプロファイルコンテナーに同期して保存します。

ユーザーログオン中に、ユーザーのプロファイルコンテナーディスクがマウントされ、I/O要求はマウントされたディスクにリダイレクトされます。その後、Profile Managementはユーザーストアからローカルプロファイルに変更を同期します。

ユーザーログオフプロセス中、Profile Managementはセッションで使用されているFSLogix Profile Containerのモードによって動作が異なります。

- 読み取り専用モードが使用されている場合、Profile Managementは変更をユーザーストアに書き戻します。
- 読み取り/書き込みモードが使用されている場合、Profile Managementはユーザーストアからの変更をローカルプロファイルに適用します。その後、変更はユーザーのプロファイルコンテナーにマージされます。

> **注:**

> FSLogix Profile Containerが使用されている場合、マルチセッションライトバック機能はプロファイルストリーミングと互換性がありません。

> 以下のイベントが変更と見なされます。

- 作成
- 変更
- 削除
- 名前変更

ライトバック戦略

Profile Management は、変更を適用するために「最終書き込み優先」戦略を使用します。

- ファイル/フォルダーの作成と変更の場合、ファイル/フォルダーの最終書き込み時刻を比較することによって変更をライトバックします。
- ファイル/フォルダーの削除と名前変更の場合、変更に関連付けられたタイムスタンプを比較することによって変更をライトバックします。Profile Management は、変更が発生したときにタイムスタンプをログに記録します。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを**有効**に設定することで、マルチセッションライトバック機能を使用できます。このポリシーはデフォルトで**無効**に設定されています。

- FSLogix Profile Container でこの機能を使用するには、次の手順を完了します。
    - FSLogix プロファイル コンテナ
        - FSLogix Profile Container がインストールされ、有効になっていることを確認します。
        - プロファイルの種類が**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていることを確認します。
    - Citrix プロファイル管理
        - **Profile Management を有効にする**ポリシーを有効に設定します。
        - **ユーザー ストアへのパス**ポリシーを有効なパスで設定します。
        - (オプション) **処理されたグループ**および**除外されたグループ**ポリシーを設定します。処理するユーザーグループがFSLogixプロファイルコンテナ内のグループと一致していることを確認します。
        - **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。このポリシーはGPOまたはCitrix Studioで設定できます。詳細については、この記事の後半の手順を参照してください。

- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのマルチセッションライトバック機能を使用するには、次の手順を実行します。
  - **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
  - Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ機能を有効にする。

> **注：**
>
> **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**は、**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**と互換性がなく、同時に有効にすることはできません。

> **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成** > **管理用テンプレート** > **Citrixコンポーネント** > **Profile Management** > **詳細設定**で、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択し、**OK**をクリックします。

変更を有効にするには、Profile Managementがインストールされているマシンで、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveコンテナを使用すると、OneDriveフォルダーはユーザーとともにローミングできます。その結果、ユーザーはどのコンピューターからでも同じOneDriveフォルダーにアクセスできます。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

プロファイル処理ソリューションには2種類あります。OneDriveコンテナは、その両方に適用されます。

- **ファイルベース**。ユーザープロファイルは、ログオン時にリモートユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- **VHDXベース**。ユーザープロファイルはVHDXファイル（プロファイルコンテナとして知られています）に保存されます。これらのVHDXファイルは、ログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

OneDriveコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する
2. OneDriveコンテナを有効にして構成する

> **注：**
>
> Citrix Profile Management 2206以降、プロファイルコンテナを使用してプロファイル全体を保存する場合、OneDriveフォルダーはデフォルトでユーザーとともにローミングされます。ただし、別のコンテナを使用してOneDriveフォルダーをローミングしたい場合は、OneDriveコンテナを有効にすることもできます。

(オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する

デフォルトでは、OneDriveコンテナ用のVHDXファイルは、ユーザーストアと同じストレージサーバーに保存されます。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`!

OneDriveコンテナのVHDXファイルは、その後、に保存されます。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\OneDrive`

必要に応じて、OneDriveフォルダーのVHDXディスクを保存するための別のファイル共有を指定できます。詳細については、「VHDXファイルの保存パスを指定する」を参照してください。

OneDriveコンテナを有効にして構成する

OneDriveコンテナポリシーを有効にし、VHDXファイルに保存するOneDriveフォルダーを指定します。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**OneDriveコンテナを有効にする**をダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **OneDriveフォルダーのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
5. ユーザープロファイルに対する相対パスの形式でOneDriveフォルダーを入力し、**OK**をクリックします。

   たとえば、OneDriveフォルダーの絶対パスが`%userprofile%\OneDrive - Citrix`の場合、`OneDrive - Citrix`をリストに追加します。

   > **注：**
   >
   > 相対パスには、`!CTX_OSNAME!`や`!CTX_OSBITNESS!`などの変数を含めることはできません。

6. **OK**をクリックします。

VHDXファイルのストレージサイズとパスを指定する

この記事では、Profile Managementが作成するVHDXファイルのストレージサイズとパスを指定する方法について説明します。

概要

Profile Managementは、以下のVHDXベースの機能を提供します。

- Outlook検索インデックスローミング
- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ設定
- フォルダーミラーリングの高速化
- OneDriveコンテナの有効化

デフォルトでは、すべてのVHDXファイルはユーザーストアに保存されます。必要に応じて、それらを保存するための別のパスを指定できます。以下に、VHDXファイルのデフォルトおよびカスタムのストレージパスを示します。

- プロファイルコンテナー設定
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\ProfileContainer\{OS_NAME_SHORT}\`
- Outlook検索インデックスローミング
  - デフォルト: `{USER_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
  - カスタム: `{VHDX_STORE_PATH}\VHD\{OS_NAME_SHORT}\`
- フォルダーのミラーリングを高速化する
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\MirrorFolders\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\MirrorFolders\
- OneDriveコンテナを有効にする
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\OneDrive\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\OneDrive\

Profile Management は、現在のユーザーを偽装して VHDX ファイルにアクセスし、ドメインコンピューターに VHDX ファイルのストレージパスへの `full control` 権限を付与しません。

ストレージサイズを指定する

すべての VHDX ファイルの最大サイズは、デフォルトで 50 GB です。デフォルトの最大サイズを変更するには、VHDX ポリシーを有効にする前に、次のレジストリ値を構成します。`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\VhdCapacity` (DWORD、サイズは GB 単位)。

VHDX ファイルは、手動でファイルを削除しても自動的に縮小されません。VHDX ファイルのサイズを縮小するには、**ディスクの管理**に移動し、該当するボリュームを右クリックして、**ボリュームの縮小**を選択します。

ストレージパスを指定する

VHDX ファイルのネットワークストレージの場所を準備します。ユーザーにストレージの場所への `Modify` 権限以上を付与していることを確認してください。

VHDX ファイルのストレージパスを指定するには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**の下で、**VHDXファイルのストレージパスをカスタマイズ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. **VHDXファイルを保存するパス**フィールドに、ストレージの場所のフルパスを入力します。例: `\\myservername\vhdx_store`。
5. **適用**をクリックし、**OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の手順を実行します。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

   ポリシーが有効になるタイミングは、使用状況によって異なります。

   - VHDX ファイルのストレージパスを初めて指定する場合、ポリシーはユーザーがログオンした後に有効になります。
   - VHDX ファイルのストレージパスを変更する場合、ポリシーはユーザーが初めてログオフした後に有効になります。

`gpupdate` コマンドの詳細については、Microsoft ドキュメント を参照してください。

この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Profile Management は VHDX ファイルをユーザー ストアに保存します。

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

「**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**」機能により、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。

概要

Citrix Profile Managementは、次のVHDXベースのポリシーを提供します。

- ネイティブOutlook検索エクスペリエンスを有効にする(/ja-jp/profile-management/2303/configure/enable-native-outlook-search-experience.html)

- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ(/ja-jp/profile-management/2303/configure/citrix-profile-management-profile-container.html)
- フォルダーミラーリングを高速化する(/ja-jp/profile-management/2303/policies/descriptions-and-defaults.html#accelerate-folder-mirroring)

各ポリシーは、適切に機能するために関連するVHDXディスクに依存しています。Profile Managementは、ログオン中にこれらのディスクをアタッチし、ログオフ中にデタッチします。ただし、これらのVHDXディスクはセッション中に誤ってデタッチされ、ポリシーが適切に機能しなくなる可能性があります。VHDXディスクがデタッチされる可能性のある原因には、次のものがあります。

- ファイルサーバーで一時的なエラーが発生する
- ネットワーク接続が遅い

「**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、前述のVHDXベースのポリシーで使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ポリシーを有効にする

デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。VHDXベースのポリシーの高い安定性を確保するために、デフォルト設定を維持することをお勧めします。

VHDXベースのポリシーでパフォーマンスの問題が発生した場合は、次の手順に従ってポリシー設定を確認してください。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **Citrix Components > Profile Management > Advanced settings**の下で、「**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 設定が「**無効**」になっている場合は、「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、Microsoftの記事に記載されているとおり、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用され、デフォルトで*有効*になります。

2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで有効になります。

VHDディスクの圧縮を有効にする

VHDディスクの圧縮は、空き領域を削除し、ファイル内のデータを結合することでVHDファイルのサイズを削減するプロセスです。**VHDディスクの圧縮を有効にする**ポリシーを使用すると、Profile ManagementでVHDディスクの圧縮を有効にできます。Profile Managementによって作成されたVHDファイルは、特定の条件が満たされるとユーザーのログオフ時に自動的に圧縮され、中央ストレージまたはクラウドストレージのスペースを節約します。

この記事では、VHDディスクの圧縮を有効にし、デフォルトの圧縮設定と動作を調整する方法について説明します。

概要

VHDXディスクの圧縮は、Profile Managementの以下のVHDXファイルに適用されます。

- プロファイルコンテナ
- OneDriveコンテナ
- フォルダーミラーリングコンテナ

VHDディスクの圧縮を有効にするポリシーが有効になっている場合、以下のいずれかの条件が満たされると、VHDXファイルはユーザーのログオフ時に自動的に圧縮されます。

- VHDファイルの空き領域比率が指定された値（デフォルトでは20%）を超えている

  空き領域比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

  * Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。詳細については、VHDファイルの必要な最小サイズを取得するを参照してください。
- 前回の圧縮以降のログオフ回数が指定された値（デフォルトでは5）に達している

> **注：**
>
> ユーザーがログオフすると、VHDディスクの圧縮プロセスはログオフプロセスと並行して実行されます。したがって、ディスク圧縮によってログオフ時間が長くなることはあり

> ません。ユーザーが再度ログオンしようとしたときにVHDディスクの圧縮プロセスが完了していない場合、Profile Managementはログオン試行を阻止します。

ニーズと利用可能なリソースに応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してこれらのデフォルト設定を調整できます。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスクの圧縮が有効になっている場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用してデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。必要に応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してデフラグを無効にできます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスク圧縮を有効にする

VHDディスク圧縮を有効にすると、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダミラーリングコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

GPOを使用してVHDディスク圧縮を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > プロファイル管理 > プロファイルコンテナ設定**にアクセスします。
3. **VHDディスク圧縮**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、機能は無効になります。

圧縮設定と動作を変更する

VHDディスク圧縮を有効にするとストレージ容量を節約できますが、システムI/Oとネットワーク帯域幅も消費します。圧縮プロセス中にシステムおよびネットワークリソースの使用状況を監視して、以下の設定を調整するかどうかを決定できます。

- VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数
- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

GPOを使用してデフォルトの圧縮設定と動作を変更するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. 圧縮をトリガーする空き領域の比率を変更するには、次の手順に従います。
    a. **VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じてパーセンテージを入力して、**OK**をクリックします。
4. 圧縮をトリガーするログオフ回数（最後の圧縮以降）を変更するには、次の手順に従います。
    a. **VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じて値を入力して、**OK**をクリックします。
5. VHDディスク圧縮のデフラグを無効にするには、次の手順に従います。
    a. 「**Disable defragmentation for VHD disk compaction**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、「**Enabled**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
    a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
    b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の20 (%)が使用されます。
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
    a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
    b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の5が使用されます。

- VHDディスクの圧縮のためのデフラグを無効にする

  a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

  b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

VHDファイルの必要な最小サイズを取得する

詳細な手順は次のとおりです。

1. VHDファイルがオペレーティングシステムにアタッチされていることを確認します。
2. このPowerShellコマンドを管理者として実行します。

   ```
   Get-WmiObject -Class MSFT_Partition -Namespace ROOT\Microsoft\Windows\Storage
   ```

   現在のデスクトップのすべてのパーティションが表示されます。
3. VHDファイルに対応するパーティションを見つけ、GetSupportedSizeメソッドを使用して必要な最小サイズ (`SizeMin`) を取得します。

Azure AD参加済みおよび非ドメイン参加済みVDAマシンに対するサポートを有効にする

Citrix Profile Managementは、顧客が管理するAzureサブスクリプション内のAzure AD参加済みおよび非ドメイン参加済みVDAマシンに対して、プロファイル管理を提供できるようになりました。

前提条件

- プロファイルマネージメント 2203以降
- VDAバージョン2203以降
- Workspace Environment Management (WEM) を使用してプロファイルストレージサーバーの資格情報を保存する場合、WEMエージェントバージョン2109.2.0.1以降

Profile Managementを有効にする

Azure AD参加済みまたは非ドメイン参加済みVDAマシンでProfile Managementを有効にするには、以下の設定を完了します。

1. **Profile Management**で、**Enable Profile management**ポリシーを**enabled**に設定します。

2. **Path to user store**ポリシーを、VDAからアクセス可能な有効なパスに設定します。たとえば、ファイルサーバーまたはAzure Files共有上にある場合、ユーザーストアはアクセス可能です。
3. **Profile container**ポリシーを**Enable**に設定し、プロファイルコンテナリストにアスタリスク (*) を追加します。詳細については、「ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にする」を参照してください。
4. **Enable credential-based access to user stores**ポリシーを**Enabled**に設定します。次に、Profile Managementがユーザーストアにアクセスできるように、プロファイルストレージサーバーの資格情報をWEMまたはWindows資格情報マネージャーに保存します。詳細については、「資格情報ベースのユーザーストアへのアクセスを有効にする」を参照してください。

ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期と非同期の2つの処理モードを提供します。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。

レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングされません。したがって、ユーザーが次の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

Citrix Profile Managementは、この問題を解決するために**ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする**ポリシーを提供します。このポリシーが有効になっている場合、Profile Managementはレジストリ値をユーザーとともにローミングします。その結果、ユーザーがログオンするたびに実際の処理モードが適用されます。

この機能は、WindowsおよびWindows Server OSの両方に適用されます。

前提条件

Windowsマシンで非同期モードを有効にするために、追加のアクションは必要ありません。ただし、Windows Serverマシンでこのモードを有効にするには、次の要件を満たしていることを確認してください。

- リモートデスクトップセッションホストの役割がインストールされていること。

- グループポリシーが次のように設定されていること。
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > ログオン > コンピューターの起動とログオン時に常にネットワークを待つ**: 無効
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > グループポリシー > リモートデスクトップサービス経由でログオンするときに非同期ユーザーグループポリシー処理を許可する**: 有効

ポリシーを有効にする

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. Group Policy Management Editor を開き、**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** にアクセスします。
2. Profile Management の下で、**詳細設定** をクリックします。
3. **ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする** ポリシーをダブルクリックします。
4. **有効** を選択します。
5. **OK** をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。
2. ここでこの設定が構成されておらず、.ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

ポリシー

プロファイル管理ポリシー

この記事では、.admファイルと.admxファイルにおけるポリシーの重要な側面について説明します。

プロファイル管理変数

このバージョンのプロファイル管理では、グループポリシーと.iniファイルの両方で使用できる次の変数が利用可能です。

ファイルとレジストリエントリを定義するポリシーの場合、次の変数は次のように展開されます。

変数	バージョン1プロファイルの展開	バージョン2プロファイルの展開
`!ctx_localsettings!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`
`!ctx_roamingappdata!`	`Application Data`	`AppData\Roaming`
`!ctx_startmenu!`	`Start Menu`	`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start menu`
`!ctx_internetcache!`	`Local Settings\Temporary Internet Files`	`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
`!ctx_localappdata!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`

パスの構築に使用されるポリシーの場合、`!ctx_osbitness!` 変数はオペレーティングシステムに応じて x86 または x64 に展開されます。以下の変数も展開されます:

- `!ctx_osname!` は、オペレーティングシステムに応じて次のように短い名前に展開されます。
- `!ctx_profilever!` は、オペレーティングシステムに応じて次のようにプロファイルバージョンに展開されます。

Profile Management Service の開始時に、長い名前がログファイルに書き込まれます。

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows 11`	Win11	v6
`Windows 10 Redstone 6`	ウィンテンアールエスシックス	v6
`Windows 10 Redstone 5`	ウィンテンアールエスファイブ	v6
`Windows 10 Redstone 4`	ウィンテンアールエスフォー	v6
`Windows 10 Redstone 3`	ウィンテンアールエススリー	v6
`Windows 10 Redstone 2`	ウィンテンアールエスツー	v6
`Windows 10 Redstone 1`	ウィンテンアールエスワン	v6
`Windows 10`	Win10	v5
`Windows 8.1`	Win8.1	v4 または v2
`Windows 8`	Win8	v3 または v2
`Windows 7`	Win7	v2
`Windows Server 2022`	Win2022	v6
`Windows Server 2019`	Win2019	v6
`Windows Server 2016`	Win2016	v6
`Windows Server 2012 R2`	ウィン2012R2	v4 または v2
`Windows Server 2012`	Win2012	v3 または v2

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows Server 2008 R2`	Win2008	v2
`Windows Server 2008`	Win2008	v2

注:

20H1以降のWindows 10の場合、長い名前はWindows10 \<postfix\>、対応する短い名前はWin10_\<postfix\>です。\<postfix\>の値は、次の2つの特定のレジストリエントリから取得されます。

- エントリ: HKLM\Software\\Microsoft\\Windows NT\\CurrentVersion > 値の名前: DisplayVersion
- エントリ: HKLM\\Software\\Microsoft\\Windows NT\\CurrentVersion > 値の名前: ReleaseId

最初のレジストリエントリに値が含まれている場合、それが\<postfix\>として使用されます。それ以外の場合は、2番目のレジストリエントリの値が使用されます。

Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、およびWindows Server 2012R2の場合、実際のプロファイルバージョンは、`HLKM\System\CurrentControlset\Services\ProfSvc\Parameters`の下にある`UseProfilePathExtensionVersion`レジストリキーの設定によって変更される可能性があります。

- 「1」に設定されている場合、プロファイルバージョンはオペレーティングシステムに応じてv3またはv4になります。
- 設定されていないか「0」に設定されている場合、プロファイルバージョンはv2になります。

バージョン別ポリシー

移行を支援するため、以下の表は、Profile Managementの異なるバージョンで利用可能なポリシー、.adm（または.admx）ファイルおよび.iniファイルにおける各ポリシーの場所、そして各ポリシーが設計されている機能（またはすべての展開の基本構成の一部であるかどうか）を示しています。

.admまたは.admxファイル内の場所は`Citrix > Profile Management`に対する相対パスです。

バージョン2303以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
PSMidSessionWriteBackSessionLock	\BasicSettings	PSMidSessionWriteBackSessionLock	セッションロックおよび切断時のアクティブなライトバックを有効にする
AppAccessControl	\AppAccessControl	AppAccessControl	アプリケーションアクセス制御を有効にする
EnableVHDDiskCompaction	\ProfileContainerSettings	EnableVHDDiskCompaction	VHDディスクの圧縮を有効にする
FreeRatio4Compaction	\AdvancedSettings	FreeRatio4Compaction	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
Nログオフス4コンパクション	\AdvancedSettings	Nログオフス4コンパクション	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
Nデフラグ4コンパクション	\AdvancedSettings	Nデフラグ4コンパクション	VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

バージョン2209以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
SharedStoreFileInclusionList	\ファイル重複排除	SharedStoreFileInclusionList	重複排除のために共有ストアに含めるファイル
SharedStoreFileExclusionList	\ファイル重複排除	SharedStoreFileExclusionList	共有ストアから除外するファイル

バージョン2206以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
SyncGpoStateEnabled	\AdvancedSettings	SyncGpoStateEnabled	ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする
OneDriveContainer	\AdvancedSettings	OneDriveContainer	ローミングOneDriveフォルダーを有効にする
OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	同時セッションでのOutlook検索データローミングを有効にする
PSForPendingAreaEnabled	\ストリーミングユーザープロファイル	PSForPendingAreaEnabled	保留中の領域に対するプロファイルストリーミングを有効にする

バージョン2203から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
EnableVolumeReattach	\AdvancedSettings	EnableVolumeReattach	セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

バージョン2112以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナの設定	ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナからファイルを除外する
ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナの設定	ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナにファイルを含める
VhdStorePath	AdvancedSettings	PathToVhdStore	VHDXファイルのネットワークストレージの場所を指定します

バージョン2109以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

バージョン2106以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADM または .ADMXファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
AccelerateFolderMirroring	\FileSystemSettings\FSSynchronization	AccelerateFolderMirroring	フォルダーミラーリングの高速化

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする
MultiSiteReplication	AdvancedSettings	MultiSiteReplication	ユーザー ストアをレプリケートする

Version 2103 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSForFoldersEnabled	\PsSettings	PSForFoldersEnabled	フォルダーのプロファイルストリーミング
ProfileContainerLocalCache	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerLocalCache	プロファイルコンテナーのローカル キャッシュ

Version 2009 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerExclusionListDir	プロファイルコンテナ
ProfileContainerInclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerInclusionListDir	プロファイルコンテナ

バージョン2003以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
FSLogixProfileContainerSupport	\AdvancedSettings	FSLogixProfileContainerSupport	**バージョン2103より前:** FSLogix Profile Container のマルチセッションライト

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
			バックを有効にする **バージョン2103以降:** Profile Containers のマルチセッションライトバックを有効にする

バージョン1909以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
MigrateUserStore		MigrateUserStore	UserStoreを移行する
OutlookEdbBackupEnabled	\AdvancedSettings	OutlookEdbBackupEnabled	Outlook 検索インデックスデータベース - バックアップと復元
ApplicationProfilesAutoMigration	\AdvancedSettings	ApplicationProfilesAutoMigration	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

バージョン 1903 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainer	**バージョン 2009 より前:** \FileSystemSettings\FSSynchronization **バージョン 2009 以降:** \ProfileContainer	ProfileContainer	プロファイルコンテナ

バージョン7.18以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
OutlookSearchRoamingEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingEnabled	Outlook検索ローミング

バージョン7.16以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
XenAppOptimizationSettings	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationSettings	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
XenAppOptimizationDefinitionPath	\XenAppOptimizationSettings	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
LargeFileHandlingList	\FileSystemSettings	LargeFileHandlingList	大容量ファイルの処理

バージョン 7.15 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
LogonExclusionCheck	\FileSystemSettings	LogonExclusionCheck	ログオン除外チェック

バージョン 5.8 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
StreamingExclusionList	\PsSettings	StreamingExclusionList	プロファイルストリーミング除外リスト

バージョン 5.6 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
`CEIPEnabled`	\AdvancedSettings	`CEIPEnabled`	CEIP
PSMidSessionWriteBackReg		PSMidSessionWriteBackReg	アクティブなライトバックレジストリ

バージョン 5.5 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
デフォルトの除外リスト	\Registry	DefaultExclusionListRegistry	ベース
NTUSER.DAT	\Registry	LastKnownGoodRegistry	NTUSER.DATのバックアップ
デフォルトの除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	DefaultSyncExclusionListDir	ベース

バージョン 5.0〜5.4 で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
除外されたグループ		ExcludedGroups	除外されたグループ
自動構成を無効にする	\詳細設定	DisableDynamicConfig	自動構成
AppData (Roaming) フォルダーをリダイレクトする、`Desktop` フォルダーをリダイレクトする、...	\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成内)	注: 該当なし	XenDesktopとの統合

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	\プロファイル処理	ProfileDeleteDelay	ベース

バージョン4.x以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	\クロスプラットフォーム設定	CPUserGroupList	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定を有効にする	\クロスプラットフォーム設定	`CPEnabled`	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定作成元	\クロスプラットフォーム設定	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム定義へのパス	\クロスプラットフォーム設定	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	\クロスプラットフォーム設定	`CPPath`	クロスプラットフォーム設定
オフラインプロファイルのサポート	\クロスプラットフォーム設定	OfflineSupport	オフラインプロファイル
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	\詳細設定	LogoffRatherThanTempProfile	トラブルシューティングの改善

Version 3.x 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
アクティブなライトバック		PSMidSessionWriteBack	アクティブプロファイルライトバック (バージョン 4.0 では「Active write back」に名称変更)
ミラーリングするフォルダー (バージョン 3.1 以降で利用可能)	\File system\Synchronization	MirrorFoldersList	フォルダーミラーリング
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する (バージョン 3.1 以降で利用可能)	\詳細設定	ProcessCookieFiles	フォルダーミラーリング
リダイレクトされたフォルダーを削除する (バージョン 3.2、3.2.2、および 4.0 で利用可能)	\詳細設定	DeleteRedirectedFolders	フォルダーリダイレクトのサポート
常にキャッシュ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSAlwaysCache	ストリーム配信されたユーザープロファイル
プロファイルストリーミング	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	`PSEnabled`	ストリーム配信されたユーザープロファイル
保留中のエリアロックファイルのタイムアウト	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSPendingLockTimeout	ストリーム配信されたユーザープロファイル
ストリーム配信されたユーザープロファイルグループ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSUserGroupsList	ストリーミングされたユーザープロファイル

バージョン2.x以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
ユーザーストアへのパス		PathToUserStore	ベース
処理されたグループ		ProcessedGroups	ベース
ローカルプロファイルの競合処理	プロファイル処理	LocalProfileConflictHandling	ベース
既存プロファイルの移行	プロファイル処理	MigrateWindowsProfilesToUserStore	ベース
テンプレートプロファイル	プロファイル処理	テンプレートプロファイルパス, テンプレートプロファイルによるローミングプロファイルの上書き, テンプレートプロファイルによるローカルプロファイルの上書き	ベース
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除	プロファイル処理	DeleteCachedProfilesOnLogoff	ベース
MFTキャッシュファイルのディレクトリ(バージョン5.0で削除)	\詳細設定	`USNDBPath`	ベース
同期するディレクトリ	\ファイルシステム\同期	SyncDirList	ベース
除外リスト	\レジストリ	ExclusionListRegistry	ベース
同期するファイル	\ファイルシステム\同期	SyncFileList	基本

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
インクルージョンリスト	\レジストリ	InclusionListRegistry	基本
除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	SyncExclusionListDir	基本
除外リスト - ファイル	\ファイルシステム	SyncExclusionListFiles	基本
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	\詳細設定	LoadRetries	ベース
ローカル管理者のログオンを処理する		ProcessAdmin	ベース
プロファイル管理を有効にする		ServiceActive	ベース
ログ記録を有効にする	\ログ設定	LoggingEnabled	ログ記録
ログ設定	\ログ設定	LogLevel	ロギング
ログファイルの最大サイズ	\ログ設定	MaxLogSize	ロギング
ログファイルへのパス (バージョン 2.1 以降で利用可能)	\ログ設定	PathToLogFile	ロギング

Profile Management ポリシーの説明およびデフォルト

このトピックでは、Profile Management の .adm および .admx ファイル内のポリシーについて説明します。

ポリシーの詳細については、Profile Management ポリシーを参照してください。

.adm および .admx ファイル内のセクション

Profile Management ポリシーは、次のセクションにあります。

プロファイル管理

Profile Management\\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイル管理\\プロファイル処理

プロファイル管理\\詳細設定

プロファイル管理\\ログ設定

プロファイル管理\\レジストリ

プロファイル管理\\ファイルシステム

プロファイル管理\\ファイルシステム\\同期

プロファイル管理\\ファイルの重複排除

プロファイル管理\\ストリーム配信ユーザープロファイル

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

グループポリシーオブジェクトエディターでは、ほとんどのポリシーが **Computer Configuration \> Administrative Templates \> Classic Administrative Templates \> Citrix** の下に表示されます。リダイレクトされたフォルダーポリシーは **User Configuration \> Administrative Templates \> Classic Administrative Templates \> Citrix** の下に表示されます。

グループポリシーエディターでは、ポリシーが **User Configuration** というラベルのセクションにない限り、**Computer Configuration** の下に表示されます。

プロファイル管理

プロファイル管理を有効にする

プロファイル管理を有効にできます。デフォルトでは、展開を容易にするため、プロファイル管理はログオンまたはログオフを処理しません。プロファイル管理は、他のすべてのセットアップタスクを完了し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイル管理はWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

処理されるグループ

プロファイルが処理されるユーザーを指定できます。以下のユーザーグループを使用してユーザーを指定します:

- `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>` の形式のドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）
- `GROUP NAME` の形式のローカルグループ

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されている場合、プロファイル管理はこれらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、プロファイル管理はすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。

除外されたグループ

プロファイルが処理されないユーザーを指定できます。以下のユーザーグループを使用してユーザーを指定できます。

- `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式のドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）
- `GROUP NAME`の形式のローカルグループ

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されている場合、Profile Managementはそれらのユーザーグループのメンバーを除外します。
2. この設定が無効になっている場合、Profile Managementはどのユーザーも除外しません。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。

ローカル管理者のログオンを処理する

Profile Managementが `BUILTIN\Administrators` グループのメンバーのログオンを処理するかどうかを指定できます。このポリシーを有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者であるCitrix Virtual Desktops展開で推奨されます。

Citrix Virtual Apps環境は、マルチセッションオペレーティングシステムの典型的な使用例です。このポリシーがマルチセッションオペレーティングシステムで無効になっているか、構成されていない場合、Profile Managementはドメインユーザーのログオンを処理しますが、ローカル管理者のログオンは処理しません。Citrix Virtual Desktops™環境は、シングルセッションオペレーティングシステムの典型的な使用例です。シングルセッションオペレーティングシステムでは、Profile Managementはローカル管理者のログオンを処理します。

ローカル管理者権限を持つドメインユーザーは、通常、仮想デスクトップが割り当てられたCitrix Virtual Desktopsユーザーです。デスクトップでProfile Managementに関する問題が発生した場合、このポリシーにより、ユーザーはログオン処理をバイパスしてログオンし、問題をトラブルシューティングできます。

> **注:**
>
> ドメインユーザーのログオンは、通常、製品ライセンスへの準拠を確実にするために、グループメンバーシップによって課される制限を受ける場合があります。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、Profile Management はローカル管理者によるログオンを処理しません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、管理者は処理されません。

ユーザー ストアへのパス

ユーザーストアのストレージパスを指定できます。ユーザーストアは、ユーザープロファイル（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存される中央のネットワークロケーションです。

パスは次のいずれかです:

- ホームディレクトリに対する相対パス。ホームディレクトリは通常、Active Directory のユーザーに対して `#homeDirectory#` 属性として構成されます。

- UNC パス。通常、サーバー共有または DFS 名前空間を指定します。
- 無効または未構成。この場合、パスは `#homeDirectory#\Windows` です。

パス設定では、次の種類の変数を使用できます:

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: `%ProfVer%`）。システム環境変数は通常、追加の設定が必要です。
- ハッシュで囲まれた Active Directory ユーザーオブジェクトの属性（例: `#sAMAccountName#`）。
- Profile Management変数。詳細については、Profile Management変数の製品ドキュメントを参照してください。

`%username%`と`%userdomain%`を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどの組織変数を完全に定義するために、カスタム属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#`はユーザー設定をUNCパス`\\server\share\JohnSmith`に保存します（現在のユーザーの#sAMAccountName#がJohnSmithに解決される場合）
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`は`\\server\profiles$\JohnSmith.DOMAINCONTROLLER1\Win8x64`に展開される場合があります

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、このポリシーがNTUSER.DATを含むフォルダーの1つ上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profileに存在する場合、ユーザーストアへのパスを\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64に設定します（\UPM_Profileサブフォルダーではありません）。

ユーザーストアへのパスを指定する際の変数の使用に関する詳細については、以下のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性とディザスターリカバリ

構成の優先順位:

1. ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。このポリシーが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。
2. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ホームドライブのWindowsディレクトリが使用されます。

ユーザーストアの移行

Profile Managementが以前使用していたユーザー ストアの保存パスを指定できます（以前指定した`path to user store`設定）。

この設定が構成されている場合、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、現在のユーザー ストアに移行されます。

パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。

どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数
- ハッシュ記号で囲まれたActive Directoryユーザーオブジェクトの属性

例：

- もし%ProfileVer%がW2K3に解決されるシステム環境変数である場合、フォルダー`Windows\%ProfileVer%`はユーザー設定をユーザー ストアの`Windows\W2K3`というサブフォルダーに保存します。
- 現在のユーザーに対して`#SAMAccountName#`がJohnSmithに解決される場合、`\\server\share#SAMAccountName#`はユーザー設定をUNCパス`\\server\share\<JohnSmith>`に保存します。

構成の優先順位：

1. パスでは、`%username%`と`%userdomain%`を除くユーザー環境変数を使用できます。この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。
2. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルからの対応する設定が使用されます。
3. ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

アクティブライトバック

アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能を有効にすると、Profile Managementはセッション中にローカルコンピューターで変更されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期します。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルのいずれにもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

アクティブライトバックレジストリ

Profile Managementを有効にして、セッション中にローカルコンピューターで変更されたレジストリエントリをユーザーストアに同期させることができます。このポリシーは、**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定を構成しない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルのいずれにもこの設定を構成しない場合、アクティブライトバックレジストリは無効になります。

セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック

このポリシーと**アクティブライトバック**ポリシーの両方が有効になっている場合、プロファイルファイルとフォルダーは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

このポリシーと**アクティブライトバック**および**アクティブライトバックレジストリ**の両方のポリシーが有効になっている場合、レジストリエントリは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

構成の優先順位:

- ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- ここで、または.iniファイルのいずれにもこの設定が構成されていない場合、このポリシーは無効になります。

オフラインプロファイルサポート

オフラインプロファイル機能を有効にできます。この機能により、プロファイルは可能な限り早くユーザー ストアと同期できます。

この機能は、頻繁にローミングするラップトップまたはモバイルデバイスのユーザーを対象としています。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーがセッションを開始すると、プロファイルはローカルで更新されます。Profile Managementは、ネットワーク接続が復元された後にのみ、プロファイルをユーザー ストアと同期します。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

プロファイル管理\詳細設定

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数を指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、デフォルト値の5回の再試行が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

一部の展開では、`Index.dat`が参照しない余分なインターネットCookieが残ることがあります。継続的なブラウジングの後、ファイルシステムに残された余分なCookieは、プロファイルの肥大化につながる可能性があります。このポリシーを使用すると、Profile Managementを有効にしてIndex.datの処理を強制し、余分なCookieを削除できます。このポリシーはログオフ時間を増加させるため、この問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Index.datの処理は行われません。

自動構成を無効にする

Profile Managementは、Citrix仮想デスクトップ環境（たとえば、パーソナルvDiskの有無など）を検査し、それに応じてグループポリシーを構成します。「未構成」状態のProfile Managementポリシーのみが調整されるため、行ったカスタマイズはすべて保持されます。

このポリシーにより、展開を高速化し、最適化を簡素化できます。このポリシーを構成する必要はありません。ただし、次のいずれかの操作を行うときに自動構成を無効にできます。

- 以前のバージョンからの設定を保持するためにアップグレードする
- トラブルシューティング

自動構成は、実行時に環境に応じてデフォルトのポリシー設定を自動的に構成する動的な構成チェッカーと見なすことができます。これにより、設定を手動で構成する必要がなくなります。ランタイム環境には以下が含まれます。

- ウィンドウズ OS
- Windows OSのバージョン
- Citrix仮想デスクトップの有無
- パーソナルvDiskの有無

環境が変更された場合、自動構成は以下のポリシーを変更する可能性があります。

- アクティブライトバック
- 常にキャッシュする
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する
- キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延
- プロファイルストリーミング

異なるOSにおける上記のポリシーのデフォルトステータスについては、以下の表を参照してください。

	マルチセッションOS	シングルセッションOS
アクティブライトバック	有効	有効
常にキャッシュ	無効	有効

	マルチセッションOS	シングルセッションOS
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	有効	Citrix仮想デスクトップが割り当てられている場合、またはCitrix仮想デスクトップがインストールされていない場合は*無効*。それ以外の場合は有効。
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	0秒	ユーザーの変更が永続的でない場合は60秒。それ以外の場合は0秒。
プロファイルストリーミング	有効	有効
フォルダーのプロファイルストリーミング	有効	有効

ただし、自動構成が無効になっている場合、上記のすべてのポリシーはデフォルトで**無効**になります。

Windows 10、Windows Server 2016、およびWindows Server 2019でスタートメニューのローミングが正しく機能するようにするには、次の手順に従います。

1. 自動構成を有効にするか、**自動構成を無効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
2. Profile Managementのベストプラクティスの記事に記載されている構成手順を完了します。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、自動構成がオンになります。この場合、環境が変更されると、Profile Managementの設定が変更される可能性があります。

問題が発生した場合にユーザーをログオフする

問題が発生した場合にProfile Managementがユーザーをログオフするかどうかを指定できます。

このポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、問題が発生するとProfile Managementはユーザーに一時プロファイルを提供します。たとえば、ユーザーストアが利用できない場合などです。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、エラーメッセージが表示され、ユーザーはログオフされます。この設定により、問題のトラブルシューティングが簡素化されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、一時プロファイルが提供されます。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム

デフォルトでは、カスタマーエクスペリエンス向上プログラムが有効になっており、匿名統計と使用状況データを送信することで、Citrix製品の品質とパフォーマンスの向上に役立てています。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

Outlookの検索インデックスローミングを有効にする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはユーザープロファイルとともにOutlook検索データを自動的にローミングすることで、ユーザーにネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。このポリシーは、Outlookの検索インデックスを保存するために追加のストレージを必要とします。

このポリシーを有効にするには、ログオフしてから再度ログオンしてください。

Outlook検索インデックスデータベース – バックアップと復元

「Outlook の検索インデックスローミングを有効にする」ポリシーが有効になっている場合に、Profile Management がログオン中に何を行うかを指定できます。

このポリシーが有効になっている場合、Profile Management は、ログオン時に検索インデックスデータベースが正常にマウントされるたびに、そのデータベースをバックアップします。Profile Management は、このバックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。データベースの破損が原因で検索インデックスデータベースのマウントが失敗した場合、Profile Management は検索インデックスデータベースを最後に認識された正常なコピーに戻します。

> **注：**
>
> Profile Management は、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは、利用可能なVHDXストレージを消費します。

Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする

Profile Management が、同じユーザーの同時セッションでネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスを提供できるようにします。「Outlook の検索インデックスローミング」ポリシーと組み合わせてこのポリシーを使用します。

このポリシーが有効になっている場合、各同時セッションは個別の Outlook OST ファイルを使用します。

デフォルトでは、Outlook OST ファイルの保存には2つのVHDXディスクのみを使用できます（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始すると、そのOutlook OSTファイルはローカルユーザープロファイルに保存されます。Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数を指定できます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

マルチセッションシナリオでプロファイルコンテナのライトバックを有効にできます。

> **注：**
>
> Citrix Profile Management プロファイルコンテナは、Citrix Profile Management 2103 以降で利用可能です。FSLogix Profile Container は、Citrix Profile Management 2003 以降で利用可能です。
>
> このポリシーが有効になっている場合、すべてのセッションでの変更がプロファイルコンテナにライトバックされます。有効になっていない場合、プロファイルコンテナでは最初のセッションのみが読み取り/書き込みモードであるため、最初のセッションでの変更のみが保存されます。

FSLogix Profile Container でこのポリシーを使用するには、次の前提条件が満たされていることを確認してください。

- FSLogix Profile Container 機能がインストールされ、有効になっていること。
- プロファイルの種類はFSLogixで**読み書きプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されています。

ユーザー ストアのレプリケート

リモートユーザープロファイルストアを、ログオンおよびログオフごとに複数のパスにレプリケートできます。これにより、Profile Managementはユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供できます。

このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフ時間が長くなる可能性があります。

注:

- この機能は、ユーザー ストアとフル プロファイル コンテナの両方で利用できます。
- レプリケートされたプロファイルコンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェールオーバーには対応していません。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にできます。

デフォルトでは、Citrix Profile Managementは現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。そのため、現在のユーザーがユーザー ストアにアクセスする権限を持っている必要があります。状況によっては、現在のユーザーがアクセス権を持たないストレージリポジトリ（Azure Filesなど）にユーザー ストアを配置したい場合があります。そのような場合は、このポリシーを有効にして、Profile Managementがストレージリポジトリの資格情報を使用してユーザーストアにアクセスできるようにします。

Profile Managementが資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、資格情報をWorkspace Environment Management™ (WEM) またはWindows資格情報マネージャーに保存します。Profile Managementを実行している各マシンで同じ資格情報を構成する必要をなくすために、Workspace Environment Managementを使用することをお勧めします。Windows資格情報マネージャーを使用する場合は、ローカルシステムアカウントを使用して資格情報を安全に保存してください。

注:

このポリシーは、ファイルベースとVHDXベースの両方のユーザー ストアで利用できます。Profile Managementバージョン2212より前のバージョンでは、このポリシーはVHDXベースのユーザー ストアでのみ利用できます。

> 構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

VHDXファイルの保存パスを指定する

Profile Managementで使用されるVHDXファイルを保存するためのストレージパスを指定できます。

Citrix Profile Managementは、以下のVHDXベースのポリシーを提供します: ネイティブOutlook検索エクスペリエンスの有効化、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ、およびフォルダミラーリングの高速化。デフォルトでは、VHDXファイルはユーザーストアに保存されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする

このポリシーを有効にすると、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。

このポリシーが有効な場合、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーによって使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ログオン時にユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに2つの処理モードを提供します: 同期と非同期です。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングしません。したがって、ユーザーが以下の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません:

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

このポリシーを有効にすると、レジストリ値はユーザーとともにローミングします。その結果、ユーザーがログオンするたびに処理モードが適用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

VHDディスクの圧縮を有効にするが有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率を指定できます。ユーザーがログオフするときに空き領域の比率が指定された値を超えると、ディスクの圧縮がトリガーされます。

空き領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

* Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の20 (%)が使用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスクの圧縮を有効にするが有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーするユーザーログオフ回数を指定できます。

前回の圧縮以降のログオフ回数が指定された値に達すると、ディスクの圧縮が再度トリガーされます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の5が使用されます。

VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスクの圧縮を有効にするが有効な場合に適用されます。VHDディスク圧縮のファイルデフラグを無効にするかどうかを指定できます。

VHDディスクの圧縮が有効になっている場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用して自動的にデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスク

のデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveフォルダーをユーザーとともにローミングできるようにします。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

Profile Management\Citrix Virtual Apps最適化設定

Citrix Virtual Apps™最適化を有効にする

この機能を有効にすると、ユーザーが起動または終了する公開アプリケーションに固有の設定のみが同期されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Citrix Virtual Appsの最適化設定は適用されません。

Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス

Citrix Virtual Apps最適化の定義ファイルを保存するフォルダーを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Citrix仮想アプリの最適化設定は適用されません。

> **注:**

> フォルダーはローカルストレージまたはSMBファイル共有に配置できます。

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

クロスプラットフォーム設定を有効にする

クロスプラットフォーム設定を有効にします。クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行には、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。

デフォルトでは、展開を容易にするために、クロスプラットフォーム設定は無効になっています。このポリシーは、この機能の十分な計画とテストを行った後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ

クロスプラットフォーム設定機能が適用されるWindowsユーザーグループを指定できます。たとえば、このポリシーを使用して、テストユーザーグループのプロファイルのみを処理できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが構成されている場合、Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、この機能は、 ポリシーで指定されたすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

クロスプラットフォーム定義へのパス

定義ファイルが格納されているネットワークの場所を指定できます。

このパスは UNC パスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ストアへのパス

クロスプラットフォーム設定ストアへのパスを指定できます。ストアとは、ユーザーのクロスプラットフォーム設定が保存されるフォルダーを指します。

このストアは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが格納されているユーザーストア内にあります。ユーザーはストアへの書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは絶対 UNC パスでも、ホームディレクトリからの相対パスでもかまいません。**ユーザーストアへのパス**で使用される変数を使用できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、`Windows\PM_CP` パスが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値が使用されます。

クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース

このポリシーがそのプラットフォームのOUで有効になっている場合、プラットフォームをベースプラットフォームとして指定できます。このポリシーは、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。デフォルトでは、このポリシーは無効になっています。

各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードとして使用するベースプラットフォームとして、どのプラットフォームのプロファイルデータを使用するかを決定します。

このポリシーが有効になっている場合、次のいずれかの状況が発生すると、Profile Management はシングルプラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。

- クロスプラットフォーム設定ストアに、データのない定義ファイルが含まれている。
- シングルプラットフォームプロファイルのキャッシュデータが、ストア内の定義データよりも新しい。

> **重要:**
>
> このポリシーが複数のOU、ユーザーオブジェクト、またはマシンオブジェクトで有効になっている場合、最初のユーザーがログオンするプラットフォームがベースプロファイルになります。

プロファイル管理\ファイルシステム

除外リスト - ファイル

Profile Managementが同期中に無視するファイルを指定できます。ファイル名はユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスである必要があります。ワイルドカードが許可されており、再帰的に適用されます。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は、`Desktop` フォルダー内の `Desktop.ini` ファイルを無視します。
- `%USERPROFILE%*.tmp` は、プロファイル全体で `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
- `AppData\Roaming\MyApp*.tmp` は、プロファイルの一部にある `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ

Profile Management が同期中に無視するディレクトリのデフォルトリストを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ディレクトリを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。

2. このポリシーをここで構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。
3. このポリシーをここでも .ini ファイルでも構成しない場合、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。

除外リスト - ディレクトリ

Profile Management が同期中に無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスとして指定する必要があります。

例:

- Desktop はユーザープロファイル内の Desktop フォルダーを無視します

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、除外されるフォルダーはありません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、除外されるフォルダーはありません。

ログオン除外チェック

ユーザーストア内のプロファイルに除外されたファイルまたはフォルダーが含まれている場合に、Profile Managementが何を行うかを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっているか、デフォルト値の**除外されたファイルまたはフォルダーを同期する**に設定されている場合、ユーザーがログオンすると、Profile Managementはそれらの除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。
2. この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを無視する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを無視します。この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを削除します。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。

ラージファイル処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル

シンボリックリンクとして作成されるファイルを指定できます。この設定は、ログオンパフォーマンスを向上させ、大容量ファイルを処理するために使用されます。

ファイルを参照するポリシーではワイルドカードを使用できます。例: `!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.OST`。

オフラインOutlookデータファイル (`*.ost`) を処理するには、**Outlook**フォルダーがProfile Managementで除外されていないことを確認してください。

これらのファイルは、複数のセッションで同時にアクセスすることはできません。

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

同期するディレクトリ

親フォルダーが除外されている場合に、プロファイル管理で同期するフォルダーを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。

プロファイル管理は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。ユーザープロファイルのサブフォルダーをこのリストに追加して含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。

同期するファイル

親フォルダーが除外されている場合に、プロファイル管理で同期するファイルを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。ワイルドカードはファイル名とフォルダー名で使用できます。ただし、ワイルドカードはファイル名でのみ再帰的に適用されます。

例:

- AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat は、デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
- AppData\Local\MyApp*.cfg は、プロファイルフォルダー AppData\Local\MyApp とそのサブフォルダー内の拡張子 .cfg を持つすべてのファイルを指定します。

Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザー プロファイルに含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザー プロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。

ミラーリングするフォルダー

このポリシーは、トランザクション フォルダー (参照フォルダーとも呼ばれます) に関連する問題を解決するのに役立ちます。この種のフォルダーには、相互に依存するファイルが含まれており、あるファイルが他のファイルを参照しています。

このポリシーを使用すると、Profile Management は、ユーザー プロファイルを同期する際に、トランザクション フォルダーとその内容を単一のエンティティとして処理します。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダー ミラーリングの高速化

このポリシーと **ミラーリングするフォルダー** ポリシーの両方が有効になっている場合、Profile Management はミラーリングされたフォルダーを VHDX ベースの仮想ディスクに保存します。ログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチします。このポリシーを有効にすると、ユーザー ストアとローカル プロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなり、フォルダー ミラーリングが高速化されます。

プロファイル管理\ファイル重複排除

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイル間に同一のファイルが存在する可能性があります。ユーザー ストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージ コストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらの単一インスタンスを中央の場所 (*共有ストア* と呼ばれる) に保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージ コストが節約されます。

重複排除のために共有ストアに含めるファイル

ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定できます。

共有ストアから除外するファイル

共有ストアから除外するファイルを指定できます。このポリシーは、*重複排除のために共有ストアに含めるファイル* ポリシーと組み合わせて使用します。

プロファイル管理\ログ設定

ログ記録を有効にする

Profile Management のログ記録を有効にするかどうかを指定できます。このポリシーは、Profile Management のトラブルシューティングを行う場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、エラーのみがログに記録されます。このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、エラーのみがログに記録されます。

ログ設定

Profile Management がログに記録するイベントまたはアクションを選択できます。Citrix の担当者から指示された場合にのみ、すべてを選択してください。

構成の優先順位:

1. ここでポリシーが構成されていない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。

2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、エラーと一般情報がログに記録されます。

このポリシーのチェックボックスは、.ini ファイルの次の設定に対応しています: LogLevelWarnings, LogLevelInformation, LogLevelFileSystemNotification, LogLevelFileSystemActions, LogLevelRegistryActions, LogLevelRegistryDifference, LogLevelActiveDirectoryActions, LogLevelPolicyUserLogon, LogLevelLogon, LogLevelLogoff, および LogLevelUserName。

ログファイルの最大サイズ

Profile Management ログファイルの最大サイズをバイト単位で指定できます。

Profile Management ログファイルの最大サイズの既定値は 10 MB です。十分なディスク容量がある場合は、この値を増やしてください。ログファイルが最大サイズを超えて大きくなった場合、次のようになります。

1. 既存のファイルのバックアップ (.bak) が削除されます。
2. ログファイルは .bak に名前が変更されます。
3. 新しいログファイルが作成されます。

ログファイルは `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager` または **ログファイルのパス** ポリシーで指定された場所に作成されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、既定値の 10 MB が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既定値が使用されます。

ログファイルのパス

ログファイルを保存するための代替パスを設定できます。

パスはローカルドライブまたはネットワークベースのドライブ（UNCパス）を指すことができます。

- 大規模な分散環境ではリモートドライブが推奨されます。ただし、ログファイルには適さない可能性のある、かなりのネットワークトラフィックを生成する可能性があります。
- ローカルドライブは、永続的なハードドライブを持つプロビジョニングされた仮想マシンでよく使用されます。

この設定により、マシンの再起動時にログファイルが保持されます。永続的なハードドライブを持たない仮想マシンの場合、UNCパスを設定することでログファイルを保持できます。ただし、マシンのシステムアカウントはUNC共有への書き込みアクセス権を持っている必要があります。オフラインプロファイル機能によって管理されるラップトップには、ローカルパスを使用してください。

ログファイルにUNCパスを使用する場合、Citrixはログファイルフォルダに適切なアクセス制御リストを適用することを推奨します。アクセス制御により、承認されたユーザーまたはコンピューターアカウントのみが保存されたファイルにアクセスできるようになります。

例:

- D:\LogFiles\ProfileManagement。
- \\server\LogFiles\ProfileManagement

ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトの場所 %SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager が使用されます。

プロファイル管理\プロファイルコンテナ設定

プロファイルコンテナ

VHDXベースのネットワークディスク（プロファイルコンテナ）を使用してユーザープロファイルを保存できます。ユーザープロファイル全体または一部を保存するために使用できます。ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナはユーザー環境にマウントされ、プロファイルフォルダはすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にできます。このポリシーは、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ適用されます。

ポリシーが**有効**に設定されている場合、各ローカルプロファイルは、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのローカルキャッシュとして機能します。プロファイルストリーミングが使用されている場合、ローカルにキャッシュされたファイルはオンデマンドで作成されます。そうでない場合、それらはユーザーログオン時に作成されます。

プロファイルコンテナから除外するフォルダー

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するフォルダーを指定できます。

プロファイルコンテナに含めるフォルダー

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ内に保持するフォルダーを指定できます。

このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

プロファイルコンテナに含めるファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナに含めるファイルを指定できます。

このリストのファイルは、除外されたフォルダー内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

プロファイルコンテナから除外するファイル

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナから除外するファイルを指定できます。

VHDディスクの圧縮を有効にする**

Profile ManagementのVHDディスク圧縮を有効にできます。有効にすると、特定の条件が満たされたときに、VHDディスクはユーザーログオフ時に自動的に圧縮されます。このポリシーにより、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびミラーフォルダーコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

必要に応じて、および利用可能なリソースに応じて、詳細設定にある**VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**、**VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**、および**VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする**ポリシーを使用して、デフォルトのVHD圧縮設定と動作を調整できます。

設定の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

プロファイル マネジメント\プロファイルの処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

ログオフ後にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するかどうかを指定できます。

このポリシーが有効な場合、ユーザーのログオフ後にユーザーのローカルプロファイルキャッシュが削除されます。この設定はターミナルサーバーに推奨されます。このポリシーが無効な場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

> **注:**
>
> キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延ポリシーを使用して、ログオフ時にプロファイルキャッシュが削除されるタイミングを制御できます。

> 設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルが削除されるまでの遅延に、オプションの延長を指定できます。プロセスがログオフ中にファイルまたはユーザーレジストリハイブを開いたままにしていることがわかっている場合、遅延を延長することは役立ちます。大規模なプロファイルの場合、この設定はログオフを高速化することもできます。

値が0の場合、ログオフプロセスの終了時にプロファイルがすぐに削除されます。

Profile Management は毎分ログオフをチェックします。値が 60 の場合、最後のチェックがいつ行われたかによって、ユーザーのログオフ後 1 分から 2 分の間にプロファイルが削除されることが保証されます。

重要: このポリシーは、ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する設定が有効になっている場合にのみ機能します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、プロファイルはすぐに削除されます。

既存のプロファイルの移行

ユーザーストアが空の場合に、Profile Management がどの種類のユーザープロファイルをユーザーストアに移行するかを指定できます。

ユーザーがユーザーストアにプロファイルを持っていない場合、Profile Management はログオン時に既存のプロファイルを「オンザフライ」で移行できます。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、**ローミング**を選択します。

ログオン中に次のイベントが発生します。ユーザーがユーザーストアに Citrix ユーザープロファイルではなく Windows プロファイルを持っている場合、Profile Management は Windows プロファイルをユーザーストアに移行します。このプロセス後、Profile Management は、同じユーザーストアへのパスで構成された現在のセッションおよびその他のセッションでユーザーストアプロファイルを使用します。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、プロファイルの移行は、ローミングプロファイルとローカルプロファイル（デフォルト）、ローミングプロファイルのみ、ローカルプロファイルのみに対してアクティブ化できます。または、プロファイルの移行を無効にすることもできます。
2. このポリシーが無効になっており、ユーザーストアに Citrix ユーザープロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存の Windows メカニズムが使用されます。
3. プロファイルの移行が無効になっており、ユーザーストアに Citrix ユーザープロファイルが存在しない場合、プロファイルを作成するための既存の Windows メカニズムが使用されます。
4. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
5. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Profile Management は既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルをユーザーストアに移行します。

既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

この設定は、異なるオペレーティングシステム間での既存のアプリケーションプロファイルの自動移行を有効または無効にします。アプリケーションプロファイルには、**AppData** フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE` の下のレジストリエントリの両方が含まれます。この設定は、異なるオペレーティングシステム間でアプリケーションプロファイルを移行したい場合に役立ちます。

例えば、オペレーティングシステム (OS) をWindows 10バージョン1803からWindows 10バージョン1809にアップグレードする必要があるとします。この設定が有効になっている場合、各ユーザーが最初にログオンするときに、Profile Managementは既存のアプリケーション設定をWindows 10バージョン1809に自動的に移行します。**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリが移行されます。

既存のアプリケーションプロファイルが複数ある場合、Profile Managementは次の優先順位で移行を実行します。

1. 同じOSタイプのプロファイル（シングルセッションOSからシングルセッションOS、マルチセッションOSからマルチセッションOS）。
2. 同じWindows OSファミリーのプロファイル（例：Windows 10からWindows 10、またはWindows Server 2016からWindows Server 2016）。
3. 以前のバージョンのOSのプロファイル（例：Windows 7からWindows 10、またはWindows Server 2012からWindows 2016）。
4. 最も近いOSのプロファイル。

> **注：**
>
> ユーザーストアパスに`!CTX_OSNAME!`変数を指定して、OSの短い名前を指定する必要があります。これにより、Profile Managementは既存のアプリケーションプロファイルを特定できます。

> ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。

この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

ローカルプロファイルの競合処理

ユーザーストア内のプロファイルとローカルのWindowsユーザープロファイル（Citrixユーザープロファイルではない）の両方が存在する場合に、Profile Managementがどのように動作するかを指定できます。

構成の優先順位：

1. このポリシーが無効になっているか、デフォルト値の**ローカルプロファイルを使用**に設定されている場合、Profile Managementはローカルプロファイルを使用しますが、それを一切変更しません。
2. このポリシーが**ローカルプロファイルを削除**に設定されている場合、Profile Managementはローカルのwindowsユーザープロファイルを削除します。そして、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。このポリシーが**ローカルプロファイルの名前を変更**に設定されている場合、Profile Managementはローカルのwindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的で）、ユーザーストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

3. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

テンプレートプロファイル

テンプレートとして使用するプロファイルの保存パスを指定できます。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートプロファイルに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーの完全パスです。

重要: パス設定に`NTUSER.DAT`を含めないでください。たとえば、`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`ファイルの場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。 UNCパスまたはローカルコンピューター上のパスである絶対パスを使用します。後者は、たとえば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージにテンプレートプロファイルを永続的に指定するために使用できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、テンプレートは使用されません。
2. このポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、ユーザープロファイルを作成するときに、ローカルのデフォルトプロファイルの代わりにテンプレートを使用します。ユーザーにCitrixユーザープロファイルがないが、ローカルまたは移動Windowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、このポリシーが無効になっていない場合、ローカルプロファイルはユーザーストアに移行されます。この設定は、**Template profile overrides local profile**または**Template profile overrides roaming profile**チェックボックスを有効にすることで変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別することは、Windows強制プロファイルと同様に、変更が保存されないことを意味します。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートは使用されません。

プロファイル管理\レジストリ

除外リスト

ログオフ時にProfile Managementが無視するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Policies

構成の優先順位:

- このポリシーが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。
- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

インクルージョンリスト

ログオフ時にProfile Managementが処理するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Adobe。

構成の優先順位:

1. このポリシーが有効になっている場合、このリストのキーのみが処理されます。このポリシーが無効になっている場合、HKCUハイブ全体が処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKCUのすべてが処理されます。

デフォルトの除外リストを有効にする - Profile Management 5.5

Profile Managementがユーザープロファイルに同期しないHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ファイルを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。
2. ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。
3. ここで、または.iniファイルでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。

NTUSER.DATのバックアップ

NTUSER.DATの最後に確認された正常なコピーのバックアップを有効にし、破損が発生した場合にロールバックできるようにします。

ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。ここで、または.iniファイルでこのポリシーを構成しない場合、Profile ManagementはNTUSER.DATをバックアップしません。

プロファイル管理\アプリのアクセス制御

ファイル、フォルダー、およびレジストリへのアクセスを制御できます。

アプリのアクセス制御

有効にすると、Profile Managementは、提供されたルールに基づいて、項目（ファイル、フォルダー、レジストリなど）へのユーザーアクセスを制御します。

アプリケーションルールを作成するには、次の方法を使用します。

- GUIベースのツール – **WEM Tool Hub > アプリケーションアクセス制御用ルールジェネレーター**
- PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージで利用可能

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここで、または.iniファイルでこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

プロファイル管理\ストリーミングユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

プロファイルストリーミング機能を有効にします。この機能を有効にすると、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチされます。`NTUSER.DAT` ファイルと保留領域にあるファイルは例外です。これらはすぐにフェッチされます。NTUSER.DAT にはレジストリエントリが保存されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする

ユーザープロファイル内のフォルダーのプロファイルストリーミング機能を有効にします。

このポリシーと**プロファイルストリーミング**ポリシーの両方が**有効**に設定されている場合、ユーザープロファイル内のフォルダーは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチされます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

常にキャッシュ

ログオン直後にユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチされるファイルのサイズの最小制限を指定できます。

プロファイルストリーミング機能が有効になっている場合、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにローカルコンピューターにフェッチされます。このオンデマンドファイルフェッチメカニズムは、ユーザーが要求するファイルが大きい場合に読み込みが遅くなる原因となります。このポリシーを有効にすると、Profile Management は、指定されたサイズより大きいファイルをログオン直後にローカルコンピューターにフェッチします。

ログオン直後にプロファイル全体をローカルコンピューターにフェッチするには、この制限をゼロに設定します。

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

保留領域ロックファイルのタイムアウト

Profile Management がユーザーのファイルを解放するまでのタイムアウト期間 (日数) を指定できます。タイムアウトが発生すると、ストレージサーバーが応答しなくなったときにユーザー ストアがロックされたままである場合、ユーザーのファイルは保留領域からユーザー ストアに書き込まれます。このポリシーを使用して、保留領域の肥大化を防ぎ、ユーザー ストアに常に最新のファイルが含まれるようにします。

設定の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の1日が使用されます。

ストリーミングされたユーザープロファイルグループ

ユーザープロファイルがストリーミングされるWindowsユーザーグループを指定できます。

このポリシーは、OU内のWindowsユーザーグループのサブセットのプロファイルをストリーミングします。他のすべてのグループのユーザーのプロファイルはストリーミングされません。

設定の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。

プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ

プロファイルストリーミングが無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイルに対する相対パスとして指定する必要があります。

例: `Desktop` と入力すると、ユーザープロファイル内の `Desktop` ディレクトリが無視されます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

> **注:**
>
> プロファイルストリーミングの除外は、構成されたフォルダーがプロファイル処理から除外されることを意味しません。Citrix Profile Managementは引き続きそれらを処理します。

保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする

保留領域内のファイルおよびフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

保留領域は、プロファイルストリーミングが有効になっている間、プロファイルの一貫性を確保するために使用されます。同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。

デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、保留領域内のすべてのファイルとフォルダーはログオン時にローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーを有効にすると、保留領域内のファイルは要求されたときにのみローカルプロファイルにフェッチされます。同時セッションシナリオで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、このポリシーをプロファイルストリーミングポリシーと組み合わせて使用します。

このポリシーは、「フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする」ポリシーが有効になっている場合に、保留領域内のフォルダーに適用されます。

Profile Management\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイルに一般的に表示されるフォルダーをリダイレクトするかどうか、およびリダイレクトターゲットを指定できます。ターゲットは、UNCパス (サーバー共有またはDFS名前空間の場合) またはユーザーのホームディレクトリに対する相対パスとして指定します。ホームディレクトリは通常、Active Directoryの`#homeDirectory#`属性で構成されます。

ここでポリシーが構成されていない場合、Profile Management は指定されたフォルダーをリダイレクトしません。

> **注:**
>
> フォルダーリダイレクトにUNCパスを使用する場合、#homedirectory#変数はサポートされません。**ユーザーのホームディレクトリにリダイレクト**ポリシーを選択した後、パスを指定する必要はありません。

> `<folder-name>`フォルダーのリダイレクトポリシーでは、`<folder-name>`フォルダーをリダイレクトする方法を指定できます。これを行うには、**有効**を選択し、リダイレクトされたパスを入力します。

> **注意:**
>
> データ損失が発生する可能性があります。

> ポリシーが有効になった後でパスを変更したい場合があります。ただし、変更する前にデータ損失の可能性を考慮してください。変更されたパスが以前のパスと同じ場所を指している場合、リダイレクトされたフォルダーに含まれるデータが削除される可能性があります。

たとえば、連絡先パスを`path1`として指定します。その後、`path1`を`path2`に変更します。`path1`と`path2`が同じ場所を指している場合、ポリシーが有効になった後、リダイレクトされたフォルダーに含まれるすべてのデータが削除されます。

データ損失の可能性を回避するには、次の手順を実行します。

1. Active Directoryグループポリシーオブジェクトを介してProfile Managementが実行されているマシンにMicrosoftポリシーを適用します。詳細な手順は次のとおりです。
    a. グループポリシー管理コンソールを開きます。
    b. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Windows コンポーネント > エクスプローラー**に移動します。
    c. **リダイレクトする前に、古いフォルダーリダイレクトターゲットと新しいフォルダーリダイレクトターゲットが同じ共有を指していることを確認する**を有効にします。
2. 該当する場合、Profile Managementが実行されているマシンに修正プログラムを適用します。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/977229>`および`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2799904>`を参照してください。

統合

プロファイル管理と Citrix Virtual Apps™

Citrix Virtual Appsサーバーでこのバージョンの Profile Management を使用するには、Profile Management EULAに従う必要があります。また、Profile Managementをローカルデスクトップにインストールして、ユーザーがローカルプロファイルを公開リソースと共有できるようにすることもできます。

注： Profile ManagementはCitrix Virtual Desktops™環境では自動的に構成されますが、Citrix Virtual Apps環境では構成されません。Citrix Virtual Apps展開のProfile Management設定を調整するには、グループポリシーまたは.iniファイルを使用してください。

Profile Managementは、Remote Desktop Services（以前はTerminal Servicesとして知られていました）を使用するCitrix Virtual Apps環境で動作します。これらの環境では、サポートされている各オペレーティングシステムに対してOUを設定する必要があります。詳細については、Microsoftのドキュメントを参照してください。

異なるバージョンのCitrix Virtual Appsを含むファーム、または異なるオペレーティングシステムを実行するファームでは、Citrixは、各バージョンまたはオペレーティングシステムを実行するサーバーごとに個別のOUを使用することを推奨します。

重要：複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、Citrix Virtual Appsで公開された共有アプリケーションデータを含むフォルダー）の包含および除外はサポートされていません。

ストリーミングアプリケーション

Profile Managementは、アプリケーションがユーザーデバイスに直接ストリーミングされる環境、またはCitrix Virtual Appsサーバーにストリーミングされ、そこからユーザーに公開される環境で使用できます。

Citrix Virtual Appsのクライアント側アプリケーション仮想化テクノロジーは、アプリケーションを自動的に分離するアプリケーションストリーミングに基づいています。アプリケーションストリーミング機能により、アプリケーションをCitrix Virtual Appsサーバーおよびクライアントデバイスに配信し、保護された仮想環境で実行できます。ユーザーにストリーミングされるアプリケーションを分離する理由は多数あり、たとえば、アプリケーションの競合を防ぐためにユーザーデバイス上でアプリケーションがどのように相互作用するかを制御する機能などがあります。たとえ

ば、同じアプリケーションの異なるバージョンが存在する場合、ユーザー設定の分離が必要です。Microsoft Office 2003がローカルにインストールされ、Office 2007がユーザーのデバイスにストリーミングされる場合があります。ユーザー設定の分離に失敗すると、競合が発生し、両方のアプリケーション（ローカルおよびストリーミング）の機能に深刻な影響を与える可能性があります。

ストリーミングアプリケーションでのProfile Managementの使用に関する要件については、システム要件を参照してください。

プロファイル管理とCitrix Virtual Desktops™

重要: Citrix Virtual Desktops に統合されている Profile Management 機能を使用することをお勧めします。詳細については、 Citrix Virtual Desktops のドキュメント を参照してください。このトピックの情報は、別の展開、つまり Profile Management コンポーネントが個別にインストールおよび構成されている Citrix Virtual Desktops の使用に適用されます。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management のインストールとアップグレード

このバージョンの Profile Management を Citrix Virtual Desktops で使用するには、Profile Management EULA に従う必要があります。EULA の条項に従い、Citrix Virtual Desktops 環境で Citrix Virtual Apps™ と Profile Management を使用することもできます。

Citrix Virtual Desktops 展開で Profile Management をアップグレードする場合は、Profile Management のアップグレード で説明されているログファイルの場所への影響を考慮してください。

Quick Deploy セットアップの Citrix Virtual Desktops については、構成の決定 の推奨事項を参照してください。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management の構成

イメージが展開される前に Profile Management が正しく構成されていない場合、グループポリシーが適用される前に Profile Management サービスが開始されます。これを回避するには、イメージを本番環境に投入する前に、文書化された手順を使用して構成を実行してください。

重要: 複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、複数の仮想デスクトップで共有できるデータを含むフォルダー）の包含と除外はサポートされていません。

Personal vDisk 展開での Profile Management の構成

Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用する場合、Citrix ユーザープロファイルはデフォルトで仮想デスクトップのパーソナル vDisk（通常は P: ドライブ）に保存されます。プロファイルはユーザーの C: ドライブには保存されません。しかし、Profile Management はプロファイルを C: ドライブにあると想定しています。そのため、Virtual Delivery Agent のインストールまたはアップグレード中に、マスターイメージのレジストリを変更する必要があります。さらに、Personal vDisk のスペースを解放したため、マスターイメージ上のアプリケーションのデフォルトのディスクスペース割り当てを増やすことも良い習慣です。これらの変更の手順については、Citrix Virtual Desktops の管理ドキュメントを参照してください。

Personal vDisk にコピーが残っている間に、ユーザーストア内のプロファイルのコピーを削除しないでください。削除すると、Profile Management エラーが発生し、仮想デスクトップへのログオンに一時プロファイルが使用されます。詳細については、一般的な問題のトラブルシューティングの「ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る」を参照してください。

ウィンドウズ アプリ - マイクロソフトストア

Citrix Virtual Desktops 環境では、Microsoft Store のアプリケーション（UWP アプリとも呼ばれます）がサポートされています。プールされたマシン（プールランダム、静的、または RDS）で Microsoft Store アプリケーションを使用するには、グループポリシー管理エディターを開き、**ポリシー \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート (ADM) \> Citrix \> Profile Management \> ファイルシステム \> 同期** で次の設定を構成します。

- ミラーリングするフォルダーを有効にし、`appdata\local\packages` をミラーリングするフォルダーのリストに追加します。
- 同期するファイルを有効にし、同期するファイルのリストに `!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*` を追加します

ユーザーがパーソナルvDisk (推奨ソリューション) を使用して専用デスクトップにアクセスし、そのプロファイルがすでに別のデスクトップで作成されている場合、Microsoft Store アプリケーションが動作しない可能性があります。

Citrix Virtual Desktops の設定例

このトピックでは、一般的な Citrix Virtual Desktops 展開で使用される Profile Management ポリシー設定を一覧表示します。Windows 7 仮想デスクトップは Citrix Provisioning™ Services で作成され、複数のユーザーで共有されます。この例では、プールされたランダムカタログから作成され、ログオフ時に削除されるデスクトップは、静的ワークステーション (モバイルノートPCではない) での使用を目的としており、パーソナルvDisk は使用されません。

ポリシーがリストされていない場合、グループポリシーで選択または入力が行われておらず、デフォルト設定が適用されます。

以下に注意してください。

- **ユーザーストアへのパス** - Profile Management 変数をユーザーストアへのパスに組み込むことができます。この例では、パスが解釈されるときにそれぞれ Win7 と x86 に展開される \!CTX_OSNAME\! と \!CTX_OSBITNESS\! を使用しています。AD 属性 #sAMAccountName# もユーザー名を指定するために使用されます。
- **ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する** - このポリシーを無効にしても安全です。デスクトップにはパーソナルvDiskが含まれておらず、ユーザーがログオフすると削除されるためです。したがって、ローカルにキャッシュされたプロファイルを保持する必要はありません。(ログオフ時にデスクトップが破棄されない場合は、このポリシーを有効にしてください。)
- **プロファイルストリーミング** - この設定を有効にすると、この展開でのログオン時間が改善されます。
- **アクティブライトバック** - このポリシーは、この展開のプールされたデスクトップがユーザーに一時的に割り当てられるため、有効になっています。そのため、ユーザーはプロファイルを変更しても、デスクトップセッションを閉じるのを忘れる (または気にしない) 可能性があります。この設定を有効にすると、プロファイル内のローカルファイルの変更がログオフ前にユーザーストアにミラーリングされます。

注: アクティブライトバックポリシーを有効にすると、セッション内で多数のファイル操作 (ファイルの作成、ファイルのコピー、ファイルの削除など) を実行すると、高いシステム I/O アクティビティが発生し、Profile Management がファイルの変更をユーザーストアに同期している間、一時的なパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

- **ローカル管理者のログオンを処理する** - この設定を有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者である Citrix Virtual Desktops 展開で推奨されます。
- **処理されるグループ** - すべてのドメインユーザーのプロファイルは Profile Management によって管理されます。
- **除外リスト - ディレクトリ** (ファイルシステム) および **除外リスト** (レジストリ) - これらの設定は、リストされた一時ファイルまたはキャッシュファイル、およびリストされたレジストリエントリが処理されるのを防ぎます。これらのファイルとエントリは、一般的にユーザープロファイルに保存されます。
- **同期するディレクトリ** および **同期するファイル** - ユーザーのアプリケーションデータがどこに保存されているかを知ることで、これらの設定を定義するのに役立ちました。

重要: Citrix Virtual Desktopsの展開は様々であるため、お客様が決定するプロファイル管理ポリシー設定は、この例の設定とは異なる場合があります。 設定を計画するには、構成の決定のアドバイスに従ってください。

Citrix/プロファイル管理

プロファイル管理を有効にする

> 有効

処理されたグループ

> MyDomainName\\ドメインユーザー

ユーザー ストアへのパス

> \\\\MyServer.MyDomain\\MyUserStore\\#sAMAccountName#\\\!CTX_OSNAME\!_\!CTX_OSBITNESS\!

アクティブ ライトバック

> 有効

ローカル管理者のログオンを処理する

> 有効

Citrix/プロファイル管理/プロファイル処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

> 無効

Citrix/Profile Management/詳細設定

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

> 有効

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム

除外リスト - ディレクトリ

```
$Recycle.Bin


AppData\\ローカル\\Microsoft\\Windows\\一時インターネットファイル


AppData\\Local\\Microsoft\\Outlook


AppData\\Local\\Temp


AppData\\LocalLow


AppData\\ローミング\\Microsoft\\Windows\\スタートメニュー


AppData\\Roaming\\Sun\\Java\\Deployment\\cache


AppData\\Roaming\\Sun\\Java\\Deployment\\log


AppData\\Roaming\\Sun\\Java\\Deployment\\tmp
```

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム/同期

同期対象ディレクトリ

```
AppData\\Microsoft\\Windows\\スタートメニュー\\プログラム\\ダズルアプリ
```

ミラーリング対象フォルダー

```
AppData\\Roaming\\Microsoft\\Windows\\Cookies
```

Citrix/プロファイル管理/ストリーム配信ユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

```
有効
```

プロファイル管理とUE-V

プロファイル管理 5.x と Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) 2.0 は、同じ環境で共存できます。UE-V は、複数のプロファイルバージョンが存在する場合 (たとえば、バージョン1とバージョン2のプロファイル) に役立ちます。このため、UE-V が存在する場合は、Citrix Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能を使用しないでください。UE-V は、より多くのアプリケーション、ユーザーセッション中の同期、およびアプリケーションの XML 構成と生成をサポートするため、その機能よりも優先される場合があります。

プロファイル管理が UE-V と共存する場合、クロスプラットフォーム設定機能が有効になっているかどうかにかかわらず、次のようになります。

- `AppData\Local\Microsoft\UEV` フォルダーを除外します。UE-V によってキャプチャされたプロファイル設定は、プロファイル管理によってキャプチャされたプロファイル設定を上書きします。
- UE-V によって制御されるプロファイルを、プロファイル管理のみによって制御されるプロファイルと共有しないでください。共有すると、「最後の書き込みが優先されます」。つまり、プロファイルを同期する最後のコンポーネント (UE-V またはプロファイル管理) が、どのデータが保存されるかを決定し、これによりデータ損失につながる可能性があります。

注: UE-V には Microsoft Desktop Optimization Pack (MDOP) が必要です。

プロファイル管理とCitrix Content Collaboration™

この記事の情報は、Citrix Content Collaborationの展開におけるProfile Managementの使用に適用されます。その一部は、他のインターネットベースのファイル共有システムにも役立つ場合があります。

Profile Management 4.1.2以降でCitrix Content Collaborationを使用できます。Citrix Content Collaborationは、オンデマンドモードでのみサポートされています。

インストール

ShareFile 2.7を使用している場合、互換性の問題を回避するために、Profile Managementをインストールする前にこのバージョンをインストールしてください。このインストール依存関係はShareFile 2.6には存在しません。

除外

Citrix Content Collaborationは、構成データをローカルの`\AppData\Roaming\ShareFile`フォルダーに保存します。Citrixユーザープロファイルを持つユーザーの場合、ユーザー固有のCitrix Content Collaboration構成が永続化されるように、このデータはユーザープロファイルとともにローミングする必要があります。この`ShareFile`フォルダーはプロファイルの一部であるため、Profile Managementの構成は不要です。構成データはデフォルトでローミングされます。

ただし、Citrix Content Collaborationによって管理されるユーザーデータは、プロファイルのルートにある`ShareFile`フォルダー（`%USERPROFILE%\ShareFile`）に含まれています。このデータは、Citrix Content Collaborationサーバーによって管理および同期されるため、プロファイルとともにローミングしてはなりません。したがって、このフォルダーをProfile Managementの除外対象として追加する必要があります。除外設定の手順については、「項目の包含と除外」を参照してください。

パーソナル vDisk

Personal vDiskを使用して仮想デスクトップを作成する場合、vDisk上のユーザーデータの場所でCitrix Content Collaborationを構成します。これにより、デスクトップとCitrix Content Collaborationサーバー間でファイル同期が行われるようになります。デフォルトでは、Personal vDiskはデスクトップ上でP:ドライブとしてマッピングされるため、データは`P:\Users\<user`name\>に配置される可能性があります。この場合、Citrix Content CollaborationのLocalSyncFolderポリシーを使用して場所を設定します。

重要: Profile ManagementおよびPersonal vDiskのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性のある不要な同期を防ぐため、仮想デスクトップで同期する必要がない限り、大きなファイルを含むフォルダーには**Folder-ID**設定を使用することをお勧めします。これはShareFileの設定です。

プロファイル管理とApp-V

Microsoft Application Virtualization 5.x (App-V 5.x) と同じ環境でプロファイル管理を使用できます。

> **注:**
>
> プロファイル管理は、グローバルに公開されたApp-Vのみをサポートします。

> プロファイル管理の除外を使用して、次の項目を除外します。

- プロファイル管理\\ファイルシステム\\除外リスト\\ディレクトリ:
  - `AppData\Local\Microsoft\AppV`
  - `AppData\Roaming\Microsoft\AppV\Client\Catalog`
- プロファイル管理\\レジストリ\\除外リスト:
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Integration`
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing`

除外の設定方法については、「項目の包含と除外」を参照してください。

App-Vで **UserLogonRefresh** 設定が有効になっている場合、プロファイル管理のプロファイルストリーミングポリシーを無効にします。この制限は、**UserLogonRefresh** とプロファイルストリーミングの非互換性によるものです。

App-Vアプリケーションをシーケンスする方法の例については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/application-management/app-v/appv-sequence-a-new-application>`を参照してください。

App-Vが有効なサードパーティのプロファイル管理ソリューションの構成については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/microsoft-desktop-optimization-pack/appv-v5/performance-guidance-for-application-virtualization-50>`を参照してください。
Microsoft Windows 10システムでは`Software\Classes`を含めないでください。

プロファイル管理とプロビジョニングサービス

この記事では、Citrix Provisioning Services で作成された仮想ディスク（vDisk）上の Citrix ユーザープロファイルを維持するためのアドバイスを記載しています。このアドバイスに従う前に、「永続的またはプロビジョニング済み、専用または共有」で説明されているように、vDisk 構成が Profile Management 構成にどのように影響するかを理解してください。

サポートされているモード

Profile Management は、標準イメージモードおよびプライベートイメージモードで実行されている vDisk で使用できますが、差分ディスクイメージモードでは使用できません。

マスターターゲットデバイスから不要なローカルキャッシュプロファイルを削除するには

不要なローカルキャッシュプロファイルが保存されないようにするには、マスターターゲットデバイスイメージを作成する前に、標準イメージモードで実行されている vDisk からこれらのプロファイルを削除してください。ただし、現在ログオンしているローカル管理者プロファイルは削除しないでください。これを実現する良い方法は次のとおりです。この手順中にエラーメッセージが表示される場合があります。

1. コンピューターを右クリックします。
2. ［プロパティ］を選択します。
3. ［システムの詳細設定］をクリックします。
4. ［詳細設定］タブで、［ユーザープロファイル］の［設定］をクリックします。
5. 削除する各プロファイルを強調表示し、［削除］をクリックします。

vDisk イメージからログファイルを取得する

このトピックでは、Citrix Provisioning™ Services で作成された共有（vDisk）イメージに存在するログファイルの使用に関するガイダンスを提供します。Profile Management はログオフ時にファイルを保存します。ただし、vDisk イメージを使用する場合、ベースイメージがリセットされるとログファイルが削除される可能性があることに注意してください。したがって、ファイルを取得するために何らかの措置を講じる必要があります。講じる措置は、ログファイルがログオン時に削除されるかログオフ時に削除されるかによって異なります。

vDisk イメージの使用は Citrix Virtual Desktops™ 展開で一般的であるため、このトピックのガイダンスではその製品を例として使用します。

ログオフ時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイル全体またはその一部がネットワーク上のユーザーストアに保存されない場合、ログファイルもそこに保存されません。

Provisioning ServicesのライトキャッシュがProvisioning Servicesを実行しているコンピューターに保存されている場合、この問題は発生しません。そして、ログファイルはユーザーストアに保存されます。

ライトキャッシュがローカルに保存されている場合、この手順ではユーザーと同じデバイスからログオンする必要があるかもしれません。ただし、ライトキャッシュがRAMにローカルに保存されている場合、これでも失敗する可能性があります。

ライトキャッシュがProvisioning Servicesを実行しているコンピューター上にない場合、vDiskイメージのコピーを作成する必要があるかもしれません。それを新しい仮想マシンに割り当て、そのコンピューターに保存されるようにイメージ上のライトキャッシュを変更します。

1. Citrix仮想デスクトップで、デスクトップグループを作成し、仮想マシンを1台追加して、vDiskイメージを指すようにします。
2. 仮想マシンへのアクセスを1人のテストユーザーと管理者に付与します。
3. デスクトップグループのアイドルプール数を終日1に変更します（電源管理によるマシンのシャットダウンを防ぐため）。ログオフ動作を「何もしない」に設定します（マシンの再起動やイメージのリセットを防ぐため）。
4. テストユーザーとして仮想デスクトップにログオンし、その後ログオフします。
5. XenCenter®またはVMwareコンソールから管理者としてログオンし、ログファイルを取得します。

デスクトップグループの作成とプロパティの変更に関する詳細については、Citrix Virtual Desktopsのドキュメントを参照してください。

ログオン時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイルがネットワーク上のユーザーストアで最新であるにもかかわらず、ユーザーがログオンしたときに正しくロードされない場合、ログファイルのエントリは失われます。

1. `\\<vmhostname>\C$` にドライブをマップし、ユーザーがセッションからログオフする前にログファイルを特定します。ログファイルは完全ではありませんが（一部のエントリが欠落している可能性があります）、トラブルシューティングしている問題がログオン時に発生している場合、問題の原因を特定するのに十分な情報を提供できます。

Provisioning Servicesのログファイルを再配置するには

標準イメージモードを使用している場合、システムがシャットダウンするとProvisioning Servicesのイベントログファイルは失われます。これを防ぐためにファイルのデフォルトの場所を変更する方法については、Knowledge Centerの記事CTX115601を参照してください。

プロビジョニングされたイメージでのプロファイル管理の事前構成

Citrix Provisioning Services、Citrix XenServer、VMware ESXなどのプロビジョニングソフトウェアを使用すると、プロファイル管理がプレインストールされたイメージを構築できます。その際、イメージのセットアップ中にレジストリに一部のグループポリシー設定がキャプチャされる可能性があります。たとえば、Provisioning Servicesでプライベートイメージモードの場合に発生します。イメージを展開しても、設定は残ります。たとえば、Provisioning Servicesで標準イメージモードに戻す場合などです。理想的には、仮想マシンが実行を開始したときの状態と、ユーザーがログオンしたときの要件に適したデフォルトを選択してください。最低限、(/ja-jp/profile-management/2303/plan/upm-plan-decide-4a.html)で説明されているポリシーに対して適切なデフォルトが設定されていることを確認してください。

Citrix Profile Management Serviceが開始される前に`gpupdate`が実行されない場合、デフォルトが使用されます。そのため、ほとんどの場合に適切なデフォルトであることを確認するのが最善です。この手順を使用して、イメージに保持したいこれらの設定やその他の設定を事前構成します。

注：Provisioning Servicesを使用する場合、まずProfile Managementの.iniファイルでイメージを事前構成することをお勧めします。そして、テストが成功したと証明された場合にのみ、設定を.admまたは.admxファイルに転送してください。

1. .admまたは.admxファイルを使用する場合は、適切なGPOでファイルを使用して目的の設定を変更します。.iniファイルを使用する場合は、この手順を省略します。変更は後の手順で行います。
2. ログレベルにも同じ変更を加えます。
3. 次のいずれかを実行します。
    - イメージをプライベートイメージモード（Citrix Provisioning™ Services）に切り替え、その上でオペレーティングシステムを起動します。
    - オペレーティングシステムを起動します（Citrix XenServer®またはVMware ESX）。

4. 管理者アカウント（設定した可能性のあるテストユーザーアカウントではない）を使用してログオンし、`gpupdate /force`を実行します。この手順により、レジストリが正しく構成されます。
5. .iniファイルを使用する場合は、ファイル内の目的の設定を変更します。
6. Profile Management Serviceを停止します。
7. 新しく作成されるログファイルとの混同を避けるため、古いProfile Managementログファイルと構成ログファイルを削除します。これらは古いイメージの名前を使用するファイル名を持っています。更新されたイメージには新しいファイル（新しいイメージの名前を持つ）があるため、これらは冗長です。
8. 次のいずれかを実行します。
    - イメージを標準イメージモード（Citrix Provisioning Services）に戻します。
    - 更新されたイメージ (Citrix XenServer または VMware ESX) を保存します。
9. イメージ上でオペレーティングシステムを起動します。

プロファイル管理とセルフサービスプラグイン

デフォルトでは、プロファイル管理はWindowsの**スタートメニュー**フォルダーを除外します。Citrixセルフサービスプラグインのユーザーは、サブスクライブしたアプリケーションを**スタートメニュー**で表示できません。このデフォルトの動作を調整するには、**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーからフォルダー `%APPDATA%\Microsoft\Windows\Start Menu` を削除します。さらに、GPOを使用して構成する場合、プロファイル管理の.iniファイルを削除することをお勧めします。これらの操作により、サブスクライブされたアプリケーション（およびユーザーが作成したサブフォルダー）を含む**スタートメニュー**フォルダーがプロファイル管理によって処理されるようになります。

注：グループポリシーではなくプロファイル管理の.iniファイルを使用している場合は、そのファイルのデフォルトの除外リストからこのエントリを削除してください。

プロファイル管理とOutlook

この記事では、Microsoft Outlookとローミングプロファイルを統合するためのベストプラクティスについて説明します。

ユーザーがOutlookデータをネットワーク共有やローカルではなく、サーバーに保存するようにすることは良い習慣です。

ローミングプロファイルでは、環境変数 `%UserProfile%` で定義された場所（ローカルコンピューター上）にあるファイルとフォルダーは、`%UserProfile%\Local Settings` という1つのフォルダーを除いて、ユーザーとともにローミングします。この例外はOutlookユーザーに影響します。なぜなら、Microsoftの推奨により、既定では一部のOutlookデータ（たとえば、`.ost`、`.pst`、および `.pab` ファイル）がこの非ローミングフォルダーに作成されるためです。

重要: この場所にあるファイルは通常サイズが大きく、ローミングプロファイルのパフォーマンスを妨げます。

以下のプラクティスは、Outlookでのローミングプロファイルのトラブルシューティングを減らし、ユーザーと管理者による適切なメール管理を促進します。

- 可能であれば、`.pst` ファイルの使用を禁止するMicrosoft Office用のADMテンプレートを使用してください。
- ユーザーがより多くのスペースを必要とする場合は、ネットワーク共有ではなく、Microsoft Exchangeサーバーのストレージを増やしてください。
- 個々のユーザーに `.pst` ファイルの例外を許可したり、個人のストレージ容量を増やしたりするのではなく、会社全体（会社全体のメールストレージサーバーを含む）のメール保持ポリシーを定義し、適用してください。このポリシーは、ユーザーが受信トレイへのメール復元を簡単に要求できるようにすることで、`.pst` ファイルへの依存を抑制する必要もあります。
- `.pst` ファイルを禁止できない場合は、プロファイル管理またはローミングプロファイルを構成しないでください。**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**機能は、`.pst` ファイル向けには設計されていません。

WindowsプロファイルとPassword Managerおよびシングルサインオンの使用

この記事には、Profile Managementに固有の情報は含まれていません。Citrix Single Sign-onがローカルプロファイル、移動プロファイル、強制プロファイル、またはハイブリッドプロファイルで最適に動作するように、特定のWindowsオプションを構成する方法について説明します。このトピックは、Citrix Single Sign-on 4.8または5.0に適用されます。

ローカルプロファイル

ローカルプロファイルは、ユーザーがログオンしたローカルサーバーに保存されます。Password Managerとシングルサインオンは、ユーザーレジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password Manager` ハイブにレジストリ情報を保存します。場所は次のとおりです。

`%SystemDrive%\Documents` および `Settings\%username%\NTUSER.DAT`。

ファイルも次の場所に保存されます。

`%SystemDrive%\Documents and Settings\%username%\Application Data\Citrix\MetaFrame Password Manager`。

Windows 7では、シングルサインオンは以下を使用します。

`%APPDATA%\Roaming\Citrix\MetaFrame Password Manager`

重要: シングルサインオンが以下のファイルに対してフルコントロールアクセス権を持つことが不可欠です。

ファイル名	説明
ユーザー名.mmf	aelist.iniへのポインターを持つユーザーの資格情報ファイル。
entlist.ini	同期ポイントまたはActive Directoryでエンタープライズレベルで作成されたアプリケーション定義ファイル。
aelist.ini	ユーザーのローカルアプリケーション定義ファイル (applist.ini) とエンタープライズアプリケーション定義 (entlist.ini) をマージして作成されたアプリケーション定義ファイル。

ローミングプロファイル

ローミングプロファイルはネットワーク共有に保存され、ユーザーがログオンするたびにローカルサーバーのコピーと同期されます。ローミングプロファイルの展開を成功させるための特徴には、SAN (System Area Network) や NAS (Network Area Storage) のような高速ネットワーク接続が含まれます。その他の一般的な展開には、プロファイルが高可用性サーバーに保存されるクラスタリングソリューションがあります。

ローミングプロファイルと強制プロファイルの展開には、次の2つの問題があります。

- 単一のローミングプロファイルは、1つのファイル同期ポイントでのみ使用できます。複数の同期ポイントが使用される場合、メモリマップファイル (MMF) 内のデータが破損する可能性があります。

- ローミングプロファイルが複数の同時セッションで使用される場合、バックエンドのMMFを共有します。すべてのアクティブなセッションは、再試行ロックカウンター、最終使用データカウンター、イベントログエントリなどの共通セッションデータを共有します。

強制プロファイルまたはハイブリッドプロファイル

強制プロファイルは、定義上、ユーザーの読み取り専用プロファイルです。シングルサインオンは、**Application Data** の下のプロファイルフォルダーへの書き込み権限を必要とします。強制プロファイルを使用する場合、ユーザーは変更を加えることができますが、ログオフ時にその変更はプロファイルに保存されません。シングルサインオンが強制プロファイルで正しく機能するためには、Application Data フォルダーをリダイレクトする必要があります。

レジストリの変更は、ユーザーがログオンするたびに書き込まれます。資格情報が同期ポイントと同期されますが、変更はプロファイルに保存されません。

Windows 2000以降、Microsoftは**Application Data** フォルダーをリダイレクトするメカニズムを提供しています。ただし、Windows NT4ドメインを使用する場合は、**Application Data** フォルダーの場所を変更できるログオンスクリプトが必要です。これは、`Kix` や `VBScript` などのツールを使用して、**Application Data** フォルダーの書き込み可能な場所を定義することで実現できます。

次の例では、ユーザーログオン時に `Kix` を使用して **Application Data** フォルダーをリダイレクトします。

重要: このサンプルスクリプトは情報提供のみを目的としています。ご自身の環境で使用する前に、必ずテストしてください。

```
$LogonServer = "%LOGONSERVER%"

$HKCU = "HKEY_CURRENT_USER"

$ShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\Shell

Folders"

$UserShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User
```

```
Shell Folders"

$UserProfFolder =

"$LogonServer\profiles\@userID"

$UserAppData =

"$LogonServer\profiles\@userID\Application Data"

$UserDesktop =

"$LogonServer\profiles\@userID\Desktop"

$UserFavorites =

"$LogonServer\profiles\@userID\Favorites"

$UserPersonal = "X:\My Documents"

$UserRecent =

"$LogonServer\profiles\@userID\Recent"

if (exist("$UserAppData") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserAppData"'

endif

if (exist("$UserDesktop") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserDesktop"'

endif

if (exist("$UserRecent") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserRecent"'

endif

if (exist("$UserFavorites") = 0)
```

```
shell '%ComSpec% /c md "$UserFavorites"'

endif
```

ハイブリッドプロファイルは、強制プロファイルの問題に対するもう1つの解決策です。ユーザーがログオンすると、強制プロファイルがロードされ、カスタムアプリケーションがユーザーに利用可能なアプリケーションに基づいてユーザーレジストリハイブをロードおよびアンロードします。強制プロファイルと同様に、ユーザーはセッション中にレジストリのそれらの部分を変更できます。強制プロファイルとの違いは、変更がユーザーのログオフ時に保存され、再度ログオンしたときに再ロードされることです。

ハイブリッドプロファイルが使用される場合、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password` レジストリキーはログオンおよびログオフプロセスの一部としてインポートおよびエクスポートされる必要があります。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、グループポリシーオブジェクトとActive Directoryを使用して実装されます。これは、グループポリシーを使用して、ユーザープロファイルの一部であるフォルダーの場所を定義します。

リダイレクトできるフォルダーは次の4つです。

- マイドキュメント
- アプリケーションデータ
- デスクトップ
- スタートメニュー

グループポリシーを使用して、基本リダイレクトと高度なリダイレクトの2つのリダイレクトモードを構成できます。どちらもシングルサインオンでサポートされています。Windows 2000では、アプリケーションデータを格納する共有を `%username%` 変数を使用して参照する必要があります（例: `\\servername\sharename\%username%`）。

フォルダーリダイレクトはユーザーに対してグローバルであり、そのユーザーのすべてのアプリケーションに影響します。**Application Data**フォルダーを使用するすべてのアプリケーションは、これをサポートする必要があります。

フォルダーリダイレクトの詳細については、以下のMicrosoftの記事を参照してください。

方法: フォルダーリダイレクトを使用して安全なリダイレクトフォルダーを動的に作成する

Windowsのフォルダーリダイレクト機能

管理者がリダイレクトされたフォルダーにアクセスできるようにする

ベストプラクティス

- 可能な場合は、Application Dataフォルダーをリダイレクトします。このアプローチにより、ネットワークパフォーマンスが向上し、ユーザーがログオンするたびにそれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなります。
- Password Manager Agentのトラブルシューティングを行う際は、ログオンしているユーザーがApplication Dataフォルダーに対してフルコントロールのアクセス許可を持っていることを常に確認してください。

トラブルシューティング

Profile Management の設定を確認する

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、現在のProfile Management設定を次のように確認します。

1. Citrix Directorでトラブルシューティングを開始します。このコンソールには、問題の診断と修正に役立つプロファイルのプロパティが表示されます。
2. UPMConfigCheckツールを使用して、稼働中のProfile Management展開を調査し、最適に構成されているかどうかを判断します。

   このツールのインストールと使用に関する詳細については、Knowledge Centerの記事CTX132805を参照してください。
3. Profile Management .iniファイルが使用されている場合は、影響を受けるマシンでその構成を確認します。
4. リストとして入力するProfile Managementポリシー（除外リストや包含リストなど）を無効にするには、ポリシーを「無効」に設定します。ポリシーを「未構成」に設定しないでください。
5. 影響を受けるマシンで`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies`レジストリエントリを確認します。GPタトゥーイングの問題により古いポリシーが残っている場合は、それらを削除します。タトゥーイングとは、ポリシーがGPから削除されてもレジストリに残る場合に発生します。
6. UPMSettings.iniファイルを確認します。このファイルには、各ユーザーに適用されたProfile Management設定が含まれています。このファイルは、ユーザーストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。

Profile Managementログファイルを確認する

システムの動作をトラブルシューティングする際に、ログファイルは役立ちます。(/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/self-troubleshoot.html)でProfile Managementの設定を確認した後、Profile Managementのログ記録を有効にし、問題を再現してログファイルを確認します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションに対して(#enable-profile-management-logging)を有効にします。
2. マシンで問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager`フォルダーにあるProfile Managementログファイル（例: #computername#.#domainname#_pm.log）で、エラーと警告を確認します。それぞれ「ERROR」または「WARNINGS」という単語を検索して見つけます。

   ログファイルの詳細については、この記事の後半にある(#reference)を参照してください。
4. ユーザーストアへのパスが正しいことを確認します。
5. Active Directoryからのすべての情報が正しく読み取られたことを確認します。
6. タイムスタンプを確認して、時間がかかりすぎるアクションがないか調べます。

> **ヒント:**
>
> Microsoft Excelを使用して、Profile Managementログファイルを確認できます。詳細については、Knowledge Centerの記事CTX200674を参照してください。

Profile Managementのログ記録を有効にする

Profile Managementの展開で問題をトラブルシューティングする場合にのみ、すべてのイベントとアクションに対してProfile Managementのログ記録を有効にします。問題が解決したら、ログ記録を無効にし、機密情報が含まれている可能性があるためログファイルを削除します。

このセクションでは、GPOと`UPMPolicyDefaults_all.ini`を使用して、すべてのイベントとアクションのログ記録を有効にする方法について説明します。

Citrix StudioおよびWorkspace Environment Management (WEM) を使用して、この目標を達成することもできます。詳細については、「Profile Managementを集中管理する場所を決定する」を参照してください。

GPO を使用してログ記録を有効にする

GPOを使用してすべてのイベントとアクションのProfile Managementログを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、グループポリシーオブジェクトを作成します。

2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ログ設定**にアクセスします。
3. Profile Managementログを次のように有効にします。
   a. **ログの有効化**をダブルクリックします。
   b. **有効**をクリックします。
   c. **OK**をクリックします。
4. Profile Managementですべてのイベントとアクションをログに記録するように有効にします。
   a. **ログ設定**をダブルクリックします。
   b. すべてのイベントとアクションを選択します。これらの説明の詳細については、「イベントとアクション」を参照してください。
   c. **OK**をクリックします。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、次の手順に従います。
   a. **ログファイルの最大サイズ**をダブルクリックします。
   b. 「**有効にする**」をクリックし、次に「**最大サイズ（バイト単位）**」フィールドにサイズを入力します。
   c. 「**OK**」をクリックします。

   > **ヒント:**
   >
   > 最大サイズに達すると、Profile Managementは1つのバックアップファイル（例: Logfilename.log.bak）を保持します。

6. マシンで`gpupdate /force`コマンドを実行します。

   これらのポリシーはマシンに適用されます。

ログ設定ポリシーについて詳しくは、「Profile Managementのポリシーの説明とデフォルト」を参照してください。

.ini ファイルを使用してログ記録を有効にする

すべてのイベントとアクションに対してProfile Managementのログ記録を`UPMPolicyDefaults_all.ini`を使用して有効にするには、次の手順に従います。

1. Profile Managementのインストールフォルダー（デフォルトではC:\Program Files\Citrix\User Profile Manager）で`UPMPolicyDefaults_all.ini`を開きます。
2. 「**ログ設定**」を検索して設定を見つけます。

   ログに関連する設定(/en-us/profile-management/2303/media/troubleshoot-ini-log-settings.png)
3. `LoggingEnabled`に`1`を入力します。
4. `LogLevelWarnings`から`LogLevelUserName`までの各パラメーターに`1`を入力します。これらのパラメーターについて詳しくは、「イベントとアクション」を参照してください。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、必要に応じて`MaxLogSize`にサイズを入力します。
6. ログファイルのデフォルトフォルダを変更するには、必要に応じて`PathToLogFile`のパスを入力します。

リファレンス

このセクションでは、次の情報を提供します。

- ログの種類
- イベントとアクション
- Profile Managementログファイルのフィールド

ログの種類

この表には、Profile Managementのトラブルシューティングに使用できるログが一覧表示されています。

非公式名	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
Profile Management ログファイル	#computername#.#domainname#_pm.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	情報メッセージ、警告、エラーは、Profile Management ログファイルに書き込まれます。ドメイン名はコンピューターのドメインです。コンピューター名が特定できない場合、このログファイルは UserProfileManager.l

非公式名	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			ogという名前になります。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインが特定できない場合、ログファイルは#computername#_pm.logという名前になります。
Profile Management構成ログファイル	#computername#.#domainname#_pm_config.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	構成ログファイルは、ログ記録が無効になっている場合でも、GPOおよび.iniファイルの設定をキャプチャします。コンピューター名が特定できない場合、UserProfileManager_pm_configという名前になります。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインが特定できない場合、ログファイルは#computername#_pm_config.logという名前になります。
Windowsイベントログ	Application.evtx	%SystemRoot%\System32\winevt\Logs	Microsoftイベントビューアーで表示するWindowsイベントは、主にエラー報告に使用されます。エラーのみが書き込まれます。

イベントとアクション

この表は、Profile Managementがログに記録できるイベントとアクションを示します。

種類	説明	.INIのパラメーター
一般的な警告	一般的なすべての警告。	LogLevelWarnings
一般情報	一般的なすべての情報。	LogLevelInformation
ファイルシステム通知	処理されたファイルまたはフォルダーが変更されるたびに、1つのログエントリが作成されます。	LogLevelFileSystemNotification
ファイルシステムアクション	Profile Managementによって実行されるファイルシステム操作。	LogLevelFileSystemActions
レジストリアクション	Profile Managementによって実行されるレジストリアクション。	LogLevelRegistryActions
ログオフ時のレジストリの相違点	セッション中に変更されたHKCUハイブ内のすべてのレジストリキー。重要: この設定は、ログファイルに大量の出力を生成します。	LogLevelRegistryDifference
Active Directory のアクション	Profile Management が Active Directory を照会するたびに、エントリがログファイルに書き込まれます。	LogLevelActiveDirectoryActions
ポリシー値	Profile Management サービスが開始されるか、ポリシーの更新が行われると、ポリシー値がログファイルに書き込まれます。	LogLevelPolicyUserLogon
ログオン	ログオン中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogon

種類	説明	.INIのパラメーター
ログオフ	ログオフ中のアクションの系列がログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogoff
パーソナライズされたユーザー情報	該当する場合、ユーザー名とドメイン名はログファイルの専用の列に記録されます。	LogLevelUserName

ログファイルのフィールド

Profile Managementログファイルの各行には、セミコロンで区切られた複数のフィールドがあります。この表はログファイルのフィールドを示しています。

フィールド	説明
日付	ログエントリの日付
時刻	ログエントリの時刻（ミリ秒を含む）
重大度	INFORMATION、WARNING、またはERRORのいずれか
ドメイン	ユーザーのドメイン（該当する場合）
ユーザー名	ユーザー名（該当する場合）
セッションID	セッションID（該当する場合）
スレッドID	この行を作成したスレッドのID
関数と説明	その時点で実行されているProfile Management関数の名前とログメッセージ

Windowsイベントを確認する

Profile Managementによってログに記録されたWindowsイベントは、トラブルシューティングのための診断情報も提供します。Windowsイベントは、`%SystemRoot%\System32\winevt\Logs\`フォルダーの下のApplication.evtxファイルに保存されます。

Windowsイベントビューアーを使用してイベントを表示するには、次の手順に従います。

1. Windowsマシンで**イベントビューアー**を起動します。
2. 左ペインで**Windowsログ > アプリケーション**ノードを選択します。

   イベントは右ペインに表示されます。

イベントのリスト

Profile Managementによってログに記録されるイベントは、すべてが連続して番号付けされているわけではなく、このバージョンのProfile Managementですべてが使用されているわけでもありません。ただし、以前のバージョンからアップグレードした場合は、ログに記録される可能性があります。

イベントID	説明	原因	アクション
6	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。これは、自動開始、手動開始、または再起動の結果である可能性があります。	起動または再起動が計画的でなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
7	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。これは、手動による停止、またはシャットダウン処理の一部として発生した可能性があります。	サービス停止が計画的でなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
8	ユーザーのプロファイルは、Citrix Profile Managementの新しいバージョンによって変更されたため、	このマシンのCitrix Profile Managementサービスは、Profile Managementの新しいバージョンがユーザーストア内のユーザープロファイルを	このコンピューター（およびユーザーストアを共有し、以前のバージョンのProfile Managementを使用している他のすべてのコンピュー

イベントID	説明	原因	アクション
	このバージョンでは使用できません…	変更したことを検出しました。データ損失の可能性を防ぐため、以前のバージョンのProfile Managementは一時プロファイルの使用に戻ります。	ター）をアップグレードして、最新バージョンを使用してください。
9	ログオンフックの検出で問題が発生しました…	Citrix Profile Managementサービスは、ログオン通知の設定中に問題を検出しました。Citrix Profile Managementサービスでは、インストールパスにスペースが含まれていないこと、またはサービスがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートが有効になっていることが必要です。	Citrix Profile Managementをスペースのないパスに再インストールするか、Profile Managementがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートを有効にしてください。
10	ユーザーストアへのユーザーパスは…	有効なCitrixユーザープロファイルが指定された場所で見つかりました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
11	spsMain: CreateNamedPipeが失敗しました…	(このイベントは現在使用されていません。)	なし。
12	StartMonitoringProfile: ログオン中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませ	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作してい

イベントID	説明	原因	アクション
		んでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	ることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
13	StopMonitoringProfile: ログオフ中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーの監視を停止できませんでした。Windows変更ジャーナル管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。ユーザーのファイルおよびレジストリの変更は同期されません。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
14	CJIncreaseSizeIfNecessary: 変更ジャーナルの作成/サイズ変更に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリュー	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してく

イベントID	説明	原因	アクション
		ム上のNTFS変更ジャーナルを作成またはサイズ変更しようとしたときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	ださい。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
15	CJInitializeForMonitoring: ジャーナルを照会できません…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを照会しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
16	CJInitializeForMonitoring: 初期MFTスキャンがエラーで終了しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリュー	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してく

イベントID	説明	原因	アクション
		ム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを実行しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	ださい。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
17	CJInitializeForMonitoring: サービス開始以降のFS変更の処理に失敗しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行しているときに問題が検出されました。このエラーは、サービスが変更を監視するのを妨げません。Citrix Profile Managementはこのディレクトリを通常どおり処理します。	このエラーはProfile Managementの動作を妨げるものではありませんが、念のためエラーを確認してください。Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。

イベントID	説明	原因	アクション
18	CJProcessAvailableRecords: 内部エラー…	プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に、Citrix Profile Managementサービスで障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出され、サービスが最近の変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
19	USNChangeMonitor: 変更ジャーナルの初期化に失敗しました…	プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視中に、Citrix Profile Managementサービスで障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを準備中に問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのディレクトリの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。

イベントID	説明	原因	アクション
20	CADUser::Init: DNSドメインとADsPathの特定に失敗しました…	ログオンしているユーザーに関する情報をActive Directoryにクエリ中に問題が発生しました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	コンピューターがドメインコントローラーへの機能するネットワークパスを持っていることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
21	DNSドメインとADsPathの特定に失敗しました…	この問題は、Microsoft TechNetの記事263693に記載されているとおり、メモリ割り当ての制限によって引き起こされる可能性があります。	この問題の解決策は、Citrix Knowledge Centerの記事CTX124953に記載されています。
22	ファイルアクセスが遅かった。ユーザーは、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Managementはこの操作に遅延を検出しました。ユーザーは警告メッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げているこ	エンタープライズアンチウイルス製品に関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Managementのドキュメントを参照してください。

イベントID	説明	原因	アクション
		とが原因である可能性があります。	
23	ファイルアクセスが拒否される可能性があります。ユーザーは、ユーザーストアからファイルがフェッチされる際に長い遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Managementはこの操作においてアクセスが拒否される可能性のある重大な遅延を検出しました。ユーザーはエラーメッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザーストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	エンタープライズアンチウイルス製品に関するトラブルシューティングと構成のアドバイスについては、Profile Managementのドキュメントを参照してください。
24	RevertToSelfがエラーコードで失敗し、Profile Managementがシャットダウンされました。	一部のログオンおよびログオフ処理は、偽装を使用して実行されます。RevertToSelf関数は通常、偽装が完了したときに呼び出されます。この場合、関数は呼び出されませんでした。そのため、セキュリティ上の理由から、Profile Managementソフトウェアはシャットダウンされました。ユーザーはエラーメッセージを受け取りました。	セキュリティ侵害が疑われる場合は、組織の手順に従って対処し、Profile Managementを再起動してください。

イベントID	説明	原因	アクション
25	ユーザーのプロファイルはCitrix Profile Managementによって管理されていますが、ユーザーストアに到達できません…	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザーストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザーストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因です。	ユーザーストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
26	デフォルトのプロファイル場所が無効です。この場所のプロファイルは正しく監視できません…	このコンピューター上のプロファイルは、ドライブ文字（例: C:）にマウントされたディスク上にある必要があります。	このコンピューター上のプロファイルをドライブ文字にマウントされたディスクに移動し、Profile Managementを再起動してください。
27	ユーザーのプロファイルフォルダーがデフォルトのプロファイル場所にありません…	レジストリ内で、このユーザーのプロファイルの場所とデフォルトプロファイルの場所が一致しません。これは、たとえば、Profile Management Serviceを実行しているマシン上の異なるボリューム間でプロファイルが移動された場合に発生する可能性があります。	このユーザーのプロファイルがデフォルトのフォルダーの場所にあることを確認してください。必要に応じて適切なツールを使用して、ファイルシステム内のプロファイルデータがプロファイルのレジストリ設定と一致するようにしてください。
28	ユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしようとしていると	このCitrixユーザープロファイルの作成に使用されたデフォルトまたはテンプレートプロファイルのレ	必要に応じて、SetAclなどのサードパーティユーティリティを使用して、Profile Management

イベントID	説明	原因	アクション
	きにエラーが発生しました。	ジストリに権限の問題がある可能性があります。	ユーザーストア内のユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしてください。
29	テンプレートプロファイルパスが構成されていますが、プロファイルが見つかりませんでした...	指定されたフォルダーはNTUSER.DATファイルが含まれていないため、テンプレートプロファイル設定で使用できません。この問題は、NTUSER.DATファイルを含むフォルダーではなく、NTUSER.DATファイルの完全なパスが構成されている場合に頻繁に発生します。テンプレートプロファイル設定は、Active Directory属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。	テンプレートプロファイルを含むフォルダーへの有効なパスが構成されていることを確認してください。パスにNTUSER.DATが含まれていることを確認してください。このファイルが有効であり、すべてのファイルへの読み取りアクセスを許可するようにフォルダーのアクセス権が正しく設定されていることを確認してください。
33	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるローカルプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
34	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにある移	指定された場所からユーザーストアにプ	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。

イベントID	説明	原因	アクション
	動プロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	ロファイルが作成されました。	
35	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるテンプレートプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています
36	ユーザーの既存のプロファイルフォルダーを、このユーザーの新しいCitrix必須プロファイル用に準備できません。可能な場合、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。	Citrix必須プロファイルは、ログオンごとにテンプレートプロファイルのコピーを使用します。既存のプロファイルはすべて削除され、Citrix必須プロファイルは指定されたテンプレートの場所からコピーされます。このプロセスは失敗しました。	既存のプロファイルフォルダーを手動で削除してください。ファイルが別のプロセスによってロックされ、削除が失敗する場合は、コンピューターを再起動する必要があるかもしれません。テンプレートフォルダーが存在し、ユーザーがその内容を読み取る権限を持っていることを確認してください。
37	ユーザーのユーザー保存パスに到達できません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザー保存内のプロファイルへの変更は保存されません。	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザー保存に到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザー保存をホストしているサーバーが利	ユーザー保存をホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
		用できないためです。	
38	ユーザーのプロファイルはCitrix Profile Managementによって管理されていますが、ユーザー保存パスが見つかりません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザー保存内のプロファイルへの変更は保存されません。	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザー保存内のプロファイルを見つけることができません。これはネットワークの問題、またはユーザー保存をホストしているサーバーが利用できないためである可能性があります。しかし、ユーザー保存内のプロファイルが削除または移動されたためである可能性もあります。あるいは、ユーザー保存へのパスが変更され、既存のプロファイルを正しく指していない可能性もあります。	ユーザー保存をホストしているサーバーが利用可能であることを確認してください。また、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作しており、ユーザー保存へのパスが既存のプロファイルを指していることを確認してください。ユーザー保存内のプロファイルが削除されている場合は、ローカルマシン上のプロファイルを削除してください。
42	ユーザー `<userdomain>\<username>` のポリシー設定を更新しようとしているときにエラーが発生しました。ポリシー設定が正しく適用されていない可能性があります。エラーコード: `<error code>`	Citrix Profile Managementは、Citrixグループポリシー設定の更新に失敗しました。	Citrixグループポリシー クライアント側拡張機能がインストールされ、正常に動作していることを確認します。

イベントID	説明	原因	アクション
3005	`<path1>`からアクセスポイント`<path2>`への仮想ディスクのマウントに失敗しました。	Citrix Profile Managementは、仮想ディスクをアクセスポイントにマウントできませんでした。この問題は、仮想ディスクにアクセスできない場合、アクセスポイントが空ではない場合、または仮想ディスクがすでにマウントされている場合に発生する可能性があります。	マシンを再起動し、問題が解決されたかどうかを確認します。解決しない場合は、CDFトレースを収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。
3008	`<path1>`からアクセスポイント`<path2>`への検索データベースのマウントに失敗しました。	Windows Searchサービスは、検索データベースのマウントに失敗しました。この問題は、検索データベースが破損している場合に発生する可能性があります。	CDFトレースを収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。

一般的な問題のトラブルシューティング

この記事では、一般的なProfile Managementの問題をトラブルシューティングする方法について説明します。

ログオンが遅い

ユーザーのログオンが遅い場合は、次の手順に従ってトラブルシューティングを行ってください。

1. Citrix Directorのログオン期間パネルでプロファイルの読み込み時間を確認します。予想よりも大幅に長い場合は、ユーザープロファイルの読み込みが原因でログオンが遅くなっています。

   詳細については、「ユーザーログオンの問題の診断」を参照してください。
2. Citrix Profile Managementログファイルでプロファイル処理時間を確認します。

`C:\Windows\System32\Log Files\User Profile Manager`にあるProfile Managementログファイルで、`DispatchLogonLogoff`で始まるエントリを見つけます。次の例は、ログオン処理時間が10.22秒であることを示しています。

`DispatchLogonLogoff: ---------- Finished logon processing successfully in [s]: <10.22>.`.

3. 推奨されるProfile Managementポリシーが適用されていることを確認してください。

   「ユーザーログオンパフォーマンスの向上」で、ログオンパフォーマンスを向上させるための推奨事項に従ってください。

4. Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。

   ログオンの遅延が続く場合は、Citrixテクニカルサポートに連絡して、さらにサポートを受けてください。詳しくは、「Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ」を参照してください。

プロファイルがストリーミングされていることを確認する

ストリーミングユーザープロファイルを有効にしており、この機能がユーザーのプロファイルに適用されていることを確認したい場合は、次の手順を実行します。

1. Profile Managementログファイルで次の種類のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;16:16:35.369;INFORMATION;;;;1140;ReadPolicy: Configuration
   value read from policy: PSEnabled=<1>
   ```

   最後の項目は、機能が有効になっている場合、PSEnabled=\<1\> に設定する必要があります。

2. Profile Managementログファイルで、ユーザーの次のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;20:17:30.401;INFORMATION;<domain name>;<user
   name>;2;2364;ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile
   support enabled.
   ```

   ストリーミングされたユーザープロファイルが適用されていない場合、項目には「ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile support disabled」と表示されます。

適用されているポリシーを特定する

UPMSettings.iniファイルを使用して、適用されているProfile Managementポリシーを特定します。このファイルは、ユーザーストア内の各Citrixユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。このファイルを調べることは、ポリシーの結果セット（RSoP）を使用するよりも便利

かもしれません。特に、GPOと.iniファイル設定を組み合わせてポリシーを決定している場合はそうです。

UPMFRSettings.iniファイルを使用して、除外リストにあるため処理されないプロファイルフォルダーを特定します。UPMFRSettings.iniファイルもルートフォルダーに存在します。

破損したプロファイルデータを除外する

ユーザープロファイルが破損しており、問題が特定のファイルまたはフォルダーにあると確信している場合は、同期プロセスから除外します。その方法は、そのファイルまたはフォルダーを除外リストに追加することです。

レジストリエントリへの接続をクリーンアップする

一部のシナリオ（Profile Managementに関連するものだけでなく）では、ユーザーがログオフした後もレジストリプロファイルデータへの接続が保持されます。この保持により、ログオフが遅くなったり、ユーザーセッションが完全に終了しなかったりする可能性があります。MicrosoftのUser Profile Hive Cleanup (`UPHClean`) ツールは、これらのシナリオを解決するのに役立ちます。

ローカルプロファイルを削除する

Microsoft Delprof.exeとSepago Delprof2は、ユーザープロファイルの削除に役立つツールです。

プロファイルがどこに保存されているかを特定する

プロファイルの問題を診断するには、ユーザープロファイル内のファイルがどこに保存されているかを特定する必要があります。次の手順は、プロファイルがどこに保存されているかをすばやく特定する方法を提供します。

1. イベントビューアーで、左ペインの をクリックします。
2. 右ペインの で、目的の Citrix Profile Management イベントを見つけてダブルクリックします。
3. イベントに関連付けられているユーザー ストアへのパスは、 タブにリンクとして表示されます。
4. ファイルを探索する場合は、リンクをたどってユーザー ストアを参照してください。

サーバーの確認

サーバーがユーザーのログオンとログオフを正しく処理しているかどうかを確認するには、ユーザー ストア内のユーザー プロファイルにある PmCompatibility.ini というファイルを確認します。このファイルはプロファイルのルート フォルダーにあります。ファイルの最後の項目は、ユー

ザーが最後にログオフしたサーバーの名前です。たとえば、サーバーが Profile Management 5.0 を実行している場合、項目は次のようになります。

```
[LastUpdateServerName]

5.0=<computer name>
```

ロールバック

Profile Management の以前のバージョンにロールバックするには、ユーザー ストアをホストしているファイル サーバーのコマンド ラインから **del /s** を実行します。このコマンドは、各プロファイルから PmCompatibility.ini ファイルを削除します。たとえば、ユーザー ストアへのローカル パスが `D:\UpmProfiles` の場合、次を実行します。

```
del /s D:\UpmProfiles\pmcompatibility.ini
```

コマンドが完了すると、ユーザーは以前のバージョンを実行しているコンピューターにログオンし、ユーザー ストアからプロファイルを受け取ることができます。

ユーザー ストア内の除外フォルダー

除外されたフォルダーはユーザー ストアに表示されます。これは想定される動作であり、修正措置は不要です。除外リストにあるフォルダーはユーザー ストアに作成されますが、その内容は同期されません。

ログ ファイル内の情報が不足している

デバッグ モードをアクティブにしても、完全なログ記録が自動的に有効になるわけではありません。ログ設定で、ログに記録するイベントのすべてのチェック ボックスが選択されていることを確認してください。

ヒント: リストの最後のチェック ボックスを有効にするには、下にスクロールする必要がある場合があります。

GPO 設定が機能しない

GPO 設定を変更しても、Citrix Profile Management Service を実行しているコンピューターで機能しません。この問題は、GP がすぐに更新されず、展開で指定されたイベントまたは間隔に基づいているために発生します。GP をすぐに更新するには、コンピューターで `gpupdate /force` を実行します。

変更を有効にするには、`gpupdate /force` に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから `<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` コマンドを実行します。

ユーザーが新しいプロファイルまたは一時プロファイルを受け取る

デフォルトでは、問題が発生した場合、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合などです。または、Profile Management を構成して、エラー メッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。このアプローチは、トラブルシューティングに役立ちます。

この機能の構成方法については、ユーザーのログオフを強制する を参照してください。

特定の状況では、ログオン時に、ユーザーはキャッシュされたプロファイルの代わりに新しいプロファイルを受け取ります。

ユーザー ストア内のコピーが削除された後もローカル プロファイルが存在する場合、ユーザーは一時プロファイルを受け取ることもあります。この状況は、ユーザー ストアがクリアされても、ログオフ時にローカル プロファイルが削除されない場合に発生する可能性があります。

Profile Management は、プロファイルの部分的な削除をネットワーク、共有、または権限のエラーとして扱い、ユーザーに一時プロファイルを提供します。このため、部分的な削除は推奨されません。この問題を回避するには、影響を受けるコンピューターにログオンし、プロファイルを手動で削除してください。

展開にパーソナルvDiskが含まれている場合、これらのディスクのデフォルト処理が正しく調整されていないと、ユーザーは一時プロファイルを受け取る可能性があります。詳細については、ユーザープロファイルの移行 を参照してください。

仮想デスクトップセッションが応答しなくなったときにプロファイルデータが失われる

Citrix Virtual Desktopsの展開において、リモートデスクトッププロトコル (RDP) セッションから切断すると、仮想デスクトップが応答しなくなったり、再起動したりする可能性があります。この動作は、セッション終了時にプロファイルデータが失われるため、Profile Managementに影響を与えます。この問題は、Citrix Virtual Delivery Agentバージョン3.1.3242以降で修正されています。

ユーザーがログオンできない (イベントID: 1000、ソース: Userenv)

ユーザーはCitrix環境にログオンできず、次のエラーメッセージを受け取ります。「Windowsはローミングプロファイルをロードできませんでした。ローカルプロファイルでログオンしようと

しています... ネットワーク管理者に連絡してください。」このエラーは、Windowsアプリケーションイベントログ (イベントID: 1000、ソース: Userenv) に表示されます。

印刷

Citrix Virtual Desktops™環境では、ユーザーはデフォルトのプリンターを選択できますが、ログオン間でその選択が保持されないことがあります。この問題は、Citrix Virtual Desktopsのポリシーを使用して、標準イメージモードのCitrix Provisioning Servicesパーソナルvディスクに基づくプールされた仮想デスクトップにプリンターを設定する場合に確認されています。

この問題はProfile Managementに起因するものではありません。Profile Managementのログファイルには、プリンターのレジストリエントリがログオフ時にコピーされたことが示されていますが (これは予期される動作です)、ユーザーのNTUSER.datにはそのエントリが含まれていません (これは予期されない動作です)。この問題は実際には、Citrix Virtual Desktopsが `DefaultPmFlags` レジストリ設定を使用する方法に起因しています。

プロファイルに予期しないプリンターが追加されることがあります。ユーザーがそれらを削除しても、次のログオン時にプリンターが再表示されます。詳細については、Profile Managementサポートフォーラムを参照してください。

複数のプラットフォームでのアプリケーション設定に関する問題

複数のプラットフォーム間でアプリケーション設定が正しくローミングされないという問題が発生する場合があります。通常、これらの問題は次の原因で発生します。

- あるシステムから別のシステムに適用できない設定。たとえば、すべてのシステムに存在するわけではないハードウェア固有の設定などです。
- 異なるシステムに異なる方法でインストールされているアプリケーション。例：
    - あるシステムではC:ドライブにインストールされているが、別のシステムではD:ドライブにインストールされているアプリケーション。
    - あるシステムでは `C:\Program Files` にインストールされているが、別のシステムでは `C:\Program Files (x86)` にインストールされているアプリケーション。
    - あるシステムにはインストールされているが、別のシステムにはインストールされていないExcelアドイン。
- 設定情報をプロファイルに保存しないアプリケーション。たとえば、ローカルマシンの設定またはユーザープロファイルの外部に保存されている情報などです。

- レジストリに保存されている言語固有の構成設定。Profile Managementは、バージョン1プロファイルの言語固有のフォルダー名を自動的に翻訳しますが、レジストリ内のものは翻訳しません。

ほとんどの場合、これらの問題を引き起こすシステムの標準化を改善することで、問題を最小限に抑えることができます。ただし、多くの場合、問題はOSまたはそれぞれのアプリケーションの（複数のプラットフォームとの）固有の非互換性に起因します。問題のある設定が重要でない場合は、プロファイルから除外することで問題が解決する可能性があります。

不明なアカウントが所有するプロファイル

まれに、プロファイルが不明なアカウントに属しているように見えることがあります。コンピューターの**システムプロパティ**ダイアログボックスの**詳細設定**タブで、ユーザープロファイルの**設定**をクリックすると、「アカウント不明」と表示されます。この問題は、イベントログエントリ「*コンポーネント \<アプリケーションID\> のイベント作成のプロファイル通知に失敗しました。エラーコードは???*」とともに発生します。レジストリでは、アプリケーションIDはMicrosoftコンポーネントであるSHACCTプロファイル通知ハンドラーを指します。

この問題が環境で発生していることを確認するには、Profile Managementがデータを処理しないユーザーとしてログオンし、これらの症状を確認してください。

これはProfile Managementの問題ではありませんが、Active Directoryが仮想マシンのスナップショットと適切に連携しない結果である可能性があります。Citrixユーザープロファイルの操作には影響ありません。ユーザーはログオンおよびログオフでき、プロファイルの変更は保持されます。

高度なトラブルシューティングを実行する

現在のProfile Management設定を確認し、Profile Managementログが有用な情報のソースではないと判断した後、このチェックリストを使用してさらにトラブルシューティングを行います。

- 分析対象のマシンからResultant Set of Policies (RSoP) レポートを確認し、すべてのGPOが期待どおりに適用されていることを確認します。

  レポートを生成するには、マシンで `gpresult` コマンドを実行します。
- 最新バージョンのProfile Managementがインストールされていることを確認します。詳しくは、「Profile Managementのバージョンを確認する」を参照してください。
- 他のユーザーからの解決策については、Profile Managementサポートフォーラムを確認してください。

- 影響を受けるマシンと同じオペレーティングシステムを持つクリーンなマシンで問題を再現してみてください。ソフトウェア製品を1つずつインストールし、各インストール後に問題が再現できるか確認します。詳しくは、「テスト環境にProfile Managementを展開する」を参照してください。

Profile Managementのバージョンを確認する

バージョン情報を確認するには、次の手順に従います。

1. WindowsエクスプローラーでUserProfileManager.exeファイルを右クリックします。
2. **プロパティ > バージョン**をクリックします。
3. 最新バージョンでない場合は、My Accountサイトから最新バージョンをダウンロードします。Citrix®製品を選択し、ダウンロードセクションからProfile Managementをダウンロードします。

> **ヒント:**
>
> アップグレード後、必要に応じて新しい機能を有効にできます。

テスト環境にProfile Managementを展開する

ログファイルが問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、次の例で使用されているトラブルシューティングアプローチを試してください。このアプローチは、次の目的で使用できます。

- どの構成設定が読み取られているかを特定します。
- 構成設定がどこから読み取られているかを特定します（複数のADMファイルが存在する場合）。
- ログファイルがプロファイルへの変更を正しく追跡していることを確認します。

展開例

この例での展開は次のとおりです。

- Citrix Virtual Apps™ サーバーはWindows Server 2022で実行されています。
- ユーザーは、Citrix Workspaceアプリ for Windowsを使用して公開リソースに接続しています。
- INIファイルベースの構成ではなく、OUベースのGPOが使用されます。

> **注意:**
>
> レジストリを誤って編集すると、オペレーティングシステムの再インストールが必要になるような深刻な問題が発生する可能性があります。レジストリエディターの不適切な使用によって生じた問題が解決できることを保証することはできません。レジストリエディターの使用は自己責任で行ってください。編集する前に必ずレジストリをバックアップしてください。

トラブルシューティングのワークフロー

この例には、サーバーが1台のみで構成される小さなテストOUが含まれています。サーバーのプロファイル設定を編集できます。その後、ログファイルとポリシーの結果セット（RSoP）レポートで設定の変更を追跡します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 実稼働環境から、CitrixユーザープロファイルをホストしているCitrix Virtual Appsサーバーの1つを削除します。次に、そのサーバーを新しいOUに追加します。
2. サーバーからProfile Managementを削除し、再インストールします。
3. ドメイン管理者としてサーバーにログオンします。
4. ローカルポリシーを調べて、このレベルのADMファイルを削除します。
5. 新しいOUに割り当てられているGPOへのリンクをすべて削除します。
6. サーバーで、レジストリエディターからキーとすべてのサブキーを削除します: `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`。
7. Profile Management の .ini ファイルをすべて削除します。
8. **マイコンピュータ \> プロパティ \> 詳細設定**を使用して、テストしたいプロファイル以外のすべてのプロファイルを削除します。表示されるエラーを調査します。
9. Authenticated Users グループにファイルのフルコントロールを付与します。これにより、ユーザーとしてログオンしたときにProfile Managementのログファイルを確認できます。ログファイルは `C:\Windows\System32\LogFiles\UserProfileManager\<domainname>#<computername>_pm.log` です（\<domainname\> はコンピューターのドメイン、\<computername\> はその名前です）。ドメインを特定できない場合、ログファイルは UserProfileManager.log です。
10. 次の設定のみを含むGPOを作成し、新しいOUにリンクします。GPOがAuthenticated Usersグループに割り当てられていることを確認します。これらの設定を有効にして構成します。

a. Profile Management を有効にします。
b. ユーザー ストアへのパス。
c. ログ記録を有効にします。
d. ログ設定。すべてのイベントとアクションを選択します。
e. 既存のプロファイルの移行。ローミングプロファイルとローカルプロファイルを選択します。
f. ローカルプロファイルの競合処理。ローカルプロファイルの名前を変更を選択します。
g. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除します。
h. *ローカル管理者ログオンの処理*設定を無効にします。これにより、Profile Managementが誤って構成され、ユーザーのログオンが妨げられた場合でも、管理者としてログオンできます。

11. OUを右クリックし、**継承のブロック**を選択して、GPOリンクがOUに適用される方法を制御します。
12. サーバーに一度もログオンしたことがなく、ローカル管理者グループのメンバーではないドメインテストユーザーを作成します。
13. このユーザーにフルデスクトップを公開し、ユーザーがRemote Desktop Usersグループに属していることを確認します。
14. ドメインに複数のドメインコントローラー (DC) がある場合は、サーバーと同じサイト内のすべてのDC間でADレプリケーションを強制します。
15. ドメイン管理者としてサーバーにログオンし、ログファイルを削除し、Citrix Profile Managementサービスを再起動して、`gpupdate /force`を実行します。
16. レジストリを確認し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`内の値が新しいGPOの値のみであることを確認します。
17. 管理者としてログアウトします。
18. Internet Explorerの設定をいくつか変更し、My Docsフォルダーに空のテストファイルを作成します。
19. Profile Managementログファイルへのショートカットを作成します。それを開き、エントリを調べます。注意が必要な項目を調査します。
20. ログアウトしてから、ドメイン管理者として再度ログオンします。
21. `gpresult`を実行して、テストユーザーとサーバーのRSoPレポートを生成します。

レポートに期待する内容が含まれていない場合は、注意が必要な項目を調査します。

Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ

このセクションのトラブルシューティングのヒントを確認し、発生した問題がProfile Managementに起因すると考えられる場合は、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。常に以下のファイルと、可能な限り多くのその他の情報を収集して提供してください。

Profile Managementログファイルを収集する

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションをログに記録するように、マシンでProfile Managementを有効にします。詳しくは、「Profile Managementログの有効化」を参照してください。
2. 影響を受けるマシンで問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager`からProfile Managementログファイルとそのバックアップファイルを収集します。

影響を受けるマシンからのログファイルには、少なくとも以下の情報が含まれています。

- サービスの開始（Profile Managementのバージョンとビルド番号を含む）
- サービスによる構成の読み取り
- 影響を受けるユーザーの完全なログオンプロセス
- 問題発生時にユーザーが行ったアクティビティ
- 影響を受けるユーザーの完全なログオフプロセス

Windowsイベントログファイルを収集する

影響を受けるマシンで問題を再現した後、以下の手順に従ってWindowsイベントログファイルを収集します。

1. `%SystemRoot%\System32\winevt\Logs` フォルダーを見つけます。
2. Application.evtx ファイルを収集します。

インストールされているソフトウェアの詳細を収集する

影響を受けるマシンにインストールされている以下のソフトウェアの詳細を収集します。

- オペレーティングシステム、言語、およびバージョン。
- Citrix 製品とバージョン。

.ini ファイルを収集する

Profile Management に関連付けられている .ini ファイルを収集するには、次の手順に従います。

1. ユーザー ストア内の各 Citrix ユーザープロファイルのルートフォルダーを見つけます。
2. 以下の .ini ファイルを収集します。
    - UPMSettings.ini
    - UPMFRSettings.ini
    - PmCompatibility.ini

CDFControl を使用して診断トレースログを収集する

CDFControl を使用して診断トレースログを次のように収集します。

1. Knowledge Center の記事 CTX111961 から CDFControl ツールをダウンロードします。
2. CDFControl実行可能ファイルを実行します。
3. 表示されるウィンドウで、必要に応じて1つ以上のトレースモジュールを選択します。機能の説明については、次の表を参照してください。
4. をクリックします。
5. 問題を再現します。
6. をクリックします。
7. CDFControl実行可能ファイルと同じフォルダーでトレースログを見つけます。

この表は、CDFControlのトラックモジュールの機能を示しています。

トレースモジュール	説明
UPM_DLL_GPCSE	Profile ManagementからCitrixグループポリシーのクライアント側拡張機能に送信されたユーザーグループポリシー評価要求をトレースします。
UPM_DLL_OUTLOOK_HOOK	OutlookのProfile Managementフックモジュールをトレースします。Outlook検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_Perfmon	Profile Managementに関連付けられたWindowsパフォーマンスモニターカウンター

トレースモジュール	説明
	と、Profile Managementによって生成されたエラーをトレースします。
UPM_DLL_SearchSvc_Hook	Windows Search Service の Profile Management フックモジュールをトレースします。Outlook 検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_WfShell	公開アプリケーションのデスクトップ準備完了イベントを報告する Profile Management の `Wfshell` プラグインをトレースします。
UPM_Driver	Citrix ストリーミングユーザープロファイルドライバーが使用されるたびに、ファイルシステムの変更をトレースします。
UPM_Service	Profile Management Service が呼び出されるたびに情報をトレースします。例としては、ログオン時、ログオフ時、またはセッション中の同期や定期メンテナンスが行われる場合などがあります。
UPM_SessionLaunchEvaluation	Profile Management の一意のトランザクション ID に関連付けられた起動イベントをトレースします。
UPM_WMI	Profile Management VDA WMI プラグインイベントをトレースします。

その他の情報を収集する

可能な場合は、次の情報を収集してください。

- `gpresult` コマンドを実行して、影響を受けるマシンとユーザーの結果ポリシーセット (RSoP) レポート。
- アプリケーションイベントログ。
- 利用可能な場合は、**Userenv** デバッグファイル。このツールに関する情報については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

注:

Citrix Provisioning Services が展開の一部であり、プロファイルが初期化されているときに問題が発生する場合、データ収集は複雑になる可能性があります。そのようなシナリオでは、前述の構成更新を .ini ファイルで行います（および GPO ログ設定を無効にします）。プロビジョニングされたイメージでのプロファイル管理の事前構成 の手順に従うことをお勧めします。

方法

ユーザーログオンパフォーマンスの向上

Profile Management は、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるためのさまざまなポリシーを提供します。例としては、**ストリーミングユーザープロファイル**、**フォルダーミラーリングの高速化**、**プロファイルコンテナ**ポリシーなどがあります。これらのポリシーは、ユーザープロファイルが日常の使用で増え続けるシナリオで役立ちます。

このセクションでは、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させる2つのProfile Managementソリューションについて説明します。

ストリーミングプロファイルを有効にし、フォルダーミラーリングを高速化する

環境にユーザーストアを展開した後、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるために、次のポリシーを有効にします。

1. **Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**に移動し、**プロファイルストリーミング**と**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**を有効にします。
2. **Profile Management > ファイルシステム**に移動し、**フォルダーミラーリングの高速化**を有効にします。

完全なプロファイルに対してプロファイルコンテナを有効にする

VHDXベースのCitrix®プロファイルソリューション（プロファイルコンテナと呼ばれる）を展開して、ログオンパフォーマンスを向上させることができます。これらのVHDXファイルは、ユーザーログオン時に動的にアタッチされます。 VHDXベースのソリューションを展開するには、完全なユーザープロファイルを保存するようにプロファイルコンテナを次のように有効にします。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナ設定**に移動します。
2. **プロファイルコンテナ**を有効にし、プロファイルコンテナリストにアスタリスク（*）を入力します。

パフォーマンスの比較

典型的なユーザープロファイルでのテストに基づいて、上記のソリューションをお勧めします。詳細については、Knowledge Centerの記事CTX463658を参照してください。次の表に示すように、いずれかのソリューションを展開した後、ユーザーのログオン時間とログオフ時間は大幅に短縮されました。

ストリーミングユーザープロファイルと**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にした場合のテスト結果：

パラメーター	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	1.80 秒 / 4.45 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	5.62 秒 / 6.89 秒

完全なプロファイルに対して**プロファイルコンテナ**ポリシーを有効にした場合のテスト結果:

パラメータ	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	2.66 秒 / 5.26 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 s / 43.67 s	3.63 s / 4.99 s

ファイル重複排除を使用してストレージ容量を節約する

ユーザーストア内のさまざまなユーザープロファイルに同一のファイルが存在する可能性があります。たとえば、異なるユーザーが同じファイルをダウンロードしたり、同じソフトウェアをユーザープロファイルにインストールしたりします。**ファイル重複排除**ポリシーを使用すると、Profile Managementは、ユーザーストアから重複するファイルのインスタンスを中央の場所（*共有ストア*と呼ばれます）に移動し、他のファイルを削除します。そのため、ストレージコストが削減されます。

前提条件

ファイル重複排除を有効にするには、以下を確認してください。

- 共有ストアが自動的に作成されるように、**ユーザーストアへのパス**設定で**%username%または#samaccountname#**を使用します。
- Citrix Profile Managementバージョン2209以降をインストールします。

ファイル重複排除ポリシーを有効にして構成する

Workspace Environment Management™ (WEM) Webコンソールを例にとります。コンソールを使用してファイル重複排除を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. **プロファイル > Profile Management設定 > ファイル重複排除**に移動します。
2. **ファイルの包含を有効にする**を選択し、重複排除するファイルを指定します。必要に応じて、**ファイルの除外を有効にする**を選択し、含まれるファイルから除外するファイルを指定します。詳細については、「ファイル重複排除を有効にする」を参照してください。

変更頻度の低いファイルのみを重複排除することをお勧めします。たとえば、次のようなファイルです。

- ユーザーがインストールするプログラムファイル:

  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.dll`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.dll`
- ユーザーがダウンロードするインストーラーファイルまたはイメージファイル：

  `Downloads*.exe`, `Downloads*.msi`, `Downloads*.iso`

以下のファイルの重複排除は推奨しません。

- ユーザーが頻繁に編集する可能性のあるドキュメント:

  `Documents*.xlsx`, `Documents*.docx`
- 頻繁に変更される可能性のあるデータファイル:

  `AppData\Local*.dat`

> **注:**
>
> ファイルの重複排除の効果は、ユーザー環境や重複排除に指定するファイルによって異なります。実際の状況に基づいてファイル設定をカスタマイズすることをお勧めします。

権限設定を変更する

共有ストアフォルダーを作成すると、Profile Management はそのフォルダーに以下のプリンシパルへのアクセス権を付与します。

- ドメインコンピューター（フルコントロールアクセス権付き）
- ドメインユーザー（読み取りアクセス権付き）

これらのデフォルトの権限設定では、ファイルの重複排除はドメイン参加済みマシンでのみ機能します。ドメインに参加していないマシンで機能させるには、共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を持つユーザーアカウントをそれらのマシンに割り当てる必要があります。詳細な手順は次のとおりです。

1. 共有ストアサーバーで、ユーザーアカウント（例: `admin0`）に共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を付与します。
2. 各VDAで、`admin0` ユーザーアカウントが共有ストアフォルダーにサインインするためのWindows資格情報を追加します。これを行うには、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用します。詳細については、ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。
3. （オプション）共有ストアサーバーで、共有ストアフォルダーを見つけて、ドメインコンピューターの権限エントリを削除します。

重複排除されたファイルのデータ変更のサポート

この機能は、重複排除されたファイルへのデータ変更を処理できます。たとえば、2人のユーザーがソフトウェアXYZバージョン1をインストールし、それをファイル重複排除に含めるとします。その後、1人のユーザーがバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは共有ストアに新しいバージョンのファイルを作成します。もう1人のユーザーもバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは古いバージョンのファイルを削除します。

__index__

アクティブライトバックを構成する

既定では、Profile Management は、ローカルユーザープロファイルに加えられた変更をユーザーがログオフするときにユーザー ストアに書き戻します。ユーザーが最初のセッションからログオフする前に2番目のセッションを開始した場合、最初のセッションで行われたローカルプロファイルの変更は、2番目のセッションでは利用できません。

同時セッション間でのプロファイルの一貫性を向上させるには、アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能により、Profile Management は、ユーザーがログオフするまで待つのではなく、*セッション中に*ローカルプロファイルの変更をユーザー ストアに書き戻します。

概要

Profile Management は、**アクティブライトバック**ポリシーと次の2つの拡張ポリシーを提供します。

- **アクティブライトバック**。Profile Management は、ローカルの*プロファイルファイルとフォルダー*に加えられた変更をユーザー ストアに書き戻します。既定では、Profile Management は5分ごとにアクティブライトバックを実行します。
- **アクティブライトバックレジストリ**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。Profile Management は、ローカルの*レジストリエントリ*に加えられた変更をユーザープロファイルに書き戻します。
- **セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。Profile Management は、5分ごとではなく、セッションがロックまたは切断された場合にのみアクティブライトバックを実行します。

アクティブライトバックを有効にする

GPOを使用してアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** にアクセスします。
3. **アクティブライトバック**をダブルクリックします。

4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。 既定では、アクティブライトバックは5分ごとに実行されます。
5. レジストリエントリのアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。
   a. 「**アクティブライトバックレジストリ**」をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
6. セッションがロックまたは切断されている場合にのみProfile Managementでアクティブライトバックを実行するには、次の手順に従います。
   a. 「**セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**」をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

> **注：**
>
> ベストプラクティスとして、「**セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**」ポリシーを有効にすることをお勧めします。

アクティブライトバックポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- 設定がどこにも構成されていない場合、Profile Managementが動的に構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

アプリケーションへのアクセスを制御する

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、ルールを使用してアプリケーションへのアクセスを制御できます。これにより、アプリケーションとイメージの管理を効率化できます。たとえば、異なる部門に同一のマシンを提供しながら、それぞれの固有のアプリケーション要件を満たすことができ、イメージの数を減らすことができます。

この記事では、アプリケーションアクセス制御を有効にし、制御ルールを構成するプロセスについて説明します。また、この機能を使用して仮想環境でのイメージ管理を簡素化する例も示します。

概要

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、非表示ルールを構成することで、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。

アプリケーション非表示ルールは、次の2つの情報を定義します。

- **非表示にするオブジェクト。** アプリケーションに対して非表示にするファイル、フォルダー、およびレジストリエントリ。

  たとえば、アプリケーションを非表示にするには、ファイル、フォルダー、レジストリエントリなど、そのアプリケーションに関連付けられているすべてのオブジェクトを指定する必要があります。
- **割り当て。** アプリケーションを非表示にする対象のユーザー、マシン、およびプロセス。

割り当ての種類

非表示ルールにおける割り当ては、ユーザー、マシン、プロセスの3つのカテゴリに分類されます。詳細な割り当ての種類は次のとおりです。

- ユーザー
- ユーザーグループ
- マシン
- 組織単位 (OU)
- プロセス

> **注:**

> アプリケーションアクセス制御のコンテキストでは、OUはマシン専用のコンテナとして使用されます。その結果、OUの割り当ては、OU内のマシンからのみアプリを非表示にします。OU内のユーザーからはアプリを非表示にしません。

> アプリケーション非表示ルールに複数の割り当てが構成されている場合は、以下の考慮事項に注意してください。

- それらの割り当てが同じカテゴリである場合 (例: ユーザーAとユーザー グループ B)、アプリケーションは、それらの割り当てで指定されたすべてのオブジェクト (ユーザー Aとユーザー グループ Bのすべてのユーザー) から非表示になります。

- それらの割り当てが異なるカテゴリである場合 (例: ユーザーAと マシンX)、アプリケーションは、それらのすべての割り当てで指定された条件が満たされたとき (ユーザー Aがマシン X にサインインしたとき) に非表示になります。
- それらの割り当てが *プロセス* カテゴリである場合、アプリケーションは、それらの割り当てで指定されたすべてのプロセスから非表示になります。

> **注:**
>
> ルールに割り当てが構成されていない場合、そのルールで指定されたアプリケーションは非表示になります。

ワークフロー

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、Profile Managementは、提供されたルールに基づいて、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。

環境にアプリケーションアクセス制御を適用するには、まず非表示ルールを作成する必要があります。そのためには、Profile Managementインストールパッケージに同梱されているPowerShellツールであるRule Generatorを使用します。

大まかに言えば、非表示ルールを作成する手順は次のとおりです。

1. アプリケーションの非表示ルールを作成します。
    a. アプリケーションに対して非表示にしたいファイル、フォルダー、およびレジストリエントリを指定します。
    b. ルールの割り当てを構成します。これを行うには、アプリケーションを非表示にするユーザー、マシン、またはプロセスのグループを指定します。詳細については、「割り当ての種類」を参照してください。
2. 他のアプリケーションの非表示ルールを作成するには、手順1を繰り返します。
3. 構成したすべてのルールの生データを生成します。

    Rule Generatorの詳細については、「Rule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する」を参照してください。
4. GPOを使用して、環境内のマシンに非表示ルールを適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

Rule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する

このセクションでは、PowerShellベースのRule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する方法について説明します。

開始する前に、ツールを実行するマシンが次の条件を満たしていることを確認してください。

- Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022がインストールされている
- ユーザーおよびマシンと同じドメイン内にある

一般的な手順は次のとおりです。

1. **Windows PowerShell**を管理者として実行します。
2. プロファイル管理インストールパッケージ内の**\tool**フォルダーにアクセスし、**CPM_App_Access_Control_Config.ps1**を実行します。
3. 画面の指示に従って、非表示ルールを作成、管理、生成します。

    a. マシンにインストールされている各アプリケーションとその状態を表示します。

    - **未構成**。アプリケーションに対してルールが構成されていません。
    - **構成済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されていますが、それらのいずれもマシンに適用されていません。
    - **構成済みで適用済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されており、少なくとも1つのルールがマシンに適用されています。

```
List of apps to manage:
Index Status           Name
----- ------           ----
    1 Not configured   Adobe Acrobat (64-bit)
    2 Not configured   AppUp.IntelGraphicsExperience
    3 Not configured   AppUp.ThunderboltControlCenter
    4 Not configured   Citrix Secure Access
    5 Not configured   Citrix Workspace 2303
    6 Not configured   DolbyLaboratories.DolbyAccess
    7 Not configured   ELANMicroelectronicsCorpo.ELANTrackPointforThinkpa
    8 Not configured   Git
    9 Not configured   Google Chrome
```

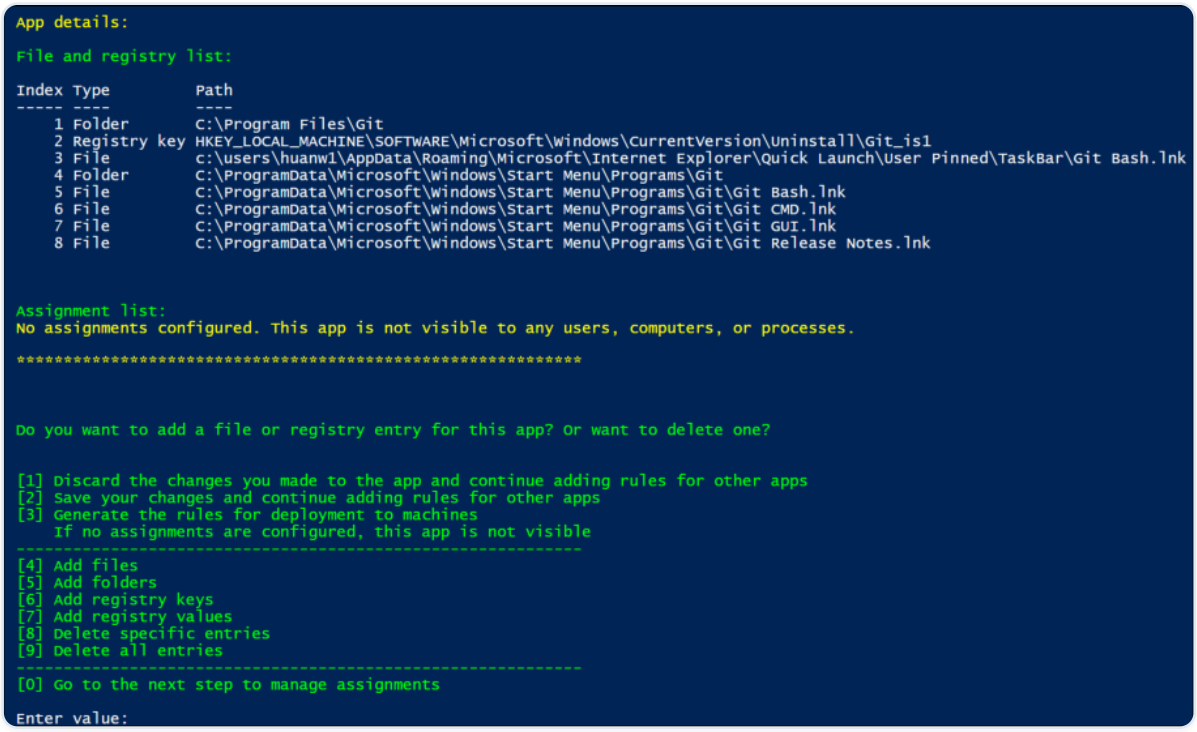
    b. アプリケーションリストから、非表示にするアプリケーションをインデックスを入力して選択します。アプリケーションに対して非表示になるすべてのファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが表示されます。

```
[D] Delete all configured rules
[A] Add an app to the list
---------------------------------------------------------
To add rules for an app from the list above, enter its index.

Enter input:
```

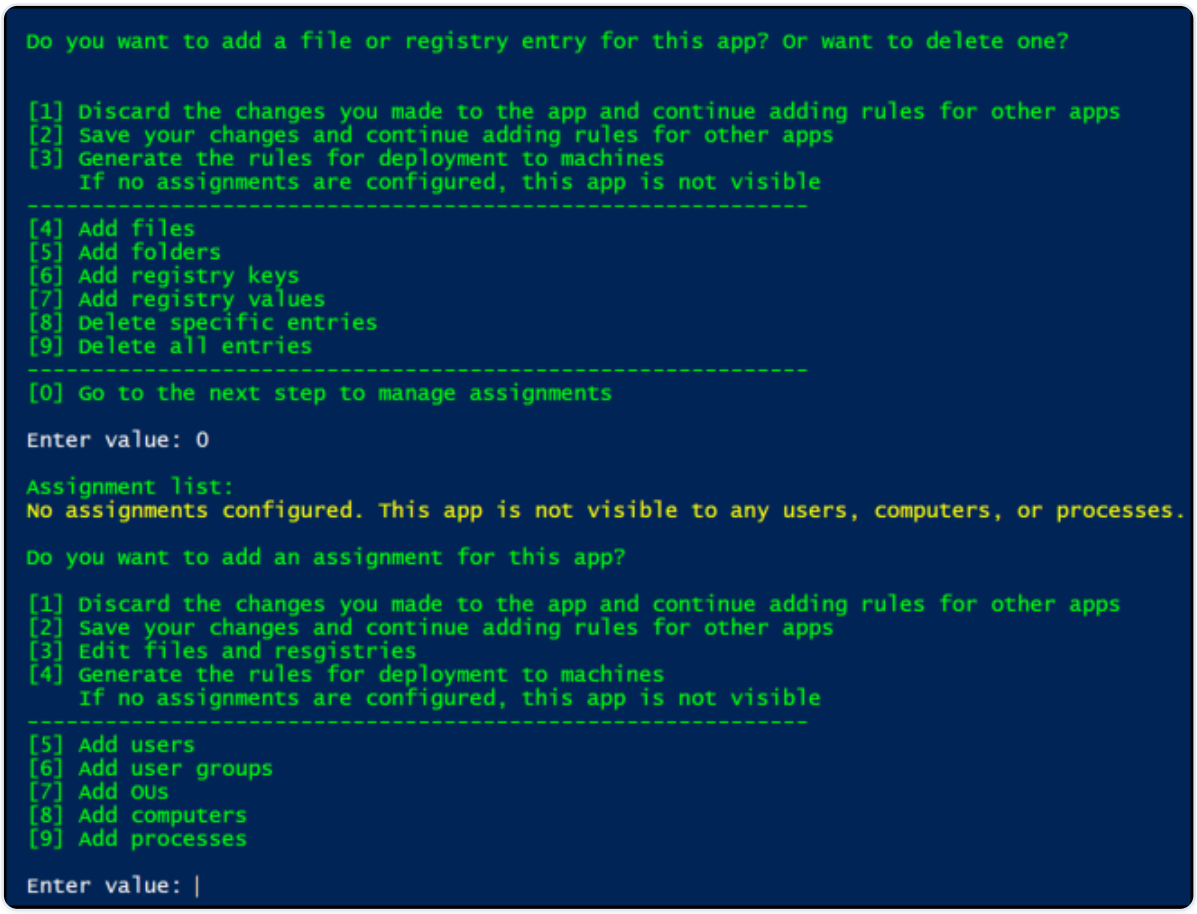
c. 選択したアプリケーションに対して追加のファイル、フォルダー、またはレジストリエントリを非表示にするには、それらのパスを入力してアプリケーションに追加します。

パスにはシステム環境変数（%windir%など）を使用できます。ユーザー環境変数（%appdata%など）はサポートされていません。



> **注:**
>
> 特定のファイル、フォルダー、およびレジストリエントリを関連付けることで、アプリケーションを手動で定義することもできます。

d. ルールの割り当てを構成します。詳細には、割り当てタイプ（ユーザー、ユーザーグループ、マシン、OU、またはプロセス）を指定し、次にアプリケーションを非表示にする対象となる選択したタイプの特定のオブジェクトを入力します。ユーザー、ユーザーグループ、およびOUの場合は、それらのADドメイン名を入力します。マシンの場合は、それらのDNSホスト名を入力します。



> **注:**
>
> ルールに割り当てを構成しない場合、ルールで指定されたアプリは非表示になります。

4. 他のアプリケーションの非表示ルールを作成するには、ステップ3を繰り返します。
5. 画面の指示に従って、構成したルールの生データを生成し、将来の使用のために.txtファイルに保存します。
6. ルールの有効性をテストするには、それらをローカルレジストリ、またはGPOを介してマシンのグループのレジストリに展開します。

> **注：**
>
> このツールを使用して本番環境にルールを展開することはお勧めしません。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

アプリのアクセス制御ルールを作成および生成したら、GPOを使用して環境内のマシンにルールを適用できます。

GPOを使用してマシンに制御ルールを適用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > アプリのアクセス制御**にアクセスします。
3. **アプリのアクセス制御**をダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. 生成されたルールを保存した.txtファイルを開き、内容をコピーして、**アプリのアクセス制御ルール**フィールドに貼り付けます。
6. **OK**をクリックします。

この機能の構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用していない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

例

このセクションでは、イメージのアプリアクセス制御を実装する手順を例で説明します。

要件

この例の要件は次のとおりです。

- 営業、人事、エンジニアリング部門の仮想マシンを作成するために、単一のイメージを使用します。
- 次のアプリケーションへのアクセスを制御します。
    - Microsoft Excel: 人事部門のユーザーには表示されません。
    - Visual Studio Code: 営業部門または人事部門のユーザーには表示されません。

ソリューション

インストールされているアプリケーションへのアクセスを制御するために、Profile Managementをインストールします。

テンプレートマシンのインストール

イメージをキャプチャするためのテンプレートマシンをインストールします。手順は次のとおりです。

1. 新しいマシンを、ユーザーおよびマシンと同じADドメインに参加させます。
2. マシンに以下のソフトウェアをインストールします。
    - 必要に応じて、Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022
    - Profile Managementバージョン2303以降
    - 必要なすべてのアプリケーション

非表示ルールを作成および生成する

1. テンプレートマシンで、Rule Generatorを使用して非表示ルールを作成および生成します。
    - ルール1：人事部のユーザーからMicrosoft Excelを非表示にする（アプリケーション：Microsoft Excel; 割り当て：人事ユーザーグループ）
    - ルール2：営業部または人事部のユーザーからVisual Studio Codeを非表示にする（アプリケーション：Visual Studio Code; 割り当て：営業ユーザーグループおよび人事ユーザーグループ）
2. 2つのルールの生データを生成し、.txtファイルに保存します。

ツールの使用方法の詳細については、「Rule Generatorを使用してルールを作成、生成、展開する」を参照してください。

これで、テンプレートマシンからイメージをキャプチャできます。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

仮想マシンが作成されたら、GPOを使用してアプリのアクセス制御を一元的に有効にし、生成されたルールをマシンに適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

クロスプラットフォーム設定を構成する

重要: この機能に関する以下の重要な情報に注意してください。

- Profile Management のクロスプラットフォーム設定は、サポートされているオペレーティングシステム (OS) とアプリケーションのセットをサポートします。この機能は、本番環境でのみ構成してください。
- Microsoft Office の設定は、そのアプリケーションのバージョン間ではローミングされません。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。
- この機能は、レジストリおよびアプリケーション設定に適しています。ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト (ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など) には適していません。
- 異なるプロファイルバージョンのシステム間でユーザープロファイルを移行するためにこの機能を使用する場合は、すべてのユーザーの移行が完了した後に無効にしてください。この機能を使用すると、主にログオフ時にパフォーマンスに影響があります。そのため、プロファイルバージョン間のローミングをサポートしない限り、無効にしておくのが最善です。

このトピックでは、クロスプラットフォーム設定を構成するために実行できる手順の例を示します。より詳細なケーススタディについては、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」を参照してください。

ヒント: この機能を本番環境に導入する前に、少数のテストユーザーに限定することをお勧めします。これには、 **クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ**オプションを使用します。この設定が構成されている場合、Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。この設定が無効になっている場合、この機能は、 処理対象グループ設定で指定されたすべてのユーザーを処理します。 **クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ**がグループポリシーまたは .ini ファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

1. すべてのプラットフォームに共通する設定については、共通のグループポリシーオブジェクト (共通 GPO) を作成し、それを Profile Management の .adm または .admx ファイルにリンクして、必要に応じて設定を構成します。この設定は、後でトラブルシューティングを困難にする可能性のある重複する設定を最小限に抑えるため、ベストプラクティスです。要件に応じて、**ユーザーストアへのパス**を除くすべての Profile Management 設定が複数のプラットフォームで機能します。バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイルのユーザーストア構造が異なるため、ユーザーストアへのパスはプラットフォームごとに個別に構成してください。共通 GPO では、この設定を未構成のままにします。
2. 異なるプラットフォーム用に個別の OU を作成します。たとえば、Windows 7 から Windows 8 に移行する場合は、これらのオペレーティングシステム用に個別の OU を作成し、各 OU でユーザーストアへのパスを適切に設定します。

3. プラットフォーム間で機能させたいパーソナライズをサポートするアプリケーションの定義 (.xml) ファイルを見つけます。これらのファイルは、ダウンロードパッケージの CrossPlatform フォルダーにあります。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。詳細については、「定義ファイルの作成」を参照してください。
4. .xml ファイルをネットワーク上の適切な場所にコピーします。
5. グループポリシー管理エディターで共通 GPO を編集します。Profile Management の下にある「クロスプラットフォーム設定」フォルダーを開き、次の設定を構成します。

    - クロスプラットフォーム設定のユーザーグループ。クロスプラットフォーム設定を体験するユーザーを制限します。この設定はオプションです。この機能をテストしたり、段階的に展開したりする場合に役立ちます。
    - クロスプラットフォーム定義へのパス。ダウンロードパッケージからコピーした定義ファイルのネットワーク上の場所を識別します。このパスは UNC パスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。
    - クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。これは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが格納されるユーザーストアの共通領域です。ユーザーはこの領域への書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。**ユーザーストアへのパス**と同じ変数を使用できます。

6. そのプラットフォームのOUで「クロスプラットフォーム設定作成のソース」が「有効」に設定されていることを確認して、ベースプラットフォームを指定します。この設定により、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータが移行されます。他のプラットフォームのOUでは、このポリシーを「無効」または「未構成」に設定します。各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、別々のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードに使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定する必要があります。これをベースプラットフォームと呼びます。クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている場合、または単一プラットフォームプロファイルのキャッシュデータがストア内の定義データよりも新しい場合、Profile Managementは単一プラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。この設定を無効にしない限り、データは移行されます。 重要: 複数のOUで「クロスプラットフォーム設定作成のソース」が有効になっている場合、最初にユーザーがログオンしたプラットフォームがベースプロファイルになります。

7. 「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を「有効」に設定します。デフォルトでは、展開を容易にするため、この設定をオンにするまでクロスプラットフォーム設定は無効になっています。
8. グループポリシーの更新を実行します。
9. プロファイルをプラットフォーム間で移行するが、それらのローミングをサポートしない場合は、移行が完了したら、「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を**無効**に設定します。

ここで「クロスプラットフォーム定義へのパス」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」が無効になっている場合、デフォルトパス `Windows\PM_CP` が使用されます。ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルトパスが使用されます。

ここで「クロスプラットフォーム設定を有効にする」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

例：Windows Server 2008とWindows 7間でのMicrosoft Office設定のローミング

この例では、バージョン2プロファイルを作成する2つのオペレーティングシステム間でユーザーのアプリケーション設定をローミングできるようにするための主要な手順について説明します。Microsoft Office 2010が例のアプリケーションであり、Windows Server 2008上のCitrix XenApp 6.5とWindows 7の間でローミングが行われます。両方のOSは64ビットです。

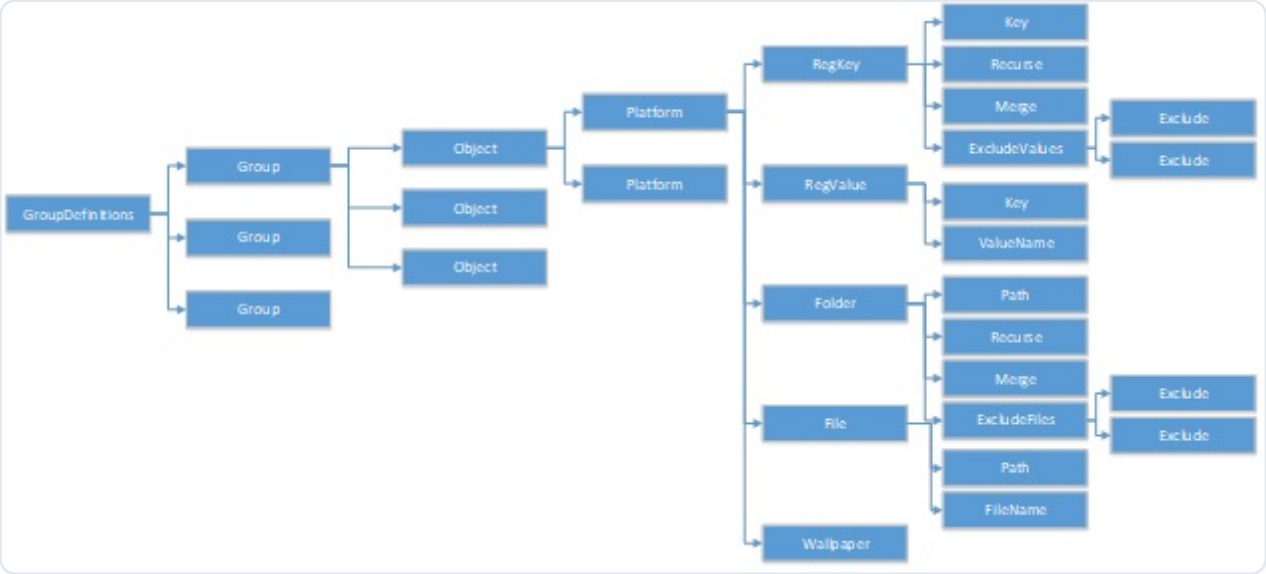
1. ユーザーは、Citrix Virtual Apps™サーバー上の公開アプリケーションとしてOffice 2010およびInternet Explorer 9にアクセスすることに慣れており、これらのアプリケーションでいくつかの設定を変更します。たとえば、Officeでメール署名を変更したり、Internet Explorerで新しいホームページを選択したりします。
2. 将来、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™で作成）が作成されますが、まだユーザーにはリリースされていません。デスクトップはWindows 7を実行し、Office 2010およびInternet Explorer 9がプリインストールされています。
3. ユーザーは、新しいデスクトップでも設定が同じであることを期待しています。このトピックの手順に従って、クロスプラットフォーム設定機能を構成します。これには、Windows Server 2008のOUで「クロスプラットフォーム設定作成のソース」を有効にすることが含まれます。

4. ユーザーが次にアプリケーションの公開バージョン（新しい仮想デスクトップではない）を実行すると、その設定はクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされます。
5. その後、新しいデスクトップがユーザーにリリースされます。ユーザーがログオンしてOfficeおよびInternet Explorerのローカルバージョンを実行すると、以前のWindows Server 2008セッションからの設定が使用されます。ユーザーが変更したメール署名とホームページは、Windows 7マシンで利用できます。
6. ユーザーは仮想デスクトップからInternet Explorerで閲覧し、ホームページを再度変更することにしました。
7. ユーザーはログオフして退社します。自宅では仮想デスクトップにアクセスできませんが、公開されているInternet Explorer 9をリモートで実行できます。彼らは、前の手順でWindows 7上に作成した最新のホームページが保持されていることを確認します。

アプリケーション定義ファイルの構造

この記事では、Profile Management アプリケーション定義ファイルの XML 構造について説明します。この構造は、アプリケーションプロファイラーとクロスプラットフォーム設定の両方に適用されます。

アーキテクチャ図



- XML宣言とエンコーディング属性

  XML宣言では、属性 \<?xml version="1.0"\> を指定する必要があります。

  Encoding="UTF-8" は推奨される属性です。

- GroupDefinitions

グループのコレクションのコンテナ。XMLドキュメントのルート要素として機能します。属性にはversionとGUIDが含まれます。これらは必須属性です。

- グループ

  サブアプリケーションの設定を定義します。属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- オブジェクト

  サブアプリケーションの1つの設定を定義します。属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- プラットフォーム

  Platformは、異なるオペレーティングシステムで異なる定義を提供します。オプションの属性OSVersionNumberを使用して、オペレーティングシステムを指定できます。属性がない場合、すべてのプラットフォームが設定の内部定義を受け入れます。Platformには、RegKey、RegValue、File、Folder、Wallpaperのいずれかの要素が含まれている必要があります。

- RegKey

  設定をレジストリ内のキーとして定義します。Key要素を含める必要があります。オプションのサブ要素として、RecurseとMergeの2つが含まれます。RecurseとMergeは、Profile Managementがキーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。もう1つのオプションのサブ要素はExcludeValuesです。ExcludeValuesは、除外できるレジストリ値を定義します。

- RegValue

  設定をレジストリ内の値として定義します。親キーのパスを指定するためにKeyを含める必要があります。

- フォルダ

  設定をフォルダとして定義します。フォルダのパスを指定するためにPathを含める必要があります。オプションのサブ要素として、`Recurse`と`Merge`があります。RecurseとMergeは、Profile Managementがフォルダをローミングする際のパフォーマンスを定義します。もう1つのオプションのサブ要素は`ExcludeFiles`で、これは除外できるファイルを定義します。

- ファイル

  設定をファイルとして定義します。親フォルダのパスを指定するためにPathを含める必要があり、ファイルの名前を指定するために`FileName`を含める必要があります。

- 壁紙

すべての壁紙設定を定義します。属性やサブ要素は必要ありません。Profile Management はこれらの設定を自動的にローミングします。

- Key

  レジストリキーのパス、または親レジストリキーのパスを指定します。KeyはRegKeyとRegValueのサブ要素です。

- ValueName

  レジストリ値の名前を指定します。RegValueのサブ要素です。

- パス

  フォルダのパスまたは親フォルダのパスを指定します。Folder と File のサブ要素です。Profile Management 変数を採用できます。

- FileName

  ファイル名を指定します。File のサブ要素です。

- 再帰

  RegKey および Folder のオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Management はキーとフォルダを再帰的にローミングします。

- マージ

  RegKey および Folder のオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Management はキーとフォルダをマージします (置換はしません)。

- ExcludeValues

  RegKey のオプションのサブ要素です。キーをローミングする際に除外できる値を指定します。

- ExcludeFiles

  Folder のオプションのサブ要素です。フォルダをローミングする際に除外できるファイルを指定します。

- 除外

  ExcludeValues および ExcludeFiles のサブ要素です。ファイルまたはレジストリ値の除外項目を指定します。

> **注**

ドキュメントに正しい構文形式が含まれていることを確認してください。Profile Management は、これらのファイルがロードされるときに、CPSValidationSchema.xsd 検証ファイルを使用してこれらのファイルをチェックします。検証ファイルは、Profile Management のインストールパスの下にあります。Profile Management は、不正なファイルを無視し、エラーメッセージをログに記録します。

サンプル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>



<!-- Copyright 2011 Citrix Systems, Inc. All Rights Reserved. -->



&lt;GroupDefinitions GUID="748E63D3-426E-4796-9C32-420B25DB2D9F"
Version="4.0.0.0">



<!-- Application Settings -->



&lt;Group GUID="0FCCCF29-0A0E-482d-A77E-3F39A8A854A6" Name="Application
Settings">



<!-- Registry Key Setting Example -->



&lt;Object GUID="637EC13C-2D47-4142-A8EB-3CEA6D53522A"
Name="Software\Application\certain key">



&lt;Platform>
```

```
&lt;RegKey>

&lt;Key>Software\Microsoft\Office\certain key&lt;/Key>

&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>

&lt;ExcludeValues>

&lt;Exclude>excluded value 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeValues>

&lt;/RegKey>

&lt;/Platform>
```

```
&lt;/Object>


<!-- Registry Value Setting Example -->


&lt;Object GUID="3C896310-10C4-4e5f-90C7-A79F4E653F81"
Name="Software\Application\certain value">


<!-- Folder Setting Example -->


&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder">


&lt;Platform>


&lt;Folder>


<!-- We can use Citrix variable if necessary -->


&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder&lt;/Path>


&lt;Merge/>


&lt;Recurse/>
```

```
&lt;ExcludeFiles>

&lt;Exclude>excluded file 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeFiles>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- File Setting Example -->

&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\file.txt">
```

```
&lt;Platform>


&lt;File>


<!-- We can use Citrix variable if necessary -->


&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application&lt;/Path>


&lt;FileName>file.txt&lt;/FileName>


&lt;/File>


&lt;/Platform>


&lt;/Object>


<!-- Setting based on different OS -->


&lt;Object GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder">


<!-- Assuming that the folder locates differently when in different
platforms -->
```

```
&lt;Platform OSVersionNumber="6.1">

<!-- Win7 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;Platform OSVersionNumber="10.0">

<!-- Win10 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder&lt;/Path>
```

```
&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

&lt;/Group>

&lt;/GroupDefinitions>
```

定義ファイルを作成する

定義ファイルは、同期するフォルダー、ファイル、またはレジストリを定義します。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。

Microsoft UE-V テンプレートジェネレーターを使用して、UE-V テンプレートファイルを作成します。

1. Microsoft のWebサイトから、Windows 10 用の **Windows Assessment and Deployment Kit** (Windows ADK) をダウンロードします。
2. Windows ADK をインストールします。**Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) Template Generator** を選択します。**インストール** をクリックします。インストールが完了したら、**完了** をクリックしてウィザードを閉じます。
3. **スタート** をクリックし、**Microsoft User Experience Virtualization** をクリックし、次に **Microsoft User Experience Virtualization Generator** をクリックします。
4. **設定場所テンプレートの作成** をクリックします。

5. ウィザードに従って、アプリケーション関連のパラメーターを指定します。**次へ** をクリックして続行します。

   メモ帳を例にとります。ファイルパスを `C:\Windows\System32\notepad.exe` として指定します。

6. 指定したアプリケーションが起動したら、閉じます。
7. プロセスが完了したら、**次へ** をクリックして続行します。
8. 左ペインで **場所の確認** を選択します。標準および非標準のレジストリ/ファイルのリストにあるすべてのチェックボックスを選択します。
9. **作成** をクリックして、テンプレート XML ファイルを保存します。

   メモ帳を例にとります。テンプレート XML ファイルを **Notepad.xml** として保存します。

> **注**
>
> 1つの UE-V テンプレートファイルに複数のアプリケーションが定義されている場合があります。

> UE-V テンプレートファイルをクロスプラットフォーム定義ファイルに変換するには、次の手順を実行します。

1. 変換ツールをこちらからダウンロードします。
2. コマンドプロンプトから、定義ファイル内のすべてのアプリケーション名を表示するには、コマンド **convert show filename** を実行します。
3. UE-Vテンプレートファイルを定義ファイルに変換するには、次のコマンドを実行します。

   convert source destination \[/Index\] \[/V\]

   \[/Index\]: インデックス番号で指定されたアプリケーションのみを変換します。

   既定では、このツールはUE-Vテンプレート内のすべてのアプリケーションを変換します。

   \[/V\]: 変換に関する詳細情報を表示します。

クロスプラットフォーム設定の場合、他のオペレーティングシステムに対して前述の手順を繰り返し、定義ファイルを1つにマージする必要があります。ファイルをマージするには、**OSVersionNumber** 属性を持つ **Platform** 要素を使用できます。Windows 7では、設定フォルダー

は **`AppData\Application\Win7\folder`** にあります。Windows 10では、**`AppData\Application\Win10\folder`** にあります。

Windows 7で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>



                    <Recurse/>



                </Folder>
```

```
            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

Windows 10で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>
```

```
                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

        </Object>

    </Group>

</GroupDefinitions>
```

マージ後、定義ファイルの内容は次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>

<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">

    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">
```

```
        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">

            <!-- Assuming that the folder locates differently when in
different platforms -->

            <Platform OSVersionNumber="6.1"> <!-- Win7 -->

                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

            <Platform OSVersionNumber="10.0"> <!-- Win10 -->

                <Folder>
```

```
                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

        </Object>

    </Group>

</GroupDefinitions>
```

クロスプラットフォーム設定の構成については、「クロスプラットフォーム設定の構成」を参照してください。

定義ファイルのアーキテクチャについては、「アプリケーション定義ファイルの構造」を参照してください。

アプリケーションプロファイラーの有効化については、「アプリケーションプロファイラーの有効化」を参照してください。

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。Windows 2003システムへの一

般的な投資を考慮すると、かなりの共存期間が予想されます。この機能は、移行と継続的な共存の両方をサポートすることが期待されます。

このケーススタディは、既存のWindows 7およびWindows 2008環境でOffice 2007が実行されている状態から始まり、Windows 8の共有プロビジョニング済み仮想デスクトップを追加します。

このケーススタディは以下で構成されます。

- 初期構成
- 新しいサイトの計画
- 計画の実行
- その他の考慮事項

初期設定

次の図は、このケーススタディにおける環境構成を示しています。

グラフィック(/en-us/profile-management/2303/media/upm-cross-platform-settings-case-study-initial-1.png)

Windows 7 マシンは、Citrix XenApp 6.5 で公開されている Office 2007 を使用するように構成されています。

ドメインには、Windows 2008レベルでActive Directoryを実行しているWindows 2008ドメインコントローラーが含まれています。すべてのマシンは2k8_FarmというOUに属しており、Profile Management 5.0の.admファイルは2k8_Farm_POというGPOに追加されています。以下のポリシーが構成されています。

ポリシー	値
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`
プロファイルストリーミング	有効
アクティブライトバック	有効

システム環境変数`%ProfVer%`を設定するマシンログオンスクリプトが、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%
Windows 2008上のXenApp®サーバー	Win2008
Windows 7デスクトップ	Win7

例えば、ユーザーjohn.smithは、Windows 7デスクトップ用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win7`に、Citrix仮想アプリサーバー用に`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win2008`にプロファイルを持っています。デスクトップとサーバーで個別のプロファイルが維持されます。管理者は、ワークステーションとマルチセッションオペレーティングシステム間でプロファイルがローミングする際に問題が発生することを知っており、慎重に対応しています。

フォルダーリダイレクトは、**ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダー リダイレクト** のグループポリシーを使用して設定されます。

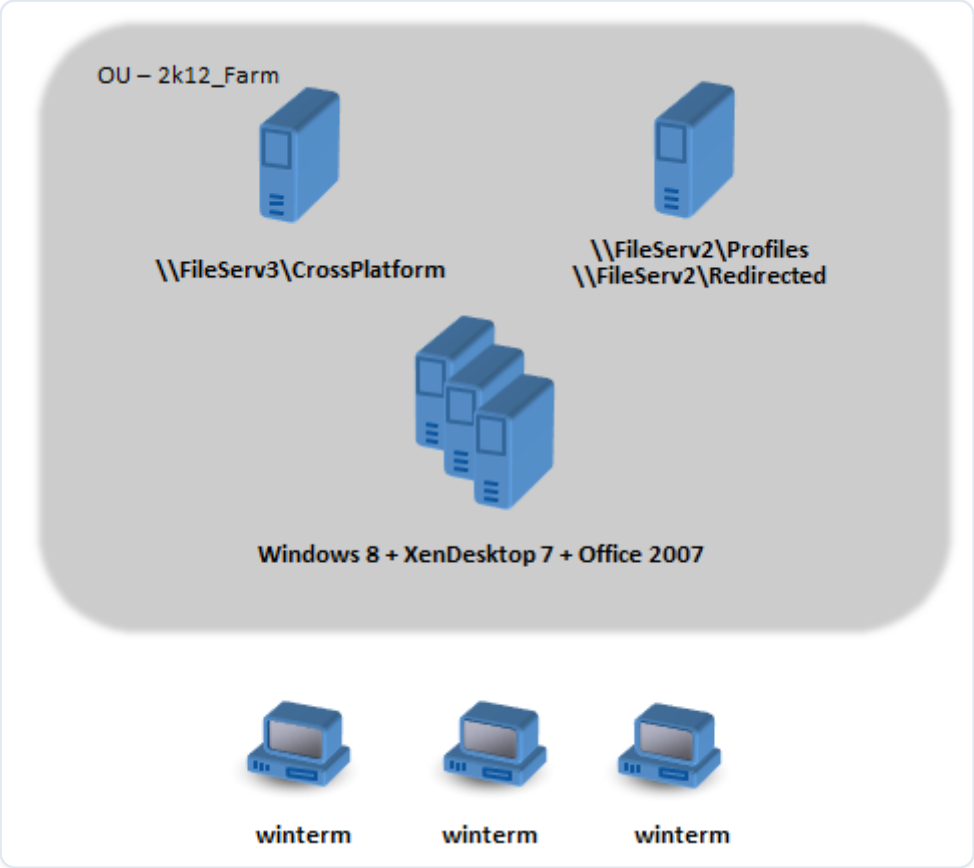
新しいサイトを計画する

ネットワーク管理者は、Windows Server 2012 ドメインコントローラーと Active Directory 2012 に基づく新しい環境のために、新しいドメインをセットアップすることを決定しました。最終的には、Windows Server 2012 で仮想アプリを実行する新しい仮想アプリサイトが計画されています。しかし、今のところ、新しいドメインは Windows 7 仮想デスクトップサイトのみに使用されています。

このサイトは、Citrix Hypervisor™ 環境でホストされ、Windows ターミナルからアクセスされる共有の Windows 7 ベースイメージに基づいています。Office 2007 はベースイメージに含まれています。

両方のドメインのユーザーが新しいドメインを使用することが想定されているため、OldDomain と NewDomain の間に双方向の信頼関係が設定されます。両方のドメインは同じ AD フォレストに属している必要があります。

次の図は、新しい仮想デスクトップサイトの構成を示しています。



管理

重要: 次のポリシーは通常、構成を必要としません。Citrix®担当者から指示がない限り、デフォルト設定のままにしてください。

ポリシー: ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数

このポリシーを有効にする必要性はほとんどありません。

ログオフ中にロックされたファイルがある場合、Profile Management Serviceは指定された回数だけファイルへのアクセスを試行し、それらをユーザーストアにコピーし直します。しかし通常、Serviceはコピー操作を成功させるためにファイルを読み取るだけであり（書き込みはしません）、ロックされたファイルが存在する場合、Serviceはローカルプロファイルを削除せず、「古い」状態のままにします（適切なポリシーが有効になっている限り）。

このポリシーを有効にしないことをお勧めします。

用語集

この記事では、Profile Managementソフトウェアおよびドキュメントで使用される用語と定義を一覧表示します。他のCitrix®ソフトウェアで使用されるプロファイル関連の用語も含まれていま

す。Windowsユーザープロファイルに関連する他の概念を理解するには、MicrosoftのWebサイトをご覧ください。

用語	定義
ベースプラットフォーム	クロスプラットフォーム設定ストアを参照してください。
ベースプロファイル	ベースプロファイルは、ユーザーストア内のプロファイルへのUNCパスによって定義されます。クロスプラットフォーム設定機能が使用されている場合、レジストリ設定とファイルは、ベースプロファイルのサブセットからプラットフォーム間で共有できます。このサブセットはクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされ、そこから移行またはローミングのターゲットとして使用されるプロファイルに追加されます。クロスプラットフォーム設定ストアにはベースプロファイルのサブセットが含まれていますが、これ（およびターゲットプロファイル）は常に完全なプロファイルとして保存されます。また、必要に応じて、標準のWindowsローミングプロファイルまたはローカルプロファイルとして使用できます。ただし、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が使用されている場合、ベースプロファイルは一時的に不完全になる可能性があることに注意してください。一部のファイルは、ユーザーがログオフするまで保留領域に存在する可能性があります。ローミングシナリオでベースプロファイルを定義する際の考慮事項については、「ローミング」を参照してください。
キャッシュ	キャッシュと同期という用語は、ユーザーストアからファイルをダウンロードする、またはユーザーストアにファイルをアップロードする行為を指します。フェッチという用語はより具体的で、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が、ログオン後いつでもユーザーが必要とするときに、ユーザーストアからファイ

用語	定義
	ルのサブセットをダウンロードする方法を指します。
Citrix強制プロファイル、Citrixローミングプロファイル、Citrixユーザープロファイル	Citrixユーザープロファイルは、Profile Managementがインストールされ有効になっているときにユーザーが受け取るプロファイルの総称です。Citrixユーザープロファイルには、Citrixローミングプロファイルと Citrix強制プロファイルの2種類があります。Citrixローミングプロファイルは、ユーザーが日常業務でカスタマイズし、ログオフ時にユーザーストアに保存され、Profile Managementポリシーによって処理されるファイル、フォルダー、およびレジストリ設定の標準的なコレクションです。Citrix強制プロファイルは、Profile Managementがそれらを処理する方法においてCitrixローミングプロファイルに似ています。しかし、ログオフ時にユーザーストアに変更は保存されません。ログオン時には、強制プロファイルの新しいコピーがロードされます。Citrixユーザープロファイルは、Microsoftローカルプロファイル、Microsoftローミングプロファイル、またはMicrosoft強制プロファイルとは異なります。
コンピューター	これらのProfile Managementトピックで使用される「コンピューター」という一般的な用語は、Citrix Profile Management Serviceがインストールされている任意のコンピューターを指すことができます。これは、ユーザーデバイス、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™仮想マシンからプロビジョニングされた可能性のあるもの）、または公開アプリケーションをホストするCitrix Virtual Appsサーバーである場合があります。
クロスプラットフォーム定義ファイル	このファイルは、クロスプラットフォーム設定機能を動作させるために必要な情報を含む、Profile Managementに付属の.xmlファイルです。サポートされているアプリケーションごとに1つのファイルがあります。

用語	定義
クロスプラットフォーム設定ストア	この場所はユーザー ストアとは別で、クロスプラットフォーム設定機能が構成されると、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。どのプラットフォームのプロファイル データを使用してクロスプラットフォーム設定ストアをシードするかを選択します。それがベース プラットフォームです。
フェッチ	キャッシュを参照してください。
レガシーアプリケーション	レガシーアプリケーションは、設定を非標準の場所に保存するため、適切に動作しないアプリケーションです。これには、一時的なアプリケーションデータをユーザープロファイルに保存し、それによってプロファイルの肥大化を引き起こすシステムが含まれます。
移行	移行とは、プロファイルをあるプラットフォームから別のプラットフォームへ計画的に一方向で移動することです（例: Windows XPからWindows 7へ）。
プロファイルの肥大化	Windowsユーザープロファイルは、一時ファイルが削除されないとサイズが増加する可能性があります。これはログオンの遅延を引き起こし、プロファイルの肥大化と呼ばれます。
ローミング	ローミングとは、複数のコンピューターまたはセッションから異なるベースプロファイルを使用することです（例: Windows 2008 R2を実行しているコンピューター用のベースプロファイルと、Windows 7用の2番目のベースプロファイル）。ユーザーは、異なるベースプロファイルを持つコンピューターまたはセッション間を行き来するときにローミングします。組織単位（OU）の構成方法によっては、ベースプロファイルをプラットフォーム間で共有できます。たとえば、Windows 2008 R2とWindows 7の両方のOUで同じプロファイルを使用できます。この場合、同じベースプロファイルが共有されているため、ユーザーは

用語	定義
	ローミングしません。ベースプロファイルは、同じプロファイルバージョン（バージョン1またはバージョン2のプロファイル）を持つオペレーティングシステムでのみ共有できます。バージョン1とバージョン2の両方のプロファイルがアクティブな場合、ユーザーは常にローミングします。
同期	キャッシュを参照してください。
ユーザー ストア	ユーザー ストアは、Citrixユーザープロファイルを保存するための中央のネットワーク上の場所です。クロスプラットフォーム設定ストアも参照してください。
vディスク、パーソナル vディスク	vDiskは、Citrix Provisioning™ Servicesによってマスターイメージから作成される仮想ディスクです。Personal vDiskは、Citrix仮想デスクトップがプロファイル、ユーザーがインストールしたアプリケーション、部門別アプリケーション、およびユーザーデータを保存するために使用するディスクです。Personal vDiskは、オペレーティングシステム、レジストリ、および基本アプリケーションに使用されるディスクとは別個のものです。
バージョン1プロファイル、バージョン2プロファイル	Microsoft Windows XPおよびWindows Server 2003のプロファイルは、バージョン1プロファイルとして知られています。Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、およびWindows Server 2008 R2のプロファイルは、バージョン2プロファイルとして知られています。バージョン1プロファイルとバージョン2プロファイルは異なる名前空間を持ち、これはそれらの構成のいくつかの側面に影響を与えます。

プロファイルについて

Windowsユーザープロファイルは、ユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定のコレクションです。これらの設定は、管理構成に応じて、ユーザーがカスタマイズできます。カスタマイズできる設定の例を次に示します。

- 壁紙やスクリーンセーバーなどのデスクトップ設定
- ショートカットとスタートメニューの設定
- Internet Explorerのお気に入りおよびホームページ
- Microsoft Outlookの署名
- プリンタ

一部のユーザー設定とデータは、フォルダーリダイレクトによってリダイレクトできます。ただし、フォルダーリダイレクトを使用しない場合、これらの設定はユーザープロファイル内に保存されます。

プロファイルの種類

Windowsには、いくつかの種類のプロファイルが含まれています。

プロファイルの種類	保存場所	構成場所	アプリケーション	変更を保存しますか？
ローカル	ローカルデバイス	ローカルデバイス	ローカルデバイスのみ	はい
ローミング	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	はい
強制 (強制ローミング)	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	いいえ
一時的	該当なし	該当なし	ローカルデバイスのみ	いいえ

一時プロファイルは、特定のプロファイルタイプを割り当てられない場合にのみ割り当てられます。強制プロファイルを除き、通常、各ユーザーには個別のプロファイルが存在します。強制プロファイルでは、ユーザーはカスタマイズを保存できません。

Remote Desktop Servicesユーザーの場合、Remote Desktop Servicesセッションとローカルセッションで同じプロファイルがユーザーに割り当てられた場合に発生する可能性のある問題を回避するために、特定のローミングプロファイルまたは強制プロファイルを割り当てることができます。

プロファイルのバージョン

Microsoft Windowsユーザープロファイルのバージョンは次のとおりです。

- バージョン 6 — ウィンドウズ 11、ウィンドウズ 10 1607 以降、ウィンドウズ サーバー 2016、ウィンドウズ サーバー 2019、および ウィンドウズ サーバー 2022
- バージョン 5 – Windows 10 RTM
- バージョン 4 – Windows 8.1および Windows Server 2012 R2
- バージョン 3 - Windows 8および Windows Server 2012
- バージョン 2 — ウィンドウズ Vista、ウィンドウズ 7、ウィンドウズ サーバー 2008、およびウィンドウズ サーバー 2008 R2
- バージョン 1 – Windows Vista および Windows Server 2008 以前のオペレーティングシステム

Microsoft のバージョン 1 プロファイルのフォルダー構造 (または名前空間) は、ほとんど互換性があります。たとえば、Windows XP および Windows Server 2003 のフォルダーはほとんど同じです。同様に、バージョン 2 プロファイルの構造もほとんど互換性があります。

しかし、バージョン 1 とそれ以降のプロファイルでは名前空間が異なります。このフォルダー構造は、ユーザーおよびアプリケーションデータ用に分離されたユーザー固有のフォルダーを提供するために、後のオペレーティングシステムで変更されました。バージョン 1 プロファイルは、ルートフォルダーである **Documents and Settings** にデータを保存します。バージョン 2 プロファイルは、より直感的な名前のフォルダーである **Users** にデータを保存します。たとえば、Windows Vista の **AppData\Local** のフォルダーの内容は、Windows XP の `Documents and Settings\<username>\Local Settings\Application Data` の内容と同じです。

バージョン 1 とそれ以降のプロファイルの違いに関する詳細については、「Managing Roaming User Data Deployment Guide」を参照してください。

インストールとセットアップ

この記事では、インストーラーを使用してProfile Managementをインストールするための一般的なワークフローについて説明します。また、Profile Managementをセットアップするためのベストプラクティスも提供します。

Profile Managementをインストールするための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. インストールパッケージをダウンロードする
2. Profile Managementをインストールする

Profile Managementをセットアップする際は、以下のベストプラクティスを参照してください。

- ローカルGPOでProfile Managementをテストする
- ユーザーストアを作成する

デプロイの計画

Profile Managementの展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。自動構成機能は、Citrix仮想デスクトップの展開における意思決定の一部を簡素化します。任意の展開でこの重要なタスクを実行するためのガイドとして、「構成の決定」を参照してください。

構成を決定し、それをレビューおよびテストした後、一般的な展開は次の要素で構成されます。

1. ユーザーストアの作成
2. Profile Management のインストール
3. Profile Management の有効化

.iniファイルを使用したパイロットスタディの計画

以下の情報は、パイロットスタディまたは評価中にProfile Managementの.iniファイルを使用する際に役立つことを目的としています。

重要: 評価目的で.iniファイル (UPMPolicyDefaults_all.ini) を使用する場合は、実稼働環境でグループポリシー (GP) の使用に切り替える前に、ファイルの名前を変更してください。たとえば、ファイル名をUPMPolicyDefaults_all_old.iniに変更します。ファイルの名前を変更することで、実稼働設定のみが適用され、評価中に指定した設定が使用されないことを確認できます。

ファイルの名前が変更されていない場合、Profile Managementはグループポリシーで構成されていない設定がないかファイルを調べ、見つかった非デフォルト設定を適用します。したがって、不要な設定が導入されるリスクを排除するには、実稼働環境で使用するすべての設定を.iniファイルではなくグループポリシーを使用して構成してください。

.iniファイルには.admファイルおよび.admxファイルと同じポリシーが含まれていますが、ポリシーの名前は異なります。GPの名前を熟知しており、.iniファイルを使用したパイロットスタディ

を計画している場合は、「Profile Managementポリシー」の表を使用して名前を比較してください。

.iniファイルの展開の詳細については、「Profile Managementのアップグレード」および「ローカルGPOを使用したProfile Managementのテスト」を参照してください。

ベストプラクティス

Windowsユーザープロファイルは、特定のユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定の集合です。ユーザーは、管理構成に応じてこれらの設定をカスタマイズできます。

1つの場所からProfile Managementを構成する

Profile Managementを構成できる場所は3つあります。Profile Managementを構成するには、次のいずれかの方法を使用します。

- アクティブディレクトリのジーピーオー
- Citrix Studioのポリシー
- ワークスペース環境管理™

Profile Managementを構成するには、3つの場所のうち1つだけを選択することをお勧めします。

このビデオを見て詳細を確認してください:



Cookieの処理

Profile Managementは、Internet Explorer 10およびInternet Explorer 11の古いCookieの削除をサポートしています。**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用して、古いCookieを削除し、Cookieフォルダーの肥大化を防ぐことができます。さらに、ミラーリングするフォルダーのリストに次のフォルダーを追加します。

- `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies`
- `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache`
- `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`

アウトルックとオフィス365

Microsoftは、一貫したオンラインおよびオフラインのMicrosoft Outlookエクスペリエンスを有効にするために、キャッシュされたExchangeモードを推奨しています。キャッシュされたExchangeモードは、Microsoft Outlookクライアントからオンにできます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/exchange/outlook/cached-exchange-mode>`を参照してください。

キャッシュされたExchangeモードを使用すると、ユーザーのExchangeメールボックスのコピーが常にオフラインOutlookデータファイル（*.ost）に存在します。このファイルは大きくなる可能性があります。

Microsoft Outlookデータをローカルまたは共有ドライブに保存することは避けることをお勧めします。代わりに、ネイティブOutlook検索エクスペリエンスを有効にする機能を使用してください。この機能を使用すると、オフラインOutlookデータファイル（*.ost）とユーザー固有のMicrosoft検索データベースがユーザープロファイルとともにローミングされます。この機能により、Microsoft Outlookでメールを検索する際のユーザーエクスペリエンスが向上します。この機能の使用方法の詳細については、ネイティブOutlook検索エクスペリエンスを有効にするを参照してください。

Microsoft資格情報ローミングが有効な場合のプロファイルストリーミング

既定では、構成ファイルの次のフォルダーはプロファイルストリーミングから除外されます。

- `AppData\Local\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Protect`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates`

プロファイルストリーミングの除外を手動で構成する場合は、上記のフォルダーを「プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ」に追加してください。

スタートメニューのローミング

スタートメニューにピン留めされたアプリケーションは、数回のログオン後に以下のオペレーティングシステムで消えることがあります。

- Windows 10 バージョン 1607 以降、32ビットおよび64ビット
- Windows Server 2016 Standard および `Datacenter` エディション

- Windows Server 2019 Standard および `Datacenter` エディション
- 仮想デスクトップ向け Windows 10 Enterprise

> **注:**
>
> Windows 10 と Windows Server 2016/2019 の両方に同じポリシーを使用することはできません。VDI および共有デスクトッププラットフォームには個別のポリシーを構成するか、Profile Management 2103 以降を使用している場合は自動構成を使用してください。

スタートメニューのローミングを自動的に有効にする

Profile Management 2103 以降を使用している場合、スタートメニューのローミングは自動的に有効になります。

Profile Management 2106 以降を使用している場合は、**Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**の下にある**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にすることをお勧めします。この設定により、フォルダーミラーリング機能のユーザーログオンおよびログオフエクスペリエンスが向上します。詳細については、「フォルダーミラーリングの高速化」を参照してください。

Windows 10 でスタートメニューのローミングを手動で有効にする

Profile Management 2012 以前を使用している場合は、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**に移動します。
2. 「**ミラーリングするフォルダー**」ポリシーを「**有効**」に設定し、次のフォルダーをミラーリングするフォルダーのリストに追加します。
   - `Appdata\Local\Packages`
   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`
   - `!ctx_localappdata!\TileDataLayer` (Windows 10 バージョン 1607 以前にのみ適用)

> **注:**
>
> Citrix Profile Management 1912 以降、「**デフォルトの除外リスト – ディレクトリ**」または「**除外リスト – ディレクトリ**」に追加されたフォルダーは、「**ミラーリングするフォルダー**」に追加しても同期できません。「**ミラーリングするフォルダー**」に追加する前に、`appdata\local\packages` フォルダーを除外リストから削除してください。

3. 「**同期するファイル**」ポリシーを「**有効**」に設定し、次のファイルを同期するファイルのリストに追加します。
    - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

Windows Server でスタートメニューのローミングを手動で有効にする

Profile Management 2012 以前を使用している場合は、次の手順に従ってください。

1. **Profile Management \> 詳細設定** に移動し、「**自動構成を無効にする**」ポリシーを「**有効**」に設定します。
2. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期** に移動します。
3. 「**ミラーリングするフォルダー**」ポリシーを「**有効**」に設定し、次のフォルダーをミラーリングするフォルダーのリストに追加します。
    - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`
4. 「**除外リスト – ディレクトリ**」ポリシーを「**有効**」に設定し、次のフォルダーを除外するフォルダーのリストに追加します。
    - `Appdata\Local\Packages`
5. 「**除外リスト – ファイル**」ポリシーを「**有効**」に設定し、次のファイルを除外するファイルのリストに追加します。
    - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

プロファイルを効率的に同期する

不十分に同期されたユーザープロファイルは、ログオンの遅延、ユーザー設定の損失、プロファイルの破損につながる可能性があります。また、過剰な管理作業が必要になることもあります。プロファイルを効率的に同期するには、この記事で説明されている推奨事項に従ってください。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、Profile Management とともに使用できる Microsoft Windows の機能です。フォルダーリダイレクトは、プロファイルソリューションを成功させる上で重要な役割を果たします。

フォルダーリダイレクトを使用するには、関連するユーザーが Profile Management が管理する OU にいることを確認してください。Active Directory で GPO を使用してフォルダーリダイレクトを構成することをお勧めします。

たとえば、**ユーザーの構成 \> 管理用テンプレート \> 従来の管理用テンプレート (ADM) \> Citrix \> Profile Management \> フォルダーリダイレクト**の下にある対応するポリシーを有効にすることで、次のフォルダーをリダイレクトできます。

ドキュメント、**ピクチャ**、**ミュージック**、**ビデオ**、**お気に入り**、**連絡先**、**ダウンロード**、**リンク**、**検索**、および**保存されたゲーム**

注:

- フォルダーリダイレクトにより、ユーザーがログオンするたびにこれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなり、ユーザーのログオンが高速化されます。
- **AppData (Roaming)** および **スタートメニュー** の **フォルダーリダイレクト** を有効にしないことを強くお勧めします。アプリケーションやスタートメニューで問題が発生する可能性があるためです。
- **デスクトップ** フォルダーが大きすぎる場合はリダイレクトしないでください。そうしないと、ユーザーがログオンしたときにブラックスクリーンが発生する可能性があります。

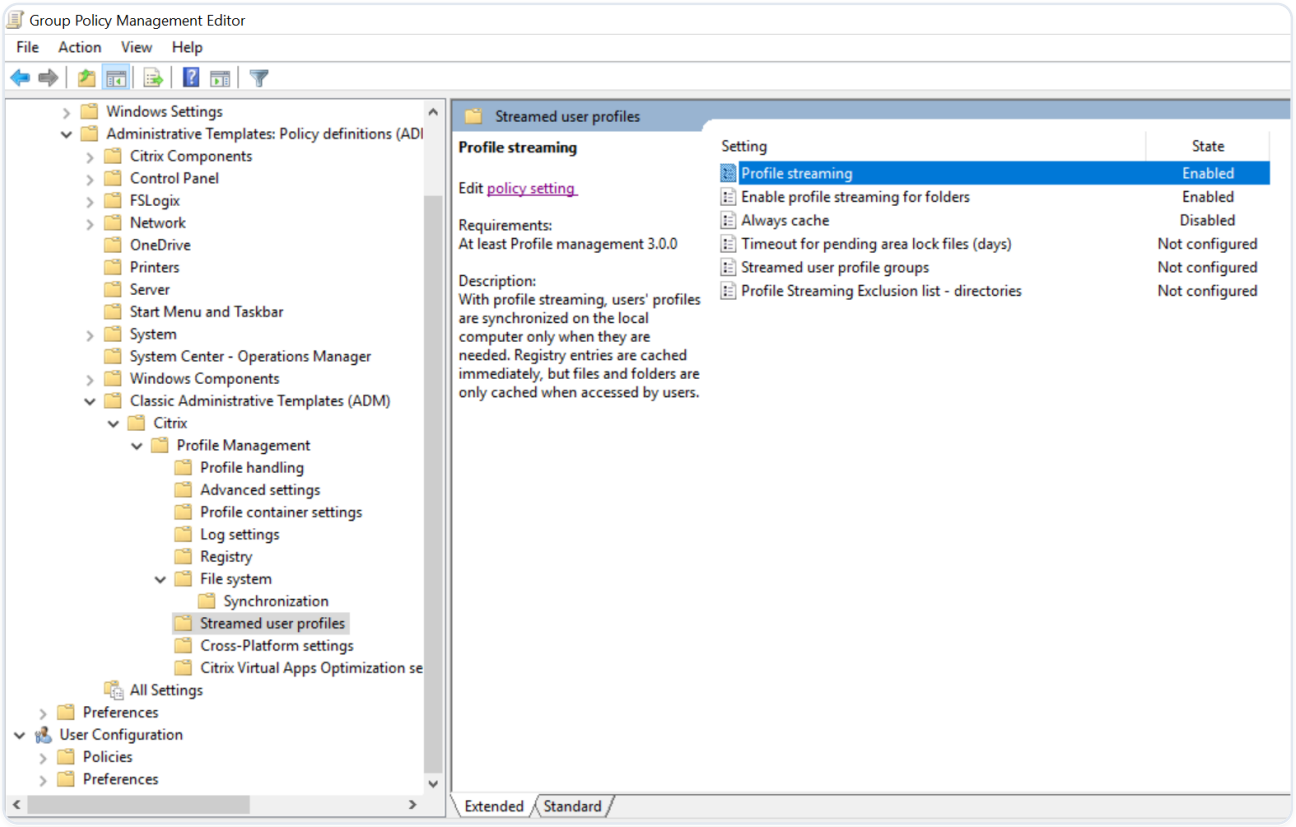
ファイルとフォルダーを含める/除外する

Profile Managementでは、包含リストと除外リストをカスタマイズすることで、同期したくないファイルとフォルダーを指定できます。プロファイルの肥大化を避けるため、サードパーティアプリケーションのキャッシュファイル（例：Appdata\Local\Google\Chrome\UserData\Default\Cache にあるChromeキャッシュファイル）を除外してください。詳細については、「アイテムの包含と除外」を参照してください。

プロファイルストリーミング

Profile Managementは、ユーザーがログオン後にアクセスした場合にのみ、プロファイル内のファイルをユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチします。これにより、ログオンプロセスが高速化され、プロファイルサイズが削減されます。たとえば、ファイルが使用されていない場合、ローカルプロファイルフォルダーにコピーされることはありません。また、**常にキャッシュ** ポリシーを使用して、ストリーミングされるファイルのサイズの下限を設定することもできます。このサイズ以上のファイルは、ログオン後できるだけ早くローカルにキャッシュされます。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする および **プロファイルストリーミング** の両方のポリシーを有効にすることで、アクセスされていないフォルダーをフェッチする必要がなくなります。



アクティブライトバックとレジストリ

この機能は、特に変更されたファイルが多い場合に、プロファイルストリーミング機能と比較してログオフ時間を短縮します。この機能は、セッション中、ログオフ前に、変更されたファイルとフォルダー（ただしレジストリエントリは除く）をユーザー ストアに同期します。

Internet Explorer 10/11 クッキーのサポート

Profile Management 5.0以降では、Internet Explorer 10およびInternet Explorer 11を使用する際のCookieの処理が強化されています。Cookieフォルダーの肥大化を避けるため、「ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する」ポリシーを使用して古いCookieを削除してください。ミラーリングするフォルダーのリストに次のフォルダーを追加できます。

- AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies
- AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache
- AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies

詳細については、ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理するを参照してください。

トラブルシューティングのベストプラクティス

潜在的な構成エラーを特定するには、常にProfile Management構成チェッカーツール（UPMConfigCheck）を使用してください。

Profile Managementが機能しない場合は、まず構成されているユーザー ストアにアクセスできるかどうかを確認してください。

Windows 10のスタートメニューのカスタマイズ

部分的なロックダウンカスタマイズレイアウトを使用し、グループポリシーを通じてカスタマイズを展開することをお勧めします。スタートメニューのレイアウトのカスタマイズに関する詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/customize/desktop/customize-start-layout>`を参照してください。

セキュリティ保護

このトピックでは、Profile Management を保護するための推奨されるベストプラクティスについて説明します。一般に、Citrix® ユーザープロファイルデータへの不要なアクセスを防ぐため、ユーザー ストアが配置されているサーバーを保護してください。

安全なユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザープロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高レベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー ストアへのアクセスを構成する際には、Citrix ユーザープロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

権限

Citrix は、ユーザー ストアとクロスプラットフォーム設定ストアに対して、以下の権限をテストし、推奨しています。

- 共有権限: ユーザー ストアのルートフォルダーに対するフルコントロール
- Microsoft が現在推奨する以下の NTFS 権限:

グループまたはユーザー名	権限	適用先
作成者/所有者	フルコントロール	サブフォルダーとファイルのみ

グループまたはユーザー名	権限	適用先
Profile Management の制御下にあるアカウントのグループ	フォルダーの一覧表示/データの読み取りとフォルダーの作成/データの追加	このフォルダーのみ
ローカルシステム	フルコントロール	このフォルダー、サブフォルダー、およびファイル

継承が無効になっていない場合、これらの権限により、アカウントはストアにアクセスできます。また、アカウントはユーザープロファイル用のサブフォルダーを作成し、必要な読み取りおよび書き込み操作を実行できます。

この最小限の権限に加えて、サブフォルダーとファイルのみを完全に制御できる管理者グループを作成することで、管理を簡素化することもできます。そうすることで、プロファイルの削除（一般的なトラブルシューティングタスク）がそのグループのメンバーにとって容易になります。

テンプレートプロファイルを使用する場合、ユーザーはそれに対する読み取りアクセス権を必要とします。

アクセス制御リスト (ACL)

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合は、定義ファイルを保存するフォルダーにACLを次のように設定します。認証済みユーザーには読み取りアクセス権、管理者には読み取り/書き込みアクセス権。

Windows roaming profiles automatically remove administrator privileges from the folders containing profile data on the network. Profile Management does not automatically remove these privileges from folders in the user store. Depending on your organization’s security policies, you can do so manually.

Note: If an application modifies the ACL of a file in the user's profile, Profile Management does not replicate those changes in the user store. It is consistent with the behavior of Windows roaming profiles.

プロファイルストリーミングとエンタープライズウイルス対策製品

The streamed user profiles feature of Citrix Profile Management uses advanced NTFS features to simulate the presence of files missing from users' profiles. In that respect, the feature is similar to a class of products known as Hierarchical Storage Managers (HSMs). HSMs are typically used to archive infrequently used files on to slow mass-storage devices such as magnetic tape or

rewritable optical storage. When such files are required, HSM drivers intercept the first file request, suspend the process making the request, fetch the file from the archive storage. And then allow the file request to continue. Given this similarity, the streamed user profiles driver, upmjit.sys, is in fact defined as an HSM driver.

このような環境では、ウイルス対策製品がHSMドライバーを認識するように構成する必要があり、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーも例外ではありません。最も高度な脅威から防御するために、ウイルス対策製品はデバイスドライバーレベルで一部の機能を実行する必要があります。そして、HSMドライバーと同様に、ファイル要求を傍受し、元のプロセスを一時停止し、ファイルをスキャンして再開するという方法で動作します。

ウイルス対策プログラムを誤って構成して、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーなどのHSMを中断させ、ユーザーストアからファイルをフェッチできないようにしたり、ログオンがハングアップしたりすることは比較的簡単です。

幸いなことに、エンタープライズ向けウイルス対策製品は、HSMのような高度なストレージ製品の可能性を念頭に置いて作成されています。そして、HSMがその作業を完了するまでスキャンを遅延するように構成できます。家庭用ウイルス対策製品はこの点であまり高度ではありません。そのため、家庭用およびSoHo（小規模オフィス/ホームオフィス）のウイルス対策製品は、ストリーミングされたユーザープロファイルではサポートされていません。

ストリーミングされたユーザープロファイルで使用するためにウイルス対策製品を構成するには、次のいずれかの製品機能を探してください。機能名はあくまで目安です。

- **信頼されたプロセスリスト**。ウイルス対策製品にHSMを識別させ、HSMがファイル取得プロセスを完了できるようにします。ウイルス対策製品は、信頼されていないプロセスによってファイルが最初にアクセスされたときにファイルをスキャンします。
- **開く操作またはステータスチェック操作ではスキャンしない**。データがアクセスされたとき（たとえば、ファイルが実行または作成されたとき）にのみファイルをスキャンするようにウイルス対策製品を構成します。その他の種類のファイルアクセス（たとえば、ファイルが開かれたときやそのステータスがチェックされたとき）は、ウイルス対策製品によって無視されます。HSMは通常、ファイルを開く操作やファイルステータスチェック操作に応じてアクティブ化されるため、これらの操作でのウイルススキャンを無効にすると、潜在的な競合が解消されます。

Citrixは、主要なエンタープライズ向けウイルス対策製品のバージョンでストリーミングされたユーザープロファイルをテストし、Profile Managementとの互換性を確保しています。これらのバージョンには以下が含まれます。

- マカフィー ウイルススキャン エンタープライズ 8.7

- シマンテック エンドポイント プロテクション 11.0
- トレンドマイクロ オフィススキャン 10

これらの製品の以前のバージョンはテストされていません。

他のベンダーのエンタープライズ向けウイルス対策製品を使用している場合は、それがHSM対応であることを確認してください。スキャンを実行する前にHSM操作を完了できるように構成できます。

一部のウイルス対策製品では、管理者が読み取り時にスキャンするか、書き込み時にスキャンするかを選択できます。この選択は、パフォーマンスとセキュリティのバランスを取るものです。ストリーミングされたユーザープロファイル機能は、この選択の影響を受けません。

ストリーミングおよびウイルス対策展開におけるProfile Managementのトラブルシューティング

ログオンがハングしたり、時間がかかったりするなどの問題が発生した場合、Profile Managementとエンタープライズ向けウイルス対策製品の間で構成ミスがある可能性があります。次の手順をこの順序で試してください。

1. Profile Managementの最新バージョンを使用していることを確認してください。問題はすでに発見され、修正されている可能性があります。
2. Profile Managementサービス (UserProfileManager.exe) を、エンタープライズ向けウイルス対策製品の信頼されたプロセスリストに追加します。
3. 開く、作成、復元、ステータスチェックなどのHSM操作では、ウイルスチェックを無効にします。読み取りまたは書き込み操作でのみウイルスチェックを実行します。
4. その他の高度なウイルスチェック機能を無効にします。たとえば、ウイルス対策製品は、実際のファイルの種類を特定するために、ファイルの最初の数ブロックをクイックスキャンする場合があります。これらのチェックは、ファイルの内容を宣言されたファイルの種類と照合しますが、HSM操作を妨げる可能性があります。
5. Windows検索インデックスサービスを無効にします。少なくとも、プロファイルがローカルドライブに保存されているフォルダーについては無効にしてください。このサービスは不要なHSM取得を引き起こし、ストリーミングされたユーザープロファイルとエンタープライズウイルス対策製品との間で競合を引き起こすことが確認されています。

これらの手順のいずれも機能しない場合は、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にします（**Profile streaming**設定を無効にすることで）。それで機能する場合は、機能を再度有効にし、エンタープライズウイルス対策製品を無効にします。それでも機能する場合は、機能しな

いケースのProfile Management診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。彼らはエンタープライズウイルス対策製品の正確なバージョンを知る必要があります。

Profile Managementの使用を継続するには、エンタープライズウイルス対策を再度有効にし、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にすることを忘れないでください。この構成では、Profile Managementの他の機能は引き続き機能します。プロファイルのストリーミングのみが無効になります。

システム要件

ソフトウェア要件

Profile Managementを実行するシステムは、以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づいている必要があります。

- **デスクトップ** - Microsoft Windows 11、Windows 10、Windows 8.1、および Windows 7 Service Pack 1。

  Citrix virtual desktops™環境では、Windowsストアアプリ（UWPアプリとも呼ばれる）がサポートされています。

- **サーバー** - Windows Server 2022、Windows Server 2019、Windows Server 2016、Windows Server 2012 R2、Windows Server 2012、および Windows Server 2008 R2 Service Pack 1 のスタンダード および データセンター エディション。

拡張保護モード（EPM）が有効な場合、Windows 7以降ではMicrosoft Internet Explorer 10以降のCookieはサポートされません。EPMが有効な場合、Profile ManagementはCookieを処理または管理しません。

すべてのユーザーは、プロファイルが一元的に保存されるネットワークフォルダーであるユーザーストアにアクセスできる必要があります。または、必要に応じて、プロファイルをユーザーのホームドライブに保存することもできます。詳細については、「Profile Management architecture」を参照してください。

Profile ManagementがCitrix Studioに統合されているXenDesktop 7を使用しない限り、構成にはActive Directory（AD）グループポリシーオブジェクト（GPO）が必要です。Windows Server 2008およびWindows Server 2012ネイティブモードのADフォレスト機能レベルおよびドメイン機能レベルがサポートされています。詳細については、「Domain and forest support in Profile Management」を参照してください。または、構成設定にローカルの.iniファイルを使用することもできますが、一般的に.iniファイルはテスト目的でのみ使用されます。.iniファイルの設定は、

GPOで構成されていない設定、つまり「未構成」状態のままになっているグループポリシー設定に適用されます。

Profile Managementで使用しているCitrix製品またはコンポーネントで短いファイル名（8.3形式のファイル名とも呼ばれる）が必須である場合、Profile Managementの展開で短いファイル名のサポートを無効にしないでください。無効にすると、ユーザー ストアとの間でファイルをコピーする際に問題が発生する可能性があります。

Profile Management Serviceを実行しているコンピューターでは、プロファイルをドライブ文字でマウントされた単一のディスクに保存します。ディスクがユーザープロファイルを保存するために使用されるフォルダーにマウントされている場合（典型的な例は`C:\Users`）、サービスからマスクされ、処理されない可能性があります。

Citrix®製品の互換性

Profile Managementは、以下のCitrix製品で使用できます。

- シトリックス バーチャルデスクトップ
- シトリックス バーチャルアプリ™
- シトリックス バーチャルアプリおよびデスクトップ™
- Citrix DaaS™ (旧 Citrix バーチャルアプリおよびデスクトップ サービス)

Profile ManagementとCitrix Virtual Apps and Desktopsの互換性マトリックスについては、「Additional Lifecycle Information for Citrix Profile Management」を参照してください。

このCurrent Release (CR)をLong Term Service (LTSR)環境で使用する方法やその他のFAQについては、Knowledge Centerの記事を参照してください。

ダウンロード

Profile Managementをダウンロードするには

1. Citrixダウンロードページに移動します。
2. マイアカウントにログオンします。お客様のアカウントは、展開したCitrix製品のライセンス資格に関連付けられている必要があります。アカウントがライセンス資格に関連付けられていない場合は、Citrixカスタマーサービスにお問い合わせください。
3. 「ダウンロードの検索」で、製品を選択し、ダウンロードの種類として「コンポーネント」を選択します。
4. Profile Managementの最新バージョンをダウンロードします。

診断機能

Citrix Diagnostic Facilityを使用してトレースログをキャプチャする前に、監視するプロファイルを持つデバイス、仮想デスクトップ、またはCitrixサーバーで使用されているCitrix製品またはコンポーネントでそれが利用可能であることを確認してください。

クロスプラットフォーム設定

このリリースでクロスプラットフォーム設定機能を使用するには、Profile Management Serviceを実行しているすべてのコンピューターにMicrosoft Core XML Services (MSXML) 6.0 Service Pack 1以降をインストールしてください。このコンポーネントはMicrosoft .NET Framework 3.5の一部であり、定義ファイルを処理するために必要です。

この機能は、サポートされているオペレーティングシステムとアプリケーションのセットでのみ使用してください。詳しくは、「クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

既存のプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する

次のプロファイルタイプからCitrixユーザープロファイルへの移行がサポートされています。

- Windowsローミングプロファイル
- 次のいずれかのオペレーティングシステムに基づくローカルプロファイル：
  - ウィンドウズ 11
  - ウィンドウズ 10
  - ウィンドウズ 8
  - ウィンドウズ 7
  - ウィンドウズ ビスタ
  - ウィンドウズ XP
  - ウィンドウズ サーバー 2022
  - Windows サーバー 2019
  - Windows サーバー 2016
  - ウィンドウズ サーバー 2012 R2
  - Windows サーバー 2012
  - Windows サーバー 2008 R2
  - ウィンドウズ サーバー 2008

    - Windows Server 2003 (ウィンドウズ サーバー 2003)

- User Profile Manager 2.0 で作成された Citrix ユーザープロファイル

以下のプロファイルタイプから Citrix ユーザープロファイルへの移行はサポートされていません。

- Microsoft 強制プロファイル。 ヒント: Profile Management のテンプレートプロファイル機能を使用して、Microsoft 強制プロファイルを Citrix 強制プロファイルとして構成できます。 Citrix 強制プロファイルはすべてのログオンに使用され、ユーザーの変更が保存されない点を除けば、通常の Citrix ユーザープロファイルとまったく同じように機能します。 詳しくは、(/ja-jp/profile-management/2303/configure/template.html)「テンプレートまたは強制プロファイルを指定する」を参照してください。
- Citrix 強制プロファイル。
- User Profile Manager のテクニカルプレビューリリースまたはベータリリースで作成された Citrix ユーザープロファイル。
- サードパーティプロファイル (sepagoPROFILE を含む)。

32ビットの Citrix ユーザープロファイルから64ビットのプロファイルにアップグレードすることはできません。

トラブルシューティング

このセクションでは、Profile Management のトラブルシューティング方法について説明します。

一般的なトラブルシューティングのワークフローは次のとおりです。

1. Profile Management の設定を確認する](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/self-troubleshoot.html)。
2. Profile Management のログファイルを確認する](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/log-file-checklist.html)。
3. Profile Management によってログに記録された Windows イベントを確認する](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/events.html)。
4. 一般的な問題をトラブルシューティングする](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/common-issues.html)。
5. 高度なトラブルシューティングを実行する](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/advanced-checklist.html)。

6. 上記の手順を試しても問題が解決しない場合は、できるだけ多くの診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください](/ja-jp/profile-management/2303/troubleshoot/collect-diagnostics.html)。

アップグレードと移行

このセクションでは、Profile Managementソフトウェアのアップグレード手順と、既存のWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行するための情報について説明します。たとえば、これらの手順を使用すると、バージョン3.xからバージョン5.xに簡単にアップグレードできます。

アップグレードする前に、アップグレード元およびアップグレード先のリリースで利用可能なProfile Managementの機能と設定を理解してください。この情報を確認するには、「Profile Managementのポリシー」を参照してください。.iniファイルからグループポリシーへのアップグレードを容易にするため、このトピックでは.iniファイルの設定を.admファイルおよび.admxファイルの設定にマッピングしています。

アップグレード中にProfile Managementを構成しないでください（グループポリシーまたは.iniファイルのいずれでも）。まず展開をアップグレードし、次に必要に応じて設定を構成することで、これら2つのタスクを分離してください。理想的には、「構成の決定」の質問に答えることで設定を構成します。

ヒント：Profile Management 2.1.1以降の展開は、最新バージョンにアップグレードすることでホットフィックスできます。アップグレード後、必要に応じて以降の機能を有効にできます。

混在展開

異なるバージョンのProfile Managementが共存する展開では、次の操作を行います。

- 混在展開が存在する期間を最小限に抑えます。
- 最新バージョンの.admまたは.admxファイルを、すべてのドメインコントローラー上の各グループポリシーオブジェクトに追加します。すべての新機能が無効になっていることを確認し、新しいポリシーが伝播する時間を確保してください。
- いずれかのポリシーを有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンのProfile Managementにアップグレードします。

バージョン5.xと3.2を含む混在展開はサポートされています。ただし、このような展開は、以前のバージョンから新しいバージョンへの移行中に存在する一時的な状態として扱ってください。

重要： バージョン5.xとバージョン2.1.1またはそれ以前のバージョン（Citrix Technical Previewやベータリリースを含む）を含む展開はサポートされていません。ただし、アップグレードできず、これらのバージョンが展開内で共存する必要がある場合は、このトピックの残りの部分が役立つかもしれません。

Profile Management 2.1.1以前を含む混在展開

このトピックの残りの部分では、Profile Management 2.1.1以前とProfile Management 3.xまたは5.xの共存に関する情報が含まれています。あるバージョンから別のバージョンへ移行する方法について説明します。このトピックでは、これらのバージョンの略語としてバージョン2とバージョン5が使用されます。

各バージョンを別々のOUに分離し、各バージョンを実行しているコンピューター用に別々のユーザーストアを維持します。あるいは、単一のユーザーストアが両方のバージョンを実行しているコンピューターにサービスを提供する場合、すべてのコンピューターがバージョン5にアップグレードされるまで、すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認してください。「混在」ユーザーストアでバージョン4の設定を有効にした後でも、ユーザーはバージョン2を実行しているコンピューターにログオンできます。ただし、一時的なWindowsユーザープロファイル（ネットワーク上のCitrix®ユーザープロファイルではない）を受け取り、そのプロファイルに行った変更は保存されません。混在展開は一時的なものと見なし、アップグレードを完了するまでの期間を最小限に抑える必要があります。

別のOUとユーザーストアを使用すると不便な場合があります。これらの制約を回避するには、次の2つの戦略のいずれかを使用できます。 設定を使用して、適切なバージョンのProfile Managementで各グループを構成します。戦略2は戦略1よりも手間がかかります。前者の場合、バージョン5の処理済みユーザーグループを更新し続けることになります。また、2つのアプリケーションとデスクトップのセットを維持します（ただし、Citrix Virtual Apps™からアプリケーション定義をエクスポートすることで自動化できます）。利点は、移行に時間をかけることができる点です。

注：以下の戦略の代替として、Windows Server 2008 Active Directoryでは、WMIフィルタリングを使用してOU内のコンピューターのサブセットにGPOを適用し、どのバージョンのProfile Managementがインストールされているかを判断できます。これにより、適用されるポリシーをバージョンに合わせて自動的に調整できます。

戦略1：一括移行

このシナリオでは、ある程度のダウンタイムが許容されることを前提としています。すべてのコンピューターが同時に移行されます。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのバージョン5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの**無効**に依存しないでください。
3. すべてのコンピューターをバージョン2からバージョン5にアップグレードし始めます。これは通常のメンテナンスおよび更新スケジュールに合わせてください。1つの例外を除き、バージョン5のいずれかの設定を有効にするまで、バージョン5はバージョン2として動作します。例外は次のとおりです。これはまれですが、このアップグレード手順が長期間にわたって段階的に行われる場合に発生する可能性が高くなります。ユーザーが複数のサーバーからCitrixユーザープロファイルにアクセスすると、複数のバージョン4セッションが作成されます。たとえば、最初にワークステーションを使用してあるサーバー上の仮想デスクトップにアクセスし、次にラップトップを使用して別のサーバー上の公開アプリケーションにアクセスします。Profile Managementは、2番目のラップトップセッションに保留領域を使用する必要があります。この時点で、OU全体がバージョン5の展開として扱われます（ただし、バージョン5の機能は何も構成されていません）。そして、PmCompatibility.iniがこの変更を反映するように更新されます。
4. オプションで、バージョン5の処理済みユーザーグループに、小規模なパイロットグループのメンバーのみを含めるように設定します。ADグループポリシーの変更がネットワーク全体に伝播するのを待ちます（たとえば、週末にかけて）。この変更が行われている間、他のユーザーのアクセスを妨げる必要はありません。パイロットグループのプロファイルをバックアップします。その後、パイロットグループにProfile Managementをテストさせます。
5. パイロットグループの結果に満足したら、他のユーザーのプロファイルをバックアップしていることを確認します。
6. 次のスケジュールされたメンテナンス期間を使用して、残りのユーザーをバージョン5の処理済みユーザーグループに追加します。ADグループポリシーの変更が伝播するのに十分な時間を確保し、残りのユーザーがログオンできるようにします。

戦略2：段階的移行

このシナリオでは、すべてのマシンまたはユーザーを一度に新しいバージョンに移行できないため、ユーザーのサブセットを選択してバッチで移行することを前提としています。これは、複数のデータセンターや地理的に分散したユーザーがいる展開に適しています。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。

2. すべてのバージョン5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの「無効」に依存しないでください。
3. いくつかのコンピューター（最初のバッチ）をバージョン5にアップグレードします。または、新しいコンピューターにバージョン5をインストールします。デフォルトでは、バージョン5処理済みユーザーグループには空のグループが含まれているため、どのユーザーもバージョン5ユーザーとして処理されません。フェーズ移行でコンピューターをアップグレードする場合にも適用される可能性がある、戦略1で説明されている例外に注意してください。
4. バージョン5コンピューターから新しいアプリケーション（Citrix Virtual Appsを使用）または仮想デスクトップ（Citrix Virtual AppsまたはCitrix Virtual Desktops™を使用）を公開します。これらのアプリケーションとデスクトクトップは、名前を除いて、以前にバージョン2コンピューターから公開されたものと同一です。これらの名前は、バージョン5ユーザーが使用するためのものであることを示します。
5. このバッチで選択されたユーザーは、アプリケーションまたはデスクトップにログオンします（たとえば、Web Interfaceを使用）。彼らは新しいアプリケーションを選択します。（ユーザー名またはグループメンバーシップに基づいて、Web Interfaceを使用してこのステップを強制します）。その結果、彼らのセッションはバージョン4コンピューターで実行されますが、バージョン2の設定で処理されます。
6. すべてのユーザープロファイルをバックアップしたことを確認してください。
7. ユーザーをバージョン2処理済みユーザーグループからバージョン4グループに移動します。ADグループポリシーの変更がバージョン5コンピューターに伝播するのを待ちます。次回ログオンするとき、ユーザーのセッションはバージョン5の設定で処理されます。
8. 前述のとおり、次のバッチのコンピューターをアップグレードし、次のバッチのユーザーを移行します。

ユーザープロファイルの移行

この記事では、Citrix®ユーザープロファイルをWindowsローミングプロファイルに変換する方法について説明します。また、Profile Managementで処理できるように、Personal vDisk (Citrix Virtual Desktops™の機能) からCitrixユーザープロファイルを削除する方法についても説明します。

移行戦略の詳細については、「アップグレードと移行」を参照してください。

ローミングプロファイルへの移行

CitrixユーザープロファイルはいつでもWindowsローミングプロファイルに移行できます。プロファイルデータを、ローミングプロファイルが保存されているネットワークの場所に移動しま

す。移行後、Profile Managementはユーザーログオンやアプリケーション設定の処理に関与しません。

1. すべてのユーザーがログオフしていることを確認します。
2. ソフトウェアによって管理されているすべてのコンピューターからProfile Management Serviceを削除します。
3. ユーザーストアで、`\UPM_Profile` の内容をローミングプロファイルの場所に移動します。クロスプラットフォーム設定ストアの内容を移動する必要はありません。
4. さらに、バージョン1のプロファイルの場合のみ、`\UPM_Profile` のすべてのサブフォルダーから _upm_var サフィックスを削除します。 注：スクリプトを使用すると、この手順が簡素化される場合があります。

Personal vDiskからの移行

Citrix Virtual DesktopsでPersonal vDisk機能を使用している場合、デフォルトでは、ユーザープロファイルは仮想デスクトップのC:ドライブではなく、Personal vDiskのP:ドライブに保存されます。代わりにCitrix Profile Management (Personal vDiskではない) でプロファイルを処理する場合は、新しいカタログに使用されるマスターイメージのレジストリを変更して、Virtual Delivery Agentのインストール時にこのデフォルトを調整します。このシナリオでは、カタログが新しいため、ユーザーはログオンしておらず、P:ドライブにプロファイルは保存されていません。

重要：Personal vDiskを持つ既存のカタログ内のマシンでProfile Managementを有効にした場合、別のシナリオが発生します。カタログはすでに使用されているため、ログオンが行われ、プロファイルがP:ドライブに存在します。レジストリを変更した後も、プロファイルはそこに残ります。したがって、デフォルトを異なる方法で調整します。

Profile Managementが有効なときにP:ドライブにプロファイルが存在することを示す問題には、ユーザーが壁紙をリセットする必要がある、アプリケーションを再構成する必要がある、または一時プロファイルを受け取る、といったことが含まれます。

この代替シナリオでデフォルトを調整するには、以下の手順に従ってください。

1. プロファイルを移行する仮想マシンのメンテナンスダウンタイムをスケジュールします。
2. スタートアップスクリプトを作成します（または既存のスクリプトを編集します）。Microsoft製のWindows XP用プロファイル削除ツールであるDelprof.exe、またはSepago製のそれ以降のオペレーティングシステム用の同様のツールであるDelprof2.exeを実行するコマンドを含めます。実行コマンドの後にシャットダウンコマンドを続けます。

```
`\<share` name>\delprof.exe /q /i

shutdown /s /t 0
```

DelprofexeはMicrosoftのWebサイトからダウンロードできます。このツールに関する情報については、`<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=5405>`を参照してください。

3. マスターイメージで、次のレジストリ設定を1から0に変更します。

   注意： レジストリを誤って編集すると、オペレーティングシステムの再インストールが必要になるような深刻な問題が発生する可能性があります。Citrixは、レジストリエディターの誤った使用によって生じる問題が解決できることを保証できません。レジストリエディターはご自身の責任において使用してください。編集する前に必ずレジストリをバックアップしてください。

   `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Citrix\personal vDisk\Config\EnableUserProfileRedirection`

4. マスターイメージのインベントリを更新します。
5. 予定されたダウンタイム中に、マスターイメージを仮想マシンに配布します。それらが再起動することを確認します。その時点で、スクリプトが実行され、P:ドライブからプロファイルを削除し、マシンをシャットダウンします。
6. すべてのマシンがシャットダウンされたら、スタートアップスクリプト（または既存のスクリプトに追加した行）を削除します。
7. すべてのマシンを起動するか、ユーザーがログオンできるようにします。この時点から、プロファイルは仮想デスクトップのC:ドライブに保存されます。

Note: To migrate profiles in the reverse direction so they are managed by the Personal vDisk (not Profile Management), follow these instructions. But change the Registry setting of EnableUserProfileRedirection from 0 to 1. This change loads the profiles on to the Personal vDisk's P: drive.

新機能

2303の新機能

このリリースには、以下の新機能と機能強化が含まれています。また、全体的なパフォーマンスと安定性の向上に役立ついくつかの問題も解決されています。

アプリのアクセス制御

Profile Managementは、提供されたルールに基づいて、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできるようになりました。新しいポリシーである**アプリのアクセス制御**を使用すると、この機能を有効にして制御ルールを提供できます。

PowerShellツールである**Rule Generator**は、Profile Managementのインストールパッケージとともに提供され、アプリのアクセス制御のためのルールを作成、管理、生成できます。

詳細については、アプリケーションへのアクセスを制御するを参照してください。

セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック

新しいポリシーである**セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**が利用可能になり、**アクティブライトバック**および**アクティブライトバックレジストリ**ポリシーを拡張します。

- この新しいポリシーと**アクティブライトバック**ポリシーの両方を有効にすると、プロファイルファイルとフォルダーはセッションがロックまたは切断された場合にのみ書き戻されます。
- この新しいポリシーと、**アクティブライトバック**および**アクティブライトバックレジストリ**ポリシーの両方を有効にすると、レジストリエントリはセッションがロックまたは切断された場合にのみ書き戻されます。 詳細については、アクティブライトバックを構成するを参照してください。

VHDディスクの圧縮

新しいポリシーである**VHDディスクの圧縮を有効にする**により、特定の条件が満たされると、VHDファイルはユーザーログオフ時に自動的に圧縮されるようになりました。このポリシーにより、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダーミラーリングコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

ニーズと利用可能なリソースに応じて、以下のポリシーを使用してデフォルトのVHD圧縮設定と動作を調整できます。

- **VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域比率**
- **VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数**
- **VHDディスクの圧縮時のデフラグを無効にする**

詳細については、「VHDディスクの圧縮を有効にする」を参照してください。

Profile Managementのドキュメント履歴

次の表に、Profile Management 2303のドキュメントに対する重要な変更点を示します。これらの更新に関する通知を受け取るには、RSSフィードを購読してください。

DATE	変更	説明
20 Mar 2023	Profile Management 2303の初期リリース	Profile Management 2303の初期リリース。詳しくは、「新機能」を参照してください。